





明治三十九年十一月二十日印刷

明治三十九年十一月廿五日發行

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯兼  
發行者

市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者 本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所 內外印刷株式會社分工場

夫木和歌抄卷第二十八

雜歌十

題

和布	夕陰草	莞草	母子草	麻	萱	忘草	海松	山橘	葛
									竹
	指燒草	射干	駒繫	萍	濱木綿	百代草	藻	淺茅	篠
									葛
	葎	莎草	犬子草	淺砂	小々妻	白慈草	菰	茅花	葛
									葛
	手向草	芝	土筆	蓼	藍	爾古草	蓬	藨	葛
									葛
	芭蕉	山菅	折敷草	芹	紅	木	思草	鞭草	葛
									葛
	莫鳴菜	目覺草	鐘草	水葱	紫	菅	忍草	蘆	日陰草

草

入道釋阿九十賀屏風御歌  
源順家馬毛名歌合(あま  
のつむいそな草)

障子繪に舟にのる人あ日はまにもくつおほくよせたる所

里のあまといふ所な(も  
しほ草)  
家隆卿せうそこして侍け  
るかへし

家集もとのした草

六帖題うもれ草

家集春歌中(おもひ出ぐ  
さ)

戀歌中(こゝろのくさ)

百首御歌初戀(こひくさ)

千五百番歌合(はつくさ)

冬歌中(冬のわかくさ)

さをしかのゐるの、秋のした露にたれつまこめて草むすふらん  
須磨の蜚の朝夕つめるいそな草けふからむちはなみそうちける

後京極攝政  
よみ人しらす

沖つなみえきりによする濱邊にはもくさかき分かひもひろはん

桑門  
もしほ草かきあつめたるかひありてみるめうれしき里のあま

祭主輔親  
法印素覺

たまならぬもしほの草もいかてかは藤江の浪にとはてすくへき

皇太后宮大夫俊成卿

つゆけくもなりまさる哉さくらあさのものゑた草拂ふ人なみ

元  
信實朝臣

おほあらしの本あらのゑたの埋れ草さも老らくの末そいふせき

忠  
源師賢朝臣

春のゝはおひぬものなく見ゆれとも思ひいて草はなきよ也けり

慈  
源師賢朝臣

ものおもふこひちや冬のほかならんこゝろの草は霜かれもなし

慈  
源師賢朝臣

去けりあはん末をもゑらす戀草のやとのま垣にめくみそめぬる

慈  
源師賢朝臣

春のなみのいりえにまよふはつ草のはつかにみてし人を戀しき

從二位家隆卿

去もかるゝよもきかそまの枯間より雪けに似たる冬のわかくさ

前中納言定家卿

竹

千五百番歌合

題不知

海道宿次百首竹の下

正治二年百首御歌

貞應三年百首歌

百首歌

六帖題

家集法文歌

家集野遊

春日社百首

二夜百首御うた

旅十五首

家長朝臣すゝめける日吉社竹間雪

百首歌

和名竹

この君とたのめて植しから人のちよのちきりやいまのよのたけ  
 梅の花ちらまくおしのみわか園のたけのはやしにうくひすなくも  
 山ふかきすきのまけみをふきおちてふもとによわる竹の下かせ  
 雪つもるありあけの月は影さえてまかきの竹のうらみとりなる  
 雨おもきまかきの竹のをれかへりくたればのほる露のまらたま  
 いはにそふ竹のさえたのまたれるやねに行鳥のとまるなるらん  
 新六五  
 さと人の軒端のたけのみしめ繩かけていのりしゑるしあらはせ  
 いまはとて衣をかけたけのはのそよさそいかに悲しかるらん  
 竹の葉にかけし衣のなこりかはとらふす野邊もむつまじきかな  
 たけの葉にころもをかけしいにしへの人の心はなき世なりけり  
 君ゆるにとらふす野邊に身を捨てたけのはやしの跡をたつねて  
 つなてひく竹のしたみちきりこめて舟ちにまよふよとの河きし  
 神かきやおまへの竹に山おろしのたゆめはつもる庭のまらゆき  
 はしたかのきりふの岡のたけの露をおふさの鈴とみかく月かけ

小侍 従  
 よみ人まらす  
 爲相卿  
 後鳥羽院御製  
 爲家卿  
 光俊朝臣  
 衣笠内大臣  
 同  
 六條院宣旨  
 隆祐朝臣  
 後京極攝政  
 同  
 従二位家隆卿  
 同

寶治二年百首里竹

同

百首歌

堀河院御時百首

家の集竹の子をおさなき物につかはすとて

返し

六帖題

文應元年七社百首

弘長元年百首吳竹

寶治二年百首

六帖題寶治二年百首里竹

百首歌

八月十五夜内裏御會

光臺院入道二品親王家五十首竹霜

文治二年女御入内御屏風

洞院攝政家百首

弘長元年百首竹

風ふけは竹の葉そよくあき玄の里もさむけきゆふまくれかな

竹の葉もたもとにおちてからころもきなれの里のゆふへ露けし

むらさきのたけのまかきのふちはかま契りありてや匂そめけん

いにしへの七のかしこきひとみな竹をかさして年そへにける

赤染集 おやのため昔の人はぬきけるをたけの子のため見るもめつらし

同 雪分てぬくこそおやのためならめこはさかりなる竹とこそみれ

新六巻 いかばかり雪の下なるたけのこのおや思ふ人のこゝろ玄りけん

いつくよりおほし立たる竹の子のならの葉分のかげによるらん

年たけてみかりにあひしこのかはの人の名残やきしのくれたけ

新六一 くれ竹のよゝの昔にかけおきたまかと思はれはあられなりけり

見わたせはなみもかすみて河かみのゆつはのむらになひく吳竹

時わかぬおのか枯葉はつもれともいろもかはらぬにはのくれ竹

月きよみたまのみきりのくれたけにちよをならせる秋風そふく

五代までなれてふりぬる川たけのまたまたかけに霜をおきそふ

ひさしかれ君ちよませの河たけにいろはへまさるとこなつの花

風ふけはみきはになひくかは竹のおともあらはにこほる浪かな

もゝしきの玉のみきりの御溝たけ君か代なかくうへやそめけん

衣笠内大臣

正二位知家卿

從二位家隆卿

仲實朝臣

大江匡衡朝臣

よみ人まらす

光俊朝臣

民部卿爲家

後九條内大臣

光俊朝臣

從二位賴氏卿

從二位家隆卿

前中納言定家卿

同

隆信朝臣

從二位賴氏卿

常磐井入道太政大臣

三島社七首歌

長歌

なよ竹のとをよる風のすゝしきはひとよへたて、秋やきぬらん  
あきやまの、あきやまの、あきたへるいもな、なゆ竹の、とをよるこらは、いかさ  
まに、思ひをりてか、

權僧正公朝  
丸

天元四年四月小野宮歌合なそくいねのおひたるかひつ物

久安百首笛竹

長承三年六月常磐井五番  
歌合竹風晚涼

六帖題一よへたつ

建保三年内大臣家歌合谷  
竹風

だいゑらす

しのへ竹

ある女にふしゑげき竹を  
たぶとて

家集雜歌中

洞院攝政家百首出家

長承三年七月常磐五番歌  
合竹風晚涼

百首御歌中

賀茂社百首御うた

秋またぬいねかと見しはなよ竹の下葉にねさすこにこそ有けれ  
笛竹をねくらにならすうくひすはさへつる聲もことにや有らん  
ふえ竹にふすとりの音もすゝしきは秋の迄らへに風やふくらん  
山かつの垣ね新六ほにかこふわれ竹のよませになとてあひみそめけん  
風ならつとふ人もなきともなれや身をかくしすむ谷のくれたけ  
わか宿のいさゝむら竹ふく風のおとのかそけきこのゆふへかな  
古來歌  
玄の竹の節はあまたに見ゆれともよゝにうとくもなり増るかな  
われなれや風をわつらふ玄のたけはおきふしものゝ心ほそくて  
かきこむるの竹の園にをかや吹あつまやかたはみやこにも似す  
ゆふされはまのゝはやしに風吹てやなきのさとそ夏はすゝしき  
人こゝろ神にたかはゝまの竹のゆかまなかたをためて見よかし  
ふる雪にかものかはらを見渡せばたゝすの竹もまたをれにけり

よみ人ゑらす  
待賢門院堀河  
皇太后宮大夫俊成卿  
光俊朝臣  
從二位家隆卿  
よみ人ゑらす  
衣笠内大臣  
兵部卿御元真  
西行上人  
常磐井入道太政大臣  
源仲正  
慈鎮和尙  
同



題不知

弘長二年若宮百首

千首歌

建保元年老若五十首歌合

六帖題

六帖題から竹

建長七年顯朝卿家千首歌合

冬か今日たゝすのみやの吳竹に賀茂のみやまの山おろしのかせ  
ふる雪にとよらの竹の埋もれてひとよも見えずなりにけるかな

はこねちや山風そよくさ、竹の玄のにみたれてあられふるらし

山かつのさかひになひく若竹のわかしくて世をやすすきなん

にしうみあらいそなみにより竹の一よになりぬ冬の日かすは

かすならぬまつか垣ほのあはら竹すゑをりかけてよをや過さん

から竹のふえにまくてふかはさくら春おもしろく風そふきける

うゑ竹のもとさへとよみ風ふけはそよゆらくにわれ忘れめや

篠

別妻時

題不知

保安三年法性寺入道前關  
白歌合野風

弘長二年箱根宮百首

文永四年毎日一首中

同七年毎日一首中

萬二新古

さの葉はみ山もさやにみたるとも我は妹思ふわかれきぬれば

かくしてや猶や老なんみ雪ふるおほあらしの、篠にあらなくに

からさきやなからの山にあらねともをさなみよるまの、秋風

なかめやるたかねは春の日かけにて谷のさふにきえぬしら雪

くる、夜そ限りなりけるいなみ野の篠分る道のはても見えねは

世々をへてうへさえけらし嵐山いはねのをさしもさやくなり

慈 鎮 和 尙

よみ人 志 らす

安嘉門院 四條

民部卿 爲 家

後鳥羽院 御製

信 實 朝 臣

正三位 知家卿

光 俊 朝 臣

人 丸

よみ人 志 らす

機中納言 師俊卿

安嘉門院 四條

民部卿 爲 家

同

同<sup>4</sup> 文永五年毎日一首中

家集冬歌

洞院攝政家百首

建保五年内裏御歌合

百首歌冬

家集月歌

御集忍戀

建保七年家千首歌

寶治二年百首御歌

同

同

同

同

同

さやくらんをさゝの霜はまらねともはるかに白きひらの山の端

同

月さえてゆふ霜こほるさゝのはにあられふるなりさらしなの山

從二位家隆卿

秋は來ぬ露もあらしも月やまつそよさらしなのやまのたまさゝ

同

むさしのや草はみなからうら枯れてあられにのこるさゝの音哉

順徳院御製

うちまくれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさき遠きのちのさゝはら

安嘉門院四條

此歌あづまへ下けるに野ちといふ所にて日くれかゝりて時雨

しければと云々

いなみのやむこ山もとのをさゝ生に浦風さやきあられふるなり

同

さよすから武庫の浦風さえくく月そくまなきわなのさゝはら

權大納言實家卿

時雨ふるおほあらしのゝ小さく原ぬれはひつとも色にいてめや

鎌倉右大臣

さゝの葉もうへ白妙に見ゆるまておほあらしのみに雪ふるなり

前大納言顯朝卿

さゝの葉のさやく霜夜は水くきの岡のやかたにふしそわひぬる

後嵯峨院御製

そめておくやしほの岡の玉さゝは君か八千代のすゑのみとりを

俊成卿女

よひくくにさゝわくる袖は露おちて誰かまのひの岡のかよひち

後九條内大臣

嵐ふくさのゝをかへの朝つゆにさゝわけころもぬれつゝそゆく

衣笠内大臣

かれぬるかころものあきも神なひのあさ笹はらのまもの下くさ

同

光俊朝臣

寶治二年百首御歌

建長八年百首御歌

正治二年百首

千五百番歌合

百首御うた

家集さいな

洞院攝政家百首忍戀

六帖題

家集康元二年毎日一首中

千五百番歌合

大嘗會主基方御屏風

あやめな

六帖題

くれかゝるならひの岡を來てみれば露のみまけきをさゝはら哉

露むすふ小さゝかはらを見渡せばきそのみさかに秋はきにけり

雨のゝちみきはのをさゝ風ふけはつゆにたまそふ池のはちす葉

花にあかぬよしのゝおくの篠まくらいとほぬ月の雲かくれかな

五月雨にふる野のをさゝみかくれて雲にぞらなき三輪の山もと

山河のいはまのさゝはひたすらにまのひし節はあらはれにけり

うへしける垣根かくれの小篠はら知られぬ戀はうきふしもなし

山かつのまつか垣根のさゝくろめにきはふまての住家とやみし

いもせ山なかにおひたる玉さゝのひとよのへたてさもそ露けき

葛 草木雖未勸暫就草字草部入之

いかはかり久しかるらんかめやまのふもとの松にましるさき草

春ことにはこやの山にさき草のよろつよかけてとのつくりせり

あはつのはきはきか花にいろそへて時ちりかほにましるさき草

千代ふへき宿のさき草ひき分てみつはよつはにふくあやめかな

いとゝ又作りますすらんさき草の三つ葉四つ葉のさゝかにのやと

鷹司院帥

左近中將具氏卿

宜秋門院丹後

具親朝臣

慈鎮和尚

俊頼朝臣

前中納言定家卿

信實朝臣

同

民部卿為家

家長朝臣

宮内卿永範

卜部兼直

正三位知家卿

苔

延長四年御屏風

延喜七年御屏風

こげを

家集祝こゝろを

堀河院御時百首苔を

同

同

家集苔上雪

文集百首

述懐百首こげを

千五百番歌合

保安二年九月内大臣家歌  
合庭露

承久元年内裏御歌合庭苔

千首歌

こげなかくおふるいは井の久しさを君にくらへん心やあるらん

千代をふる松にかゝれる苔みれば年のをなかくなりにけるかな

ときはなる松にかゝれる苔なれば年のをなかきえるへとそ思ふ

萬代をなからのはまのさゝれいしはこよひよりこそ苔は蒸らめ

さよひめの遊ぶところかおく山のをねかみねの苔のむしろは

ふかみとりいはねか上にむす苔や空にのほらぬけふりなるらん

年ふれば苔のみつらをゆひわけていはのすかたは神さひにけり

としへたるいはほか上に雪ふりておひにけらしな苔の志らひけ

こげのおひに秋の山もと夕まくれながくいまは物もおもはず

いはたゝむ山のかたそのこげむしろとこしなへにも物思ふかな

いくよへぬかさしをりけん古へに三輪のひはらの苔のかよひち

岩の上のこげの葉ことにおく露をたまく庭とみけるやはわか

にはの面に苔の玄からみかけてけりせきいれし水の末よわる迄

おく山の木たかき松のさかりこげおなしみとりに年やふりぬる

貫 之

躬 恒

よみ人ふらす

清 原 元 輔

權大納言公實卿

前中納言匡房卿

權中納言師時卿

源 仲 正

慈 鎮 和 尙

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

基 俊

從二位家隆卿

民部卿爲家

六帖題御うたこげを

御集夕立

寶治二年百首御うたきしの昔

同

同

たにふかみとしふりにける岩かねの苔の葉なひきやま風そふく

風はやきをすての山のゆふたちこけなからちるまきの玄た露

住吉とおもはん人のためなれやきしに玄くてふこけのさむしろ

すみよしのうらはのきしによる浪の思はぬほとは苔むしにけり

まつとてもたれ住吉のきしもせん浪のかけほすこけのさむしろ

中務卿みこ鎌倉

同

後嵯峨院御製

衣笠内大臣

民部卿爲家

### 日蔭草

六帖題

百首御歌

百首御歌

ひかげ

日かげ

題不知

爲家卿家百首

日かけもて軒端ふくてふたましつめ永き世かけて猶まつれとや

新六のさばかりや木の下くらきおく山にあるへくもなき日かけ草かな

消のこるかきねの雪のひまことに春をも見する日かけくさかな

續詞花けふかさす神のいかきの玉日かけむかしのことを尋ねてそくる

現存六あかねさす日蔭のかつら千代かけて少女さひすもいはふ比かな

萬四我宿のゆふかけ草の玄らつゆのけぬかにもとおもほゆるかも

たくひとてわかすむ宿のかへに生るみなしこ草もあはれいつ迄

前中納言爲兼卿

光俊朝臣

慈鎮和尚

よみ人志らす

從三位行能卿

中納言家持卿

從二位家隆卿

### 山橋

題をらす

物語

貞應三年百首

六帖題

萬七 万七 万七  
 むらさきにいとをそわかよる足引の山たちはなを拔んと思ひて  
 萬廿 けのこりのゆきにさへてる足引の山たちはなをつとにつみこな  
 六五 萬四 萬四 萬四  
 あしひきの山たち花の色に出てかたらひつきてあふ時もあらん  
 岩間なる山たちはなのかけみえてそこまですめる庭のやりみつ  
 新六六 新六六 新六六  
 ふりにける卯月のけふのかみそきは山たちはなの色もかはらす  
 現存六  
 岩かねはみとりもあけもばへ色の山たちはなるときはかきはに

人 丸  
 よみ人志らす  
 同  
 民部 卿 爲家  
 正三位知家 卿  
 信實朝臣

# 浅茅

題不知

萬十 我宿のあさち色つくふなはりのなみしはのゝはもみちちるらし  
 同 わかやとの浅茅いろつくふなはりのなつみの上に時雨ふりつゝ  
 萬八 秋はきはちりぬへからしわかやとのあさちか花のちり行みれば  
 六六 ほととぎす聲きくをのゝ秋風にあさちさけれやおとのともしき

よみ人志らす  
 同  
 穗積 皇子

時鳥

家集草花薫風

家集

題不知

つゆむすふ秋には早くなりにけりあさちか原のうつろふみれば  
 さらぬたに秋はくまなき月かけにあさちか花をつみはやしつる  
 萬六 萬六  
 印南野の浅茅おしなみさねし夜のけなかくなれば家し去のほる  
 萬七 家にしてわれはこひなんいなみのゝあさちか下にてりし月よを

修理大夫顯季卿  
 基 俊  
 赤 人  
 よみ人志らす

貞應三年名所百首

三百六十首中

旅歌中

六百番歌合寫

洞院攝政家百首

永曆元年八月清輔朝臣家後番歌合雪

文集百首

同

嘉元二年十月竹園御會

六帖題御歌あさち

題不知

文應元年七社百首

文永十年每日一首中

文應二年每日一首中

洞院攝政家百首

おのつからぬる夜もさひし印南野のあさちおしなみわたる秋風

草木おふるあとのかはらのあさち野も残らす霜に枯はてにけり

今日も又道行<sup>現存六</sup>くれていなみのあさちおしなみたひねえてけり

あさちたつ庭のいろたにある物をのきはのつたはうち時雨と

ふる雪のはなのあさちまろたへにの草木もわかぬ比かな

みかりする片のをを今朝みればあさちおしなみふれる白雪

露<sup>むすぶ</sup>そむるかたのあさちまろたへに秋のよわたる風のさむけさ

宿しむるかた岡やまのあさちはらつゆにかたふく月をみるかな

此歌者文集百首黄茅岡頭秋日晩、苦竹嶺下寒月低といふこと

をと云々

露をまきみかきかはらのあさちふにふかきかけみる秋のよの月

このねぬるあさつゆさむみ水くきのをかあさちに秋風そふく

春日野のあさちか原におくれゐてその時となくわかこふらくは

秋風はけふよりふきぬかすかのあさちか露もいかにおくらん

ゆく秋のすす葉のあさち露霜のふるから小野をかねてまらるゝ

おほはらやをのあさちの冬かれに霜さえまさるよはの月かけ

ゆめかともさとの名のみや残るらん雪に跡なきをのあさちふ

民部卿為家

好忠

従二位行家卿

寂蓮法師

光明峰寺入道攝政

源雅重朝臣

前中納言定家卿

慈鎮和尚

參議為相卿

中務卿みこ鎌倉

よみ人あらす

民部卿為家

同

同

前中納言定家卿

百首御歌

建保三年名所百首

家集卅首歌夕蟲

續千載新上

あれにけり伏見の里のあさちはらむなしきつゆのかゝる袖かな  
むさしのゝあさち色つくいまよりや夜さむの衣かりもなくらん  
あらし山みねのあわ雪いかならんふもとのあさちうら枯にけり  
あらし山夕日かくれのあさちはらいらいつきぬとや蟲のなくらん

式子内親王  
正三位知家卿  
僧正行意  
從二位家隆卿

六帖題

君臣御歌合

六帖題

家集三百六十首中

家集春歌中

新六六  
ふる川のきしのあたりのあさくさにつはな浪よる夏のゆふかせ

同  
日影くれすゝしき山のかたくなり茅花なひきてかせわたるなり

新六六  
あをみわたるゑはふの色もすゝしきはつはなさゆるゝ夏の夕暮

新六六  
春もすき夏もきぬらし野へに出てつはなぬきにも誰をさそはん

新六六  
つはなぬくあさちか原もおひにけり白わたひける家とみるまで

新六六  
春雨のふるのゝ茅原今日見ればつはなぬくへくなりそゑぬらし

つはなぬく片野の原の壺すみれわかむらさきにいろそかよへる

民部卿爲家

前中納言爲兼卿

同

光俊朝臣

好忠

衣笠内大臣

前中納言匡房卿

蘩



題まらす

萬二  
玉かつら花のみ咲てならすあるはたか戀にあらめ我こひ思ふを  
萬十一  
ゆふたゝみまらつき山のさねかつら後もかならず逢んとそ思ふ

巨勢耶女  
よみ人まらす

建保三年名所百首

丹波路の大江の山のたまかつら絶んのこゝろわかおもはなくに  
夕すゝみおほえの山もたまかつらあきをかけたる露をすゝしき  
新六六  
思ふこと大江の山のさねかつらくるとあくとなけきつゝのみ

前中納言定家卿

建保三年内大臣家百首

いかにせん逢坂山のさねかつらはふきあまたにうつりはてなん  
玉かつらつゆおきそへておほえやまいくのをかけてすくる夕立

從二位家隆卿

千首歌

秋ふかきすその露の玉かつらたゆるときなくむしのなくらん  
み山木の末まではへる玉かつらとりつくかたもいまはなき身か

同  
中務卿みこ

爲家卿家百首

萬十一  
さねかつらいまする妹かうなひ髪るみゝいかりみきつゝ紐とく  
はつかりの山とひこゆるさねかつらくるほととぎす秋風そふく

從二位家隆卿

寛元三年結縁經百首

新六六  
ときは木のかけのにしける玉かつら苦しき物と世をそまりぬる  
同五  
いそのかみふるのゝ小野の玉かつらかけて昔をこひぬ目はなし  
草のはらうは葉にはへる青かつらくるしやことのまけき夏野は

同  
民部卿爲家

鞭草

述懷百首

六帖題

家集十首歌中戀の心

文永四年每日一首中

建長四年每日一首中

家集古今一句歌

百首御うた

千首

六帖題

家集寒草

永久四年百首餘寒

題不知

百首歌守山

柴の庵にはひおほれる青つゝらむつかしけなる世にもふる哉

戀をのみするかの海のはまつゝらゆふ浪かけてほすかたもなし

玄まひとの繁みにはへる青つゝらくるしきものは夕されのこひ

をくら山まつのした葉に青つゝらみちなき世こそ人くるしけれ

うたて世は荒磯山のはまつゝらなにゝつけてかたちのほるへき

谷せはみうきふし玄けきあをつゝらいかに心をへてかみん

日にそへて玄けりそまさる青つゝらくる人もなきまきの板戸に

柴かきのうへはひかゝる青つゝらとひくる人やたえてなからん

新六六永日もくるすのをのゝ青つゝらすゑはさしそひ玄けるころかな

新六一玄けり行玄はをの山のくりつゝらくるゝもなかきみな月のそら

霜ふれは野原のつゝらふしたえてこまのつまつくつら物もなし

雲さえぬあを葉の山のをつゝらはるはくれとも猶さむきかな

現存六かへるさのあしたの原の青つゝらくるしき道といまそ去りぬる

青つゝら玄けきひとめをもる山のしたにかよはぬ道そくるしき

俊 頼 朝 臣

後 九條 内 大臣

神 祇 伯 顯 仲 卿

民 部 卿 爲 家

同

從 二 位 家 隆 卿

後 鳥 羽 院 御 製

民 部 卿 爲 家

衣 笠 内 大 臣

源 仲 正

藤 原 忠 房

よ み 人 志 ら ず

藤 原 爲 顯

蘆

家集毎日一首中

岡屋入道攝政家百首顯戀

百首うた

建長五年毎日一首中

文應二年毎日一首中

弘長元年百首

建保三年内大臣家百首水郷寒蘆

龜山十首歌朝寒蘆

堀河院御時百首

同

貞永百首御歌早秋

家集水邊蘆葉

百首歌

御集

家集

わすれたる人にいひやる

わか朝イのうら代々朝イのあし朝イはら立朝イかへり朝イみたればつらしよその白浪

津朝イの國のなにはいつまで玄朝イのひげん霜かれはつるむやのあし原

あちのすむすさの入江朝イの蘆朝イのはにみとり朝イましらぬ冬は來朝イにけり

いかにせんうきぬの澤朝イにはふ蘆朝イの下朝イのみたれもわきかたき世を

あしつきの夜朝イのまの霜朝イのかけさえてさなからうつるこやの池水

はるかなる港朝イの玄朝イほのなかれ江朝イにあしの葉さむくこほるうら風

大井河朝イいり江朝イのあしの霜朝イかれにのこるもさむきまつ朝イのいろかな

おほひ川朝イすさきのあしの冬朝イかれにあさけの霜朝イのさえぬ日はなし

霜朝イかれの野へのほとりの玄朝イをれ蘆朝イは行朝イかふ駒朝イもすさめさりけり

津朝イの國の須磨朝イのうら風朝イふくたひに玄朝イをれしあしの音朝イのみそする

あけてみるあしまの露朝イの玉朝イくしけふたみのうらに秋朝イはき朝イにけり

見渡朝イせはあしは朝イおしなみ玄朝イけりあひて道朝イたとくし堀江朝イこく船

玄朝イほ風朝イに玄朝イほれにけりな流朝イあしのおきふし春朝イをまつとせしま朝イに

さはたか朝イはゐてなる蘆朝イのかりそめに淺朝イしやちきり一夜朝イはかりは

さはた川朝イゐてなる蘆朝イの葉朝イはかれてかけさすなへに春朝イふけにけり

のちおひ朝イのつ朝イのくむあしの程朝イもなき浮世朝イの中朝イはすみうかりけり

あしま行朝イうちの河浪朝イなかれてもひをのかはねをみせんとそ思ふ

民部卿為家

同

同

同

同

前大納言為氏卿

從二位家隆卿

按察使資平卿

權大納言公實卿

大納言師頼卿

洞院攝政

修理大夫顯季卿

基俊

中務卿みこ

好忠

元真

百首歌水鳥

去をれ蘆のふし葉か下にあさりするかりのうき世を流てそふる  
おもはずよな井の浦の蘆分のみやこになほもさはるへしとは

俊頼朝臣  
權大納言實家卿

此歌は津の國わたりにかよふ女の都へかへりて後猶とかくさ  
はるとて物申さゝりしにつかはしけると云々

百首御うた

家集雜歌

永保三年十月性子内親王  
家歌合蘆花

嘉應二年住吉社歌合違懷

貞應三年百首

六帖題

建保三年名所百首

承安三年廣田社歌合判者  
俊成卿

承保四年九月殿上歌合蘆  
花

冬歌中

千五百歌合

17

冬きてはあらはれぬらん蘆の葉にかくれてすみしみのえの月  
すゝたれるこやのあれより漏月やみしえは蘆のめにもあるらん  
むらゝにさらせる布と見えつるは玉江の蘆の花にそありける  
住吉のうきにおひたる去をれ蘆をなみひきたてよ神のめくみに  
夏かりのあしのふるねの又はへにみしかくたまる冬のしらゆき  
新六云々  
人なみにさても世渡る流あしのうきふしはうきになしつゝ  
新六三  
けふもこすうきにかるてふ蘆つゝのうすきや人の契りなるらん  
つるのなくたみのゝ嶋もまぐれつゝあしの枯葉にうら風そふく  
おきつすに潮やみつらんあさりするあしまの鶴の立さわくめり  
難波江にひまなくよする白浪見えこそわたれあしのわかほの  
古米歌  
なにはかたあしのはなふくうら風に浪にもきえぬ雪そちりける  
すみよしの堀江のあしも霜枯てよそにもまるきみをつくしかな  
なみかくる君にあふみのかたゝ舟まけきあしまをゆく方そなき

順徳院御製  
俊頼朝臣  
源頼綱朝臣  
土御門院内大臣  
民部卿爲家  
同  
正三位知家卿  
從二位範家卿  
智經法師  
藤原惟信  
右近大將通平  
法橋顯昭  
家長朝臣

正治二年百首

久應元年七社百首寒廬

建保三年内大臣家百首水經寒廬

弘安三年新熊野宮百首

題不知

家集

舟

ひさしくまゐらざりける人たひくになりにければ

長歌

みたれあしのほむけの風の方よりに秋をそよするまのうら浪  
 冬ふゆきてはおはなにつく蘆あしのほのひとつによするまのうら浪  
 まのうらうらいり江えにすたく水鳥みづとりのうきねのあしも霜しもかれにけり  
 おく霜しもに人めはかりはかれあしの玄くろたにかはらて春はるやまつらん  
 萬よろづ十四しよみなどあしの蘆あしの中なる玉たまこそすけかりこ我わがせことこのへたしに  
 はま萩はまかぎのおひしとところにふみ分わて夕ゆふきりかくれたつそなくなる  
 六む三さん萬よろづ九くあしとみてこき行舟ゆきふねはたかしまのあまの道みちにつきにけんかも

ひさしくまゐらざりける人たひくになりにければ  
(新宮女御集)  
 うらみつの濱なみにおふてふあしあしけみひまなくものを思おもふ比ひかな  
 萬よろづ一いつならのみやこの、さほかはに、いゆきいたりて、わかねたる、ころ  
 ものうへに、あさつくよ、さやかにみれば、あしのほに、よるの霜  
 ふり、いはとこの

### 海松

百首賦

六百番歌合見戀

この比はみなみの風かぜにうきみるのよるくすしあしのやの里  
 妹あなかままあらいそそによる浮うみるのうきをもみるはみぬみぬにたられり

法橋顯昭	前中納言定家卿	後京極攝政	民部卿爲家	大藏卿有家	安嘉門院四條	人丸	同	よみ人去らす	天曆御製	人丸
------	---------	-------	-------	-------	--------	----	---	--------	------	----

家集寄海戀  
家集みるといふものを人  
のおこせたるを

長歌

ちぬの海浪にたよふ浮みるのうきをみるはたゆかしかりけり  
磯に生るみるめにつけて鹽かまのうらさひしくも思ほゆるかな  
みけむかふ淡路の島もたむきてみぬめのうらのおきへに  
はふかみるとれり

俊頼朝臣  
爲頼朝臣  
赤

長歌

伊勢のうみのあさなきにきよるふかみる夕なきにきよるま  
たみるふかみるの

よみ人志らす

題不知

打寄するみるかひありてよさの海のおそひの浦に比もへぬへし

同

藻

萬七  
うち川に生るすかも川はやみとらてきにけりつとにせましを

よみ人志らす

難波かたまほひにて玉藻かるあまの少女等かなつけさね

同

かるもかきたく鹽竈にあらねとも戀のけふりや身よりたつらん

大納言經信卿

池水新出賣のよにひさしくすみぬれはその玉藻もひかりみえけり

伊勢大輔

思ふこといまこそなけれわかの浦にまつむもくつも花咲にけり

法橋顯昭

田子のうらのあら磯の玉藻浪の上にうきてたゆたふ戀もする哉

鎌倉右大臣

まほたれて我身すもにたつけふり蟹のまわさといつ思ひけん

民部卿爲家

御集戀歌  
寶治二年百首寄煙戀

永イ  
文應元年七社百首

六帖題御うた藻

建長八年百首歌合

禊子内親王家歌合池水一  
重殘

題不レ知

長歌

家集戀歌中

六帖題

菰

ひをのよる網代にかゝる流藻の玄はしましるもいとはれやせん

とにかくに人の心はみたれ藻のなひくとみるもたのまれぬかな

蟹の刈藻にいほりして住むしの名は去りながら名をうらみつゝ

春のいげにひとへのこれるうす氷あをむ玉藻もかくれさりけり

たま藻かるとしまをすきてなつ草の野鳥かさきに舟ちかつきぬ

とふとりの、あすかの河の、のほりせに、おふるたま藻は、くたり

せに、流ふれふる、

いつしかもけふをくらして飛鳥河わたりてはやく玉藻かつかん

新六三ミカ居る濱のまさこのうちあけに浪際見えてよるもくつかな

題不レ知

三百六十首中

六百番歌合

家集右義の宮の御許にち  
まさたてまつるとて

夏歌中

萬十一  
まこもかるおふの川原のみこもりにこひこし妹か紐とくわれは

蛙なく井手のわかこも刈ほすもつかねもあへすみたれてそふる

行するのふかきえにこそ契つれまたむすはれぬよとのわかこも

ふかさはのこもをそかれる君かためたまは衣のうらにかへらん

萬代  
みしまえの玉江のまこもなつかりに去けく行かふをちこちの舟

民部卿爲家

中務卿みこ

光俊朝臣

美人作

同人丸

同

貫之

光俊朝臣

よみ人志らす

好忠

後京極攝政

和泉式部

相模

題不知

久安百首

洞院攝政家百首

六帖題

建保四年内裏十首紙合

同三年名所百首

家集みつ河にて

文治六年五社百首

家集

每日一首中

同

同

千五百番家歌合知病得一

六五萬十 刈蕪のひとへを去きてきぬれとも君としぬれはさむけくもなし  
六五袖中抄 みちのくのとふのすか蕪なふには君をねさせて我みふにねん  
同 よみ人ふらす

君待ととふのすか蕪ふにたにねてのみあかす秋をそかさぬに  
前參議教長卿

山かつのふせやのまこもあみめよりかつみたれいるふゆの白雪  
民部卿爲家

新六み かりてほす淀野の眞蕪あみいとちかひめおほき我うれへかな  
信實朝臣

風吹はみなはになひくかりこものみたれてのほるよとの河ふね  
後久我太政大臣

玉葉族 舟とむるみつのみまきのまこもくさからてかりねの枕にそしく  
俊成卿女

刈のこすみつのまこもにかくろへてかけもちかほになく蛙かな  
西行上人

### 蓬

直しとてあさの蓬はなにならすみたれてもあれ野へのかるかや  
皇太后宮大夫俊成卿

わか宿の雪はいくへと春やみんあれにしのちのよもきふのかけ  
前中納言定家卿

さくらあさのかりふの跡のよもきにそうつり行よの程は悲しき  
民部卿爲家

ふくとみしあやめはかるふるさとの軒のふにまじる蓬生  
同

春またぬ冬かれのみもなにとしてふかきよもきの跡やおくらん  
同

身につもる風のかよひ路尋ねすはよもきの關をいかてするまし  
寂蓮法師



萬壽二年義忠朝臣家歌合  
列歌者有

正治二年百首

六帖題

弘長元年百首

家集

蓬

爲家卿家歌合

かた／＼にとるかたもなきよもき草人かすならぬ心ちこそすれ

とふ人や山ちのかけにあとたえてよもきかすゑに風そふくなる

新六六 まきもくの檜原ひげに似たるかり蓬よもぎをまのまけみとうへもいひけり

山陰にまけきよもきのそまつくり我すむいほのかこひにそかる

たれかきてみるへきものものと我宿のよもきふあらし吹はらふらん

霜現在六ふかきにはにをれ伏す蓬生よもぎのたつかたなくて身はふりにけり

きり／＼す庭のよもきのそまかたに聲ふきまよふ霜のゆふかほ

### 思草

秋雜歌中

堀河院御時百首

建保三年名所百首

同年内大臣家百首

同年内裏御會に曉増戀

建保元年老若五十首歌合

正治二年仙洞御會枯野霜

萬十 道のへのをはななか本のおもひくさいまさらなにかもの思ふへき

ひくまの、かやか下なるおもひくさままたふた心こころなしとまらすや

春日の、かすみかくれのおもひ草下のおもひのはる、よそなき

春日のにまたしもかれのおもひ草おもふこゝろは神かみをまるらん

あかつきの床はまほせのおもひくさ人を見らくの夢もすくなし

春日野やしたもえわたるおもひ草きみのめくみを空にまつかな

朝霜のいろにへたつるおもひ草きえすはうとしむさしの、はら

よみ人志らす

前大納言忠良卿

信長 朝臣

同

和泉式部

隆祐朝臣

從二位家隆卿

人丸

仲實朝臣

正二位忠定卿

正二位家隆卿

同

前中納言定家卿

同

0 0  
同年百首  
光臺院入道二品親王家五  
十首寄草戀

あさちふの露のみふかき思ひ草いろをみすへきことの葉もなし  
いかにせんまのふのおくの思ひ草われのみまりて年はへにけり

隆 祐朝臣  
從三位範宗卿

0  
六帖題

新六  
人まれぬむねの思のせきいたにのきのまのふはさそまけるらん

信 實 朝 臣

### 忘 草

0  
延喜六年月次御屏風忘草

0  
忘草を

0  
建保四年百首

0  
嘉元元年百首不逢戀

六帖六拾雜上  
うちまのひいさすみのえの忘草わすれしひとのまたやつまぬと  
萬代  
かた時もみてなくさめよ昔よりうれへわするくさといふなり  
下細のゆふてもたゆきかひもなしわする草をきみやつけん  
また細につけたる草はなのみしてこゝろにかれぬ人のおもかけ

貫 之  
中納言兼輔卿  
前中納言定家卿  
參議爲相卿

### 百代草

0  
六百番歌合

百代草  
よまてなとたのめけん刈初めふしのまちはしかき

法 橋 顯 昭

隆 祐

六帖題

新六六 露<sup>つ</sup>ま<sup>も</sup>け<sup>い</sup>き<sup>い</sup>へのそのなる百代草もよ<sup>い</sup>もこ<sup>ひ</sup>ぞてぬらし<sup>つ</sup>

光 俊 朝 臣

白慈草

百首歌公事と云事を

永仁元年楚忽百首

けふにあふ雲井の庭のすま<sup>い</sup>草と<sup>る</sup>てもあたにうつるものかな  
すま<sup>い</sup>草秋のはつきのをり去りてうつる花<sup>は</sup>はたちなましりそ

前 参 議 雅 經 卿  
藤 原 爲 顯

爾許草

六帖題  
題不知

新六六 霜に枯<sup>か</sup>にけらしなあしかりの箱根のねろにまけるにこくさ  
あし<sup>か</sup>かきの中のにこ草にこ<sup>か</sup>かにわれとゑみして人にまらるゝ

衣 笠 内 大 臣  
人 丸

木

六帖題

萬十四 こひしは袖もふくむをむさしのうけらか花の色にいつな夢  
あさかた潮干のゆたに思へらはうけらか花のいろに出めやも  
あさかたうけらか花のいと又色こそみえねとるもくれつ

よみ人まらず  
同 正三位知家卿

菅

家集

天曆十一年坊城右大臣家  
歌合山菅

家集戀歌中

建長七年顯朝家千首

六帖題

同

同題歌すけ

題不<sub>レ</sub>知

百首歌

百首歌

千五百番歌合

西園寺入道太政大臣三十  
首

正治二年百首

おときけは人のものおもふやますけを心みかほにさけるはな哉  
 かきりなくたのまるゝかな露はかりうつろふ色にあらぬ山すけ  
 ときはなる山のやますけ世々をへてかはらぬ色は君のみそ見る  
 いかにかせん野澤に生るまる菅のまろすけもなきこひにけぬへし  
 露ふかきまのにおひたれら菅のまらしな袖のぬれまをるとも  
新六六 かくれぬの初瀬はつせの山のいは小菅こすげいはぬもななきねはなかれつゝ  
新六六 菅の根はむへなかくらし片淵かたふちのぬまたにふかみたれかうゑけん  
 玄たねさす潮の入江の玄のひ菅玄のひもあへすからき世なれば  
萬十二 やま玄ろのいつみの小菅こすげおしなみにいもか心を我おもはなくに  
 さりともなよもたゝにては山城やましろのいつみの小菅こすげいつかあひみん  
 いつくまで今日はいくのゝ道ならんえも玄ら菅の草まくらかな  
 山かけのいはもとすけのねたくのみいろもかはらぬ物思ふらん  
 あらしふくばるのみゆきは吉野山すかのねまろき花をふりしく  
 逢はやなよそなからのみ三吉野のみくまか菅のかりねなりとも

和泉式部

よみ人志ら

同

修理大夫顯季卿

光俊朝臣

衣笠内大臣

信實朝臣

權僧正公朝

人丸

法橋顯昭

正三位季經卿

野宮左大臣

從二位家隆卿

喜多院入道二品親王み

題不知

13

萬十一 三吉野のみくまか菅をあまなくにかりのみかりて亂わづれなんとや  
萬七 春日山やまたかゝらしいしの上のすかのねみんと月まちかてに  
萬七 はしたての倉梯川の青菅を我かりて笠にもあます河のおをすけ  
萬十一 うはたまのくろかみ山の山菅にこさめふりしきますくそ思ふ  
六帖 大君のみ笠にぬへるありま菅ありつゝみれとことなきわきもこ  
萬十四 あしかりのまゝの小菅のすか枕あせかまかささんころせたまくら  
あしからの山にまげれるたま小菅行かふこまもすさめさりけり  
かせふげは箱根のやまのたまこすけなひきてわれに心とゝめよ  
いもやまの岩根におふるまる小菅まるこすとてや露けかるらん  
いたつらに朽やはてなん鶴のなくなこえの小菅むすほれつゝ  
萬十八 いやましにのみ、たつのなく、なこえのすけの、ねもころこ、思ひ  
むすほれ、なげきつゝ、

新後撰冬  
去きしまやみむろの山のいはこすけそれとも見え霜さゆる比  
見わたせはみむろの山のいはこすけ去のひに我はかた思ひする  
萬十二 あさはのなたつ三輪小菅根隠れてたれゆゑにかは我こひさらん  
あさはのなたつみわこすけ去きたへの枕に去ても一夜あかしつ  
あさはのゝ露の去ら菅うちはえてかくれて永ときねにそなきぬる

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

よみ人志らす

同

同

同

同

同

同

元

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

千首歌

題不知

建保五年歌合冬山霜

長歌

弘長元年百首

建長八年百首歌合

家集戀歌

東宮賀御屏風さがみのあしがらな

相模國歌

家集

六帖題

戀御うた中

題不知

寶治十首歌合忍久戀

長歌

題不知

家集戀歌中

久安百首

旅宿蟲

百首歌

ゆふはかはなつ行水のいはこすけぬきもさためぬ玉をみたる、  
 新ニナシ五六新川新山陰のみかけのこすけ年をへてこゝろなかくもいひわたるかな  
 同ニナシ六新昔人のかさねぬふ草の茹あとのよにすけもなくなりにけるかな  
 現存ニナシ六新ものゝふの弓柄に巻るみしま菅みしまならはとけぬつれなさ  
 えられしなかなたしきあかす涙のみ眞菅のをこもえたにくつとも  
 ねぬなほにえたさしかはすまろ小菅まるをこすとや未だ定めし  
 下萬六にのみえのふの山のいはこすけいはて思ひのとしそへにける  
 かねてえりせは、ちとりなく、そのさほかはに、いしにおふる、す  
 かのねとりて、えのふ草、

萱

萬十四 川かみの根白たか萱あやに／＼さね／＼てこそことに出にしか  
 をかみ川根白たか萱ふみしたきとるあしつきもせなかためと  
 秋ふかみあたのおほの／＼つゆ霜にかやかうら葉も色つきにけり  
 宮城のゝかやかねに鳴きり／＼すなれもたひねや露げかるらん  
 あはつのゝかやか下をれわけわひてうつらたつ也秋のゆふくれ

從二位家隆卿  
 衣笠内大臣  
 正三位知家卿  
 同  
 後九條内大臣  
 俊頼朝臣  
 山階入道左大臣  
 よみ人志らす  
 よみ人志らす  
 俊頼朝臣  
 實清朝臣  
 後徳大寺左大臣  
 寂蓮法師

文永五年毎日一首中

十首歌

老若五十首歌合

あはつのかやか下葉のみたれより又ふきのほるまかのやま風  
よしとたに人にはえこそいはれの、かやか下葉にいさ亂れなん  
むしのねも秋のすゑ葉に枯はてゝまもにさえゆく庭のかやはら

民部卿爲家  
同  
前大納言忠貞卿

### 濱木綿

題まらす

十題百首

仁安二年二月清輔朝臣家  
歌合海邊渡

みくまの、浦のはまゆふも、へなる心は思へとたに逢ぬかも

はまゆふのかさなるかすを去るへにて思ひたちけりわか浦浪

みくまの、浦の濱木綿見えぬまでいくへかすみの立へたつらん

此歌判云衆儀浦のはまゆふといふならばたちかさぬらんなど

ぞうちまかせたることにてあるをへだつとあればほいなきや

うにこそきこれたししかきたがへにこそ侍めれ此かすみは

おぼつかなき所をいかにしてさだめらるべきよし申あはれた

る程にぬしの物去たまへるにたづねられはまゆふはへだつ

共よめるやうにこそと申さるゝを思ひいで侍ればふるくもは

まゆふ心へだてゝ思ふ物かはなど申事侍れどそれは男女の中

の事に引よせん時こそあらめこの歌にはいかにもかさねまほ

人 寂 蓮 法 師 丸

資 隆 朝 臣

久安百首

六帖題

しき事になんと人々申されしかば左勝にきと云々

あはぬまは浦の濱木綿うらみつゝかく言の葉をゆめにたにみよ  
新六三  
かきつくる浦の濱ゆふなにとしてゆめには人をみせはしめけん

待賢門院堀河  
光俊朝臣

### 小々妻

十題百首

堀河院御時百首

山かつのむすひてかつくさゝめこそころもの關と雨をとほさね  
月きよみあけの野はらの白露にさゝめわけくるころもさぬれぬ

寂蓮法師  
仲實朝臣

### 藍

題不知(六帖)

百首御歌草

六帖題

人<sup>萬七</sup>去れすこひは去ぬともみそのふのからあゐの花<sup>の</sup>色<sup>の</sup>にいてめや  
いくまほもおのれか染る色そかしなとくれなるのからあゐの花  
新六六  
刈<sup>の</sup>おけるつかねの藍のこゝの<sup>の</sup>あればあくまでそみん色<sup>も</sup>知るゝ

よみ人志らす  
土御門院御製  
正三位知家卿

### 紅



題不知(六帖)

くれなる

たかまきし紅なれば三輪やまをひたくれなるにほはせらん  
かくらくのとませのやまをすにつくとよすめかみのまきし紅  
くれなるの末さく花の道ふかくうつるはかりもつみしらせはや

よみ人 去らす  
同  
民部 卿 爲家

紫

題不知

13

延喜廿一年三月京極御息所歌合

久安百首

六帖題

むらさきを草とわけく伏鹿の野はことにしてこゝろはおなし  
つくはのにおふる紫きぬにそめいまた著すして色にいてにけり  
から人のころもそむてふむらさきの心にまみておほほゆるかな  
今年より匂ひそむめり春日のゝわかむらさきにてをなふれそも  
むらさきに手をこそふるれ春日のゝ野守よ人にわかなつますな  
紫のゆはだ染むてふさすはひのあひみあかすはひとまらめや  
むらさきはなへて位の色なればこきもうすきもうはきなりけり  
みとりよりふかむらさきの衣きてつかへし事もむかしなりけり

よみ人 去らす  
中納言 家持 卿  
麻 田 連 春陽  
よみ人 去らす  
同  
前參議 親隆 卿  
民部 卿 爲家  
衣笠 内大臣

麻

題不知

久安四年毎日一首中

十題百首

久安百首

正治二年百首

家集

三百(六十一)首中

うき草

寛治二年百首

萬十二

さくらあさのおふの下草露しあれは明てをゆかんおやは去る共

さくらあさのおふの山はた刈もあへす作りかへても何急くらん

去つのめか心すしきまとゐかなさくらあさちるおふのした風

夏草や去けみの野らのあさの葉になと夕たちのたまをぬくらん

かりはやす麻のたち枝に去るきかな夏の末葉になれるけしきは

我戀ははしめも去らす賤の女かあさのをたまきすゑのみたれに

我まきし麻をのたねを今日みれば千枝にわかれて風そすしき

萍

六方  
こもりえにひまなくうける浮草のまなくそ人はこひしかりけり

さのみやはうきに年へんうき草のねもみぬ物をいひもたえなて

浅砂

新六六  
みれは又あさおふてふさはみつはそこの心のねをそあらはす

同  
思ふことそこふかゝらぬうきねより心あさのさてそおひける

よみ人去らす

民部卿爲家

寂蓮法師

郁芳門院安藝

土御門内大臣

正三位知家卿

好忠

よみ人去らす

正三位知家卿

信實朝臣

正三位知家卿

同  
新六六  
いけ水におふてふ草のあさゝのみうきはならひとぬらす袖かな  
民部 卿 爲 家

蓼

六帖題  
新六六  
さきのとふ河邊のほたてくれなるにゆふ日さひしき秋の水かな  
衣笠 内 大 臣

同  
同  
かきほなるほたていろつくつゆ霜にむへさえけらし夜はの衣手  
正三位 知家 卿

同  
同  
みるまゝにこまもすさめすつむ人もなきふるさとのたてに花咲  
信 實 朝 臣

たて  
現存六  
うき世には身をのみつみし水たてのからきめにこそ涙おちけれ  
光 俊 朝 臣

同  
同  
水たてのほつみにかよふ村とりのたちゐにつけて秋そかなしき  
後光明峰寺攝政

題不知  
萬十六  
童部もくさな刈そねやほたてをほつみのあそかわきくさをかれ  
よみ人志らす

同  
同  
みな月のかはらにおふるあをたてのからしや人にあはぬ心ちは  
同

好  
好  
やほたても河のせみれば生にけりからしやわれも年をつみつゝ  
民部 卿 爲 家

眞應三年百首  
たてといふ草の紅葉した  
からきかな刈もはやさぬいぬたてのほになる程にひく人のなき  
民部 卿 爲 家

たての葉ももみちしぬればよそめには唐錦とそ見えまかひける  
惠 慶 法 師

芹

六帖題

家集戀百首中

六帖題

家集

新六六

新六六

水まさるわさ田にまけるふかせりのねもみぬ人をかく戀めやは  
こひぬまも水田のあせにひく芹のねをあらはして袖ぬらしけり  
かつすゝく澤のこせのりねをまろみきよけに物を思はずもかな

衣笠内大臣

民部卿爲家

西行上人

### 水葱

新六六

をしなへてまける草葉にわかさりし沼のこなきも花にさきつゝ  
露むすふ田なかの井とのなきのはに光さしそふゆふつくひかな  
おのれさへこひちにぬれてなは代のこなきかもとになく蛙かな  
苗代の田つらのあせのうゑこなきまくてふ種をとりやませけん

衣笠内大臣

民部卿爲家

正三位知家卿

信實朝臣

### 母子草

花の里こゝろもまらさ春のにはらくつめるはこもちびそ

和泉式部

此歌家集云右義より野老おこせたるてばこにくさもちいれて

たてまつりてと云々

駒 繫

貞應三年百首草 セニ

をみなへしおほかる野への駒つなきおちげん人や引とゝめてし

民部 卿 爲 家

犬子草

貞應三年百首草

ゑのこ草をのかころくほにいて、秋おく露のたまやとらん

同

土 筆

貞應三年百首草 ア

さほひめの筆かとそみるつくくし雪かきわくる春のけしきは

同

折敷草

貞應三年百首草 ワ

秋來ぬときゝつるにはのをしき草いとゝ露をやすまさららん

同

鏡草

貞應三年百首草

かねはみのそはにおいたるかみ草露さへ月にかけてみかきつゝ

同

莞草

家集戀

河ちとりなくやかはへのおほひ草すうちおほひ一夜ねさせよ

清輔朝臣

射干

家集草歌

蓬生はさることあれや庭の面にかくすあふきのたとえけるらん

西行上人

莎草

六帖題

新六ふみかくれに深きさはねのみくりなは月日はくれとひく人もなし  
同 さやまなる池のみくりのねもみねとうちは人のくるを待るゝ

民部卿爲家  
光俊朝臣

芝

弘長三年内裏百首野夏草

六帖題

ふみそめし跡はたのまん春日のゝみちのしは草ことえけくとも  
新六一  
いかにせん内野の芝生年をへてあらぬつくりにせはくなるよを

同  
えらさりしのくちの里に宿かりて道のえはふにいまそあきたつ

新六六  
駒放つ野へのうなむかえはくらへ永き目くらすこれやなくさめ

同  
いへの風ふき枯したる芝のねはおこしところもなくなりにけり

同  
たまほこの道のえは草ほに出てはるのつはなもひとまねくなり

同  
もゝしきの庭のきりしはふる雪にこれをかきりとぬれし袖かな

同  
あひにあふふちのかさしその春のひかてそ過しきり芝のこと

同  
なつ山のかはかみきよき水の色のひとつにあをき野邊のみち芝

同  
たまほこの露のみちしはうちなひきくるればすゝむ夕立のそら

同  
あかつきの露のみちしはなきわかれ袖のかたみにのこる月かけ

同  
現存六

前大納言爲氏卿	民部卿爲家	正三位爲家卿	同	信實朝臣	同	光俊朝臣	前民部卿雅有	前中納言定家卿	光明峰寺入道攝政	正三位知家卿
---------	-------	--------	---	------	---	------	--------	---------	----------	--------

六帖題

建長四年内裏十首歌合

建保七年百廿八首體歌芝

家集芝

山ちさ

新撰  
行

六帖題

いかはかり人めこふらしかくらくのはつせにさける山ちさの花

權僧正公朝

目覺草

題不知

萬十二  
あかつきのめさまし草と花をたにみつゝいまゝて我を去のはせ

よみ人志らす

夕陰草

題不知

萬四  
我やとのゆふかけ草の去ら露のけぬか<sup>も</sup>もとなお<sup>も</sup>ほゆるかも

笠女郎

指燒草

雜歌中

六六  
ちきりけん心からこそさしも草おのかおもひにもえわたりけり  
同  
去もつけや去めちかはらのさしも草おのか思ひに身をや燒らん

よみ人志らす

正治二年百首

六百番歌合戀

さしも草さしも去のはぬ中ならば思ひありともいはましもものを  
あさましやなとか思のさしも草露もおきあへすはてはもゆらん  
此歌左方申云後拾遺にもいぶきによせてこそもゆ共よみたれ

同  
皇太后宮大夫俊成卿  
寂蓮法師



いぶき無てもゆとよめるいか右陳云古歌にさしも草もゆと  
よみたればよむなり判者俊成卿云左歌さしも草露おきあへず  
もゆらん事もにはかにあまりなるにやと云々

葎

正治二年百首

續後拾雜上

建長三年鳥羽殿十首歌合  
山家秋風  
家集

古里はむくらのゝきもうらかれてよるくはるゝ月のかけかな  
柴の戸をまけるむくらのさしこめて風たに夏はいらぬなりけり  
むくらはふ柴のいほりに音信ておきの葉すくる夜はのあきかせ  
むくら生て荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすたく也けり

式子内親王  
正三位經家卿  
俊成卿  
業平朝臣

手向草

題不知

長歌

萬一  
白浪のはま松か枝のたむけくさいくよまてとかとしのへぬらん  
なら山すきて、ものゝふの、うち川わたり、おとめらに、あふさか  
山に、たむけ草、いとゝりおきて、わきもいに、

河嶋皇子  
よみ人ふらす

芭蕉

久安百首

家集

正治二年百首

百首歌草廿首中

秋風にあふはせをほのくたけつゝ有にもあらぬ世とは知らずや  
風ふけはあたにやれ行芭蕉葉のあはれと身をもたのむへき世か  
きり／＼すまちかきかへにおとつれてよひの雨ふる庭の芭蕉葉  
いかゝするやかてかれ行はせをほにこゝろしてふく秋風もなし

前参議教長卿  
西行上人  
寂蓮法師  
民部卿爲家

莫鳴菜

天仁三年四月師時卿家歌  
合寄衣戀

題不知なりのりそ

六帖題

同

同

なりのりそをかりほす蟹のあさ衣おのれををるゝこひもするかな  
なかの蟹の磯にかりほすなりのりそは告てしをなそ逢かたき  
和歌の浦に磯のなりのりそそれはかり僅にかけるあまのさひしさ  
いたつらに浪にゆるるゝなりのりそを木の丸殿にいかてうゑまし  
磯かくれのりにまされるなりのりそ今も今は去る人もなし

藤原定通  
よみ人ふらす  
民部卿爲家  
信實朝臣  
光俊朝臣

和布

洞院攝政家百首

思<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>

見和布

六一 うきめかるあまの小舟は我なれやうらみそわたる朝なゆふなに

正三位知家卿

六五 萬四<sub>テ</sub> 難波かたえほひのなこりあくまで人にのみるめを我はとしき

よみ人まらす

六三 續後拾雜上 興風集 白浪ををりかけあまのこく船はいのちにかふるみるめかりにか

同

六三 海に神のいはへるみるめをはみとせにきてそ蟹も刈てふ

同

夫木和歌抄卷第二十八終



文集百首挿柳作高林  
種桃成老樹

六帖題むし

栗田右大臣念御申されけるによる夏の事に侍ける

七重寶樹風には一實相の  
理を調へ

久安百首

正治二年百首

詩

文永五年毎日一首中

六帖題

同(流木)

同(山木)

寶治二年百首

嘉祿三年百首寄木戀(そこのながれ木)

柚木

三百六十首中(まは木)

家集戀

ひきうゑし木々の梢にとしたけて宿もあるしもおいにけるかな  
ことわりをえらて木をはむ蟲なれば深きみのりを聞かひもなし

慈 鎮 和 尙  
權 僧 正 公 朝

なへなる植木のかげも暗からす夏の夜ふかきの法のひかりに  
陰きよき七重のうゑ木うつり來てるりのとほそも花かとそみる

能 宣 朝 臣  
皇太后宮大夫俊成卿

いつみなる玄のたのもりの千枝なから玉のうゑ木にかさる白雪  
わか葉さすたまのうゑ木の枝ことにいくよの光みかきそふらん

前 大 納 言 隆 季 卿  
後 京 極 攝 政  
參 議 爲 相 卿

なへてよのたねともみえぬ梢かな玉のうゑ木のはなのすかたは  
またえらぬ玉のうゑ木の面影もゆきのこすえにみるこちする

民 部 卿 爲 家  
同

新六二  
すてられし昨日の山のふし折木さてもかひなく世にやくちなん  
難波潟潮干しほみちなかれ木のうきてはまつむ身こそつられ

正 三 位 知 家 卿  
光 俊 朝 臣

新六六  
かさこしにたてるやま木のうは枝は花も紅葉もあるときそなき  
いかにせんをのへに立てるうつほ木のあな戀しとも言ぬ思ひを

同  
民 部 卿 爲 家

雲葉  
わたつ海のそこの流れ木いたつらにからき思ひに沈みはてつ  
柚山にたてるふし木のいたつらになとひく人のなき身なるらん

藤 原 教 嗣 朝 臣  
好

柴木たくいほりにけふりたちみちてたえすもの思ふ冬の山さと  
よとよに浪こす磯のそなれ木のまつえや戀のころもなるらん

修 理 大 夫 顯 遠 卿  
忠

百首歌旋頭歌(うき木)

題不知

千五百番歌合建長八年首

建長八年百首

建保四年百首

六帖題

承久二年四季百首

家集(えたなき)

同(まがり木)

百首歌老後初戀

文應元年每日一首中

家集

同(はいき)

同(あはれ木)

心似空木浮(水上(あまのうき))

夫木和歌抄卷第二十九 木

九百八十七

新千雜下  
飛鳥河浮木に積る淡雪の浪立來れば頼もしけなきよにも有かな

萬七  
まかなもてゆけの河原の埋木の顯はるましきことにあらなくに

五月雨はゆけのかはらの埋木もあらはれてこそなかれきにけれ

むもれ木のかれたるえたも花さきし昔になしてふれるまらゆき

和歌の浦の浪のうもれ木いく代へて君かめくみの春をしるらん

新六六  
ふる河のまけきぬなはになかれてなかれもやらぬよの埋木

拾遺集  
なみた川春の月なみたつことに身はまつみ木のまたにくちつ

野にたてるえたなき木にもおとりけり後の世まらぬひとの心は

新千物名 惠慶集  
わさとこそくり放つめれ曲木にはひまつはるゝあをつゝらをは

此歌は惠慶法師のもとよりあをつゝらをこにくみてなつめそ

り歟  
などを花にませておこせたる

われなからうたて朽木のみにしあへは心のはなのまたに有けり

風わたるをたのすくろるときは木に秋をきかするもすの聲かな

すみかそと思ふもかなしくるゝ木をこりつゝ人のかへる山へに

は、き木は思ふもせやと思へはや近づくまゝにかくれゆくらん

冬山の雪間にたてるあはれ木のうへにそくゆるかくすつみなく

心をしあまのうき木になしつればなかるゝ水にまつまさりけり

俊 頼 朝 臣

よみ人志らす

寂 蓮 法 師

從二位行家卿

從二位家隆卿

正三位知家卿

前中納言定家卿

西 行 上 人

重 之

寂 蓮 法 師

民部卿爲家

和 泉 式 部

俊 頼 朝 臣

順

千

里

寶治二年百首寄木戀あ  
さきのみやき

取かぬるあさきのみやき節まけみさもわれにくく人のいふかな

信實朝臣

松

題不知

萬十二 山の小松かすゑにあれこそはわか思ふ妹にあはすやみなめ

人丸

同

六二 伊勢集 新古戀五 わかこふるみのを山のひとつまつむすひし心いまもわすれす

よみ人まらす

同

萬二 のちみんと君かむすへるいはえろの小松かうれを又みつるかも

人丸

結松枝

萬二 いはしろのはま松か枝を引むすひまさしくあらは又かへりみん

有間皇子

見結松作歌

萬二 岩代の野なかにたてるむすひ松ころもとけすむかしおもへは

意吉丸

題不知

萬十 やちくさの花はうつろふときはなる松のさ枝をわれはむすはな

右中納言大伴家持

同

風吹は紅葉ちりつゝまはらくもわかのみつはらきよからなくに

よみ人まらす

同

足引のやまかも高きまきもくの木すゑのまつにみゆきふりけり

同

同

萬四 きみにこひいとすへなみなら山の小松かもとに立なけりかも

同

同

萬十二 とよくにのきくのはま松心にもなにとていもにあひしそめけん

同

忠峰がもとへ

かひかねの松に年ふる君ゆゑにわれはなけきとなりぬへらなり

貫之

元服の所にまかりて

春日野にいまもえいつる千代の松木高きかけとはやもならなん

能宣朝臣

圓融院御時紫野の子日に  
松のもとにて

續千賀 ひく人もなくてちとせをすこしける老木の松のかけにやすまん

法性寺入道關白

家集春歌中

三百六十首中

建保二年名所百首

洞院攝政家百首

文永五年毎日一首中

建長七年顯頼卿家千首歌

六帖題

家集

承安三年七月右大臣家歌  
合庭松

正治二年百首出家

百首歌

千五百番歌合

正治二年百首御歌

同

文應元年毎日一首中

正嘉二年毎日一首中

おとは山みねの霞はたなひけとまつの木すゑはかはらさりけり  
をしほ山をのへのまつ枝ことにふりしくゆきは花と見えつゝ  
をしほ山夕霜ゑろきまつのはのちりもいく代のとしつもるらん  
まらとりとは山松の木のみよりさえたる月にあきかせそふく  
われはかりともとそたのむ小倉山おなしふもとのみよのふる松  
いたつらにたてりしものをふる松のよこねかちなる老の後かな  
葉すくなに吹からさるゝ浦まつのはほ風さむみなをたてるかな  
おいゆけは末なき身こそかなしけれかた山はたの松のかさをれ  
さきくさの三葉四葉にえたかはす松の千とせはきみかまに〜

此歌の判者清輔朝臣云松を三葉四葉といはんこといかいと云々

山里はみねにたえせぬまつこのゑ木葉にしふたにのしたみつ  
雲もなく空はれわたるみねたにも雨をふくむはまつのおとかな  
いくかへりおいそふ松の陰をみんはこやのやまの春の木すゑに  
千代ふへきはこやの山のとこ松をたのむこゝろも色そかはらぬ  
いつもみしまつのいろかは初瀬山さくらにまじる花のひとしほ  
色かへぬまつはすくなきはつせ山はなも紅葉もおもかけそたつ  
たかの山さこそ千年とたのむらめむかしにかへす松のゑるしに

俊 頼 朝 臣

好 忠

從三位行能卿

同

民部卿爲家

信 實 朝 臣

同

西 行 上 人

俊 惠 法 師

式子内親王

前中納言定嗣卿

嘉陽門院越前

第三のみこ

前中納言定家卿

民部卿爲家

同



光臺院入道二品親王家五十首寄松祝

同 君か代はたかの、やまのみねの松まつもひさしき月やみるへき

正三位行衛卿 如願法師

つくは山岩根の松の千代をへてまげきやきみかめくみなるらん

前大納言忠夏卿

正治二年百首 正治二年百首

從二位家隆

家集松松 洞院攝政家百首雪

從二位家隆卿

建保二年和歌所歌合松經 同 神代よりいくよかへにしをとめこか袖ふる山のみつかきのまつ

從二位家隆卿

同 同 友千鳥さほのかはらの浪になげはこゑうちそふるみねのまつ風

同 慈鑣和尚

御集中 人のもとにおほわりこなつかはしけるに子の日しけるかたあるを

同

萬代新千賀 君かへむ丸のかへりをかそふればゑにかく松のおひかはるまで

道信朝臣

建長八年百首歌合 衣笠内大臣

衣笠内大臣

千五百番歌合中 前大納言兼宗卿

前大納言兼宗卿

養和元年百首神祇 前中納言定家卿

前中納言定家卿

家集祝歌中 西行上人

西行上人

千五百番歌合 宜秋門院丹後

宜秋門院丹後

家集 前大納言公任卿

前大納言公任卿

堀河院御時百首 おほつかないさ古へのこと、はんあこやの松にものかたりして

顯仲朝臣

家

題不知(歌イ)

家集

戀歌中

文應元年七社百首

同

貞應二年六月名所百首

同年卒爾百首契少人戀

嘉元元年百首松

乾元元年二月藤原長清家

歌松

みちのくのおこやの松に木かくれていてたる月の出やらしぬ哉

我君のみかさの松のかひあらはまけきめくみは千代もつきせし

とし月はいはての松の下もみちいろにいて、やいまはこひまし

ふなをかの子日のあとはそれなからきたの、まつにひく心かな

たのむかないまも北野の一夜松むかしのあとにいろもかはらす

たつた山あへぬ紅葉もあるものをまくれにつよき松のかけかな

春の、にわかまめはふるひめ小松おひゆくすゑを人にひかるな

あらましの心のうちのたむけ草まつとはまるやすみよしのかみ

さよふけてた、こゝに聞うら浪のこゑをわけたるいそのまつ風

夜をこめていそぎつれとも松かねに枕をまてもあかしつるかな

此歌は伊勢國にてまほのひたるにみわたりといふはまをすぎ  
んとて夜のうちにおきて行に道いまだくらくて見えさりけれ

ば松原の中にとまりて夜をあかしてよみ侍る

明玉 君か代にくらふの山のいはね松いくたひはかりおひかはるらん

君か代にくらふの山の峯におふるまつは千年をかきるはかりそ

たとふへきものこそなけれ君の代にくらふの山の松の千とせを

ひた人のひくよもまらぬ谷かけになにをか松とふりまさるらん

よの人まらす

光俊朝臣

藤原經繼

民部卿爲家

同

同

同

參議爲相卿

同

増基法師

左京大夫顯輔卿

鎌倉右大臣

隆信朝臣

民部卿爲家

民部卿爲家

君臣御歌合

嘉元三年仙洞歌合

雜歌中

建保三年家百首御歌名所戀

同年名所百首

題不知

千五百番歌合

文治六年五社百首

洞院攝政家百首旅

雜歌中

名所須磨浦

百首御歌

建保三年名所百首御歌浮鳥松

百首御歌

同

那智三十首

或所の障子の繪になる尾の松を

あめふれは雲おりかゝる山松のふもとにのこるかすそすくなき

をかのへやなひかぬ松はこゑをなして下草玄をる山おろしの風

みとりなるまつにはみえぬ春秋をつたと藤とのいろをあらはす

ふかくさやいくよの露かばらふらん來ぬ人たのむやとのまつ風

冬もいま日かすつもり浦さえて雪にもなりぬあられまつはら

みくまのうらの松原みかくれてねはひとつにや思ひいるらん

おしてるやはまのみなみの松原もいく木の千代を君にそふらん

何となくこゝろそとまるそれとみてこきはなれ行むしあけの松

むしあけの松に秋風ふきすきてなみたもとめぬなみのおとかな

すまの浦やなきさに立るそなれ松はひえを浪のうたぬ日そなき

松風のせきやにさむき音までも玄くれになりぬすまのうらなみ

すまの浦やあまのとちかき入玄ほにうつるもあをき松の色かな

とき玄らぬ山はゆきけのくもなから有明の月のうきしまのまつ

もしほ草しきつのうらに舟とめていま玄はきかぬいそのまつ風

いはやとに片枝かれたる霜の松たかよにう忍ていくよへぬらん

すゝしとてたちやよらまし夏引のいとかのやまの松の玄たかせ

なる尾なる友なき松のつれくとひとりもくれに立りけるかな

前中納言爲兼卿

同

他阿上人

光明峯寺入道攝政

僧正行意

よみ人まらす

皇太后宮大夫俊成卿

同

俊成卿

俊頼朝臣

法眼橋慶融

順徳院御製

同

慈鎮和尚

從二位家隆卿

文昭法師

俊頼朝臣

御集

爲家卿家百首

元久元年詩歌合水郷春望

六帖題

吹風のなるをにたてるひとつ松さひしくもあるか友なしにして

中務卿

ゆき島のいはほに立るそなれ松まつかひもなきよにもふるかな

從三位行能卿

玄かのうらの浪より霞むあけほのに山ふきおろす春のまつかせ

慈鎮和尙

見わたせは木末ひとしきならひ松ままさき遠くたれかう烈けん

信實朝臣

ありへけんもとの千年にふりもせて我きみちきるみねのわか松

前中納言定家卿

此歌はみなせどのにあたらしくたきおとされ石たてられて後

にまゐりて朝に清範朝臣のもとへ地形勝絶のよし申けるつい

でによめると云々

松かねのいはたのきしの夕すゝみきみかあれなと思ほゆるかな

西行上人

此歌は夏熊野へまゐりける時いはたと云所にてすゝみて京な

る西住がもとへつかはしける云々

建長八年百首歌合田

をかたちの松のあらしの音聞はおもひしよりもなみたおちけり

衣笠内大臣

同 たけくまのくちにし松の跡に又たれう烈かへて千代をつきけん

從二位行家卿

同 いかせん色もかはらぬつらさのみおはたの松のさても朽なほ

左近中將具氏卿

同 二葉よりいまはおはたの松のはにいく世か君をこひてへぬらん

兼盛

同 あつさ弓はるといふよりものふのやの松原ときを去るらし

民部卿爲家

同 文永七年毎日一首中

文應二年毎日一首中

光臺院入道二品親王五十  
首松雪  
十首歌

玄からきの外山はうすき白雪のうつみもはてぬまつのむらたち  
玄からきの外山の松は玄くるともつれなき色はえやはみるへき  
とふ人のきなれの里はなのみしてなみよるきしの松そさひしき  
萬六  
からころもきならの里の玄ま松にたまをしつけんよき人もかな

前中納言光經卿  
民部卿為家  
同

題不知

谷かはのこほるにつけてしのふ山なほうきものはまつのゆふ風  
われならぬ玄のふの山の松の葉も年へていろにいつるものかは  
おしてるやなにはのうらにみわたせは夕日かゝれるこやの松原

よみ人志らす  
從二位家隆卿  
大藏卿有家

元久元年小野宮歌合忍戀  
寶治十首歌合年久戀

難波江のきしにそなれてはま松をおとせてあらふ月の玄らなみ  
松風のおとこそかはれ紀のくにや吹上のはまにあきやきぬらん  
うら風のふきあけの松のうれこえてあまきる雪を浪かとそみる

源仲業  
西行上人  
鎌倉右大臣

月歌中

千鳥なくふきあけにたてるまつ原のこゑすむ袖に月そやとれる  
ふきおろすふもとの草に露おちてこゑもたかしのみねの松かせ  
冬の日をあられ降はへあさたては波になみこすさのゝまつかせ

前中納言定家卿  
如願法師  
藤原為守

冬歌中家集

こまなつむさのゝあさけにみわたせは松原とほくふれる玄ら雪  
たけくまにいつれたかへりくりこまのみあけの前に松たてる岡  
くりこまの見あけと云所一本の松あり山のくちに田ある所を  
よめると云々

大藏卿隆輔  
藤原長能

高瀬山秋

鳥羽院くまのに御幸の時  
道の程の御會に

前中納言定家卿

熊野十二首歌

家集

藤原長能

家集

よめると云々

藤原長能

題不知

家集

正治二年百首

千五百番歌合

同

建保三年名所百首

よるの御さうそくいるは、このふたあしてにて

日向國にことひき松の岸に浪よす

石にうみ松のおひたるを

六月人海松院にすまにまかりたる

家集

家集みちのくにより宮へかへるとて

千五百番歌合

みちのくにあればの松

萬二  
みよし野の玉松か枝ははしきかも君かみことをもちてかよはく  
よみ人志らす

みよしのにたてる松原千代ふるをうへもあるかな常ならぬよの  
好 忠

雲かゝるひらの高ねにふゝきしてさゝ波よするまのうらまつ  
小 侍 從

春はなほかすみもはてぬけしきかなよしのやまのまつ村立  
寂 蓮 法 師

なく鹿に聲うちそふるたかさこののをへの松もつまやこふらん  
二 條 院 攝 政

こほりするきよ瀧かはせたえしていはねにおつる松の風かな  
從 三 位 行 能 卿

去らなみの長閑けき浦のひめ松はちとせのかけそ染て見えける  
兼 盛

去らなみのよりくる糸を緒にすけて風に去らふることひきの松  
重 之

うこきなきいはほにねさすうみ松の千年をたれに浪のよすらん  
惠 慶 法 師

おほる川きしにかけさすうみ松の風にや瀬々のなみもたつらん  
同

さらしなや雪のうちなる松よりもはけしき物はわかたのむつま  
同

くり原のあねはの松の人ならはみやこのつとにいさといはまし  
業 平 朝 臣

くり原のあねはのまつをさそひても都はいつと去らぬたひかな  
正 三 位 季 能 卿

かくはかり年つもりぬる我よりもあねはの松はおいぬらんかし  
祐 舉

ふりにけるゆきの島なるむすひ松とくこそ人の見るへかりけれ  
同

此歌家集云中務亟雪をしまのかたに造ていはたて日かげをこ

けのかたにおほして松などあるをこきでんのだいばん所にい  
れたりけるをよめる

月前千鳥

松間雪

保元二年毎日一首中

九條大納言家歌合騎旅霞  
と云事な

伊勢にくんだり侍けるにふ  
ちかたの松をみて

屏風歌松原にたてる松の下に落つもる紅葉などがきとる人あり

眺望を

家集冬歌

上東門院住吉社行啓之時

文治六年女御入内御屏風  
住吉松に霞わたる所

六帖題みとり

宇治殿にて院御會山風

寶治二年百首續松

貞應三年朗詠百首外物獨  
醒酒松色

たまつ玄まわかの松はらゆめにたにまたみぬ月に千鳥なくなり

雪つもるわか松原ふりにけりいく代へぬらんたまつ玄まもり

伊勢のうみあの、松原まつともいひし日數になみはこえつ、

す、か山ふりはへこえてみわたせはみとりにかすむあの、松原

ひきこして人わすれすはふちかたの松もむかしの物かたりせよ

かきつもるはまの松葉は年を経てこたかくはらふ風にこそまて

おほわたのはまの松ふくうら風に玄かのてこらか袖かへるみゆ

すみよしのきしの村松たはむまてふるへかりぬるふるさとの雪

住吉の松もみゆきはありけりとこはめつらしのみしまえのうら

山たかみかすみをわけて詠むればはるかにみゆるすみよしの松

ときはなるちしほのみとり神代よりそめてふるよの住吉のまつ

するとほきあさかの山の峯におふる松には風もときはなりけり

神さふるいこま高ねのむかしより松にへにけるとしも玄られす

龍田山玄たまたかはるもみち葉にひとり色なきたにのまつかせ

鎌倉右大臣

同

民部卿爲家

家長朝臣

六條右大臣室

太宰大貳高遠

後九條内大臣

惠慶法師

小

隆信朝臣

信實朝臣

後京極攝政

正三位知家卿

民部卿爲家

同年百首

同

秋風のふきくるみねのむらさめにさしてやとりのわたのかき松  
波かくるいそへにたてるはなれ松いくまほ風を身にならふらん

同

うちわたすせたのなかはし程もなくひとむらみゆる野ちの松原

同

建保三年名所百首

正三位忠定卿

最勝四天王院名所御障子

同  
茶庵利花院前關白

別歌  
四首

きみすみてとはに見るへき里なればたのもはるかに松風そふく  
新續古一  
ひとまほもまたそめあへぬ高砂の松のみとりはかすみなりけり

入道一品親王永助

高砂のをのへのはなのよそめこそきえあへぬ松の雪と見えけれ

隆直卿

たかさこの尾上の月にあきふけて松かせちかくまかそなくなる

定家卿

たかさこの松はつれなき尾上よりおのれ秋まをさをしかのこゑ

同

椿

百首御歌

順徳院御製

同(たまつはき)

同

御集祝(まらたまつはき)

法性寺入道關白

正治二年百首

後京極攝政

千五百番歌合

宜秋門院丹後

谷ふかきやつをのつはきいく秋のまくれにもれて年のへぬらん  
ちきりてもとしのをなかき玉椿かけには千代のかすそこもれる  
みやきのゝまらたまつはき君かへんやちよの數に老そまぬらん  
君か代は貌姑射の山にいくたひかやつをのつはき色かはるへき  
君か代ははこやの山のみねにおふる白玉つはきはかへせんまで



天喜二年兼房家歌合祝

永久三年五月大神宮禰宜歌合祝

寛治五年十一月從二位石

親親王家歌合

永久三年十二月大神宮禰宜歌合祝

家集

六帖題(あなつばき)

題不知(つばき)

同

同(つらくつばき)

同

かもの歌合霞を

久安百首(たまつばき)

家集寄椿戀

家集六帖題

君か代はからくれなるのふかき色に八千歳つはき紅葉するまで

君か代はあさ日の山の玉つはきちりもくもらて八千代こそつめ

おとは山いはねに生ふるたま椿やちよはかへるときはなりけり

君か代はかゝみのやまのたま椿くもりもあらしときはかきはに

かゝみ山みかきそへたるたまつはきかけもくもらぬ春の空かな

新六六 イ やましのやみねに茂る青つはきつらくものを思ふころかな

萬七 イ あなしやま椿さけれや八峯こし玄かまつきみはいはひつゝかも

萬十 イ 我かとのかたやま椿まことなれわかてふれなくつちに落しかも

萬一 イ こせ山のつらく椿つらくにみつゝおもふなこせのはるのを

同 イ 河上のつらくつはきつらくにみれともあかすこせの春野は

同 イ かすみたつこせの春野のたま椿つらねもあへす見えみみえすみ

同 イ たま椿ひかりをみかくきみか代にもかへりさく優曇華のはな

同 イ 花にさくみやま椿ををりそへてたかいろこのむはいにやくそも

柏

新六六 ニ 花さけと人もすすめぬかへ木のいたつらにのみ身は成にけり

よみ人まらす

同

同

同

前中納言定家卿

信實朝臣

よみ人不知

同

同

同

殷富門院大輔

待賢門院安藝

源

仲正

衣笠内大臣

同

同

建長七年顯朝卿千首歌

六帖題かへ

六百番歌合寄木戀

同  
みちのへのかへのかさおち拾ふとて木の下かくれ行そやられぬ  
信實朝臣

同  
ちはやふる三室の山のかへの木のはかへぬ色はきみかためかも  
光俊朝臣

つまかくす矢野の山なるかへの木につれなき戀にわれ年は經ぬ  
同

つかのうへに松とかべとの生ひんまで待んとちきる妹か畏こさ  
權僧正公朝

戀しなは苦むすつかにかへふりてもとのちきりの朽やはてなん  
前中納言定家卿

此歌の判者云左こけむすつかに栢ふりてといへる何事にか侍

らんもし是は史記と申文に晉文公が私の妻にわかるると我を

またん事廿五年までにかへらずば其時つかをせよと申ければ

妻わらひて廿五年の比ほひにはわがつかの上に栢のおひなん

といひたる事をこそ見侍しか若其事を思へるにやと云々

桂

柿本影供百首

前中納言定家卿家にて寄  
桂戀

六帖題

同

やま人もつきをちきりの秋よりやかつらの花のころもうつらん  
後九條内大臣

心なきくさ木なれとも契あれはあふひかつらはかけもはなれす  
家長朝臣

あふひかるころにしなければ神山のもとあらの桂かくれかもなし  
信實朝臣

いつのよにたれたねうゑて久かたの月にありてふかつら成らん  
光俊朝臣

Handwritten notes in the left margin, including characters like 'たへう' and 'たへう' with arrows pointing to the main text.

三體和歌

寶治二年百首河紅葉

六帖題

正治二年百首桂

新羅秋歌合述懷

六帖題かつら

永久四年百首桂

同

同

詠花

題不知

同

六百番歌合寄木戀

喜多院入道二品親王家五十首

よひの間の月のかつらのうすもみちてるとしもなきはつ秋の空  
 河そひのなみのかけちやそめつらんいはもと桂もみち玄にけり  
 新六六  
 玄るへとてをりしかつらの枝もかな月のみやこも行てみるへく  
 月も今あはれとや思ふわれむかしかつらをりてしひともと故に  
 何となく我身はふりぬみたひまで月のかつらををるとせしまに  
 くもりなきかゝみとそ見る月のうちの桂を折て身をたつるひと  
 わか身には吹へき風も吹こねはかつらの枝もをらすそありける  
 堀川次郎  
 人ぞれすけふをしまつと風はやきかつらの枝のをりもよからは  
 神山のかつらを折れば月のうちにわか思ふことならさらめやは

鴨長明  
 信實朝臣  
 衣笠内大臣  
 民部卿籠光  
 泰覺法師  
 權僧正公朝  
 仲實朝臣  
 俊賴朝臣  
 二條后皇宮肥後

楸

萬十  
 うちなひく春さり來らし山きはにひさきの末のさきゆく見れば  
 萬六  
 うは玉の夜の更行けはひさき生ふる清きかはらに千鳥玄はなく  
 萬十二  
 浪間よりみゆるこしまの濱ひさきひさしく成ぬ君にあはずして  
 なみたにはうきみやまきも朽ぬへし沖の小島のひさきならねと  
 夜のまにや冬はきぬらんひさきおふるあとの川原に枯葉散玄く

よみ人まらす  
 赤  
 よみ人しらす  
 正三位經家卿  
 禪性法師

千五百番歌合

六帖題

同

建仁元年新宮撰歌合霞  
隔遠樹

千首歌

正治二年百首

御集戀歌

家集戀歌

十題百首木

長承三年顯輔卿家歌合紅  
葉  
題不知

ひさきおふるさほの河原に立千鳥そらさへきよき月になくなり

新六のこき清き月影もきよきはらの河おろしにちりてひさきの下もくもらす

ひさきおふる庭の木かけの秋風にひとこゑそくむらしくれ哉

ななめこしおきつ浪間のはまひさき久しく見えぬ春かすみかな

ゑらせてもいかななるみの濱ひさきをるゝ波に袖をまかへて

五月雨はぬまの入江のみをつくしきのひさきのこすゑなり鳥

おきつ浪うちてのはまの濱ひさきをれてのみや年のへぬらん

いはき山こえてこぬみのはまひさき久しくなりぬ浪にをれて

從二位家隆卿

衣笠内大臣

民部卿爲家

後京極攝政

民部卿爲家

宜秋門院丹後

鎌倉右大臣

從二位家隆卿

枝保持

波の上になかはかくれし四つのをの契もふかきをほちなりけり

寂蓮法師

槿

秋ふかみあさゆふ露のもる山のまきのをたえはもみちをにけり  
すへらきは神にてませは槿のたつあら山なかにうみをなすかも

維順朝臣  
丸

長歌

わかおほきみの、をろしめす、そむものくにの、まきたてる、  
よみ人しらす

同

ふは山こえて、かやたちの  
いしはしる、あふみのくにの、ころもての、たなかみ山の、ま

同

題不知

萬七 あたへゆくをすての山のまきのはも久しくみねは苦おひにけり

同

六帖題

新六六 みるすひさになりそまにけるをすて山まきのふるきの苔深きまで

同

家集冬歌中

雲葉 吉野はまきの下葉のかれしよりとやまも雪のふらぬ日はなし

同

建保四年内裏十首歌合

みよしの、まきたつくもの梢には花もつれなきいろそのこれる

同

千五百番歌合

吉野山ゆきふるさともまかすかにまきのはまきのきはる風そふく

同

同

うたゝねの夢もあらしの山里にまきのはつたひあられふるなり

同

建長三年毎日一首中

またさかぬ花かとみえてまき山のはたれにつもるふゆのをら雪

同

百首御歌(寄三名所戀)

くちねた、思ひくらふの山たかみたつをたまきは去る人もなし

同

家集(秋鹿)

つくは山たつをたまきのまきまきと峯行まかのこゑはさはらす

同

百首歌

筑波山まききめくみにもらさすはたつをたまきも花やさかまし

同

嘉元二年竹園千首御會寄

わか袖もほさてやくちんおくやまにたつをたまきのまきまきは

同

建保名所百首

ふしわひぬ旅ねのそてをまきのはにふるやあられのさやの中山

同

六帖題横

新六六 陰くらき槇のまけ山つれくといつをつき日のあかはともみす

同

信實朝臣

正三位知家卿

參議爲相卿

安嘉門院四條

從二位家隆卿

光明峯寺入道攝政

民部卿爲家

醍醐入道前太政大臣

後京極攝政

參議雅經卿

從二位家隆卿

民部卿爲家

修行ま侍ける時雪のふりける日

萬代雜三  
そまやまの横のたちかれ枝をなみおのれをしるき雪はたまらず

前僧正道慶

### 杉

題不知

番イ  
百首歌合

後九條内大臣家會に寄  
晚樹戀

韻歌百二十八首

文永八年毎日二首中

ひの、たけといふ山をみて

題不知

六帖題

文集百首不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>禪房無<sub>レ</sub>熱  
到<sub>レ</sub>但能心靜即身涼

雜歌中

春のはしめに

嘉<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>二年住吉社歌合述懷

堀河院御時百首

萬九

かみなひの三室の山にかくれすき思ひすきんやこけをふるまで  
杉ふかきかたやまかけのまたすゝみよそにそする夕立のそら  
けふはかりまちみんととも月日へぬのきはのすきの夕暮のそら  
うきよりは住よかりけりとはかりよあとなき霜に杉たてるには  
かしは原わかたつ袖にちきりけるすきのまるしも今こそはきけ  
とくにかくひの、杉むらうつむ雪をしほの松にけふやまかへる  
萬三  
うつゑかかもかみさひけるか香山のむすきか本にこけおふるまで  
新六六  
かこ山のみねの六杉のもつはにみとりをそへて苔おひにけり  
嵐やますきの葉かけのいほりとして夏やはまらぬころこそすめ  
たきのうへのとよふの山は苔ふりてみむらの杉も神さひぬらん  
けふといへは春のまるしをみやかはの岸の杉むらいろかはる也  
いたつらに生にけるかないにしへの人のうぶけん杉ならなくに  
逢坂の關のむらすすき葉をまけみたえまにそみるもちつきのこま

よみ人しらす

後京極攝政

從二位家隆卿

前中納言定家卿

民部卿爲家

紫式部

よみ人しらす

光俊朝臣

前中納言定家卿

後九條内大臣

後京極攝政

寂蓮法師

中納言國信卿

永久四年百首稻荷詣

同

十題百首神祇

正治二年百首

太神宮卅六番歌合

百首歌祝五首中

後法性寺入道關白家百首

家集戀の歌中

題不知

家集修行の道にて

千五百番歌合

同

建保四年百首

重家卿家雪五首歌合

いなり山<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>きて<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>人<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>な

い<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>春<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>哉

い<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>お<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>な

と<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>野<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>宮<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>君<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>そ<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>る

よ<sup>マ</sup>ろ<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>田<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>原<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>や<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>ゑ<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>り

い<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>松<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>千<sup>マ</sup>代<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>そ<sup>マ</sup>へ<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>

い<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>三<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ん<sup>マ</sup>幾<sup>マ</sup>代<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>へ<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>村

い<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>荒<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>る

い<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>取<sup>マ</sup>三<sup>マ</sup>輪<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>祝<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>原<sup>マ</sup>薪<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>程<sup>マ</sup>々<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>手<sup>マ</sup>斧<sup>マ</sup>取<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>ぬ

檜

か<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>岩<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>昔<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>木<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>ゑ<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>ろ<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>り

み<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>ろ<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>峯<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>な<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>去<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>降<sup>マ</sup>なり

君<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>代<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>わ<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>袖<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>お<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>杉<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>色<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>し

龍<sup>マ</sup>田<sup>マ</sup>姫<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>ね<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>露<sup>マ</sup>にお<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>や<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>そ<sup>マ</sup>み<sup>マ</sup>た<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>

雪<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>山<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>き<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>葉<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>れ<sup>マ</sup>に<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>り

神祇伯顯仲卿

仲實朝臣

後京極攝政

正三位季經卿

西行上人

藤原爲顯

藤原盛方朝臣

元真

人丸

僧正行意

後京極攝政

西園寺入道太政大臣

從二位家隆卿

從三位賴政卿

百首御歌

十題百首本

百首御歌

題不知

詠花

洞院攝政家百首五月雨

奈良花林院歌合雪

百首歌

御集秋雨

文永七年毎日一首中

千首中

六帖題

同

同

をしねかる山田のくろのひはらより残るあらしの音そさひしき

慈鎮和尙

まきもくのひはらのまけみかき分てむかしのあとを尋てそみる

前中納言定家卿

まきもくのひはらもりて降雪にこまつか原もあとたえぬべし

後鳥羽院御製

まきもくのひはらもりて降雪にこまつか原もあとたえぬべし

中納言家持卿

いにしへに有けん人も我ことやみわのひはらにかさしをりけん

人丸

三輪の山五月のそらのひまなきにひはらのこゑそ雨をそふなる

前中納言定家卿

あしたつか三輪の檜原に雪ふかみ宮木ひくをのかよひちもなし

よみ人しらす

雲消るをちのやまもとみわたせはひはらそ庭のよもきなりける

寂蓮法師

雲のゆくたかねのひはら言たてゝむらさめわたる秋のやまかせ

中務卿みこ

時雨ふるひはらか下葉色つきぬよそのもみちもさこそゝむらめ

民部卿爲家

あまをふねとませの山もまろたへにひはらの雪の道みえぬまで

同

梨

新六帖 時にあひて秋をもまたぬなしならはかならす西の枝ならすとも

正三位知家

新六帖 年ふれは變らすなからつきなしのあらぬ物にも身こそなりぬれ

衣笠内大臣

同 かた枝はなりもならずもつまなしの思ひあへりやねては語らふ

信實朝臣



弘長四年毎日一首中

建長七年顯朝卿家千首寄

梨戀

六帖題山なし

同

同

御集

近江御息所歌合

かひにて山なしの花をみて

山なしのはなのえら雪ふるさとの庭こそさらにふゆこもりけれ

こふるまはくるしき物を世中にあはれえのふのやまなしもかな

いとひてもいつくにえはしやとからん浮世の外のやまなしの花

きゝわたる面影見えてはる雨のえたにかゝれるやまなしのはな

あしひきの山なしの花さきしよりたなひく雲のおもかけそたつ

春はまたいつちこゆらんむさしのはたえていく日も山なしの花

世中をうしといひてもいつくにか身をはかくさんやまなしの花

かひかねにさきにけらしなあし引の山なしのをかの山なしの花

李

六帖題

同

同

同

新六六

さゝかての雪と見るまでやまかつのかきほのすも、花咲にけり

山かつのころもほすてふかきほかとえらきをみればすも、花咲

かすならぬ片山かけの青すも、身はあるかひもなくなりけり

誰も見よすも、の下の道せはみかふりかたふけ手やはふれつる

民部卿為家

信實朝臣

同

民部卿為家

衣笠内大臣

後九條内大臣

よみ人しらす

能因法師

民部卿為家

正三位知家卿

信實朝臣

權僧正公朝

杏

六帖題

同

新六六二  
いかにして匂ひそめけんひのもとわか國ならぬからもゝの花  
もろこしの吉野の山にさきもせておのか名ゑらぬからもゝの花  
ことはよも聞えらしとやからもゝの物をはいはて花にのみさく

衣笠内大臣  
民部卿爲家  
光俊朝臣

柏

題不知

同

天慶二年二月貫之家歌合  
仲冬  
天祿三年五月資子内親王家歌合

家歌合

御集秋歌中

家集

建保三年家百首御歌

秋歌中

家集心かろき聞えありける女のつれなくあたりけるに

雜歌中

萬二十  
いなみのゝあから柏は時はあれときみをあか思ふ時はさねなし  
萬一  
なら山のこのてかしはのふた面ともかくにもねちけひとかも  
えら雪の降つもりぬるおく山はあからかしはもうつもれにけり  
君かためわかもる山の青かしはよろつよまてにもえまさらなん  
ちらすなよこのてかしはの薄紅葉はもりの神もめてさらめやは  
おのかみなおもひくゝに神山のこのてかしはを手にそとる  
神山のこのてかしはをとりかさし卯月になればみをこそいのれ  
いはれのゝ萩かたえまのひまゝにこのてかしはの花咲にけり

よみ人ゑらす  
同  
同  
同  
後徳大寺左大臣  
和泉式部

我といへはこのて柏のおもてくゝとくひもろきも結ほれつゝ  
三笠山あふみたえてかしはきのめつらしからぬ森の木のもと

清輔朝臣  
正三位知家卿

建保四年内裏御會遠村雪

うつもるゝ遠山もとのむらかしはたかゝきねより雪はらふらん

從二位家隆卿

家集夏の風を

たまかしはすゑこそす風にはかられてまたきに鹿や聲たてつらん

俊頼朝臣

六帖(題イ)て

よはひのみふるから小野のもと柏もとの身はかり戀しきはなし

衣笠内大臣

ななめかしは

あめやまぬふるからをのゝ遠かたになかめ柏もなにしおふらん

信實朝臣

ななめかしは

人こふるななめかしはゝ古里のかきねにのみそまげくみえける

よみ人まらす

光臺院入道二品親王家五十首朝時雨(あさかしは)

あらしふくはらのと山のあさかしは降やまぐれの色にいてつゝ

常磐井入道太政大臣

建保四年百首

みるまゝに色にいて行あさかしはふるやまぐれのまのゝめの空

家長朝臣

三十首歌(たまかしは)

よしさらはたえなは絶ね玉かしはさすかにかけて問もうるさし

同

文應元年七社百首

かた野なるならの葉かしは吹風にあられふりそふ音のはけしさ

民部卿為家

嘉祿四年百首蟬

かた山ののならのはかしは葉をしけみこそゑひまなき蟬の聲かな

同

神祇歌中人家

昔たれみつのかしはのさかつきをあまてる神にたむけそめけん

度會仲房

18

神風やみつのかしはにこと問てまつをまつゝみてそふる

俊頼朝臣

此歌は俊忠卿家十首歌にあはんことをうらなふといふことを

よめると云々

家集

伊勢島やみつのかしはのたちはもてつゝむ眞袖に神まつるらん

民部卿為家

寶治二年百首寄木戀

神風やみつのかしはのうきしつみとふにつけてもぬるゝ袖かな

衣笠内大臣

永久二年四季百首秋歌  
洞院攝政家百首

萬代もなほなか月のそらにあふみつのかしはにみきたてまつる  
神風やみつのかしはのあきの色にとようちひとの袖さへそてる  
みわそくみつの柏の玄垂葉のなかくし夜をいはひきにけり

從二位家隆卿  
家長朝臣  
鴨長明

此歌伊勢記云この國にみつのかしはといふものあり小侍從が  
歌に「神風やみつのかしはにとふことのまづむにうくはなみた  
なりけり」とよめりこれにてうらなふ事あるにやとしごろお  
ほつかなく思ふ事を此たび人々にたづぬればえきおよばぬ  
よしをのみいふいかなる事にか此かしは輔親卿集にみもすそ  
河の岸におふるとよみ侍ばそのわたりにあるかとしてたづぬれ  
ばむかしやありけんいまの世にはまぐにのうちにとくのま  
まといふ所あり木の上にかづらのやうにておひたるをのぼり  
てきりおろす時ひらにふしておちたるをばとらずたてざまに  
おちたるばかりをとる其おちやうにぞとふ事のありとかやい  
ひつたへたるこれは神宮四度の御まつりの時かならず入物な  
り御前の御あそびはて、四の御かどのわきにとくらのことい  
ふおほみわをまうくやまろのつかさこのみつのかしはをおの  
おのひとはもちてよればその上にこのみわをそぐことさら

これをこしにさしていづるなりなが柏かしともいふにや寂蓮法師  
百首の歌の中に「おもふ事とくのみまのなかくまはなかく  
そたのむひろきめくみを」といへるかやうにきけどいまだそ  
のすがたをばみすこの日ある人のもとよりおくれりかしはの  
やうにてひろさ三四寸ひながさ三尺ばかりまことにつねの本草  
の葉には似すと云々

楯

林下時雨

永久四年八條太政大臣家  
歌合戦を

正治二年百首御歌

洞院攝政家百首暮春

百首御歌晚風如秋

六帖題

一字抄  
るな山のならのむら立木かくれて時雨のあめにあまやとりしつ  
風さむみるなの中山こえくれはならのかれ葉はにあられふるなり  
ならかしは末葉はに露やなりぬらん木陰すしきひくらしのこゑ  
夕かすみかた野にたてるなら柴のなればまさらてかへる春かな  
ゆふかけてならのはそよき吹風にまたき秋めくかみなひのもり  
新六の  
さは山のならのかしは木又はへのもとつ葉はまけみ紅葉はするなり

椎

大藏卿有家  
藤原道經  
第三のみこ惟  
後九條内大臣  
後徳大寺左大臣  
信實朝臣

題不知

六帖題

六百番歌合

建保三年名所百首

山雪を

六帖題

百番歌合

家集戀の歌中

家集冬歌中

建保四年百首

弘長元年百首不逢戀

後鳥羽院御時百首

永久四年百首椎柴

同

六百番歌合

萬十四

おそはやもなほこそ待め向つをの椎のこやてのあひはたかはし  
新六のむかつをのまひのこやてのよにふれは人の心にあひたかほめや

山人のたよりなりとも岡邊なるまひのこやては折すもあらなむ

千代までも葉かへぬ色をたのむかな後瀬の山のみねのまひしは  
明玉

ときすくるまひのさ枝もみえわがすのちせの山につもるしら雪

新六の秋風にのきはの椎のおちつれはにはにくろいしまかそみる

いまはたゝそらたのめにもこりねとやまかかね山の峯の椎しは

ときは山椎のした柴かりすてんかくれておもふかひのなきかと

おほつかなこしのをやまの椎柴の青葉も見えずつもるしらゆき

わすれしとたのめし末はわかさちやのちせの山よその椎しは

しくれゆく秋にまられぬこもりえのはつせの山のみねの椎しは

いつまてかうきたの森の椎柴のまひてもひとをこひわたるへき

降雪もをやめをやめ小野山にまひしはかるはまはしはかりそ

くらゐ山みねのまひ柴としふともうつろふ色はあらしと思ふ

くらゐ山みねのまひ柴としふりてこえゆく人そうらやまれば

君ならてあとをはずけしみかさ山はや雪かゝれまひか木するゑに

此歌は定家卿少將に叙まけるにことさら三日すぎて悦申べき

よみ人まらす

衣笠内大臣

法橋顯昭

從三位家隆卿

後光明峰寺入道攝政

光俊朝臣

慈鎮和尚

西行上人

權中納言俊忠卿

家長朝臣

西園寺入道太政大臣

衣笠内大臣

神祇伯顯仲卿

六條院大進

隆信朝臣

寂蓮法師

よし思ける程に雪の朝定家卿のもとより「みかさ山ふみ見し  
ままにまちしかとけさの雪さへまたあともなし」といひ遣し  
たりける返事と云々

栗

西行上人高野よりといひて侍ける返歌中(さしくり)

康和二年四月國信卿家歌  
合歴年戀

百首御歌木(みなしくり)

建長八年百首歌合

洞院攝政家百首歌出家  
(さしくり)

百首

貞應三年百首(わかくり)

栗

山風にみねのさしくりはら／＼と庭におちゝるおほはらのさと  
えめこめてをかへにはやす栗柴のとしをそへてもまける比かな  
埋るゝ木のはの下のみなしくりかくてくちなん身をほをします  
えた栗のまふる／＼もわか方にむけるを見るそえむこちする  
風に落るにはのさゝ栗ひろひおきてとひくる人の家つとにせん  
捨られて木のはにまじるみなし栗ひろひのこせる秋やへぬらん  
よの中はあきになりゆくわか栗のまふる／＼や忍みてすきなん  
風まちてひろふとすれと袖の上にかゝる木陰のつゆのおちくり

槻

寂然法師  
源家識  
土御門院御製  
信實朝臣  
家長朝臣  
藤原為顯卿  
民部卿為家  
參議為家卿

十題百首木

家集戀

いはひの心を

けふみればゆみきる程になりにけりうゑし岡邊のつきのかた枝  
關守かゆみにきてふつきの木のつきせぬ戀にわれおとろへぬ  
君か代はおほはつせちの百枝つきもゝえなからも榮えますかな

前中納言定家卿  
修理大夫顯季卿  
俊頼朝臣

枿

六帖題むる

同

同

同

同

同

同

同

同

新六み  
玄ほのみつうらに年ふる室の木のかはらぬ色もまた葉ちりつゝ  
同  
玄くるれとあきの色には離れ磯にみとりかはらすたてる室の木  
同  
いかせん我ゐる山のむろの木のならみし人をわすれかねつる  
浦  
うら風は吹玄をれともいそ山にはかへぬむろのいろそつれなき

同  
むかしへを思へはとほしいはやとにねはふ室の木幾代へぬらん  
林葉  
とももの浦の浪路はるかにこく舟のそかひにみゆる磯のむろの木  
萬十五  
はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき時をすきにける哉  
萬三  
吾妹子が見しともうらの室の木はとこ世にあれと見し人そなき  
同  
磯の上になはふ室の木みし人をいかなりと問は語りつけんか

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

令法

衣笠内大臣  
正三位知家卿  
光俊朝臣  
前中納言爲家卿  
中務卿のみこ  
源仲業  
よみ人志らす  
同  
同



六帖題はたつもり

新六六

さと人やわか菜つむらんはたつもり外山もいまは春めきにけり

衣笠内大臣

同

はたつもりつもし雪も消ぬれば玄つかすまひに若なつむらし

信實朝臣

同

ねやいらぬ外山の春のはたつもり葉にのみいて、人に玄らるゝ

光俊朝臣

永久四年百首忍戀

おく山のくきかくれなるはたつもり玄られぬ戀にやまふ比かな

俊頼朝臣

家集或人令法と云物をおこせたるにかくいひやりける

今よりは深山かくれのはたつもり我うちらはらふとこの名なれや

能因法師

櫛

六帖題しきみ

新六二

玄きみつむ竹のはなこのはかなさも誠のみちにいらさらめやは

衣笠内大臣

同

あはれなる玄きみの花の契かなほとけのためとたねやまきけん

民部卿為家

同

枝なから峯の玄きみの葉を繁みころとはいはてつみにこそつめ

信實朝臣

同

あか水に玄きみの青葉きりうけてさゝけもたればぬるゝ袖かな

光俊朝臣

家集山雪の心を

あさころもまたをりなれぬおく山の玄きみか花の露にぬれつゝ

從二位家隆卿

建長八年百首歌合

世をいとふ人すみけりとみゆるかな玄きみなかるゝ山川のみつ

右近中將經家卿

判者光俊朝臣云尋ニ櫛流之跡蹤ニ得ニ花麗之文辭ニ因縁共不淺旨

趣又可深云々

寶治二年百首山家水

かくれすむ人のありかもえられけりまきみなかる、山川のみつ

從二位賴氏卿

楳

六帖題ゆつるは

同

新六二  
ゆつる葉のときはの色もうつもれぬあらくま山に雪のふれは  
同これぞこの春をむかふる去るへとてゆつりはかさしかへる山人

衣笠内大臣  
從三位知家卿

同

新六  
年毎になつとはすれとゆつる葉のかひこそなけれ老のまほみは

信實朝臣

同

山人のつま木にそふるゆつるはに春をかけたるいろは見えつ、

衣笠内大臣

題不知

同

六帖  
旅人のやとかすか野のゆつるはのみちせんよや君をわすれん  
萬十四  
あともへかあむくま山のゆつるはのふまるときに風吹すかも

よみ人まらず

同

いにしへにこふる鳥かもゆつるはの三井の上より鳴わたりゆく

弓削皇子

妻間々

六帖題つまい

同

同

新六六  
かみさふるいそのつまゝのねをはへて深くや人をまたに忍はん  
同新六  
世とゝもに浪のゆふこそかけつらめ神さひ渡るいそのつまゝに  
同  
かみさふる磯のつまゝのねをはへて君し問ねはいけりともなし

衣笠内大臣  
民部卿爲家  
光俊朝臣

合歡木

題不知

ワタモトニ

我妹子 萬八 かかたみのかうか花にのみ咲てけたしも身にならぬかも

中納言家持

同

我妹子 新六六 にかくとはかりは告やらんかたみのかうか花さきにけり

正三位知家卿

六帖題

うかりけるかうかの花のためしかな我思ふ事もならぬ身なれば

民部卿爲家

同

よにたえぬ大内山のかたなしにふるきかうかの木すゑをそみる

信實朝臣

同

山ふかみいつよりねふと名をかへてかうかの木には人惑ふらん

光俊朝臣

胡桃

六帖題

夏山 新六六 のすそ野にまけきくるみはらくるみいとふな行てうらみん

衣笠内大臣

同

時雨にもぬれぬくるみのかはかすてをのか心をなにしむらん

民部卿爲家

榿

つかのなかにて獨ながめ  
給ひけり<sup>三</sup>御歌

六帖題かたかし

四季百首歌

六帖題かたかし

同

賀茂社百首御歌

奈良花林院歌合祝

長歌

貞應二年百首木

同

櫛<sup>新六六</sup>の葉を神のかさりにさし、年<sup>に</sup>もいのちやまたき人はてふかも  
外山<sup>新六六</sup>なるをかのかしはら吹なひきあれゆく<sup>行</sup>ころの風のさむけさ

夏<sup>新六六</sup>かけて山かほるらし<sup>新六六</sup>ゑらかしの落葉<sup>新六六</sup>をれてみちもれつ、  
をくる<sup>新六六</sup>まの諸輪<sup>新六六</sup>にかくるかたかしのいつれもつよきわか心<sup>新六六</sup>かな

かつはまたいはにたとふるかたかしもつれなき人の心にそしる

かしの葉の紅葉<sup>新六六</sup>ぬからに散つもるおくやまてらの道そかなしき

春<sup>新六六</sup>日山みねのゑらかしよろつよをきみにといへは神もすさめす  
たまたすき、うねひの山の、かしはらの、ひしりのみよに、あ

れまし、かみのところ  
きりたふすたな<sup>新六六</sup>かみ山のかしの木は宇治<sup>新六六</sup>の川瀬<sup>新六六</sup>に流れ來にけり

櫟

おほる河<sup>新六六</sup>くる、秋のいちひたに山やあらしのいろをかすらん

猿滑

足引の山のかげちのさるなめりすへらかにてもよをわたらはや

聖 徳 太 子

民 部 卿 爲 家

慈 鎮 和 尙

正 三 位 知 家 卿

信 實 朝 臣

慈 鎮 和 尙

よ み 人 志 ら ず

同

衣 笠 内 大 臣

民 部 卿 爲 家

同

貞應二年百首木

糖

をやまたのなはしろくみの春すきて我身の色にいてにけるかな

民部卿爲家

漆

いさゝらは繁りおひたる漆の木のとかくまさを立てすきなん

同

漆

くれなるのおのか身に似ぬ漆の木ぬるとまくれに何かはるらん

同

もちひの木

君かすむやとの軒端のもちゐの木かはらぬ色はときはかきはに

同

つけ

まつのめか頭けつらすあさゆふにつけの小櫛やとるまなからん

同

こふし

同

同

うちたえて手をにきりたるこふしの木心せはさをなけく比かな

同

ひら木

世中はかすならずともひら木の色にいて、はいはしと思ふ

同

そはの木

ありとても人にすさめぬそはの木の唯かたそはに過すへきかな

同

ねすもち

かた山のおとろにまじるねすもちのひく人ありと頼むへき世か

同

こめく

秋ふかき山の夕きりこめくにおのれもいろやまつかはるらん

同

うはめの木

冬くれは霜をいたくうはめの木老のすかたやいと見ゆらん

同

ねふの木

貞應二年百首木

あきといへは長き夜あかすねふの木もねられぬ程にすめる月哉

民部卿爲家

するの木

同

あさまたき梢はかりにおとたて、櫻欄の葉すくるむら時雨かな

同

めつら

同

朝つゆのもる山かけのまためつらめつらしけなくぬる、袖かな

同

檜

同

川はたのきしのえの木の葉をまけみ道ゆく人のやとらぬはなし

同

柿

同

秋くれは山の木のはのいかならんそのふのかきは紅葉まにけり

同

家集

いにしへのやまと言葉の跡とめてはるかにあふく柿のもとかな

信實朝臣

百首歌

山里はかきの紅葉にはとなきてまくれもふりぬかせもさむけし

寂蓮法師

柿のみはのこりて葉のみなちりぬるをみて

世の中にあらしの風の吹なから實をはのこせるかきのもみち葉

源仲正

桑

寄<sup>レ</sup>木

延喜十二年賀御屏風

たなかみの山さとにてく  
はの木に露のおきたるを

六帖題

同

同

同

あせみ

題不<sup>レ</sup>知

いちし

六帖題

萬七  
たらちねの親おやのそのなる桑くわいもなほ願ねがへは衣きにきるといふものを

ことし生のいにひ桑くわいまゆのから衣き千代ちよをかけてそいはひそめつる

露つゆにさへまをるゝ桑くわいの枝見えだれはこきたでられしわか身みなりけり

新六六  
山やまかつのそのふの桑くわいのくはまゆのいてやらぬ世よは猶なほそかなしき

同  
吾われ妹子むすめかこやのえひらのかすおほみあまたまめつるそのゝ桑くわい原はら

賤しづかの女むすめかつくりさかゆる桑くわいはらのおなしさまなる枝えだつゝきかな

新六六  
みのをみはり堺さかいつゝきに植うなめてよむともつきしくはのいくもと

あせみ

おそろしやあせみの枝を折をたきてみなみにむかひ祈いのるいのりは

同

逸師

萬七  
大原おほはらのこのいちまはのいつしかと我われ思おもふいもに今宵こんやあへるかも

現存六  
立た民たみもころもてまろしみちのへのいちしの花はなのいろにまかへて

新六六  
大原おほはらはゆきてやみましいつしかとさくいちまはの花はなのまるへに

よみ人志らす

光明峯寺入道攝政

信實朝臣



樟

題不知

六帖題(くぬきはら)

同

同(くぬきはら)

同(ふしくぬき)

御集中

建久三年九月十三夜後京極攝政家御會(くぬきはら)

萬四

萬十二

新六六

同

同

同

明玉

なみたてるくぬきか本に駒とめておきつ川原にまはしすま

けふりたつをちのまのやのくぬき原そのふしもなく秋そ悲しき

柴

家集雜歌中

永久二年十二月太神宮禰宜詠合雪

あをまはを苔のたもとにかけぬれば色このむとや人は見ららん  
ふる雪に杉のはならず三わのやま大かたまはの葉も見えぬかな

大僧 正行 意  
よみ人 去らす

よみ人 去らす  
同  
衣笠 内大臣  
正三位 知家 卿  
光俊 の 朝臣  
信實 朝臣  
紫金臺院入道親王二品

前中納言 定家 卿

承安三年七月右大臣家歌  
合野風

岡のへのならのままはに風立てかへるはくすのうら葉のみかは

俊 惠 法 師

此歌判者云右歌は野といふ事なしをかのべはをかべなりと云

云

正治二年百首

山おろしに人やは庭をならまはのまはしもふれは道もなきまで

後 京 極 攝 政

夏御歌中

かたをかの花ものこらぬ梢トネトネよりみとりかさなるまつのまはしは

同 衣 笠 内 大 臣

六帖題

春をへて鳥かへる山のかつめに柴のたち枝もひこはえにけり

同 正 三 位 季 經 卿

建長八年百首歌合（また  
し）

山里のみねのまはた柴をりくにもものあはれのたゆむまもなし

同 正 三 位 季 經 卿

六百番歌合（まゐのまし  
は）

冬さむみまひの眞柴ををりさせはやとはは風もたまらさりけり

同 從 三 位 行 家 卿

弘長九年百首

うたの野やかれまはかくれふす鳥のとひたつはかりふる霞かな

同 仲 前 中 納 言 忠 長 卿

家集曉時雨

時雨する山のぬれまはこりにとやまた夜をこめて賤かむれたつ

同 仲 前 中 納 言 忠 長 卿

建仁元年老若五十首歌合

つま木とりたにの通路うちはらひわけそわひぬるまはの雪をれ

同 西 行 上 人

家集山家時雨を

宿かまふはくその柴のいろをさへまはたひてそむるむら時雨かな

同 民 部 卿 爲 家

永承六年毎日一首中

をくら山まつの嵐の目にそへてさむきあさけにかはるまはまは

同 皇 太 后 宮 大 夫 俊 成 卿

弘長四年毎日一首中

まつとても人やはとはんをくら山うつもればつる雪のまはまは

同 皇 太 后 宮 大 夫 俊 成 卿

述懐百首

柔するならのは柴にちるつゆのはらくとこそ音はななけれ

同 皇 太 后 宮 大 夫 俊 成 卿

同

まはつ山ならの眞柴にかさゝれてねらふ獵夫のたゆみな世や

同 俊 頼 朝 臣

同

ふし柴にやとれるほやおのれのみ常磐かきはに物をこそ思へ

同 俊 頼 朝 臣

夫木和歌抄卷第二十九終

# 夫木和歌抄卷第三十

雜十二

題

國 禁中 仙家 都 故郷 故宮  
 閑居 窟 宅 廬 屋形  
 隣 山家 田家 屋形

國

老若五十首歌合  
 弘長元年百首題  
 家百首  
 永仁三年家歌合  
 六帖題(てるひ)  
 (同國)

我てくにはて天照神あまてらすかみのすゑなれば日のもとゝ玄あもいふにそありける  
 山はみなあつまもろこし霞みけりわかくにひろく花やさくらん  
 あきつしまひとの心をたねとしてほかにはきかぬやまと言ことの葉は  
 島あまのほかもなみ治されるあきつ國くににみちある君のめくみをそ玄ある  
 天津あまそらかはらすてらす日のもとくにに静しずなる御代みよそかしこき  
 さかひこそ敷にはあらぬ國なれとあきつ玄あまにそ法はひろまる

後京極攝政  
 後九條内大臣  
 民部卿為家  
 參議為相卿  
 正三位知家  
 光俊朝臣

題不知

大嘗會悠紀方御屏風

御集國

國

建仁元年老若五十首御歌

同

百首歌合春曙

正治三年百首

千五百番歌合

同

建保三年名所百首

六帖題

同

文永二年每日一首中

住吉社三十首

建長八年百首歌合

萬二千  
いさ子ともたはわさなせそ天地のかためし國をやまとまねは

あし原やみつほの國をもる山もとのあかりのおもしろきかな

あしはらのくにつによせしいは舟のさして契りし未なたかへそ

ひとつる日のたかみの國をやすくと祈るすゑをは神やてらさん

ひとのすむやまとは花の國なれやみよしの山をはつせのやま

むかしよりみふにつたはる法の水なかれてすめる四のうみかな

はなの色鳥のこゑまでゆかしきは彌陀の御國のはるのあけほの

いくよろつ君をめぐまん紀の國やみつの山にも千代をそへつゝ

いさなきやいろはも同じ未なれば君にちきれるとよくにのつち

もろこしの代々はうつれとまきまや大和島根は久しかりけり

津の國のみつとないひそ山城のとはぬつらさは身にあまるとも

としへぬる松もむかしに山城のとはにあひみんちよのふるみち

よ、かけて思へはひさしあしはらや中津國よりならふことのは

かけまくもかしこかるへしまき島や大倭くになる大みやとこ

ひとつにそかみも佛もまもるらんわかひのもとの大やまとくに

名もゑるし年もつもりの國をへてなほもやそちの坂をこゆへき  
おしてゐるやなにはのくに、夏のきてあしのまけみは行舟もなし

よみ人あらず

前中納言匡房卿

洞院攝政

卜部兼直

慈鎮和尚

後京極攝政

權僧正公朝

皇太后宮大夫俊成卿

大納言道具卿

土御門内大臣

後鳥羽院宮内卿

順徳院御製

民部卿爲家

同

同

從三位家隆卿  
藤原伊嗣朝臣

難波に幸の時長歌

おし<sup>萬六</sup>てるや、なにはのくにの、あしかきの、ふりにし里<sup>も</sup>、人なみ 笠 金 村

長歌

の、おもひやすみて、つれもなく、  
あめつちも、よりてあるにそ、いしはしる、あふみのくにの、ころ よみ人去らす

同

もての、たなかみ山の、  
あしほらの、みつほのくに、たむけすと、あまくたります、いほ 同

同

よろつ、千<sup>萬</sup>かみの、かみ代より、  
あまさかる、ひなにはあれと、いしはしる、あふみのくにの、さゝな 人 丸

同

みの、おほつのみやに、  
すへらきの、とほのみかと、まらぬ火の、つくしのくには、あた 中納言家持卿

同

まもる、おさへのきそと、きこしめす、  
こもり<sup>の</sup>の、はつせのくに、さよはひは、われかきたれば、たな よみ人去らす

幸ニ于吉野宮の時

くもり、雪はふりきぬ、さくもりて、あめはふりきぬ、  
やまかはの、きよきかうちと、みこゝろを、よしの、くにの、花ち 人 丸

りあふ、あきつ<sup>の</sup>、へに、みやはしら、ふとしきませは、  
うこきなき大和まねのときはきもくにを治めし神やう忍けん ト 部 兼 直

此歌は定嗣卿人々に貞觀政要の文をよませ侍りし時治國如  
栽樹の心を

雜歌の中

一須彌のよつのおもてのそらをゆく月日や國をまかへさるらん 他 阿 上 人

六帖題

神國と豊おしはらをさためおきて君のまもりのかきりなのよや 權僧 正 公 朝

中務卿親王家五十首歌合

波たゝて風をさまれる君か代にその名あらはすうらやすのくに 同

此歌判者光俊朝臣云浦安國は伊弉諾尊名付給りげにも他にこと

にこそ侍ければ波平風靜也嘉名かたゝ賞侍べきにこそと云

々々

五行の御歌に中

むかしよりみやこをめたるこの里は唯わかくにの中なりけり 後 京 極 攝 政

禁 中

寛喜元年女御入内御屏風

こゝのへのはにかさぬるさかつきのさすやひかりの雲の上人 西園寺入道前太政大臣

同

としことの山あむの袖にひくこまのたえせぬ今日の春のには哉 從 二 位 家 隆 卿

同

かすみ玄く雲井のはるの空ながらゆきをめくらすやまあむの袖 正 三 位 知 家 卿

二夜百首御歌

萩の戸の花の玄たなるみかはみつちとせの秋のかけそうつれる 後 京 極 攝 政

同

冬のあした衛士のけふりをたつるやのあたりはうすき九重の雪 同

寶治二年百首水邊盤

これもまた衛士のたくひか百敷のみかはのいけの夏むしのかけ 正 三 位 知 家 卿

題不知

名もたかきおほうち山をたちいて、月すみわたる御川みつかな 賀 茂 重 保

洞院攝政家百首

御集月

同

一二三を句のかみにおきて秋の心な

十題百首居所

後京極攝政家十首歌合禁庭雪

建久元年一字百首冬歌

仙洞三十首花歌

百首御歌禁中

同

六帖題

十題百首御歌

同二年百首

正治二年仙洞歌合庭松

六帖題秋の月

同もいしき

文永六年五社歌

いくちよの秋をふともさ、たけのおほうち山の色はかはらし

九重にたゝめるたまの御はしよりかたふく月のねりのほらかな

とねりめすとよのあかりに月さえて宮人わたるたつの尾のみち

九重やなかき夜すからもる水のおとさへさむきにはのはつしも

もいしきやもる白玉のあけかたにまた玄もくらかねの音かな

さえのほる御はしのさくら雪ちりて春秋みするくものうへの月

百敷やてる日のまへにとるほこのたつるこゝろは神もみるらん

うらみはや御はしの前にとるほこの身をたてかぬる花の玄た蔭

みやき野をおもひいつるそあはれなるけふ萩の戸の秋の匂ひに

これをみん人は心をみかくへしおほはのむくのいにしへのあと

とのへみれば古きみかきのかはらふき變らぬ御代に又めくる哉

もいしきやたまのうてなにてる月のひかりをえたる秋のみや人

よろつよに玉しく庭の松のかけはるの日かけものとかにそさす

もいしきや玉しくにはの清きせにひかりをそへてやとる月かな

玄ひでみる秋の吃哩字のうへにこそなほ九重のつきはすみけれ

たちよりにまつ補みせしかたなしの軒の下こそわすれかたけれ

百敷やなかれひさしき河たけのちよのみとりはきみそみるへき

從二位家隆卿

法性寺入道關白

同

後京極攝政

中納言定家卿

同

同

爲實卿

同

慈鎮和尙

同

信實朝臣

後京極攝政

從二位家隆卿

正三位季經卿

光俊朝臣

同



百首歌禁中

同

河竹のかはらぬいろのふかみとりたましく庭のすゑそまらるゝ  
をさまれる御代のためにやかきとめて風も音せぬあら海のなみ

同 参議雅經卿

仙家

永久四年百首仙家

同

漢故事和歌集  
もゝの花まげきみ谷にたつね入ておもはぬ里にとしそへにける

仲實朝臣

同

承久元年内裏御書

たちぬはぬ衣のそてしふれければ三千とせふへき桃もなりけり  
のりてゆくつるの羽風にくもはれて月もさやくすむ山邊かな  
やま人もすまていく代のいしのゆか霞にはなほなほにほひつゝ

俊頼朝臣

同

弘安元年九月詩歌合仙家  
春秋をこゝにとめてとしをふるわかすむ宿やこの名なるへき

前中納言定家卿

同

仙洞詩歌合仙家秋興

たつねけん心をそまらる雲のなみけふりのなみのふかきやとりを  
う列てみる山路の菊のとしをへてをのゝえくちん秋そひさしき  
ふくかせもをさまる御代のあさち山いつる月日の影ものときし

入道前太政大臣

同

ふるさととはちとせの秋や過ぬらん君すむやまのみち見るより  
あしたつに乗てかよへる宿なればあとたに人はみえぬなりけり

前大納言爲家卿

龍門にまうて、仙屋書つ  
ける

能因法師

都

從三位顯成卿

從二位行家卿

能因法師

題しらす

同

同

弘長三年内裏百首賀茂

六百番歌合

千五百番歌合

家集夏歌中(花のみやこ)

建保三年家百首御歌釋教

(玉のみやこ)

題不知(雲のみやこ)

忽開海上有<sup>開</sup>三山

六帖題(ふるみやこ)

題不知(なにはのみやこ)

仁和行平卿歌合時鳥(ふるのみやこ)

題不知(くにものみやこ)

百首御歌

長歌

萬六

よろつよに見ともあかめやみよしのたきつ河内の大宮ところ

いつみ川ゆくせのみつたえはこそ大宮ところうつろひゆかめ

みかの原ふたいの野へをきよみこそ大宮ところさためけらしも

山城の此みやこをやまもりけんをかたの賀茂にあとたれしより

こひそめしこゝろはいつそ石上みやこのおくのゆふくれのそら

玉はこのみちの玄はくさうちなひきふるきみやこに秋風そふく

ほとゝきす青葉の山にかへるとも花のみやこをおもひわするな

いさきよきたまのみやこをいつる日は我立柚のひかりなるらん

かきちらし花とのみふる玄ら雪はくものみやこの玉のちるかも

たつねすはいかてか知らんわたつ海のなみまにみゆる雲の都を

あともなきむかしかたりの古都のこるなにはうらさひにけり

むかしこそなにはる中と謂れけめ今はみやことそなはりにけり

さよふけてふるの都のほとゝきすかへる雲路にこゑをきかせよ

みかのはらくにの都はあれにけりおほみや人のうつりいぬれば

みかのはらふりにし國のみやこにも山と川とそあとのこりける

やま玄ろのくにものみやこは、はるされは、花咲をり、あきされ

笠 金 村

よみびとまらす

同

從二位行家卿

慈 鎮 和 尙

後鳥羽院 御製

前中納言道房卿

光明峯寺入道攝政

よみ人まらす

太宰大貳高遠卿

信 實 朝 臣

式部卿 宇合

よみ人まらす

同

光明峯寺入道攝政

境部宿禰老丸

柱本  
卯

同

建治三年名所百首

故郷秋風

萬三  
おほやまと、くにのみやこは、うちなひき、はるさり<sup>り</sup>れば、山へ  
には、花さきを<sup>り</sup>り、かはせには、あゆこさはしる、

たつのいちや千年をかへてくるたみも國の都のわかきみのため  
明玉  
さひしともたれかはきかんいつみ川くにのみやこの松のあき風  
萬二  
たかてらす、目のわかみこは、とふ鳥の、きよきみやこに、かみの  
まに、ふとしきまして、

萬一  
わたらひの、いもゐのみやこ、かみ風に、いふきまとはし、あまく  
もを、目のめもみせず、とこやみに、おほひたまひて、

この川の、たゆることなく、此山の、いやたか<sup>し</sup>らし、たま水の、  
たきつみやこは、みれとあかぬかも、

建長七年顯朝卿家千首歌

洞院攝政家百首御歌月

照不<sup>レ</sup>知(ひさかたのみや  
こ)

同(まかのみやこ) 近江

同

同(うちのみやこ)

秋歌中

今はいやこほりもとけぬたま水のたきのみやこは春めきぬらん  
月影のやとりてみかくたまみつのたきつみやこに秋かせそふく  
萬十三  
ひさかたのみやこをおきて草枕たひゆくきみをいつとかまたん  
明玉  
ふりぬとてまかのみやこを山<sup>ま</sup>とにたれすみなして衣うつらん  
萬一  
いにしへの人にわれあれやさ、波のふるき都をみれはかなしき

同  
秋の野の尾花かりふきやとれりしうちの都のかりいほしそ思ふ  
續千秋下 石間  
おはなふくかりいほ寒き秋風にうちのみやこはころもうつなり

中納言家持卿

從二位家隆卿

法印尊海

人丸

同

同

藤原光朝朝臣

光明峯寺入道攝政

ふみ人志らす

祝部成茂

ふみ人志らす

額田王

藤原顯成

（ふちばらのみや、大和）

長歌

萬十  
藤はらのふるきみやこの秋はきはさきてちりにき君まちなか  
萬十三  
あやにかしこき、藤原のみやこしみゝに、ひとしもの、みちては

よみ人まらす

題不<sub>レ</sub>知（ならのみやこ）

同

あれと、きみしもの、おほおはせと、  
萬十六  
世中をつねなきものと今をしるならのみやこのうつろふみれば  
萬八  
あわ雪のほとろ／＼に降まけはならのみやこしおもほゆるかも

福  
太宰師大伴卿

同

うな原をやそ島かくれきぬれともならのみやこは忘れかねつも

よみ人まらす

同

くれなるにふかくそみにし心かもならのみやこに年のへぬれば

同

同

あをによし奈良の都にたなひけるあまの白雲みれとあかぬかも

同

ならの都にて作歌

雑歌

萬十六  
たちかはり古きみやことなりぬれば道の芝くさなくおひけり  
萬代  
いにしへのならの都の宮はしらこのかたなしになほのこるかな  
雲葉  
道芝のしも夜の月をふみならしふりにしみやこあれにけらしも

中原  
光朝卿

神無月の比ならの都にて

題不<sub>レ</sub>知

文治六年五社百首伊勢  
（竹のみやこ）

ひな  
まなさかるこしの國邊にありしかはならの都もまらすなりにき  
竹のみやまかきにうゑて千代までもいはひそめけん此君そこれ

三條右大臣  
鎌倉右大臣  
皇太后宮大夫俊成卿

同

おもへた、竹の都にかすみつゝまめのほかなる御代のけしきを

俊頼朝臣

此歌は伊勢に侍ける比正月廿八日齋宮おりさせ給ぬときゝて

むろ山の入道がもとより「ふるさとゝなりぬるみやの夕かす

みおもひかけすやたちかはりけん」とよみておくりけるかへ

光朝卿

新羅社歌合述懐

しと云々

霜ふかきその、都にすむひとはきえかへりてかあさ日をそまつ

よみ人志らす

此歌判者清輔朝臣云去もふかきといへることばあかひをうまへ  
るなどあるおもふ心なきにあらす但その、みやこそ歌合など  
にかやうにはよむべしともおほえずと云々

故郷

故郷歌

千五百番歌合

元久二年詩歌合水郷春望

六百番歌合

長歌

思故郷

題不知

長歌

萬二 よそにみし眞弓まゆみのをかも君ませはとこつみかたと、宿直とどろするかも

よみ人志らす

めくりゆく秋やはもとのあきのそら月そむかしのまかのふる里

後鳥羽院御製

新千春下 みやきもりなきさの霞たなひきてむかしも遠きまかのはなその

前中納言定家卿

ふるさとにおもふ人あるいへつとは春にそみゆるまかの山こえ

寂蓮法師

萬二 ゆるもなき、まゆみのをかに、みやはしら、ふとしきまして、みあ

らかを、たかまりまして、あさことに、

萬七 きよきせに千鳥ちとせつまよふ山きはにかすみ立らんかみなひのさと

萬三 わすれ草我が紐いとにつくかく山のふりにしさとをわすれしかため

萬十 ますらをの、いてたちむかふ、故里の、かみなひ山に、あけくれ

同

同

題不知

は、つみのさえたに、夕されは、  
故郷のあすかはあれとあをによしならの飛鳥をみらくしよしも

坂上 耶女

同

よしもなくさたの岡邊にかへりぬは島のみはしに誰かすまはん

人 九

同

大はらのふりにし里にいもを置いてわれいねかねつ夢に見えつゝ

同

同

わかさとに大雪ふれり大はらのふりしにし里にふらまくはのち

天武天皇御製

家集

冬くれはふるさとさむし大原やおほろのまみつさえやまさらん

前中納言匡房卿

建長七年顯朝卿家千首歌  
故郷

いのりおきしわかふるさとの三笠山きみのまるへとなほ思ふ哉

權少僧都 支覺

建保四年仙洞百首

色ふかきよろつ葉までならのは名におふ宮にちり初めけり

前中納言定家卿

千五百番歌合

さほとこの繁ゆる見ればかけふれて古郷とこそおほえさりけれ

家長 朝 臣

永久四年百首故郷

さしなからまた斧の柄はくちなくにまかきもねやもあらぬ里哉

源 兼 昌

同

ほととぎす誰まのへとか大あらしのふりにし里を今もとふらん

仲 實 朝 臣

仁和寺法親王家五十首里  
時鳥

ちはやふるならの宮ぬにいのりして大和ことのは道をはるけよ

前中納言定家

毎日一首中故郷

まのへともいはぬ色なるやまふきの花に戀しきむてのふるさと

民部卿 爲 家

千五百番歌合

夏かりのあし間の浪のおとはして月のみのこるみほのふるさと

後久我内大臣

同

白露のたつ野とよそに見えつるは卵のはなさける小野のふる里

寂 蓮 法 師

建仁元年老若五十首歌合

露の袖霜のさむしろいかならんあさちかたしくをのゝふるさと

嘉陽門院越前

秋御歌中故郷秋

露の袖霜のさむしろいかならんあさちかたしくをのゝふるさと

後京極攝政

天徳三年八月女房前裁合歌

題不知

文集百首歌に秋風不破關  
建長七年顯朝卿家千首關  
紅葉  
貞應三年百首

けふよりはかすむ山路にたちのほり三輪の古里ほのかにそみる  
ふち原のふるさと人になれる身をま松のえもさこそ去るらめ  
ふるさとのふはの中山日はくれてせきやさひしく秋かせそふく  
山風にまくれそいまはふるさとのふはのせきは紅葉しにけり  
ねやのうちの真木のいたさへ苔むしてやつれ果たるくさの故郷

元 眞  
參議 忠基 卿  
光 俊 朝 臣  
信 實 朝 臣  
民部 卿 爲 家

故宮

八幡若宮歌合仙洞より侍けるに故郷務(まきしまの宮)

題不知(のうへのみや)  
百首御歌(たかまとの宮)

同をばたのみや(大和、攝津)

百首歌(ひはらのみや)

光明峯寺入道攝政家百首  
歌合故郷紅葉

後法性寺入道關白家百首  
歌(たかまきの宮、大和)

一字百首(ふしみの宮、山城)

やまとも敷島の宮まきまのふむかしをいとまきりやへたてん  
たかまとの野の上の宮は荒にけりたまき君のみよとほそけは  
高まことやあれのみまさる宮のうちにのこるむかしの庭の松かせ  
をばたの宮のふる道いかならんたえにしのは夢のうきはし  
よそにみし古き木すゑのあともなしひはらのみやの秋の夕きり  
おひかはる木末もあらずふりにけり檜原の宮のあきのみみちは  
まきもくの玉きのみやに雪降れば更にむかしのあしたをぞ見る  
すか原やふしみの宮のあとふりていくらのふゆの雪つもるらん

後京極 攝政  
中納言家持 卿  
土御門院 御製  
同  
從三位家隆 卿  
信實 朝臣  
皇太后宮大夫俊成 卿  
前中納言定家 卿

正治二年七月當座三首詠

御集

家集

雜歌中秋風

百首御歌

同

長歌

ふるさと(大津宮、近江)

家集

同(ひのくまのいりの宮、大和)

七百首歌古宮(なからのみや、攝津)

同(あちはらのみや)

弘安元年申務卿親王家百首(よしののみや)

建長七年顯朝卿歌千首故郷(あちふのみや、攝津)

柿本影供百首(おきつのみや、大和)

題不知(つゝきのみや、山城)

荒にけるたかつの宮をきてみればまかきの蟲やあるしなるらん

いにしへの高津の宮のあとふりてむしの音のみそ秋をわすれぬ

あれにける高津の宮のあさちはらなほたましきのむらさめの露

おほさゝき高津の宮は雨ふれとつかれぬことをたみはよろこぶ

松風はいつくもおなしこゑすなりたかつのみやの秋のゆふくれ

むかしおもふ高津の宮のあとふりてなにはのあしにかよふ浦風

やすみまゑる、わか大君の、ありかよひ、なにはのみやは、くちらと

り、うみかたつきて、たまひろふ、はまへをちかみ、

さゝ波や大津のみやは名のみしてかすみたなひき宮木もりなし

ひのくまのいりの宮のさゆる日は川せこほりて駒もわたさす

いにしへのなからの宮はあともなしはし柱たにくちはつる世に

おしてるや海かたまけてみせんかもあち原のみやに玉拾ふかも

くにみせしむかしはとほく霞きぬよし野のみやはるのよの月

たつのなくあしへの浪に袖ぬれてあちふのみやに月をみるかな

みよしの、あきつの宮のさくら花いくよさきてか神さひぬらん

山城のつゝきの宮にもまうすわかせをみればなみたくましも

後鳥羽院御製

醍醐入道太政大臣

鳴長明

按察使國隆卿

慈鎮和尙

同

よみ人不知

後九條内大臣

人丸

光俊朝臣

權僧正公朝

同

同

少僧都玄覺

法印尊海

よみ人未らす



弘長元年百首（かしはらの宮、大和）

六帖題やな

題不知（ふたいのみや、山城）

長歌

同（うねひのみや）

同

題不知

橋寺にまうで、月をみて

題不知

古來歌  
あめつちの神代はまらすかしはらの宮ぬそ國のはしめなりける

そひかはにやなうつ男はやくこそにへ備へけれかしはらのみや

ふたいやま山なみ見れはも、代にもかはるへからす大宮ところ

山まろの、かせ山きはに、みやはしら、ふとしきまはり、たかまり

し、ふたいのみやは、かはちかみ、

あきつしま、やまとのくにの、かしはらの、うねひのみやに、みや

はしら、ふとしきたて、あめのまた、まらしめける、

わか大君の、よろつ代を、おもほしめして、つくらまし、かく山の

みや、よろつよに、

橋のままのみやにはあかすともさたのをかへにとのゐにゆく

知さりしむかしさへこそ戀しけれたけちのみやの月をなかめて

いとねたしく、りの宮の池にすむこひゆる人にあさむかれぬる

閑居

我やとのみきりにたてる松の風それよりほかはうちもまきれす

爪木こるやと、ひもなしすみはつるおのか心そ身をかくしける

前中納言定家卿

同

法印定圓

權僧正公朝

よみ人未らす

同

中納言家持卿

人

丸

同

寂蓮法師

よみ人未らす

文集百首  
同始知真隱者不<sub>レ</sub>必在<sub>二</sub>山林<sub>一</sub>

且<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>者

イニハ

イニハ

家五十首閑居

同

岩ねふむやま路はこげにうつもれて雲こそかよへ人はとひこそ  
とこととはに身をも離れぬかけたにも月入ぬれはみえずなりけり

喜多院入道二品のみこ

同

いつとても人めまれなる山里はおもひもわかぬふゆのさひしさ

三條入道左大臣

同

やま里はほそ谷かはのさゝれ水おとなふさへそさひしかりける

前大納言爲家卿

同

山さとは月のひかりもすみかへてたもとの露にやとるなりけり

源師光

同(閑居)

谷のみつみねのまつかせ音信てなにかさひしきすまるなるへき

前大納言隆房卿

同

音たえぬまつのあらしもあるものをとへかし人の秋のけしきを

皇太后宮大夫俊成卿

同

さもこそは庭は木のはにうつもれめこげおひにけりまつの下道

同

同

のこる松かはる木草のいろならてすくる月日もまらぬやとかな

定家卿

同

夕暮のあはれをたれにかたらし人もとひこぬやまのすみかを

正三位季經卿

同

山田もるひたの音にそおのつから人すむさとのあたりともきく

寂蓮法師

同

さこそあれまた人おともせぬいほにふけたる月をみるか寝しさ

光俊朝臣

同

里ちかきすみかを分てまはねはつかふる道をいとふともなし

前中納言定家卿

窟

後法性寺入道關白家百首  
述懐

うき世かなひとりいはやの奥にすむこけの袂もなほしほるなり

後京極攝政

十題百首居所  
曉風拂雨斜陽見寒浪閉  
水流水無

百首御歌

千五百番歌合(野へのいはや)

建久七年百八十首韻歌

大堂神童子いはやにて(神のいはや)

文治三年十首歌(いはや)

俊成卿家十首歌

家集山家心を

百首御歌中

六帖題みれのいはや

花月百首みれのいはや

家集戀歌中えそかいばや

三百六十首中かまきのいはや

題不知(しつ)のいはや、未勸國

同(み)ほのいはや、紀伊

紀伊三種窟にてよめり

山ふしの岩屋のほらにとしふりてこけにかさなるすみそめの袖

苦ふかきいはやの床のむら時雨よそにかかはやありてうき世を

山ふかき岩屋の月はあけやらてこけのとひらにあきかせそふく

むかしきく野への岩屋そ哀なるあらしのそこをゆめに見えけん

よしさらはともなひはてよ秋の月こけの岩屋によはそむくとも

雪間よりたちいてみれはかすみけり神のいはやの春の明ほの

ふりまさる吉野のみゆき跡たえてもらぬ岩屋はおとつれもなし

冬こもるよし野のやまの岩屋にはこけのまつくに春をえららし

吉野やまおくのいは屋を見ぬ人やゆき降さとを近しといふらん

ときは山かすみわたれる明ほのやおくの岩やもこゝろすむらん

あはれなり峰の岩屋の冬こもりのほるけふりのたゝぬはかりそ

おもひやる峯の岩屋の昔のうへにたれかこよひの月をみるらん

奥のうみやえそかいはやのけふりに思へはなひく風は吹らん

河かみやかさきの岩屋けをぬるみこけをむしろとならす優婆塞

おほなむちすくひなひこのいましけむ賤の岩やは幾代経ぬらん

はたすゝきくめの若子かい座けるみほの岩屋は見れと厭ぬかも

岩屋戸にたてる松の木なれをみはむかしの人をあひみしかこと

同

前中納言定家卿

後九條内大臣

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

前權僧正宗懷

前中納言定家卿

從三位頼政卿

從二位家隆卿

後九條内大臣

衣笠内大臣

前中納言定家卿

從二位家隆卿

好

よみ人しらす

同

轉通法師

弘安元年百首雜歌中  
寶治二年百首

同紀の國やみほのいはやとさすかなほ風こそふるき松にふくなれ  
わか戀はみほの岩屋にふるあめのいつくもりてか人に去られん

定圓法師  
衣笠内大臣

宅

六帖題

同題わする

百首御歌秋

洞院攝政家百首不逢戀

中務卿親王家五十首歌合

同

柴扉日暮隨風掩

初六二  
いかにせん家に傳ふる名のみしていふにもたぬ大和ことのは  
新六五  
から人の我妻去らぬいへうつりそれをためしのこひもするかな  
やま里はまはらの軒のかやまよりもりくる秋のゆふつく夜かな

民部卿爲家  
光俊朝臣

東路や杉いたふきのひまをあらみあはぬ月日もさてすくせとや

北院入道親王二品みこ  
民部卿爲家

まはらなるはにふの小屋もぬれなくに小雨に過て降木の葉かな

權僧正公朝

まくすはふよもきか宿のゆふ風にうらみもまさるむしの聲かな  
家集  
わひてすむ宿にひかりのくれゆくは吹風のみそとさしなりける

大江千里

廬

百首御歌

賀茂社百首御歌

さゝ分る野への庵のとまをあらみあはてぬる夜の月そのこれる  
つちかへに窓ぬりのこすいほまでもすすめすやとる秋の夜の月

順徳院御製  
慈鎮和尚

百首歌

寶治二年百首旅宿

家集山家春雨

題不知

嘉應二年住吉社歌合旅宿時雨

千首歌

寶治二年五首滋五月雨

建長八年百首歌合

御集田家月(田いほ)

洞院攝政家百首(しほのいほり風出)

寶治二年百首夜鹿

家集秋のくれによしの山にこもりたる人のもとへ

續後拾遺雜上

山階入道左大臣家百首山家風(松のいほ、あらし山)

後鳥羽院遠所にて影供御歌山家夕藤(松のいほり)

家集秋歌中(いほ)

雲につくみねの庵にねさめしてたゝこゝもとにはつかりのこゑ

玄の原やさてもこゝろはとまらねとみくさかりふきさす庵かな

山かつのいほりはかやのぬけめよりわりなくもるゝ春の雨かな

萬二千 たらちめの母を別れてまことわれ旅のかりほにやすくねんかも

かりほさすならのかれはのむら時雨哀まさきのおとはかりかは

行暮てやとかるいほの杉はしらひと夜の不しもわすれやはせん

かけつくる谷のいほりの軒端より玄つくもなかし五月雨のころ

山かつのいほはあらはに霜かれてこゝろはかりや冬こもるらん

まはらなる田庵にすこかいをやすみ月にもら玄て幾代あかしつ

秋されは玄くれもるまもあらし山もみちふきそふ柴のいほりに

小鹿なくみねの玄はやのあき風にねやまのいほの夢はたえにき

はしの山もみちのいほりいかならん夜半の嵐のおとそはけしき

おもひやれ山はあらしの松のいほむすへは夢もやふれやすさを

みやこ人松のいほりのふちの花あめさへふりてゆふ玄をれつゝ

をらてふく下葉のもみち玄くるなりもる山人のいほもたまらす

寂 蓮 法師

正三位知家卿

源 仲 正

よみ人未らす

智 經 法師

民部卿為家

信 實 朝 臣

從一位良教卿

後法性寺入道關白

光明峰寺入道關白

常磐井入道太政大臣

山 田 法 師

民部卿為家

從二位家隆卿

同

十題百首(杉のいほり)

正治二年百首(みれのいほり、よしの山)

建久四年風(さゝいほり)

題不知

喜多院入道二品親王家五十首

花月百首

御集泊瀨山春

山あていけり 三笠山

建保三年名所百首(いほり歸山)

文治六年女御入内御屏風(いほり)

後九條内大臣家卅首旅宿(あらしのいほ)

嘉祿二(六)年百首(をほのいほ)

建長四年三首山家夏草(露のかりいほ)

慈鎮和尚にまゐらせける哀傷十首中

旅御歌中(かりのいほり)

後法性寺入道關白家百首(いほり、かりのいほり)

洞院攝政家百首旅(霜のいほり、井なの)

いなり山杉のいほりにまとあけてあかたてまつる音もほのかに  
よそにてやかすむと見まし吉野山みねにいほりを結はさりせば  
吉野山みねのあらしのはけしさにさゝのいほりは露もたまらず  
たかまとのあをさることやかくらくの初瀬のやまに庵すといふ  
をはつせのふもとの庵もかほるらんさくら吹まく深山おろしに  
いほの上に行くへにしきをふきつらん花ちる春のをはつせの山  
はつせ山花にうき世やのころらんいほあはれなる春の木のもと  
雨ふれはみかさの山の本もぬれぬいほりはなしとこそきけ  
みやこ人くるればやかて歸る山なにそはひとりとまるいほりそ  
秋風になひく稻葉のたえまよりほのかにみゆるまつかまはいほ  
山かけやあらしのいほのさゝまくらふし待すきて月もとひこす  
とふ人のまねくたよりもたえはてぬ尾花のいほの野への霜かれ  
たれかこんやまかけふるき夏草にまかせてむすふ露のかりいほ  
小山田の露のかりいほのやとり哉君をたのまんいなつまのかけ  
あけかたになるや白露數そひぬかりのいほりのあしのすたれに  
いほりさすかひのまらねのたひ枕よすかに雪をはらひかねつゝ  
さゝむすふ霜のいほりのかりまくらたれとゐなのゝよるの月影

寂蓮法師  
小侍從  
六條院大進  
よみ人志らす  
大藏卿有家  
慈鎮和尙  
後京極攝政  
よみ人しらす  
兵衛内侍  
正三位季經卿  
前中納言定家卿  
民部卿爲家  
同  
前中納言定家卿  
後京極攝政  
同  
後九條内大臣

御集(すきのいほり)  
貞應三年百首河邊家(いほり、よと川)  
長歌(いほ、難波江)

月いつるうしろのやまは雲はれてすまのいほりにかへるうら風  
いほりさすよとの河きし水こえてうきぬはかりの五月雨のころ  
おしてゐるや、なにはのうらに、いほつくり、かたまりてをる、あし  
かにを、おほきみめすと、なにせんに、

後九條内大臣  
民部卿爲家  
よみ人志らす

題不知

同

老若五十首歌合(あしの  
まるや)

千五百番歌合

家集遇不逢戀(あしや)

文治六年五社百首

正治二年百首(しかのほ  
まや)

堀河院御時百首

春日社奉納百首不逢戀  
(みわのすき)

題不知(ひや)

屋

難波人あし火たく屋のすゝたれとおのか妻こそとこめつらしき  
夕つくひさすや河邊に造る屋のかたちをよしみうへそよりつる  
ふし馴しあしのまる屋も霜かれてうちもあらはにやとる月かな  
詠やる野へもひとつに霜かれてあしのまろやにふゆは來にけり  
山かつの蘆屋にかけるたかすかきふしにくしとも思ひけるかな  
難波女かあしのまのまのすかき一夜のふしも忘れやはする  
都路はとほからねともくさまくらまかのまよも浪はかけり  
まなかな鳥ゐなのは山に旅ねしてよはのひかたにめをさましつゝ  
よそなから三輪のすきやのいたまよりつらさあらはに明る山風  
朝霞かひ屋かまたになくかはつまのひてありとつけんこもかも

人  
よみ人志らす  
後京極攝政  
大藏卿有家  
俊頼朝臣  
皇太后宮大夫俊成卿  
同  
俊頼朝臣  
安嘉門院四條  
よみ人志らす

永萬二年五月經盛卿歌合戀(あつまや)

百首歌(さゝや)

楚忽百首戀歌中(はや)

家五十首御歌旅(ひなのさゝや)

題不知

百首御歌冬(あはらや)

六帖題

夕對三和花二字抄(ふせや)

久安百首

百首御歌中(きそのふせや)

同(すゝのまのや)

花月百首御歌

百首歌

家集秋歌中

千五百番歌合

光臺院入道二品親王家五十首野徑月(ますゝのまるや)

あつまやの軒のかやまにおふときく人をまのふは我身なりけり

さえあかすさゝやの廳のかりひさしたゝひとへなる夜半の白雪

すゝきふくほやの軒端のひと方になひかは神のまゐるしともみん

さても世を過しけるよと外に見しひなのさゝやに幾代とまりぬ

わくらはに問人もかなあまさかる鄙のさゝやにわふとこたへん

峯わたる風なかりせはあはらやの軒に木の葉をたれかふかまし

あはらやのいた間つゝきの長きよにうたゝめさます月の影かな

月にこそふせ屋のすたれあけしかと卯花にまたおろされぬかな

冬の夜はとふのすかこもさえくゝて獨ふせやそいとゝさひしき

今朝みればきそのふせやの竹はしらたはむばかりに雪降にけり

野邊まむるすゝのまのやにまきたちて窓に傾ふく月をみるかな

こよひたれすゝのまのやに夢さめてよし野の月に袖ぬらすらん

はるかなる野中の松を友と見てすゝのまのやに世をやすきまし

よしの山秋風たちぬいかはかりすゝのまのやのすゝしかるらん

かた岡のすゝのまのやに秋暮ぬまくれもらすならのうはふき

とまるへきすゝのまのやは荒にけり里までおくれ野への月かけ

清 輔 朝 臣

太宰帥為經卿

參議 為 相 卿

北院入道二品のみこ

權 僧 正 公 朝

喜多院入道二品のみこ

信 實 朝 臣

中納言資 仲 卿

大炊御門右大臣

喜多院入道二品のみこ

慈 鎮 和 尙

後京 極 攝 政

寂 蓮 法 師

從二位家隆卿

嘉陽門院越前

從二位家隆卿



家集戀歌中(かほらや)

建保二年内大臣家百首水郷寒廬(波のとまや)

家集ある人の贈答(とまのや)

神力品如來一切秘要之藏(柴や)

久安百首(あまのかこや)

百首歌述懐(つかや)

家集深山叢(まきのかりや)

千五百番歌合(あまのふせや)

十題百首御歌

百首歌(ゐてのかはや)

六帖題やどり(はにふのこや)

くちかたむ

題不知

三百六十首中(なにはのこや)

寶治二年百首(あかしのこや)

法輪百首山家述懐(あふりや)

瓦屋の去たゝく人もこひわひぬさらはあさまのけふりともなし

冬の日のみしきあしは霜かれてなみのとまやに風そよわらぬ

とまの屋に浪立よらぬけしきにてあまり住憂きほとは見えにき

くらふ山かこふしは屋のうちまでも心をさめぬところやはある

潮たるゝ蟹のかこやになにとしてやくとも叩くよはのくひなそ

うき身をはつかやのほとにすむ鬼の一口にたになりねとそ思ふ

そま人のまきのかりやのあたふしに音する物はあられなりけり

紀の國や蟹のふせやのとまひさしふきあけのちとり月になく也

夕なきに浪間の小島あらはれてあまのふせやをてらすもしほ火

春の日は行もやられすかはつなくゐてのかはやに駒とゝめつゝ

宿りする埴生の小屋のかつらにてぬるかうちたに見る夢もなし

河をちのはにふのこやのかり枕ゆめになしてもひとにかたるな

久方のはにふのこやに小雨ふりとこさへぬれぬ身にそへわきも

あしのはに隠れてすめる難波女の二屋は夏こそすゝしかりけれ

おく露に袖さへぬれてをちかたの明石のこやにあかしかねつゝ

わひ人のかたちにかくるあふりやの去たくらなりや山陰にして

從二位家隆卿

前中納言定家卿

西行上人

同

前參議親隆卿

寂蓮法師

西行上人

後鳥羽院宮内卿

後京極攝政

重之

民部卿爲家

光俊朝臣

よみ人あらす

好忠

衣笠内大臣

源仲正

後鳥羽院宮内卿

屋形

家集旅歌中(たびやかた)  
嘉應二年住吉社歌合旅宿  
時雨  
嘉祿二年百首(かりやか  
た)  
久安百首(くゝめやかた)

朝夕にさしてはこえつたひやかた立居につけていとまなのよや  
神無月去くる、夜半の旅やかたもるとはなしにぬる、そでかな  
かりやかた又やむすはんいほさきのすみた河原に今日も暮しつ  
をかや葺く、め屋かたの竹はしらふしよからぬは旅寢なりけり

源 正 仲  
藤 原 懷 綱  
民 部 卿 爲 家  
前 參 議 親 隆 卿

隣

六帖題

同

同題の御歌となり

同

幽谷聞鹿

家集花十首歌中

永久四年百首隣

新六二  
さと人の軒をならへて往やともいつくまでこそとなりなりけれ  
家になき四のとなりの垣こしはうたてといふもにくからぬかな  
いかにせんよつの隣の宿にたにかなしむこゑのたえぬうき世を  
あまた、ひとなりをかへて教へける人の親こそかしこかりけれ  
となりぬはたのかりやに明すよは鹿哀れなる物にそありける  
はる風のふくにつけてや山さくらとなりのまつに花はかそへん  
色かへてふりぬる物としたかきとなりの松とわれとなりけり

衣 笠 内 大 臣  
光 俊 朝 臣  
中 務 卿 の み こ  
禮 僧 正 公 朝  
西 行 上 人  
修 理 大 夫 顯 季 卿  
仲 實 朝 臣

同  
文集百首寒鴻飛急覺  
盡隣鷓鴣鳴通知三夜長

たらちねの更よりにとなりをかへけるも子を思ふゆゑと聞そ悲しき  
まきの屋にとりの霜はしろたへのゆふつけ鳥をいつか聞へき

藤原忠房  
前中納言定家卿

山家

延長二年御屏風

宇治殿にて山家旅情宿後拾

千五百番御歌合

雑歌中

御集山家松

正治二年百首山家

百首御歌

洞院攝政百首山家

やまのほへのあらしとい  
へることなよめる

洞院攝政家百首山家

同

同

かひかねの山里みればあしたつのいのちをもたる人そすみける

旅後拾遺雜四ねするやは深山にとちられてまさきのかつらくる人もなし

老の後月にすみけんからひとのあとをたつねているやま路かな

古古來歌来の橋まつのはしらと住にをめて老をおくりしやまそゆかしき

ひきうゑしさとはみなせの庭の松ぬしなきいろに春やへぬらん

入ぬとやみやこの人はなかわらんまよりにしにめくる月かけ

ゆきてみんむかしなからにさくら花をりにあふみのまかの山里こゑ

道とほくまた誰かそにかけつらん松木のふねにうくるやま水つかなみ

あらしのみたえぬ深山に住民はいくへかまけるとふのすかこも

いしにふれこけにかさなる春のくもなれていくよの枕なるらん

またれつる花のたよりも過はてゝむくらのやとそいとゝ住うき

みわたせは杉の葉青きかともなし雪のさかりの三輪のやまさと

貫之

大納言經信卿

土御門内大臣

權中納言經平卿

後鳥羽院御製

從二位家隆卿

慈鎮和尙

常磐井入道太政大臣

俊賴朝臣

後九條内大臣

從三位範宗卿

從二位賴氏卿

弘長元年百首

御集山家

百首御歌

家歌合山家夜霜

南北百首歌合山家

山家十五首御歌中

同

同

建長三年十首歌合衆議判  
山家秋風

同

洞院攝政百首山家

同

同

同

同家百首郭公

山家

同

きく人も見るひとみなきやまそうき風と月とのみちはあれとも

軒とつるみやまの檜原高ければほかにいてたるつきをまつかな

この里は雲の八重たつ峯なれやふもとに去つむとりのひとこゑ

草結ふ夜半のとさしのかれしよりうちもあらはにおける霜かな

みよしの、眞木立やまに宿はあれと花みかてらの音つれもなし

ふもとまでおなしさ、原あともなし深山のいほの露のたみち

山かけや軒はのこけに去たくちてかはらのうへに松そかたふく

かりそめのうきを出たる草のいほに残るこゝろはふるさとの夢

我やとの草のとさしのあとなればあけぬくれぬとあき風そふく

ふしなれぬほとをはゆるせ竹の戸に風も夜さむの時もきぬらん

いたつらにあけぬくれぬと住わひぬ人めかれゆく草の戸さしは

松風のおとにすみけんやま人のものとこのゝろはなほや去たはん

谷こしの眞柴の軒のゆふけふりよそめはかりはすみうからしや

山里はあしのまろやの妻こひになくやをしかのこゑをなれぬる

ほとゝきすいほりあまたにまたれつゝひと聲とほき谷の山さと

道かへてたか世をわたる宿ならん竹あむかとのまへの去ははし

我のみとむすひしいほもかすそひて杉のむら立もとつ葉もなし

後九條内大臣

同

後京極攝政

同

同

同

同

同

正二位成實卿

從三位顯氏卿

大納言經通卿

前中納言定家卿

同

從二位賴氏卿

同

光俊朝臣

家長朝臣

山家歌中

久安百首

山里のかれたる草といふことな

千五百番歌合

家集山家心を

寛喜元年女御入内屏風歳暮山邊民家

正治二年百首山家

文治六年五社百首

洞院攝政家百首山家

建久七年百廿八首山家

同

同

文治三年閑居百首歌

正治二年百首

建久七年百廿八首

貞應三年朗詠百首衝田御峰月出念中

六帖題山さと

やまさとの雲のとさしのあけかたに月かけうすしにはのはつ霜

さら更くいにいやはねらるゝ山里のあしふく宿にあくれぬふる夜は

垣かきこめしすそのすき霜かれてさひしさまさるはの庵かな

あいともなし岩のかけみちたとりきて雪とわけつるにはのあら雲

柴の戸もあけゆく山の峯なればのきにわかるよこくものそら

暮ぬとて民のかまともいそくめりとしのこえゆくみねの山さと

みやこ人とはぬもいかうらむへき雲にわけいる宿のかよひち

爪木こる山路はかりはふみわけてよもきの門はあとたえにけり

なほあはし雲るる谷をたちかへりみやこの月にいつるやまみち

山ふかみひとはむかしのやとふりて月よりさきに軒そかたふく

としへぬる宿たちいつる権かもとよりぬし石もこけあをくして

たちかへりやま路かなしき夕かないまはかきりの宿をもとめて

瀧のおとみねのあらしもひとつにてうちあらはるゝ柴の垣かな

浪のおとに宇治の里人よるさへやねてもあやうき夢のうきはし

物おもはぬ人のきけかし山里のこほれるいけにひとりなくをし

峯の庵のまとよりいつる月たにも有明のころはなほまたれけり

我かゝる山里すみをいかにともあるびとあらはたつねきなまし

大納言教家卿

季通朝臣

西行上人

後久我太政大臣

従二位家隆卿

西園寺入道太政大臣

隆信朝臣

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

同

同

同

同

同

同

民部卿為家

同

文治四年毎日一首中

建長三年毎日一首

同

貞應三年百首山家夕あら

文永六年毎日一首中

同

千首歌

家集山家昔

嘉元元年式部卿親王家續  
千首山家鷄

君臣御歌會

高野より寂然法師のもと  
へつかはしける歌中

百首歌中

嘉禎二年山家十首歌合

同

家集

なにはめかたく火とみえて山さとのあしのまろやにとふ螢かな

山里のまつの木のまのいけみつにすまぬこゝろそ月におとろく

小倉山もみちふりしくたにかけのあとなき庭はみるひともなし

くれゆけはそのふの山にふく嵐なれすはいかにこゝろうからん

いくよしもたえてあらしの山里にあはれはけしき風のおとかな

かけにゐて枝を折にもなりぬへし軒はのやまをたのむつま木は

われとせぬもとの谷川やりみつにいたてわたすおく山のいほ

山ふかく年ふるほとそまられけるまかも小鳥もひとになれつゝ

たらちねの跡とてみれば小倉山むかしのいほそこげにのこれる

すむ人のやとまとはなる山路とてゆふつけとりも聲そすくなき

身はかくてまはしとおもふ山里にこゝろをかへすみねのまつ風

山深みなるゝかせきのけちかき世を遠さかるほとそまらるゝ

やま里はそのふの野へのはな盛かきねのうちにたつねををする

とはれてもまちかきほとの里そなき山かけふかき庭のあしかき

雲かゝるみねの松かきあれにけり世をのかれこし年やへぬらん

のきちかくなこの釣舟くたすなり山たにこそとくちすさひして

此歌はたなかみにてくれかゝるほどにをとこのこゑして山た

同

同

同

同

同

同

同

同

法眼慶融

参議爲相卿

前中納言爲兼卿

西行上人

寂蓮法師

後鳥羽院少輔

善真法師

俊賴朝臣

家集

にこそとくちずさみしてうたうたふ聲のしければなにごとぞ  
とたづねければつりぶねのくちずさみしてくだるなりといふ  
をきゝてよみ侍けると云々

谷かけやこゝろのにはほ袖にみちてたかねの花の色もよしなし

慈 鎮 和 尙

此歌は文集百首に心足ニ即爲ニ富身ニ閑仍富貴ニ富貴ニ在ニ此中ニ何必

居ニ高位ニ

田家

文治六年五社百首田家

弘長元年百首

承久四年百首秋山家

貞應三年百首

寶治二年(百首)田家雨

貞嘉元年女御入内御屏風  
田家秋收興

弘長元年百首

同

なかをかやおち穂ひろひし山里にむかしをかけてたつらをそ行  
わが門の稲葉のまたひつたひきてたこの水もるはなのゆふかけ  
こりはてぬかり田のおものいなすまし鳴たつくれのうす霧の宿  
かりあくる門田のおもは霜かれてかきほにのこる竹のひとむら  
いねかての田つらの庭のまは間よりよるの雨さへもり明しつゝ  
年新勅賀あれば秋のくもなすいなむしろ刈たみしくとこのたえぬ日そなき  
たつらなるわらやの軒のこもすたれこれや縣のまゐるしなるらん  
かりをたに立るそほつはかひもなしいたつらならは門守りせよ

皇太后宮大夫俊成卿

後九條内大臣

前中納言定家卿

民部卿爲家

從二位賴氏卿

光明峯寺入道攝政

常磐井入道太政大臣

信實朝臣

隆綱朝臣家歌合山田

百首夏

嘉元百首田家

文應元年七社百首田家

嘉元四年七月當座百首田家

正治二年百首

堀河院御時百首

田家の心を

六帖題

建治三年内大臣百首田家

時雨

洞院攝政家百首

いなしきや山田もるをのかりほにてねぬよの敷を幾代へぬらん

かはつなく田中のゐとに日はくれておもたかなひく風渡るなり

山もとのたけよりおくに家居して田のものをかよふ道のひとすち

折ふしにこゝろをつくるすまひかな田のもののおくの竹の一むら

秋風にとはましひとのおとつれもいくたの里はふゆかれにけり

すみすて、刈田にのこる杉はしら秋のゑるしもみえぬいほかな

山里のわさ穂の庵におのつからともなふものはみなくちまもり

種つものみそのにまきついさことも外面の小田に慈姑ひろはん

雲葉  
かこひなき柴のいほりはかりそめのいなはそ秋の爪木なりける

新六二  
山かつの外面の小田の片あらし去年のつくりはまめもおろさす

をしねかるふしみの小田に初時雨心あるいほのいたひさしかな

あさ霞かひやのけふりたてそめてまた春あさきまつのをやま田

よみ人志らす

寂蓮法師

参議爲相卿

民部卿爲家

同

爲實朝臣

民部卿範光

顯仲朝臣

中納言國信卿

正三位知家卿

慈鎮和尚

從二位家隆卿

# 夫木和歌抄卷第三十終



夫木和歌抄卷第三十一

雜部十三

題

郡 床 牆

里 樞 籬

村 棟

市 窓

驛 戶

庭 門

郡

かひのくににまかり申に、つるのこほり(郡留、甲斐)

六二一 新千雜上

題不知六帖

同

同龜鏡(愛智郡近江)

君かためいのちかひにそ我は行つるてふこほり千代をうるなり  
甲斐の國つるのこほりのいたのなる白玉こすけかさにぬひてん  
よろつ代を君に譲らんためこそつるのこほりの早苗とるらめ  
うらやみにえちの郡の稻をすへて神ときみとにつくはつ穂かな

忠 八條院六條  
よみ人まらす  
よみ人まらす

六帖目根郡和泉

龜鏡(ひかみのこほり)

みの國(まきのこほり)に

武藏守みつすゑくだりける錢に郡筑郡

六帖題御歌こほり(鎌倉郡相模)

同阿武の郡(長門)

同さらのこほり(河内)

おくのこほり(陸奥)

あきつばのすかたのこほり(陸奥)

同やすのこほり(野州又近江)

大嘗會歌

正安大嘗會歌

題不知(なほ)のこほり(伊那信濃)

百首御歌(伊勢)

六二  
いつみなるひねの郡(の)の日ねもす(そ)にこひてくらすと人は去らん(そくらす)

萬代のためしにいねをつきしよりひかみのこほり民そさかえん

たひ人のわひしきとき(も)はくさまくら雪ふる時のこほりなりけり

武藏野のつゝきのこほりつゝきつゝおのちよを思ふへら也

東路やあまたこほりのその中にかてかまくらさかえそめけり(新六二)

長門なるあふのこほりの柚(う)いたはもろこし人もすさめさりけり(新六二)

さゝわくる音もさらの(こほり)路(ち)に駒(り)をはやめてけふも暮しつ

我(わ)ことはおくの郡のえひすかけともかくにもひきちかへつゝ

あきつばのすかたの郡うこきなしくにもろ神まもりをさめて(新六二)

みちのくにけふの郡におるぬのせはきは人のこゝろなりけり

人めもる關をはゆるせあふみなるやすのこほりの安(やす)かよはん

人心やすのこほりときくなへにつけとつきせすはこふいねかな

君か代は安のこほりのみつきものゆにはの稻穂つきそはしむる

信濃なるいな(の)こほりと思ふにはたれかたのめ(の)里(むら)といふらん

いく代へぬうらの秋風わたらひのこほりのうちに宮井せしより

里

同

同

重

能宣朝臣

中務卿のみこ

光俊朝臣

信實朝臣

民部卿(の)為家

前中納言定家卿(の)

衣笠内大臣

正三位知家卿

左京大夫顯輔卿

兼仲卿

よみ人ふらす

後京極攝政

題不知

寛平御時后宮歌合、山ま  
たさと

昌泰元年亭子院歌合野里

後法性寺入道關白家百  
首（いるまのさと）（武藏）

文應元年七社百首、いは  
たのさと（尾張）

建長七年毎日百首中、い  
とゐのさと（未勘國）

隔里聞（搦衣）と云事を

長治二年權中納言俊忠家  
歌合、いとかの里（紀伊）

法隆寺舍利の御はこの歌をみて、  
いかるがの里（未勘國）

六帖題（今里、山城）

御集

正治二年百首、いなしき  
のさと（未勘國）

名所歌申、いばでのさと  
（陸奥）

初秋歌、いまねのさと（河  
内、未勘國）

題不知懷中、いつしのさ  
と（但馬）

同じそきのさと

萬七

山もりのさとへにかよふ山路はまげくなりけるわすれけらしも  
（新撰萬葉）

あらしふく山したさとにふる雪はとくちる梅のはなかとそ見る  
（のこらん）

をみなへし立る野さとをうち過てうらみん露にぬれやわたらん

さりとともたのむの雁をたのみきて入間の里にけふそいりぬる

いまよりやいはたのさとのおき風も夜さむにふけは衣うつらん

いもかくるいとゐの里の手卷山よりくこゝにやとりぬるかな

さよ衣いるのゝさとにうつならしとほつきこゆるつちの音かな

五月雨はいとかの里のひきまゆもたえぬにすれや曝す日もなき

かきりありし鶴の林のかたみをはとめおきつるいかるかの里  
（新六一）

雨ふれはかたそはつくるいまさとのふる道とめておつる山みつ  
（萬代）

日くるれはをちのいま里かひたてゝとはたの面にけふりたな引

わひつゝもかくて幾代を過ぬらんかりねならぬいなしきの里  
（明五）

山ふきはいはてのさと（春よりやくちなし）いろの花にさくらん  
（六一）

あつまちのいまねの里は初あきのななき世ひとりあかす我しも  
（そい）

但馬なるいつしの里のいつしかもこひしき人をみてなくさまん  
（懷中）

いつしかと我をまちつゝこし人のいかていそきの里をきかはや

よみ人あらす

同

同

皇太后宮大夫俊成卿

民部卿爲家

同

西行上人

源仲正

殷宮門院大輔

正三位知家卿

入道二品みこ覺性

喜多院入道二品親王

隆朝臣

躬恒

よみ人あらす

同

家集いふきのさと、伊勢、  
近江又上野加賀)

同じなばのさと(河内)

永久三年十二月大神宮禰宜歌合祝いはみの里(未勸圖)

おもふたにかへらぬ山のさくら花誰かいふきのさとをつけしそ

清少納言  
光俊朝臣

もろ人はいはひの里にまとひしてともに千年をふへきなりけり

よみ人ふらす

いへ人に戀すきめやもかはつなくいつみのさとに年の經行けは

石河廣成

おほつかな心は月にあくかれていかていくのさとをすくらん

俊頼朝臣

駒なへていくの、おくの人里にみゆるけふりやゑるへなるらん

小侍從

卯花のさげるかきねはぬのさらすいくの、里のこちこそすれ

顯仲朝臣

いつくさのあひ亂れたるたなつものいけたの里に雲をなしつゝ

兼仲卿

そのかみの里は河瀬となりにけりこゝも池田のおなし名なれと

參議爲相卿

一條前太政大臣家歌合山家夕霞、は山の里(當陸)

つくは山葉やまのさとにたつけふりかすみもまげし春のゆふ暮

從二位家隆卿

つくは山葉やまの月のふかきよをさにはまげき鳥のこゑかな

後九條内大臣

まつ月ははつかの里のよひのまをたれあらましにころも擣らん

同

家百首歌合はつかのさと  
(未勸圖)

なにごとのゆかしければか道とほみはやみの里に急き來つらん

太宰大貳高遠卿

あさみとりかすめる雲のたえまよりこすゑそまらき花その、里

爲忠朝臣

三河國名所歌合花その、  
さと

永仁大嘗會はなかさのさ  
(近江)  
はきはらのさと(常陸)

よそなからにほふこすゑも見るはかり霞なこめそ花そののさと  
春かすみたちかくせともうくひすのなくねにまるき花そのの里  
新羅古賀  
法乃たへのゆふとりまてゝかみまつるうつきに匂ふ花かさの里  
秋ならば花にこゝろやとめまし霜にかれたるはきはらのさと

藤原道經  
盛  
前中納言俊光卿  
光俊朝臣

寛治五年八月定通卿歌合  
にまのさと(二萬備中)

ぬのさらすにまの里ともみゆるかなうの花さけるかきねに  
君か代はにまのさと人つくる田のいねのほすゑの數にまかせん

藤原季綱  
隆信朝臣

正安大嘗會

すゑとほき春のむかへのみつきものかすはこふにまの里人  
春ことにう烈げる花のかひありてさきみたれたるとこなつの里

大藏卿隆教  
左京大夫顯輔卿

家集とこなつのさと(近江常陸)

常夏のさとゝはなとかいはさらんからなてしこの咲るころにて  
ふなちにてともゆひの里に宿とればとけてねられぬ浪の音かな

祭主輔親卿  
安法法師

同ともゆひのさと(山城)  
正安大嘗會とよ岡のさと  
(豐岡備中)

時にあふ民のこゝろもやすらげき御代のはしめのとよ岡のさと  
わするなよときはの里の楨はしらつれなき中に立てしちかひを

大藏卿隆教  
後九條内大臣

家集

ほとゝきすときはの里にすむ人はいつとわきてかはつね待らん  
六五 拾糶賀

民部卿爲家  
よみ人まらす

物語

あふことのとほちの里にほとへしは君はよしのと思ふなりけん

同

謙徳公集

刊本

家集戀

千五百番歌合

堀河院百首

最勝四天王院名所障子

太宰師に下ける時とは

るのさと(未御國)

天仁大嘗會ちくらのさと

(千藏、近江)

御集宇治より京へわた

らせ給とて

秋の比法輪寺にて

承安二年閏十二月東山歌

合

寶治二年百首寄玉戀(なことのさと備中或近江)

御集山家卯花(をかほのさと)

長久二年五月イ祐子内親王名所

歌小山田里

家集なやまのさと (小山、下野或近江)

家集小醜(山城)

此歌は大和よりかへらせ給て侍りける女のもとよりと云々  
 あふことのとほちの里ははやまと河おもほぬ中にありとこそ聞ひ  
 みよし野のきき山きはにまつ月はとほちの里のかけよりそみる  
 雲かゝるとほちの里のかかり火はけふり立つとも見えぬ也けり  
 雲るとふかりの羽かせに月さえてとはたの里にころもうつなり  
 行みちをととほるの里にみそきしていまも鳥根をいてはなれぬる  
 見渡せはちくらの里にあまるまで数も知られずとるさなへかな  
 はるなれば花のみやこにかへるまにをくらのさとの霞ぬるかな  
 わかものと秋のこすゑをみつるかなをくらの里に家居せしより  
 えそ行かぬをはたの里のいもかりは板田の橋の榎もとたえて

清輔朝臣  
 野宮左大臣  
 權中納言師時卿  
 後鳥羽院御製  
 太宰大貳高遠卿  
 左京大夫顯輔卿  
 宇治入道關白  
 西行上人  
 道因法師  
 從三位賴氏卿  
 後徳大寺左大臣  
 よみ人まらす  
 俊賴朝臣  
 後久我太政大臣  
 權僧正公朝

海道宿次百首（な）かへの  
里（駿河）  
六帖題（おと）  
おとなしの里（紀伊）

家集

同なのいさと（山城）

夕日さすけしきもさひし松たてるをかへのさと（山）かけにして  
うきこと（新六）のまはし聞えぬ時やあるとき音なしの里をたつねん

こほり皆みつといふ水はとちつれば冬はいつくも音なしのさと（能）

山まろのをのゝ山邊の里とほみかりのやとりととりそかねぬる（能）

此歌は屏風にをのといふ山里に人の家のもみちおもしろきに  
女ともいであむ侍りかりする人たかす忍てきたる所をよめると

云々

五十首歌遠樹花  
題不知かすかのさと（大和）

同

越後國（懷中）

正安大嘗會かたなかのさと（片岡、近江）

川邊里（備中）

かまくらさと（相模）

御集

康平四年三月祐子内親王家歌合霞里（かすみ）のさと（武藏）

さくらさく野への春かせふかぬまにいさみにゆかんをのゝ里人  
春かすみ春日の里にう（も）なき苗なりといひしえはさしにけん（萬三）

かすみたつ春日の里の梅の花はなにとはんとわかおもはなくに（萬八）

かすみたつ春日の里のさくらはな山おろす風（わ）にありやまぬらん（萬八）

まらつるは千代ものとかに片岡の里をとことむれつゝそ居る

まろたへの浪もまつけきいろ見えてかはへの里にさけるうの花（現存六）

むかしにも立（た）こそまされ民の戸のけふりにきはふかまくらの里

十年あまり五とせまてに住なれてなほわすられぬかまくらの里

春きては花のみやこをみてもなほかすみの里にこゝろをそやる

式部	中務卿	藤原基政	大藏卿隆教	兼仲卿	よみ人	駿河丸	後鳥羽院御製	よみ人	能宣朝臣	和泉式部	民部卿	参議	爲相卿
----	-----	------	-------	-----	-----	-----	--------	-----	------	------	-----	----	-----

御集秋御歌中、かみなひのさと(大和)

かさゝきのあけてとわたる山もと仁かはきりのこる神なひの里

後九條内大臣

永久四年九月雲居寺後歌合終(かどの、里、未勘國)

海道宿次百首かけがはの里(懸河、遠江)

旅人もゆきゝも見えずなりにけりかとのゝさとの今朝の朝きり  
これもこのところならひと門毎にほすてふぬのをかけかはの里

仲實朝臣  
参議爲相卿

楚忽百首、かつまたのさと(勝磨田、遠江又は大和或美濃)

いとふなよきくかは渡る道をよきてとはんと思ふかつまたの里

同

長久二年五月庚申夜祐子親王家名所歌合勝田のさとのさなへ(かつまたの里勝磨田、大和又美濃)

苗代のみつぐみにこしけふよりはさなへとるらんかつまたの里

よみ人しらす

永久四年歌合扶桑女郎花(かほよのさと未勘國)

さき匂ふかほよの里のをみなへし誰かは見にとたつね來さらん  
あらし山雪けのそらになりぬれはかいつの里にみそれふりつゝ

藤原忠隆  
仲實朝臣

建保三年名所百首かたののさと(河内)

道わかぬ夕日のかげもみねさえてかたのゝ里はかたぞくれつゝ  
あまの河やゝ夜さむむなる風の音にかたのゝ里もころもうつなり

前大納言忠定卿  
土御門内大臣

龜山殿百首歌河邊持衣

貞應二年名所百首、かつらのさと(桂、山城)

民部卿爲家

家集

月のわのかけをは今宵見つれともことのかつらはいかて忘れん  
月をたによしみの里のあきのくれまつかせならてとふ人もなし

能宣朝臣  
俊成卿

吉水郷懸紀方御屏風

いくちよの秋かすむむき菊の花にほひをうつすよしみつのさと

皇太后宮大夫俊成卿



よし田のさと(近江)

冷泉院御時大嘗會歌、よ  
し田のさと

永久四年百首嵐(よきむ  
のさと未勸國)

同四年九月雲居寺後番歌  
合

弘安三年百首

百首の(御)歌、たつた  
の里(大和)

正治二年百首

百首歌、たかやすのさと  
(河内)

家集

建長八年百首歌合、たか  
よのさと(河内又未勸國)

御集、たまの井のさと(山  
城)

永久四年百首遊暮

題不知懷中、たびるのさ  
と未勸國)

寶治二年百首たのむの里  
(武藏)

家集たまわけのさと(未  
勸國)

長治元年五月源宗光家歌  
合旅宿時鳥

大嘗會御屏風高宮郷、(たかみやのさと高宮、近江)

むく水もよし田の里にうゑる田はかねて年得んかけそみえける

名にたてる吉田の里のいねなればつくともつきしちよの秋まで

袖かはす人もなき身をいかせんよさむの里にあらしふくなり

もろともになきあかしたるきりすよさむの里のくさの枕に

きくまゝにあらし吹そふ秋とてや夜さむの里のころもうつらん

なかめわひぬたつたの里の神無月木の葉ふみわけとふ人もなし

霧ふかきたつたの里の夕まくれこすゑをわけてかりそなくなる

雲はれぬいこまの山のいかならんふもともゆきはたかやすの里

あけぬとてひとりたつたの山のはにあり明の月はたかやすの里

さしのほるたかせの里のいたつらにかよふ人なき五月雨のころ

夕たちのひとむらすくる草の葉におくしら露のたまの井のさと

みつはよしあたりもまみよ吹すくる風さへさゆるたまの井の里

都いでたひるの里をなかわれば月はかりこそかはらさりけれ

いまこんと秋をたのむの里人もまつかひあれやはつかりのころ

家の井の玉分さとにいもをおきてこひやわたらんなかき春日を

いそけともたかまの里に旅寝して山ほとゝきすはるかにそきく

皇太后宮大夫俊成卿

能宣朝臣

神祇伯顯仲卿

仲實朝臣

式乾門院御連

慈鎮和尚

前大納言忠良卿

家長朝臣

鴨長明

衣笠内大臣

中務卿のみこ鎌倉

俊賴朝臣

よみ人しらす

源俊平朝臣

人丸

藤原兼行

家集

故郷、たかまどの里(大和)

光臺院入道二品親王家五十首里時鳥(たかまどの里)

二ノ月 七和

前大納言忠良卿家會雪歌

永久四年百首水鳥(たけの里竹田、山城)

三河國名所歌合竹屋の里、たけのやのさと(三河)

同

たのめの里(信濃)

正治二年百首、たま川の里(玉河、山城或陸奥)

建保三年名所百首

同

同

題不<sub>レ</sub>知

家集冬歌、そともの里(未勸國)

つるの里松(ばら)(未勸國)

織女に今朝ひくいともなか、れと君にそいのるたかみやのさと

あさまたきふりさけみれば白たへの雪つもれるやたかみやの里雲葉

たかまとのふるさと人はいつまでかのこりて萩のかさし折けむ

たかまとのあれたる里のほとゝきすなく夕くれを誰か志のはん

たかまとのをへの里に雪ふかし猶ふりゆかんあとをこそ思へ

心からたけたの里にふしなれていくよくひなにはかられぬらん

みとりなる色もかはらて世の常にいくよかへぬるたけのやの里

すみよしの松のたくひとおもほやそまにもよせぬ竹のやの里明玉

玉のをのおもひ絶てもあるへきにたのめの里にとしをふるかな

五月雨はうの花さかぬかきねにも浪こそかくれたまかはのさと

てつくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとむるたまかはの里

日にみかき風にみかけるひかりかなのとかにすめる玉川のさと

玉川にさらすてつくりさらに世にたのむ日かけのあはれすき行萬十四

玉河にさらすてつくりさら／＼になにそここのころこゝら悲しき

神無月雲間のやまにくもかゝるそとものさとやしくれふるらん

君か代はつるのさとなる松原のはまのまさこもかすゑらぬかな

皇太后宮大夫俊成卿

左京大夫顯輔卿

前中納言資實卿

從三位行家卿

寂蓮法師

俊賴朝臣

藤原道經

琳賢法師

二條大皇后宮肥後

前大納言忠良卿

前中納言定家卿

順徳院御製

從三位家隆卿

よみ人しらす

顯仲朝臣

祐舉

主基方御屏風丹波國イ  
月よみのさとイ近江  
みの、國月よしの里

くもりなきとよのあかりに空はれてひかりをそふる月よみの里  
やみならはねぬへきものをたのめぬも人にまたる、月よしの里

藤原茂明朝臣  
元 輔

題不知つの、里石見  
同ならのさと奈良、大  
和

夏草のおもひしなへてなげくらんつの、さとみんなひけこの山  
わかやとの萩さきにけり散らぬまにはやきてみませならの里人  
いとけなきわか子をならの里におきてこよひの月に面影にたつ

同 基 俊

正安大嘗會、なかつたのさ  
と近江又出雲  
家集里の秋と云事を

雨露もめくみあまねき時にあひてなかつたの里にさなへどるなり  
や、さむくなるをの里の秋風になみかけころもうたぬ日はなし

兼 仲 卿  
民部卿為家

光臺院入道二親王家五十七首里時鳥、長居里未勸國

鳴すて、急きなすぎそほと、きすなか井の里の名をそたのまん  
まひてとふ人はありとも戀すてふなとりの里をそことまらすな

法 印 覺 寛

寄里戀、なとりの里陸奥  
廿六人歌合なるみの里  
尾張

むかしにもあらすなるみの里にきてみやこ戀しき旅ねをそする  
神無月やまのけしきはつれなくてまくれふりくるむらくもの里

法 印 靜 賢

丹波村雲の里懐中

おほつかなとなりもみえすなりにけりかすみへたつる村雲の里  
七そちにむかふの里のふるよもきうた、朽ねとなれるさまかな

祐 舉

長治元年五月源廣綱朝臣家歌合霞隔山家

おほつかなとなりもみえすなりにけりかすみへたつる村雲の里  
七そちにむかふの里のふるよもきうた、朽ねとなれるさまかな

ふみ人しらす

むかふの里無河有、未勸  
國現存六  
題不知うちはの里打  
大和

ころもてをうちはの里にある我をまらすて人はまてとこすけり  
手にならすおなしうちはの里人はなつのなかはの月やみるらん

信 實 朝 臣  
笠 女 郎

弘長元年百首夏月

手にならすおなしうちはの里人はなつのなかはの月やみるらん

後九條内大臣

願不知懷中、(うりふの里若狭又山城)

正治元年百首出家

家集、のかみのさと(美濃)

同一字抄

正安大嘗會國々名所歌、(の山のさと野山、備中)

三百首歌、のさかのさと(肥後)

正治二年百首、おぼろの里(山城)

家集、なき原の里(三河)

百首歌、おくの里(みよしの、大和)

正治二年百首、おぼはらのさと(大原、山城)

同

同

家集寂然法師すみむる大原へ遣ける

九月十三夜十首歌里月、(おきゐの里陸奥)

光善院入道二品親王家五十首持衣幽

祝歌中興鏡、(おほいそのさと未勘國)

家集おほくらのさと(近江)

小大君集

雲のたつうりふの里のをみなへしくちなし色にいひそわつらふ

浪のおとに宇治のさと人よるさへやねてもあやうき夢のうき橋

なつなかと霞のひまに見えつるはのかみの里のはるのこすゑか

いかにしてのかみの里を過ゆかん夜ふかくせきに雪ふりにけり

あかすこそ秋の野やまの里人はくもりなきよのつきをみるらめ

夜半にふく河風さむみあしきたの野さかの里はころもうつなり

まれにこしおほろの里に佃馴ておいはしみつの爰るしなりけり

風ふかぬうらみやすらんうしろめたのとかにおもへ萩原のさと

みよしの、おくの里人いかゝするみやこもふかき雪のおしたに

見わたせは軒の玄のふにたるひしてふゝきにこもる大原のさと

あさゆふのけふりは庭をあるしにてひととはおとせぬ大原のさと

あきの日にみやこをいそぐ玄つめか歸るほとなき大原のさと

水のおとはまくらにおつる心ちしてねさめかちなる大原のさと

明玉よもすからたもとにはらふ白露のおきゐの里につきをみるかな

賤の女か月におきゐの里とはみおひかせゑるくころもうつなり

はこへともつきせさりけり貢物おほいその里のみちのまもなく

君か代をまらしもゑるくおほくらの里のなちを見るか樂しさ

よみ人しらす

前中納言定家卿

刑部卿範兼卿

權僧正永縁

大藏卿隆教

中務卿みこ鎌倉

宜秋門院丹後

實方朝臣

殷富門院大輔

源師光

小侍從

前中納言定家卿

西行上人

第三のみこ

藤原孝經

維衡卿

兼盛

名所歌龜鏡、くらぶのさと近江

家集くろつのとさと(黒津、近江)

題不知懷中(くるまの里上野)

長治元年五月源朝綱朝臣

家歌合 主基方御屏風、くらかき

保延元年八月宗成朝家歌

合くきのとさと(未翻國) 水郷冬望、くさかりの里

海道宿次百首くろた、く

ろたのとさと(尾張) 文應七年毎日一首中、や

のい里(未翻國) 六帖題、やはきの里(三

河) 保安二年内大臣家歌合、

山なしの里(下總) 山なしの里を 明王

冬歌申人家、山しなの里

(山科、山階、山城) 御集夏歌、山たのとさと(山

城) 家集名所歌よみける中

戀歌中歌林、やせの里(山

城) 天仁大嘗會、やすらのさと(安良、近江)

何事もならひなくのみみゆるかなくらぶの里にいかいふへき

つかなみの上によるくたひねして黒津の里になれにけるかな

みやこよりかへりくるまの里人はひとねかはをは渡らさらなん

春かすみ八重たちぬればたつねゆく道もわかれすくらはしの里

くらかきの里に波よる秋の田はとしなかひこの稻にそありける

月かけをあなしのなみに夢さめてあけぬとや思ふくきのさと人

萬代 河の入江のあしは霜かれてさひしくなりぬくさかりのさと

をちこちも今はたみえすうはたまのくろたの里のゆふやみの空

あつさ弓はるといふよりひきかへてはやくそいはふやの、里人

あつさ弓やはきの里のかはさくら花にのみいるわかこゝろかな

月かけをまつもをしむもくるしきになららん山なしの里

外よりもひかりひさしくさやけきは月のかくる、山なしのさと

冬のくるいはたの里のこからしには、そまくる、山しなのさと

ほと、きすまのはぬ聲をきくよかや山田の里にさなへむるらん

なはしろのみつを心にまかすれば山田のさととはたねまきにけり

日にそへてすかたそ影になりにけりやせの里なる妹をこふとて

やすみしるわか大君の御代にこそいとやすらの里もとみけれ

實 源 俊 重

よみ人志らす

同

前中納言匡房卿

藤原忠兼

仲原師光朝臣

參議爲相卿

民部卿爲家

同

源雅光

津守國基

惟宗行政

堀河右大臣

六條院宣旨

印禪法師

左京大夫顯輔卿

家集

やきての里(伊勢)

からひとのねかふ心にあふみなるやすらの里のやすらけきかな  
うちすくる人もけふりになれよとやもしほやきてのさとの松風

祭主 輔親 卿  
證心 法師

此歌鴨長明が伊勢記云伊勢へ下けるにやきてのさとくもつの

濱などすぐるほどにやゝきりはれゆき伊勢の海のおきのゑら

す濱の松原ほのくあらはれわたるをみればゑはかまかすも

ゑらす打ちりて繪にかけるごとくなるをよめると云々

題不知懷中、(ますたの里近江)

年ことにますたの里のいねなればつくともつきしちよの秋まで

よみ人しらす

まきの里(山城)

名にしおはゝいさやねとめんまきの里戀來る人もありと云なり

爲頼朝臣

題不知懷中、まつかぜのさと(尾張)

松風の里にむれゐるまなつるはちとせかさぬるこゝちこそすれ

よみ人しらす

同けぶりの里(丹波)

戀しきをおもひのかるとせしかともいと煙のさとにこそふれ

同

同まきの里(山城)

布さらすまきのさとゝもみゆる哉卵のはなさけるかきねゝは

同

まつむらのさと(未勘國)

春秋はおほくつもれ〇年をへてときはにみゆるまつはらのさと

同

祝歌中、まつはらの里

君かためひときにちよをちきりつゝゆくすゑとほき松原のさと

二條太皇大宮肥後

建久五年左大將家歌合

雪をれの竹のした道あともなしあれにしのちのふかくさのさと

前中納言定家卿

(深草の里雪)

あれまくに誰ほりうゑてくれ竹のふしみの里はよにふりにけん

民部卿爲家

寶治二年百首里竹、(ふしみの里)

一夜ふすふしみの里の岡邊なるわさ田もかりにゑかそなくなる

後久我太政大臣

同

鹿のねにねさめの秋とまつ〇の風ふしみのさとにつきやちきりし

俊成卿女

同

家集

秋歌中

家集

同ふたみの里（播磨又伊勢）

かたたく野風をさむみかりにきてふしみの里のいねかての露

大藏卿有家

野邊夏林ことに折ヒこそ盡ツせをみなへしふしみの里はむくらはふまで

相模

あしかきにはつれて見えし妹ゆゑにいとふしみの里を戀しき

智經法師

ふしみすき岡（カ）の屋（ウチ）になほとまらし日野までゆきてこま心（ココロ）み

西行上人

玉（タマ）くしけふたみの里（桑門）のうの花をありあけのつきとおもひける哉

戒秀法師

時（トキ）ならてまたもさくららの花さかり春をふたみといふへかりけり

鴨長明

此歌伊勢記云九月ばかり二見の里に侍けるにある人のもとよりさかりにさける櫻を一枝おこせたりければつかはしたりけ

ると云々

同

心せんひとつみのりのすゑまでもふたみの里はひとへたてけり

此歌同記云二見に侍けるにちかきあたりに如法經の十種供養

とて人々あつまるときと折（ヒ）もさるべきにこそと思て聽聞

すべきよしへどかの願主（ねがひぬし）に侍にやあらんあるべきことにも

あらずとも（な）ではなるよしをきゝてよめると云々

峯（ミネ）たかきあらしの山のもみちはふもとの里のにしきとそみる

前中納言師時卿

ちりまかふあらしの山の紅葉（もみぢ）はふもとの里の秋（あき）にそありける

藤原祐家卿

むら雲（クモ）のささゆくまゝに（な）あらしやまふもとのさとは霰（あられ）ふるなり

藤原祐家卿

堀河院御時百首、ふもとのさと（あらしやま）  
永承四年十一月内裏歌合  
紅葉  
弘長四年毎日百首中

里（さの）中道（ふなばし）の  
里武藏（武蔵）の野（野）  
題不（し）知（藤原の里大和）

仁安三年奈長歌合鹿

百首歌忍尋（緑戀）（ふせ）  
の里信濃（信濃）

正治二年百首御歌、ふる  
野の里（大和）

千五百番歌合

寛和二年殿上歌合にふる  
の山里（大和）

寶治二年百首里竹（ふたむらのさと）尾張

正安大嘗會、ふるいちの  
里（近江）

家集宇治にてよめるい、  
（ふけのさと山城）

千五百番歌合、こはたの  
さと（山城）

弘長百首紅葉、このはの  
里越中

天喜元年八月頼家朝臣家越中國名所歌合、木葉里

同

正治二年百首、こまつの  
里（未勘國）

こまの、里（狛野、山城）

いとひするさの、中道（中道）くさ葉（葉）よりわれこひわたるふなはしの里  
ふち原（原）のふりにしさと（秋）はきはさきてちりにき君（君）にちかひて  
みかさ山（山）かみのちかひにたつしかのこゑかすかなる藤原のさと  
ちらすなよそのはらからを尋てもふせやといはん里（里）のゑるへを  
さてもなほいつかはるへき日かすのみふるの、里（里）の五月雨（五月雨）の空（空）

とはさらん人もうらみしあとたえてふるの、里（里）の雪（雪）のふかさに  
はつ（新千冬）くくれふるの山（山）さといかならんすむ人さへや袖（袖）のひつらん（ひつらん）

たか代（代）よりうゑて此名をと、めけんそのふの竹（竹）のふたむらの里  
ふるいちの名にあらはる、里（里）なればひさしくかゝるいけ（池）の藤浪（藤浪）

秋（秋）かせのふけのさと人おとすやと我もこゝろにかゝるかはなみ  
かち人（人）のみちをそおもふやまゑなのこはたの里（里）のおきの夕（夕）きり（夕きり）

色（色）そむる木の葉（葉）の里（里）のからにしきあらくなたちそすかの山かせ

吹（吹）き來（來）なる風の音（音）こそさひしけれ木の葉（葉）の里（里）のあきのゆふくれ

秋（秋）ふかみ嵐（嵐）にそひて去くるれば木のはのさとそさひしかりける

ふた千代（千代）をかさねてゆつれ君をいのる小松（小松）の里（里）の鶴（鶴）の毛（毛）ころも

山（山）ちかみあさたつ雲（雲）と見えつるはこまの、里（里）のけふりなりけり

祐 舉  
よみ人しらす

同

寂 蓮 法 師

喜多院入道二品のみこ

俊 成 卿 女

好 忠

冷泉太政大臣

兼 仲 卿

祐子内親王家紀伊

後京極攝政

九條内大臣

よみ人あらす

同

喜多院入道二品のみこ

前大納言公任卿

後京極攝政  
行



延久歌合、衣ての里(再城)

家集

光善院入道二品親王家五十首里時島

(家集ころもの里(陸奥))

爲忠朝臣家三河國名所詠合、衣里

同

重家卿五首詠合月、このさと

十題百首御歌、ふびすのさと(陸奥)

(大和) 題不知、あすかのさと

建長七年顯朝卿の家の千首故郷霞

久安五年七月山路歌合花

文永二年七月(白河)百首(あかし)のさと(攝津)

最勝(四天王)院名所御障子

千五百番歌合、あしやのさと(攝津)

此歌春日よりかへり侍けるに山つらにけぶりの立けるを(下)ばこまの、里といひければよめると云々

夕されはみねの松風おとつれてもみち散り去くころもてのさと  
かたしきのとこのはつ霜色にいて、よなくさゆる衣手のさと  
いまでも又なみたやさそふほと、きすわかころも手の里に鳴なり  
わきもこかころもの里の梅の花さそくれなるいろにさくらん  
いまよりのかすみもさこそたちぬらめ衣のさとに春しきぬれば  
夜をかさねみやま立出てほと、きす衣のさとにきつ、なくなり  
春すきて夏のひとへになりなからころもの里は名こそかはらね  
月かけにうつもれぬとや思ふらん雪にならへるこしのさとひと  
わか思ふ人たにすまはみちの野のえひすの里のうときものかは  
飛鳥のあすかの里をおきていなは君かあたりはみえずかも有ん  
とふ鳥のゆくすゑみえぬあすか、はさとの名こめてたつ霞かな  
飛鳥のあすかのさとのさくら花そらにそあそふかせにみたれて  
浦人のおのかものとなかなむらんあかしのさとのよはの月かけ  
あかしかたいたさをちこちもまら露のをかへの里のなみの月かけ  
浦ちかきあしやの里に日はくれて浪路のきりにあまのいさり火

よみ人しらす  
正三位知家卿  
西園寺入道太政大臣  
中納言定家  
應司院按察  
平兼盛  
意尊法師  
從三位賴政卿  
後京極攝政  
元明天皇御製  
從二位行家卿  
隆縁法師  
從二位良教卿  
前中納言定家卿  
前大納言忠良卿

中納言定家  
兼盛  
意尊法師

貞應三年百首

最勝四天王院名所御障子

同

同

みるめ

三河國名所歌合(あしやの里)

同

建長六年(毎日)一首中

題不知懷中、(あはでのさと尾張)

家集(あむらの里)上初

家集(あさくらの里)但馬

家集(あさくらの里)但馬

あなやきのさと(未勸國)

永仁大嘗會、あさはらの

家集秋風、(あきつの里)大和或紀伊

元永二年十月内大臣家

あひつの里(陸奥)

山とはきゆふつけ鳥もあけぬとてあしやの里にふねいそくなり

くれぬとはつけの小櫛をさすとも蘆屋の里にほたるとふなり

ゆふされは秋やはまつをふく風に軒うちそよくあしのやのさと

あしの葉の霜かれはてし里の名をかすみにむる空のあけほの

あしのやの里のいりえによる草のみるめにうきて行ほたるかな

まものつるおきぬてすたく聲すなりさえ行よはあしのやの里

むれたけるかきねの木葉霜かれてかくれかまなしあしの屋の里

夜の内のゆふつけ鳥も關こえてあけてあはつのとにきにけり

日くるればあはての里のわらはへのゆふとゝろきか物も聞えず

鹿のねに草のいほりも露けてなみたなかるゝあとむらのさと

としてみて蟹のすむらんあさくらの里の若めもいかてわれみん

いつしかとあさ日に里を立出ていそきもはらふみつきものかな

木からしの風はふけとも散らすしてあをやきの里常磐なるらん

早苗とるたこのひまなみ五月雨のふるも時えるあさはらのさと

みな月のころも見えぬ草葉かなあきつの里のみちのつゆけさ

見わたせはきりへの山もかすみつゝ秋つのは春めきにけり

かひなしや尋ね來たれとみちの野の會津の里も名のみなりけり

民部卿 爲家

大藏卿 有家

參議 雅經卿

俊成卿 女

後九條内大臣

爲忠朝臣

琳賢法師

民部卿 爲家

よみ人あらす

相模

顯綱朝臣

左京大夫顯輔卿

よみ人あらす

前中納言俊光卿

法印 定圓

よみ人あらす

藤原定國

あくた火の里

南北百首歌合、あをばか  
の里（番イ）  
家集さくら井の里（櫻井、山城或攝津）

同

家集名所歌

弘長四年（毎日）一首中

建保三年名所百首（史料の里、信濃）

時鳥歌中、（きななの里脈猶大和）

七百首歌、きなれのさと（大和）

御集（て）

建長五年毎日一首中、  
（きくか）の里遠江  
題不知、（ゆき）見の  
里山城、未翻國

百首戀歌

永久四年百首春日祭、  
かさのさと（み）

あつまへ下りけるに（みつけの里）

えたもえによをのみつくす人ならて誰かふすふるあくた火の里

一夜みし人のなさけは立かへりこゝろにやとるあをばかのさと

こせりつむさはのこほりのひまたえてはるめきをむる櫻井の里

秋風のふくにちりかふもみちは花とほおもふさくら井のさと

さくら井の里にて春のはなをみて秋はかつらのつきをなかめん

花をみし春のにしきのなこりとして木葉いろつくさくら井のさと

はるかなる月のみやこに契ありてあきのよあかすさらしなの里

やなきをはすて山のあきのそら月そすみけるさらしなのさと

なきおくれうちせ山のほととぎすきなほの里の松のたえまに

からころもきなれの里にうちそめぬま松風や夜さむなるらん

から衣きなれのさとに君をおきてま松のきのまてはくるしも

神無月またうつろはぬきくかはにさとをはかれす秋そのこれる

立わかれゆきみの里にいもを置てころ空なりつちはふめとも

なきすて、ゆくみのさとと郭公ころそらなりあかぬ名こりに

妹かいへにゆくみの里の道遠みいそきなからもゆかぬよそなき

こまなへてみかさの里へ行人はあめの下いのるつかひなりけり

誰か來てみつけの里と聞からにいとたひねのそらおそろしき

祐 懋 鎮 和 尙 擧

西 行 上 人

實 方 朝 臣

權 中 納 言 長 方

民 部 卿 爲 家

前 中 納 言 定 家 卿

正 二 位 家 衡 卿

俊 賴 朝 臣

權 僧 正 公 朝

鎌 倉 右 大 臣

民 部 卿 爲 家

よ み 人 三 郎 三 郎

從 二 位 行 家 卿

正 三 位 知 家 卿

源 兼 昌

安 嘉 門 院 四 條

此歌は路次記云こよひとほつあふみ見つけのごうといふ所に

とどまりてさとあれて物おそろし水の江ありと云々

家集、みのふのさと(甲斐)

みづらの里(相模)

みれの、里

建保四年内裏十首歌合みよしの、里(大和又武藏)

雨しのくすくるみのふの里のかけ柴にすたちほしむるうくひすのこゑ

我萬代こゝろとはつあふみの濱名よりみづらの里のいもかりそゆく

たれかいまおもひおこさんあつまちやみねの、里の夕暮のそら

すみなるゝときは夏みのかはよとに山かけすゝしみよしの、里

行古來歌すゑはたのむのかりの玉つさをわすれかたみにみよしの、里

ひきうゑしさとはみなせの庭の松ぬしなきいほに春やねぬらん

さゝなみや志賀の浦かせふきこしてよさむなるらしみつすの里人

みわのさとの花のさかりはいそのかみふるの、末すにかゝる白雲

ありあけの月のひかりも鳥のねもえやはまのふのさとの秋かせ

いはぬまは人こそまらねみちのくの忍ふの里にまめはゆひてき

いたつらに露やおくらん人まれす忍ふのさとおくのさゝはら

はりまなるまかまの里にほすあゐのいつかおもひの色に出へき

はつ時雨まかまの里のうす紅葉なとあなかりにわきてそむらん

山かつのすみぬとみゆるわたりかな冬にあせゆくまつはらの里

家集、まつはらの里(山城)

安井、まかまの里(飜磨、播磨)

寶治二年百首

後九條内大臣家會秋曉

建仁二年五十首三つの里

(三輪、大和又丹波)

遠所十首歌合山家(みな

せの里山城或は攝津)

家集

西行上人

源仲正

祝部成

西園寺入道太政大臣

正三位知家卿

後鳥羽院御製

右兵衛督惟方

慈鎮和尚

從三位家隆卿

八條院高倉

兵部卿隆親

衣笠内大臣

家長朝臣

西行上人

利義

同去ほのやの里

題不知、(まのだの里和泉)

まほやのさと(下野)

ふみつの里(播磨又信濃)

正治二年百首まがらきのさと

家集

南北百首歌合まらかはのさと(山城又陸奥)

六百番歌合怨戀(志賀の里志賀)

家集百首まじまの里

永保元年大嘗會主基方御屏風(ひおきの里(丹波又備中))

六帖題、ひもの、里(檜物(遠江))

家集、もろこしの里(駿河)

せたの里(近江)

御集大原せれふ里と云所にて

霞さへたえぬけふりにたちそひてはれまもみえぬまほのやの里

いづみなる高師の濱の浪しあればまのたの里もあらはれにけり

ことゝはんまほやの里にすむ思ふやともわかことからきものや思ふよと

おりたちてまみつの里にすみぬれば夏をはほかにき、渡るかな

夏來ればふせやか下にやすらひてまみつの里にすみつきぬへし

また柴のかれ行ほとにふりぬればつまきこりつむまがらきの里

春あさみすまのまかきに風さえてまた雪きえぬまがらきのさと

花はまたしこゝろはそらにあさみとりはるめくころの白川の里

浪をよるさても見るめはなきものをうらみなれたるまかの里人

櫻さくゑしまの里をむらゝにいろとるものはかすみなりけり

新六(み)あふみなるひもの、里のかはさくら花をはわきてをる人もなし

東路のもろこしの里におりてたつきぬをやからの衣といふらん

せたの里はしのうまふみ朽めおほみそこのなみたも面影にたつ

よをそむくかとはまたり大原やせれふの里のくさのいほりに

大原やせれふのさとの月はみついつかわが身もすむへかるらん

二條太皇太后宮肥後

ふみ人まらす

中務卿親玉

二條太皇太后宮肥後

二條院大進

正三位經家卿

西行上人

慈鎮和尚

後京極攝政

源仲正

前中納言匡房卿

光俊朝臣

人丸

俊頼朝臣

後徳大寺左大臣

權中納言實家卿

0 0

久安百首

せきやの里

此歌は大原にせれふといふ所にまかりてある聖人にあひて侍けるにいまはみやこへかへらんとするに月のあかく侍りしに何となく心すみておぼえしによめると云々

大原やせれふの里のけふりをはまたきかすみのたつかとそみる

いほさきのすみた河原に日は暮ぬせきやの里にやとやからまし

此歌は家集に云康元元年九月鹿島社に詣でけるにすみだ河のわたりにて此わたりのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬればせきやのさと、申まへには海ふねもおほくと

まりたりと云々

光臺院入道二品親王家五十首竹霜、(すゑをの里未勘國)

五百六十番歌合

題不知すがはらの里

山とりのすゑをの里もふしわひぬ竹の葉たたりなきよのしも  
つくはねのすそわの里のゆふ煙このもかものすまゐをそしる  
おきつうみ水底ふかく思ひつゝもひきならまゝすかはらのさと

從二位家隆卿  
覺盛法師  
よみ人志らす

村

永保元年大嘗會いつみのむらの人の家に菊花さかりなり、(いづみの村丹波)

正安大嘗會、石倉のむら  
(備中)

永承大嘗會、いはねのむ  
(近江)

正安大嘗會、にしきへの  
(錦部、近江)

永保元年大嘗會、はるべ  
(丹波)

永仁大嘗會ちえだのむら  
(丹波)

承保元年大嘗會、基方御屏風、かみたのむら(未勘國)

よしみのむら(未勘國)

天仁元年大嘗會、悠記方御  
屏風、よしたのむら、(近江)

永保元年大嘗會、五月雨、  
たかのむら、(近江)

たか田のむら 人々

永仁大嘗會、名所たなかの  
むら、(田中、近江)

たてりのむら(立入、近  
江)

天仁大嘗會、(ながらのむ  
ら、近江、又丹波)

名所歌中に禁衣、(たまむ  
ら、玉村、近江)

家集、ながたのむら(長  
田、丹波)

白菊のいつみのむらにすむ人はくろかみなからとしをこそふれ  
うたふらしよを治まれといはくらの村のもろ人もろこそにして  
(萬代)

わか君につかへまつらん苦ふかきいはねの村のよろつ代までに  
色々の木々のもみちをみわたせはたれ織かくるにしきへのさと  
(里)

けふりたつはるへの村はいにしへの難波のみつの氣色こそすれ  
玉葉賀  
うすくこく千枝にさける藤なみのさかりもひさしよろつ代の春

千はやふる神田の村のいねなれば月日とゝもにひさしかるへし  
君か代はよしみの村のたみもみな春をまつとやいそきたつらん

時雨せぬよしたの村のあきをさめかりほす稻のはかりなきかな  
わか君のちよのかすかも五月雨のたかのゝむらの軒のたまみつ

天の下かくこそはみめかへはらやたか田の村は得ぬとしそなき  
皇のちひほのあきのはしめにはたなかのいねのわさほをそつむ

うつろはてたてりの村のしらきくはさていく秋の露まかへん  
はるゝと年もはるかに見ゆる哉なからの村のなかひこのいね

うつろはて庭おもしろきはつ霜におなしいろなるたまむらの菊  
まつかなるなかたの村にすむ人のかりつむ稻のはかりなきかな

前中納言匡房卿

大藏卿隆教

資業卿

兼仲卿

前中納言匡房卿

前中納言俊光卿

前中納言匡房卿

前中納言匡房卿

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言匡房卿

同

同

前中納言俊光卿

同

藤原正家朝臣

藤原正家朝臣

藤原正家朝臣

藤原正家朝臣

同

家集、うしかひの村(伊賀)

正安大嘗會八重村(備中)

家集、やすらのむら(安  
真、近江)

天仁元年大嘗會、まきの  
むら(真木、近江)

爲忠朝臣三河國名所歌、  
(藤野村三河)

同

中務卿親王家九山和歌、  
ふしみのむら

柿本影供百首、ふるえの  
村(駿河)

いなり松みにとてゆけはおそろしく草かひまさるうしかひの村

八重村にさけるやまふき幾とせかあかぬにはひの色をかさねん

さなへとるやすらのむらの五月雨に天かえたこそ賑はひにけれ

まきの村つらくつはきつらくに思へはひさし君か八千代は

むらさきの糸くりかくと見えつるは藤の、むらの花さがりかも

さしなくてふちの、むらの藤浪は松の木すゑにかゝるなりけり

見わたせはふしみのむらのゆふ霞たか歸るさのみちまよふらん

五月雨はふるえの村のとまやかたのきまてかゝるたこのうら波

此歌は萬葉集十七家持卿天平九年九月廿六日思放逸鷹夢見

感悦作長歌に「つなしとる、ひみのえすきて、たこのえま、とひ

たもとほり、あしかもの、すたくふるえに、おとつひも、」云々

同右射水郡古江村取獲蒼鷹形容美麗鷲秀群也云々(此心歎)

花なみのくるすもいかになりぬらんこもしの村にみゆるさ、栗

神まつる花の時にやなりぬらんありまのむらにかくるまらゆふ

紀伊國やありまの村にます神のたむくる花はちらしとおもふ

春風に木すゑさきゆく紀の國やありまのむらにかみまつりせよ

君か代は民のこゝろのひとかたになひきてみゆるあをやきの村

祐 擧

大藏卿隆教

前中納言匡房卿

同

藤原宗國

藤原道經

源基長朝臣

法師定圓

法

祐

光俊朝臣

祐

大炊御門右大臣

ふみ人

右京大夫顯輔卿

右京大夫顯輔卿



永徳元年大嘗會主基方御屏風、さかひの村(丹波)

正安大嘗會、さかひのむら

(備申) 題不知、ゆづはのむら(湯郡盤、伊勢)

光明峯寺入道攝政家百首

(遠村紅葉) 文永二年七月白河殿七百首(名所村)

永保元年大嘗會木綿園村

(近江) 題まらず

八角しる我すへらさきの御代にこそさかひのむらの水もすみけれ

色ことにそむるもみちの木々の村まくれけりとは今そまらるゝ

河上のゆつはの村にくさむさすつねにもかもなとこをとめにて

かは上のゆつはのむらのうす紅葉また草かけてつゆやおくらん

いせちゆく人や宿らん河かみのゆつはのむらも日はくれにけり

をちこちの卯花月夜あかければひるとそみゆるゆふそのゝむら

かやり火のけふりたつなり里とほみゆつはの村に日は暮にけり

前中納言匡房卿

大藏卿隆教

よみ人不知

從二位家隆卿

光俊朝臣

前中納言匡房卿

源仲遠

市

六百番歌合寄商人戀

家集或所の屏風市ひめのかたなどかける所

十題百首三輪の市(大和)

百首歌市時鳥

六百番歌合寄商人

たちくらすいちめもさこそなけくらめ心をかへて思ひまかな

市ひめの神のい垣のいかなれやあきなひものに千代をつむらん

大和なる三輪の市路に急きてもいつまて世にはふるのやまこえ

さゝわかむさとすみてなげ時鳥すきゆく三輪のいちとよむなり

尋ねはやほのかに三輪の市にいて、命にかふるまらしありやと

此歌左方申云かふるまらし如何判者俊成卿云ほのかに三輪の

三位經家卿

爲頼朝臣

寂蓮法師

從二位家隆卿

隆信朝臣

長歌かるの市(大和)

市はいのちにかふるぞにはなるやうに侍れど三々の市にまゐる  
しありやなどいへらんゆゑなきにはあらずと云々  
萬二  
やまといてみし、かるのいちに、わかたちきけは、玉たすき、  
うねひの山に、なく鳥の、

丸

文永四年七月白河殿七百首市商客、たつ田の市(大和)

御集十首御歌寄市戀

建保三年名所百首

同

同

同

家集

まろしらす人はたつたの市なればたれをたれとかわきて頼まん  
つれもなき名のみたつたの市もあらは心をかへて思ひまれかし  
玉ほこやおほくの民のたつの市にくるれば歸るかすもみえけり  
いたつらにけふも暮なはたつの市日數經ぬへきみやこひとかな  
辰の市や行かふひともしくれば行はうるまのまみつかけもとゝめす  
たつの市にうるまの清水をこそみてひとの心のくまものこらす  
たつの市うるまの清水すゝしくてけふはかひある心ちこそすれ

此歌は右のむまのかみの八條の家にていづみ夏のともたりと  
いへることをよめると云々

同  
建保三年名所百首(まか  
まの市掃麿)  
最勝四天王院御障子

時しあればたつの市路のいちまろくさけとも花をうる時そなき  
君か代はまかまのいちにおくかちの千年をへても色やまさらん  
秋くれはまかまのいちにほすかちのふかきいろなる風の音かな

正三位知家卿  
從三位範宗卿  
如願法師

參議忠繼卿

後鳥羽院御製

順徳院御製

正三位行家卿

正三位知家卿

藤原康光

俊賴朝臣

題不知(さかみの市、相模) あべの市(阿部、駿河)

萬代のさらすこれやさかみの市ならんさゝわけ衣ぬきもかへはや  
萬三のやきつ(を)わか行しかは駿河なるあへの市路にあひしこらかも

四條太皇太后宮下野  
よみ人不知

驛

驛

六二 あつまちのうまやうまやと數へつゝあふみの近くなるか嬉しき

よみ人不知

とりつなくうまやくと思ふまにゆけとつきせぬみちのなが濱

太宰大貳高遠卿

新六二 たひ枕いくたひゆめのたえぬらんおもひあかしのうまやくと

前中納言定家卿

みちほそき關の驛のすゝかやまふりはへすくるともよはふなり

民部卿爲家

六三 松原はそこともみえすはりまちのかこのうまやは霧ふかくして

前大納言顯朝

君はかりおほゆる物はなし原のむまやいてこんたくひなきかな

よみ人不知

時鳥きこゆることもなしはらのうまやうまやとまちあかしつる

藤原資隆朝臣

こし方はそむるまくれもなしはらのうまやあるてふ山の紅葉は

正三位 知家

百首歌あかしのうまや (播磨)  
六帖題せきのうまや (伊勢)  
建保七年家千首驛霧(かこの馬や)

承安三年經正朝臣家歌合  
時鳥  
建長三十年十首歌合行路紅葉

庭

家集建長四年毎日一首中

秋のよのあめにまされるおとすなり木のしたかけの庭の瀧つせ

民部卿爲家

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

同五年每日一首

百首御歌

同

同宴遊

六帖題

同

後法性寺入道關白家百首

二夜百首榮中

六帖題かざし

天仁四年師時卿家歌合花玉の庭

堀河院御時百首

たはふれ歌てよみたる  
中に

題不<sub>レ</sub>知

建長七年顯朝卿家千首

六帖題

眞應二年當座百首出家庭革

關カいる、やましカたみつカのともすれはとたえかちなる庭の瀧つせ

みむろやまの冬のやまもとかみさひて庭の木の葉にみねの松風

すみよしの庭の木すゑも霜かれて冬こそまつカのいろはありけれ

庭の松のことしよふなる風の音にうち合せてもとるひやゆし哉

宿カめてかひこそなけれこけの上にはつくりせぬ山の岩かと

春はまつ袖をつらねしむらさきの庭そたちむにいまもわすれぬ

むらさきの庭の雪にはみなまろしみなまろたへのみよしの、山

むらさきの庭のはるかせ長閑にて花にかすめるくものうへかな

藤さくらかさしつゝくるもろ人の袖をつらぬるこゝのへのには

うの花のまらゝにさけは山賤のかきねもたまのにはカとなるらん

柴の庵のはひりのはにはカ蚊火のけふりうるさきな夕暮

我もさそ庭のまさこの土あそびさておひ立るみにこそありけれ

萬十四  
にはたつあさて小衾今宵たにつまよしこせねあさてこふすま

庭にたつあさてか袖もなほさえぬ春はきたれとゆきのけなくに

なかめのみたゝつれゝの庭たつみよにふりはてゝ行方もなし

とふ人はあるしとてたにこぬ山のかけちの庭にさくすみれかな

同 慈 鎮 和 尙

同

同

信 實 朝 臣

民 部 卿 爲 家

皇 太 后 宮 太 夫 俊 成 卿

後 京 極 攝 政

前 中 納 言 爲 兼 卿

仲 實 朝 臣

顯 仲 卿

西 行 上 人

よ み 人 し ら す

光 俊 朝 臣

民 部 卿 爲 家

同

同

刊本

建保三年名所百首

同

文永九年毎日一首中

樞

春はこよひ<sup>よひ</sup>はのとはそにかへる山あさけの庭に誰をまたまし  
はつせ山まつ<sup>まつ</sup>の戸ほそのあけかたにそよふきそむる秋のはつ<sup>はつ</sup>風  
夕顔<sup>ゆがな</sup>のみさへむなしきとほるこそさしてうき世の事もゑらるれ

僧 正 行 意

正 三 位 忠 定 卿

民 部 卿 爲 家

床

久安音首

家集

家集旅歌中

六帖題

同

よるひとりなり

山かつのすかきのとこのゑたさえて冬來にけりとゑらせ顔なる  
かけにそふむくらの床のひとりねも月より外<sup>ほか</sup>のなくさめそなき  
草むすふ床たにある、夕くれのあらしのそこにこよひたにねん  
すみ染の袖をつらぬるなかとこは時まつとてもあたにやはある  
あはれわかあなうらむすふ床の上<sup>うへ</sup>に待いつる月の影の長閑けき  
さりとはさもあらましの床中にひさをいたきて幾代あかしつ

上 西 門 院 兵 衛

選 子 内 親 王 家 大 輔

大 納 言 通 具 卿

光 俊 朝 臣

同

信 實 朝 臣

棟

家集徴をよめる  
同、山里落葉

あれはてゝむねもくもらぬやとなれは徴ならてはもる人もなし  
あれはてゝむねまはらなる山里はちる紅葉はをとこにこそまけ

俊頼朝臣  
同

窓

題不知

萬十一  
窓ことに月さし入てあしひきのあらしふく夜はきみをしそ思ふ

よみ人しらす

養在深窓一人未識

からくしけあけてしみれは窓深きたまのひかりをしる人そなき

太宰大貳高遠朝臣

最勝四天王院名所御障子

はつせ山よのうきものはすみぬへしすきのまとふく雪のした風

後鳥羽院御製

十題百首御歌

月きよみまくれぬ夜半の寢覺にもまとうつものはにはの松かせ

後京極攝政

百首の御歌

月させとおろさぬまとの夕かせにのきはの梅はほころひにけり

小侍從

建長八年百首御合

月の夜のこゑをほそめに窓あけてこゝろをやれる歌なかめかな

信實朝臣

六帖題(ねまら)

新六  
まとあけて山のはみゆるねやの内にくらそはたて月をみる哉

同

家集

おとはしていはにたははしる霰こそよもきのまとの友もなりけれ

西行上人

建仁元年老若五十首御合

谷ふかきかすみのまとは明やらて雲そいさよふうくひすのこゑ

寂蓮法師

式部親王續千首曉月

秋さむきあらしの窓はあけやらてねさめに見よとすめる月かけ

參議爲相卿

六百番歌合

夏きてそ野中のいほはあれまさるまととちてけり軒のしたくさ

大藏卿有家

光臺院入道二品親王家五  
十首閑中燈

つたへきくまとしつかなるきみか代にひかりをそふるのりの灯大

從三位保季卿

夏臥ニ北窓風ニ枕席如ニ涼秋

さよふけてまとおしあくるうたゝねにまくらすゝしき庭の松風

慈 鎮 和 尙

戸

六帖題

新六二  
いかにせん時にひくとのいてたちにかたゝ見まくほしき昔を

民部 卿 爲 家

寛元元年緒縁經百首夜戸

我せこか夜戸出のすかたそのまゝに今もさゝすて待かくるしき

同

同

あなこひしこやの戸いてしかた庇ひさしひみねはおも影そたつ

同

題不知

あしひきの山櫻戸をあけおきてわかまつきみをたれかとゝむる

人 丸

洞院攝政百首山家

たれかすむ山さくら戸のたてなからあくるまもなき軒のしら雲

光明峯寺入道攝政

家集關花

あふさかの山さくらとの關もりは人やりならぬはなを見るらん

從二位 家隆

春歌中

みかりするかり場のをのに今日暮ぬ山さくら戸に宿やからまし

同

千首歌

あしひきの山櫻戸のあけたてはにしきおりはへうくひすそなく

民部 卿 爲 家

千五百番歌合すぎのあみ戸

ほとゝきすあはれも深くすむ山に杉のあみ戸のあけくれのこゑ

西園寺入道太政大臣

洞院攝政家百首山家

山里の柴のかた戸のかたひさしあたけにみゆるかりのやとかな

常磐井入道太政大臣

百首歌

柴の戸をとほてあくるやたれならんかよひなれたるみねの松風

寂 蓮 法 師

光臺院入道二品親王家五十首菘露

さきかくす野もりかいほのさゝの戸もあらはにおける菘の朝露

從二位 家隆 卿

秋歌中はぎの戸

こゝのへに花の散しく菘の戸はさそむらさきのはとみゆらん

後九條内大臣

内裏當座御會草花

正嘉三年毎日一首中（あみ戸）

六帖題柴のあみ戸

同

中つまど

同（あみ戸）

つま戸

三百六十首中

かさ戸

題不知眞木の板戸

れいのつまどをならし給ければきゝすくして明にける又のつとめて

御返事

修理大夫顯季六條のイの家にて曉水鷄六條のイてるとどの御戸みど

題しらぎて

八幡若宮六首の歌合出家

さきやらぬ萩の戸わたるむら雨にたましくにはをみするしり露

あけくれのそらにやいはん朝日さすあみ戸にかゝる夕ゆふかほの花

山里新六二の柴のあみ戸のあけたてはみねのあらしのこゝろなりけり

世をそむく柴のあみ戸のかけかねのおもひはつせは人そ待るゝ

逢見逢みての後のつらさの中つま戸をり戸もあけぬおとしたてかな

今宵現在六へ事去けしとて逢あうことをちかへやりとのたてなからのみ

ねられねは宿の妻戸をおしあけてみなみにすめる月をみるかな

我せこか板屋いのすゝとかけさけてたえぬをみるそ秋はすへなき

よをこめて秋はたつなり我せこかねやのかさとを今やさゝまし

おく山のまきの板戸をとくさしてわかひひかんに入來いてなさぬ

まつ人やありあげあげの月とおもひしをさしてやみにし横の妻戸を

ひとりのみ有明の月のやまのほにいるまてきぬ眞木の妻戸を

誰しかもくひなゝらては叩たたくへき黒戸くろのみとをひままひままらむまて

豊國とよのかゝみの山のいはとたてかくれにけらしまてときまさぬ

すみすてゝひととはあとなきいはのどにいまも松風庭はらふなり

民部卿為家

同

衣笠内大臣

信實朝臣

同

正三位知家卿

隆祐朝臣

好

衣笠内大臣

よみ人しらす

前大納言公任卿

權中納言定頼卿

俊頼朝臣

手持女王

後京極攝政



門

十題百首

述懷歌中(くはの門)

六帖題

同

同

同門柱

同

むしろの門

かど

文治六年五社百首

正治二年百首

同

同

夕戀

あきつ嶋をさむるかとの長閑けきをつたふるきたの藤浪のかけ  
 かき籠る桑のとさしの老らくよこはいかなれやねのみなかる、  
 新六二  
 同六二  
 からくして入しはなにそ桑の門みちのこゝろよそのまゐるしあれ  
 世にしあらは行かふ人もいかはかりよもきの門に市をなさまし  
 同六二  
 おのつから朽のこりたる門はしらわかいへいかて立なほさまし  
 同六二  
 荒はてゝあやしけれともあや蕙かけたるかとはさすかなりけり  
 同六二  
 唐のむしろのかとはいやしきにくるまのあとそたえすみえける  
 引かへてすゝみのあみをかけてけりこや市をなす門とみえけり  
 春雨はくるひとなくあとたえぬやなきのかとの軒のいとみつ  
 跡たゆるやなきのかとの春ふかみあくるもさすも風にまかせて  
 いはまもるかた山かけのさゝれ水せかねとかとの内にこそすめ  
 老おくる門にやなきを植おかんさてそむかしも目をくらしける  
 とはれんとさしてはすます松のかとみはてんためのあきの夕暮

前中納言定家卿  
 民部卿為家  
 光俊朝臣  
 正三位知家卿  
 同  
 信實朝臣  
 衣笠内大臣  
 權僧正公朝  
 同  
 皇太后宮大夫俊成卿  
 土御門内大臣  
 三條入道左大臣  
 前大納言隆房卿  
 從二位家隆卿

正治二年百首

家五十首祝

千五百番歌合判御歌

祇園社百首(西門)

久安百首

願不知

同(いもがかど)

御集三首御歌山霧(横の門)

三百六十首

永久四年百首(覆夢)

六百番歌合

家集垣根雪

正治二年七月當座三首歌

六帖題(かきは)

すみわひてなほ山ふかくあとたえはたれをかこゝに松たてる門

としふれと老せぬかとをいく千代か月日の影のさゝんとすらん

山路よりさすか月かけまはのかと見るもさひしき霧のまかきに

きりのうちもまつ面影にたつるかな西の御門のいしのきさはし

我かとのいつもとやなきいかにして宿もよそなる春をまららん

我門のいつもと柳いつもいづもおもひこひすななりましつしも

いもかゝとゆきすすきかねて草むすふ風ふきとくな又かへりん

おく山のきりのたえまの眞木の門いかなる人のすみかなるらん

墻

朝なくには草とるとせしほとにいもか垣根はうすらきにけり

とこなつの花さく宿いかにしてをりよき竹をかきにゆはまし

おのつからなさけそみゆるあらてくむまつかそとの夕顔の花

やのはやす垣根の雪はつるのほものとしろにこそ消のこりけれ

垣根もるいさゝをかはに音かけて門田のいなはほなみたつなり

かくて世を危ぶげにてもすくかなかこふ垣根のねもそ朽つゝ

寂 蓮 法 師

喜多院入道二品みこ

後鳥羽院 御製

皇太后宮大夫俊成卿

清 輔 朝 臣

よみ人しらす

同

後鳥羽院 御製

好 忠

藤 原 忠 房

法 橋 顯 昭

源 仲 正

參 議 雅 經 卿

正 三 位 知 家 卿

同

嘉元三年楚忽百首

百首御歌

俊頼朝臣の所へ旅なる所にて

かへし

山里

貞應三年百首野亭歲暮

石清水三首歌合

家集雪歌中

秋御歌中柴の袖垣

家集やへのしげがき

永久四年四月鳥羽殿歌合卯花

承元三年長尾社歌合社頭花

同はなのやへがき

同みやがき

きりくすを(かやのかき)

千首歌竹がき

同くつれそふ破れついちの犬はしりふまへところもなき我身かな

わかやとは秋のあはれをこめかほにかきねの山に鹿そなくなる

いかにせんおくもかくれぬさかきのあらはにうすき人の心を

草まくらさかきうすきあしのやはとろせきまで袖そ露けき

散木さかきの薄き蘆屋の露けさに去をれにけりとみえもするかな

山里にたかりそめのすきかきふちする人もなきわか世かな

雪つもる野原にうつむあしかきのひとよのほと春そまちかき

かひねするとこの柴かきひまを荒みうらもあらはにさゆる山風

をりならぬめぐりのかきの卯花をうれしく雪のさかぜつるかな

こゝろなきえつかえわさとみえぬかなあさかほさける柴の袖垣

はるさりてかつらの里に雪ふればやへのまはかき花さきにけり

卯花のさけるさかりのやへかきをたれやまかつの宿とみるらん

いにしへの誰そのかみに手向おきてはるもいくよの花のみつ垣

つまこめに宮るせしよのあとなれや八雲にまかふはなの八重垣

あまつそでふるきみやかき神さひて花も久しき名をとめてけり

うらかるかやの垣根のきりくす夜風をさむみ聲よわるなり

山かつのへたてにひしく竹垣のわれくたけてもよをやすきまし

信 實 朝 臣

爲 實 朝 臣

順 德 院 御 製

二條太皇太后宮肥後

俊 頼 朝 臣

信 實 朝 臣

民 部 卿 爲 家

後鳥羽院宮内卿

西 行 上 人

花 園 左 大 臣

仲 實 朝 臣

同

正 三 位 知 家 卿

法 眼 宗 圓

從 二 位 行 能 卿

後 一 條 入 道 關 白

民 部 卿 爲 家

百首歌、竹あめるかき

庭の面は鹿のふしと、あれはて、世にふりにける竹あめるかき

前中納言定家卿

千首歌、里の竹垣

かた山のさとのたか、きあみめよりもりくる秋の月のさひしさ

民部卿爲家

寛喜元年女御入内御屏風  
沼江菖蒲沼のみつがき

あやめかる沼のみつ垣いくかへりひさしき御代にけふを待らん  
新六の  
我宿のこけのかきねのきりくす野へにのみやは露はならひし

同 信實朝臣

六帖題、こけのかきね

心あるやとのとなりの中ひかきふみのかよひのはさまやはなき

同

同  
文永二年七月白河殿七百首しのがき

とし月を中にへたつるまのかきひと夜二夜にあふよしもかな

同 後嵯峨院御製

建長三年十首歌合山家秋風山のかきは

人とはぬ山のかきほのくすかつらかつらみつ、秋かせそふく

同 民部卿爲家

文永元年七社百首、神のあらがき

ちはやふる神のあらかきまろたへにゆふかけわたす卯花のころ

同

永久元年七月藤原定通家  
歌合雪ふるのかきね

卯花のふるのかきねのしら雪はふた、ひさくとみゆるなりけり

同 よみ人未らす

秋歌林良材歌の月まろくそてれるうなはらのあをふしかきも色かふるまで

秋の月まろくそてれるうなはらのあをふしかきも色かふるまで

同

此歌は童蒙抄云日本紀の事代主神の海中に八重のあをふしが

きつくりてかへりさりぬといへり

家集山家納言すゝのかき

日影おほきすゝの垣根にかくれるてほかより夏をすくすけふ哉

同 權大納言實家卿

あやひ垣あやひ垣たてへたてたるあなたにてはたおるむしの聲ぞ聞ゆる

あやひ垣たてへたてたるあなたにてはたおるむしの聲ぞ聞ゆる

同

永久四年百首夏衣

さみたれにあひにけらしな夏衣ひとへひかきにかけてほきなん

同 藤原忠房

弘長二年内裏百首寄垣戀の中かき

君戀しつもの中かき三とせまていかてゆるさぬへたてなるらん

同 從二位行家卿

仁安二年二月清輔朝臣家歌合あしの中かき

梅の花いかてにはひのもりくらんあしの中かきひまなきものを

同 太宰大貳重家卿

久安五年七月山路歌合雪(松がき)  
題不知(よもぎのがき)  
久安五年七月山路歌合雪

あられてくむまつの松かきはなさきてあな面白のゆきのあしたや  
万代 万代 万代  
まげかりし蓬のかきのへたてにもさはらぬものは冬にさりける  
雪ふかき谷のはふやにあさほらけあけそわつらふ柴のくみかき

藤原顯方  
好念法師  
西念法師

此歌判者顯輔卿云右の歌はふやとよめるきよからず云々

籙

百首御歌

百首初冬

嘉元元年民部卿親王家續千首麓柴

寛喜元年女御入内御屏風

光聖院二品親王家五十首篋羅夢

あるやんことなき所よりきくのうつろひけるをいだしたまへれば

わかやとのすゝきおしなみふる雪にまかきの野への道そたえ行  
いかなればよものまかきはかれはてなほ冬こもる深山への里  
山人のふもとをかけてすむ庵はからぬましはをまかきにそゆふ  
色かへぬまかきの竹のませの内にもちよゆひそふる松むしのこゑ  
あたにゆふまかきの内にとこ夏のおのれふしてや露にぬるらん

山里に匂ふをみればきくのはなたきとのまかきおもひこそやれ  
家 新千雜下  
くりかへしま垣の内に花つめはいとはかりにもありとやは思ふ

此歌は重之がもとにあをつらをこにくみて棗栗などを尾花

にませてやるとてと云々

後京極攝政  
前中納言定家卿  
參議爲相  
西園寺入道前太政大臣  
信實朝臣  
惠慶法師  
同

〇 文永二年詩歌合仙家秋興

〇 六帖題

〇 三百六十首 牙

〇 百首歌きりのまがき

〇 建長八年百首歌合霜がれのまがき

〇 六帖題あばら筥フツツキ

ぬれてほす露もちとせをちきりおきて玉のまかきにうつす白菊しらぎく

霜しもおけは一夜二夜にうつろひぬたげのまかきのしらぎくのはな

かこはねとよもきの籬夏くれはあはらのやとをおひかくしつゝ

秋はいぬきりのまかきは霜かれてさてもすむやと問とひとはなし

霜しも枯かのまかきにのこる露や今朝さゝのつらくとむすほゝるらん

我わが庵いほのあはらまかきに柴しばへておいらくのこはたちもかくれん

前中納言爲家卿

衣笠内大臣

奸 忠

寂蓮法師

從三位行家卿

正三位知家卿

# 夫木和歌抄卷第三十一終

高

夫木和歌抄卷第三十二

雜部十四

題

御調 太刀 行膝 笛 玉 櫛 志折

酒 刀 杖 鼓 鏡 鬘 標

藥 鞆 鞆 鐘 瓮 答答

文 弓 蓑 率都婆 枕 火取

硯 矢 笠 金 薙 插頭

筆 沓 琴 寶 簾 祓麻

御調

六帖題

新六二  
ゆたかなるな、つのみちの貢ものうみ山かけてさためおきてき

民部卿爲家

寛喜元年女御入内御屏風

冷泉院御時大嘗會歌

安和元年大嘗會悠紀方近  
江國御屏風歌

大嘗會悠紀方御屏風

同

同

永久四年百首真調

同

同

同

六帖題

同長歌

詠酒歌

秋の田に民のみつきをそなへても幾とせあまりおしねほすらん

くのもとやせたの橋桁たむむまてはこひつゝくるみつき物かな

みつき物たえすそなふる東路のせたのなかはしおともとろゝに

東路や日つきのみつきたえすむて雪ふみわくるせたのなかはし

さゝなみや志賀の浦より舟出してはこふみつきはかちも變らす

貢ものはこふふなせのかけ橋にこまのひつめのおとそたえせぬ

みつき物ひく桑まゆのいとをもてくるてもたゆく備へつるかな

あしたつやはたさす駒の聲たてゝせたのなか橋ひきわたすなり

なかとゝひたちの御倉開きあけよけふ貢ものをさめみつへく

すめらぎのたみやすらけくをさむればひまなくはこふ貢物かな

新六二  
はるはまつ貢そなふる國ふみをさしていくよもきみのみそ見む

萬二十  
なにはの宮は、きこしめす、よものくにより、たてまつる、み

つきの舟は、ほりえより、

酒

萬三  
さげの名を聖といひしいにしへのおほきひしりの言のよろしき

同

元

兼

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言匡房卿

同

俊 頼 朝 臣

神祇伯顯仲卿

仲 實 朝 臣

二條皇太后宮肥後

光 俊 朝 臣

よみ人しらす

大納言家持卿



同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

萬三

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

よるひかる玉といへともさけのみて心をやるにあにまかめやも

あたひなきたからといへと一つきの濁れる酒にあにまさらめや

古への人のなませるきひのさけやもはらすへてぬきすたまはん

あち酒を三輪のはふりか祝ひすき手觸しつみか君にあひかたき

あちさけをみわの祝か山てらすあきのもみちのちらまくをしも

あち酒の御室の山に立月のみかほしきみかうまのあ音をする

あくまてにみてる酒にそ寒き夜は人の身まてにあたまりける

をみ衣玄ろきをす忍てさかつきのめくみにゑへる夜半を樂しき

竹の葉にまかきの菊を折そへてはなをふぐらんたまのさかつき

竹の葉にうかへる菊をかたふけて我のみ玄つむなけきむそする

朝出できひのとよさけのみかへしいはしとすれと玄ひて悲しき

この下につもるおち葉をかきつめて露あたむむる秋のさかつき

春秋にとめるやとにはしら菊をかすみのいろにうかへてそ見る

きよみきの聖をたれもかたふけて玄ひをつみえぬ人はあらしな

此歌は家集にはく人のもとにまかりてよもすがらあそびけ

るにさけなんどのみて玄ひの有けるをつみなんとしてあるひ

じりのあやしきことなんといちくにいひけるついでによめ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

ると云々

薬

思故郷歌

題不知

家集菊

久安百首

住吉社卅首

千五百番歌合

由來生老死三病長相隨、  
除却無生忍人間無藥治

久安三年毎日一首中

六道生死輪廻心を

久安百首金剛夜叉

萬五

くもにとふ薬はむよはみやこみは賤しきあか身またをちぬへし

同 我さかりいたくたちぬくもにとふ薬はむともまたをちぬへし

長月のきくの志た水くみつれはおいせぬくすりたれかたつねん

尋ねゆく船路にとしのおゆるまであはぬくすりに似たる戀かな

君かためよもきかまもよりぬへしくすりとする住吉のうら

浪の上にくすりもとめし人もあらははこやの山に道しるへせよ

舟のうちとうき世のきしをはなれてやまらぬ薬の名をば尋ねん

くさ木まで佛のたねをさすとはたえなる法のくすりにそしる

もとの志のさかの教への薬あらはわれ永き世にまとひはてめや

いつかたも心にかなふ薬あらはにしをそつひのすみかにはせん

よみ人しらす

同

権中納言長方卿

花園左大臣家小大進

従二位家隆卿

寂蓮法師

前中納言定家卿

民部卿爲家

花山院御製

花園左大臣家大進

文

家集不見文戀

文永六年白河殿七百首披  
書知昔

六帖題御歌文

柿本影供百首

久安百首

六帖題

百首歌

千五百番歌合

六帖題

同

同

度々返事戀といふ事を

寄文戀

六帖題ふみ

家集迷懷百首歌

六百番歌合初戀

としをへてとなりの壁はくつるれと夢にも文をみぬそかひなき

むかし人やいかなる花をむすひおきて今も其世の事を知るらん

ときおけるみ法の文をあはれわかさとり開きてみるよしもかな

朝ことに文の塵をもうちはらひひのちありけによをやたのまん

あさからぬ心をふみにかきのへてなくなるをりにや我をしるらん

いくかへり染て色こきくねなるのふみしあとも今はたえつ

陸奥つほのいしふみありときくいつれかこひのさかひなるらん

夢とのみおもひいてもやむへきに契しふみのなにのこるらん

武士のやそうちふみはかたくに行わかれたるあとそみえける

うたてなと大和にはあらぬから文の跡を學はぬみとなりけん

はては又去みのすみかの昔ふみはらはちりと見るそかなしき

結ひめの違ひて返るたひもあらはみてけりとたに慰さめてまし

此度はみて返しけり手なれつひくすみたかふふみのうはかき

なにとしてうちとの文を學ひけん巻くものふるも物うかる世に

いしふみやつかろのをちありときくえそ世中を思ひはなれぬ

にしき木にかきそへてこそ言の葉も思ひそめつる色はみ

俊頼朝臣

後嵯峨院御製

中務卿みこ鎌倉

後九條内大臣

前大納言隆季卿

衣笠内大臣

寂蓮法師

小侍從

正三位知家卿

民部卿為家

信實朝臣

資隆朝臣

前民部卿雅有

權僧正公朝

清輔朝臣

法橋顯昭

此歌右方申云にしき心に心ざしを見せそむるにてこそあれふ

みをそふべきことかは左陳云能因がかきたる物に錦木には必  
ふみをつくる儀也と云なり

### 硯

家集寄硯戀

洞院攝政家百首水

正治二年百首御歌

いつはりの名をのみ立て逢見ぬは硯のうへのちりやふきけん  
池にすむ鳥のあとさへたえぬらん氷るすりのみつくきの末  
いさきよく蓮の法をうつつしてそ鳩もすりのみつをそへける

源 仲 正  
家 長 朝 臣  
喜多院入道二品のみこ

### 筆

家集くさのほたるを

同日暗不見テ小字書一

家集

水くきのあとふみならず我ならば草のほたるをよそにみましや  
水くきのあとをかすみの立こめてめにたなひくは老のはるかな  
水くきのあとにのこれるたまの聲いかもさむき秋のころかな

惠 慶 法 師  
能 因 法 師  
能 宣 朝 臣

この歌は貫之がかきあつめたる歌をとき文がもとへかへすと  
てよめると云々 此乎工筆字ニテリ物也

貞應三年百首筆御首中

さほひめの筆かとをみるつくくし雪かきわくる春のけしきは

民部卿爲家

弘安元年百首

柿本影供百首

なからへて身にそ知らるゝ筆の海かく迄かたは實にいとまなし  
わかわかの浦はわかおほくの人の筆のうみおきにもへにも藻鹽かくらし  
後九條内大臣  
同

太刀

題不<sub>レ</sub>知

六帖題御歌

同題歌たち

同

同

同

同

久安百首

建保三年名所百首

萬十萬十つるつるきき爾爾  
たまたちをまきぬる妹もあらはこそよの永けきも嬉しかるへき  
世をはかり人もあらはと武士のつはなかしたるたちもかしこし  
伊勢島やみそしの濱の松かねにとし經てたてるたちもかしこし  
新新六六五五  
からからくにくにののふたつふたつののたたちちはは昔昔よりより君君ののままももりりににささたためめおおききててき  
同同の中の中をおをおももふふ心心ももほほそそたたちちののささややははままかかつつららいい  
同同山山ふふかかみみ松松のおおふふててふふいいははかかねねににををささめめししたたちちはは妹妹そそままるるららん  
ああははれれににそそいいひひしし契契ををたたかかへへししととつつかかのの上上ままててたたちちををかかけけゝゝる  
ははくくたたちちのの鞆鞆ははああるるへへききとと思思へへととももせせめめてて戀戀ししきき物物ににそそ有有ける  
たたひひゝゝととのの草草ののままくくららににおおくくたたちちののささややのの中中山山けけふふややここええななん  
中務卿のみこ  
儒僧正公朝  
衣笠内大臣  
信實朝臣  
光俊朝臣  
大納言典侍  
前參議親隆卿  
從二位家隆卿

刀

六帖題かたな

同

同

同

家集五十首歌中

新六五

何事を思ひけりとも忘られしなゑみのうちにもかたなやはなき

同 ずてはてすみはさひはてぬ古刀さすかに世をはおもひたてとも

同 今ほわれまるはにとける小刀のよにつかはれぬ身とそなりにし

同 やまと歌のこしはなれたるさひ刀さもよにたゝすきえもなき物哉

手にとれば人をさすてふいかくりのゑみのうちなる刀おそろし

鞞

貞永三年十月廿五日

同題さや

同

同

新六五

いまは忘もさそ忘りぬらん忘りさやのさしも心におもふ氣色は

同 つし祭けふをはれともみせさやのさき折かけてねるや誰か子そ

同 かつはまたさす鞞くちにあふひつは心ありけるかなつくりかな

弓

文治六年五社百首

貞永六年十首歌合寄弓戀

家集寄弓戀

うらやましあたちの峯のそりま弓そりはてましを引かへすらん

狩人のひくやゆすゑのよるさへやたゆまぬ關のもるにまとはん

とかりするさつをの弓絃うちたえてあたらぬ戀にやもふ比かな

衣笠 内大臣

民部卿 爲家

正三位 知家卿

信實 朝臣

權僧正 公朝

衣笠 内大臣

正三位 知家卿

信實 朝臣

皇太后宮大夫 俊成卿

前中納言 定家卿

信賴 朝臣

家集寄弓戀

久安百首

寛元四年日吉社歌合イ

題しらす

同

寶治二年百首寄弓戀

六帖題まゆみ

同題弓

同

同題あひおもふ

寶治二年百首

たはぶれ歌とてよみ侍りけるイ

題不知

天仁元年顯季卿家歌合

わかれにしたつかの弓の白鳥をきのかはゆすりこひぬ日そなき  
 なか／＼にたつかの弓となりにはせは引止めてもいはましものを  
 いかてかは梓のまゆみつるきれておとせぬ人をうらみさるへき  
 まれにみん君をみるとそひたりての弓とるかたの眉根かきつる  
 萬二もかる信濃の真弓我ひけはむま人さひていなといはんかも  
 こひとのみ信濃の真弓ひきかねてつよきなきはよるそ苦しき  
 みこもかる信濃の真弓おしかへしおもふもくるし君によりなん  
 新六五  
 いかにせん信濃の真弓年をへてなひかぬほとこのころつよさを  
 つるなれぬあらしきの弓のそり高みさていたつらにひく人もなし  
 同  
 あつさ弓末までとほすふせ竹のはなれかたくもちきるなか、な  
 手にならずかひこそなけれあつさ弓ひけは中のみ遠さかりつ、  
 玄のためてすゝめ弓はるをの原はひたひ烏帽子のほしけなる哉  
 萬廿 好忠家集  
 まくらなるをふちのまゆみ見るときそ君か手風はいと、戀しき  
 いかにせんよしきの弓のともすればひきはなちつゝあはぬ心を

同

前參議親隆卿

光俊朝臣

よみ人あらす

同

後九條内大臣

權僧正公朝

衣笠内大臣

正二位知家卿

信實朝臣

同

西行上人

よみ人あらす

琳賢法師

箭

六帖題

新六五  
老ぬれはのやにさすてふつの鏑らをうしくそなりにけるかな 民部卿爲家

同

人こゝろたのまれかたき狐矢はたそのまゝにまたおとせぬも 正三位知家卿

同

今日は皆ゆやたちのいての外迄もすゝのいたつきこしなれにけり 俊實朝臣

同

いまのよや弓の心もあらはれてはなつやすちのちかはさるらん 光俊朝臣

同

空にきくつゝみのこゑのなかりせは身に立矢をはいかて拔みし 同

同

峰におへはむす音むもせて草のかうあさき裾野にとも矢たはさめみ 神祇伯顯仲卿

同

なるやもて鹿とりなひく夏草にうらはすふせてねらふさつをか 權僧正公朝

同

きの國のむかしゆみをのてにもたるなるやならずや我思ふこと 同

同

我戀はくるりはなかくす河の瀬にたちぬるとりのあとはかもなし 源仲正

同

あつさ弓とも矢たはさみ諸人のおのかひきくいとむなるかな 源師光

同

近江のやゝはしのゑのをやにかけてまことありとや戀しき物を よみ人不知

同

ますらをの友矢たはさみ立向ひいるまとかたはみるにさやけし 萬

### 行 膝

家集五月雨

夏野ふむせこかむかはきすそ朽ちてほすひまもなくさみたるゝ比 源仲正

戀歌中

よとゝもに恋ここそあはせね行膝のかたかはもなき戀をのみして 源仲正



六帖題

題不知

新六二  
たちならず野原の鹿のあきふけてかたむかはきの妻をこふらし  
萬十六  
すこもしき青なにもてこうつはりにむかはきかけてやすむ此君

信實朝臣  
よみ人不知

杵

家集閑庭霜

古抄中

家集

長歌

山里にはさえわたるあさ玄もをくつすりけちてくる人もなし  
ふみ分て誰いそくらんこへのやとのへにつもる雪のふかくつ  
ぬく杵のかさなる上に重なるはいもりの玄るしかひはあらしな  
庭の間もみえすちりしく木の葉杵はかてもたれの人か來てみん  
萬十八  
とふとりの、あすかをとこか、そらはれて、ぬひしくろくつ、さし  
はきて、にはにたゝすみ、

源仲正  
民部卿為家  
よみ人不知  
和泉式部  
よみ人不知

杖

正治二年百首

六帖題御歌

同

男山はとのつゑにはたつさひぬならさかのほる玄るしあらせよ  
たらちめの諫めし杖の年をへてよわるはさこそかなしかりけめ  
新六四  
あはれ我家につゑつくよはひまで身をなからへて物をやは見し

土御門内大臣  
中務卿のみこ鎌倉  
衣笠内大臣

同

述懐百首

寄老人戀

永久四年百首賀

同

家集

題不知

百首御歌

七日卯杖にあたりたる日わかなにそへて俊頼のもとへ

返事

百首御歌

同

新六

新六の柄はさそ枿くにけん身のうさの我つらつゑのたゆるよそなき

いかにしてこのよのやみをてらさまし光あさかの杖かさなかりせは

山ふかみ杖にすかりてゐる人のこゝろのそのはつかしきかな

つきもせぬ君かよはひは幾千代と限れるたけの杖にやあるらん

我君をいはひこめつゝたけの杖ちとせかきるちそうれしかりける

つきもせぬ祝の杖はかめやまのをのへに行てきる有にそありける

八千代へん君のためにと神やまのまらたまつはき卯杖にそきる

鳩歌林のゐるつゑにたつさふ身もを持てこえまほしきはあふさかの關

いかにしてはとてふ杖にかゝるまて君につかへて此よくらさん

散木春  
老らくのこしふたへなる身なれとも卯杖をつきて若菜わかをそつむ

鳩かのゐる杖にすかりてつみくればそのまろしさへ頼たのもしきかな

鞠

花のえにかけて數ひふるまりの音ねのなつまぬほとに雨そゝくなり  
秋の稻のをさまされるよの嬉うれしきは春のあそひのまりこゆみまで

信 實 朝 臣

俊 頼 朝 臣

西 行 上 人

二 條 院 大 進

二 條 院 皇 太 后 宮 肥 後

よ の 人 し ら す

鳴 長 明

昌 俊

慈 鎮 和 尙

藤 原 經 業

俊 頼 朝 臣

慈 鎮 和 尙

同

久安四年毎日一首中

同十一年毎日一首中

てりもせず風のとかなる夕暮にこゑくゝまるきまりのかすかな  
鞠の庭にさくら柳をうつしおきて春はにしきにたちやましらん

民部卿爲家 同

雪中旅行を

六帖題澤

伺みの

同

題不知山すげみの

六帖題ふかみの

伺かくれみの

同

家集五月雨へさゝめのみ

中院入道左大臣家元永元年歌合五月雨

蓑

旅なれぬ人にをしへよ雪ふらはみのうちかへせふきもそする  
ますらをの蓑にさゝむと澤に生るさゝめかるにも袖はぬれけり  
あま衣みのきていへにいることは神やらひよりいむといふなり  
旅人のみのふきかへすあさあらしにむら雨むかひ行なつみぬる  
我妹子か袖をたのめてあしひきの山すげみのをとらてきにけり  
かち人の野分にあへるふる蓑の毛をふく世こそくるしかりけれ  
さまほしきよのうき時のかくれ蓑なにかは山のおくもゆかしき  
隠れみのうき名をかくすかたもなし心におにをつくる身なれば  
たひ人のさゝめのみのをきてしより一日ぬかせぬ五月雨のそら  
朽にけるすけのをみにのおのつからふる五月雨の程をしるかな

權中納言師時卿 衣笠内大臣 權僧正公朝 前中納言爲兼卿 よみ人しらす 民部卿爲家 信實朝臣 衣笠内大臣 權中納言定家卿 八條入道太政大臣

笠

堀河院御時百首

久安百首みかさ

六帖題

同つほみかさ

同袖かき

同しからきかさ

同すけのあみかさ

同やふれかさ

同

延喜十一年京極御見所歌

同

題不知なにはすががき

みしますかがき

六百番歌合

六帖題おほひかさ

ますけよき笠のかりてのわき裳をうちきてのみやすき渡るへき

みさふらひみかさなめしそあさひ山木の下露もいまはひぬらん

新六五きみ新六  
大みやのみかさのかけの廣ければあめのしたには誰かたのまん

新六五  
ふりやまぬ雪まのむめのつほみかさおもふ心のいつかひらけん

同  
なにせんに我れかかさすらし袖かさの下にそなみた雨とふりぬる

同  
雨すくる外山の道のこかくれにまからきかさそみえかくれする

同  
ますらをのすけのあみ笠うち垂てめをもあはせず人のなりゆく

同  
さりとてもさせる事なき破れかさほねを折りてそ君につかへし

まの、浦の小菅の笠をとりもあへすまぐれて渡る淀のつきはし

こまなへて君か見にくるかすか野はまつかさ繁し雨にぬらすな

ぬれつゝも雨にはゆかかんまつかさは千年の春をちらさゝらなん

萬十一  
おし照や難波すか笠おきふるしのちはたかさんかさならなくに

萬  
みしま菅いまたなへなり時またはきすやなりなん三島すかゝさ

たれかゆく夏の野草の葉末よりほのかにみゆるみしまするかゝさ

世を捨ぬ人のさまかはおほひ笠かけぬはかりはかことなれとも

權大納言公實卿

季通朝臣

正三位知家卿

衣笠内大臣

光俊朝臣

民部卿爲家

衣笠内大臣

信實朝臣

中務卿親王鎌倉

よみ人しらす

同

同

同

正三位季經卿

權僧正公朝

琴

仲實朝臣ことをあたらしく作てみせければかきならして

ひきならず聲をさやかに聞ゆよなるくちにし舟のみことならねと 俊 賴 朝 臣

此歌は日本紀第十應神天皇五年冬十月伊豆國におほせてなが  
さ十丈の舟をつくらしむ試に海にうかぶ則かろくうかびてと  
く行事はしるがごとし故其名を枯野といふ輕野とはのちの人  
誤也同三十一年秋八月宮船枯野朽て用にたゝす其舟の名をた  
たずして後葉伊につたへんとて有司に今其船材を薪として鹽を  
やかしむ五百荷をぬたり則諸國に賜て船をつくらしむ初枯野  
船を鹽のたき々にせし日餘燼ありすなはち其もへざるをあや  
しみて天皇に獻す琴につくらしむ其音鏘鏘として遠聆云々

ゆふき琴ひきあかしてかへりけるあしたにつかはしける

琴のねに水のゑらへやかよひけんいさもほしかたきけさの袖かな 如 覺 法 師

家集云此水のゑらべといふ事をいかゞと思ひてねたる夜父の  
伯夢にいはく水調といふ事あればひがことにあらずとなんあ  
りしと云々

天慶三年宰相中務家屏風  
月に琴ひくをよめる

ひく琴のねのうちつけに月影ゆげをあきのゆきかとおとろかれつゝ、  
月かけを雪かのみつゝひく琴をきゝてめつとは知すやあるらん 貫 之

同

同

六帖題こと

永久四年百首筆

同

同

文應元年毎日一首中

六百番歌合寄琴戀

色葉四十七首

六帖題こと

百首中

建保三年名所百首

新六五

夏くれはあつまのことのあしつをによりあけてける藤なみの花

衣笠内大臣

琴の音のことにむせふ夕暮は毛もいまたちぬすのさむさに

俊頼朝臣

空の色によそへる琴のこちをはつらなるかりと思ひけるかな

仲實朝臣

さよ更でもものね高くなりぬらしゑらふる琴はこちあくらし

源兼昌

みとりなる玉の緒ことのことちかみれば音する秋のかりかね

民部卿為家

むかしきく君かたなれの琴なほは夢にゑられてねをもたてまし

前中納言定家卿

此歌判者云左の歌殊なる事なし萬葉に梧桐日本琴夢に娘子に

化して云「いかにあらん日の時にかもこゑゑら人のひさの

はわれまくらせん」といへる歌の心にこそ侍めれゆゑなきに

はあらざるべしと云々

律のうたに琴の音あへるゆふまくれかたいとなひくにはの青柳

同

我齡たつかことちの緒あはせのたせめにのみせめもゆくかな

信實朝臣

あふさかの關のいほりと思ふにもあつまの琴そ身にはゑみける

寂蓮法師

あふさかのせきのいほりの琴のねはふかき木すゑの松風そふく

從二位家隆卿

笛

永久四年百首笛

同

同

權中納言家屏風家集歌人の家の琴ひき笛ふきてあそびたる所

同

文永二年七月白河殿七百

首 毎日一首一中

六百番歌合寄<sub>レ</sub>笛戀

六百番歌合寄<sub>レ</sub>笛戀

あをたけを雲のうへ人ふきたて、春のうくひすさへつらすなり  
吹たつるふえの調のこゑきけはのとけきちりもあらしとそ思ふ  
なみの音にたくへてそきく墨の江の汀にてきくこまふゑのこゑ

俊頼朝臣  
仲實朝臣  
源兼昌

きく人のみゝさへさむき秋風にふきあはせたるふえのこゑかな

和泉式部

笛のねは紅葉をふくにあらねともひゝきに枝もうこくへきかな

同

末の世と思ふもわひしよりたけはきりてそ笛のねをもたてける

後嵯峨院御製

吹まよふもみちの風のふえのねにたちまふ人のそでかへるみゆ

民部卿爲家

うらやましわかりこちくの笛の音をたのむる中の人はきくらん

正三位季經卿

獨寝をいまはなに、かなくさまんなりのふえも吹やみぬなり

法橋顯昭

此歌判者云向子期か隣人のふえはことばの中に隣人ふえを吹

ものあり其聲寥唳といへども吹やむゆゑもなきを吹やめるこ

とのあるやうにきこゆいかいと云々

わかこひはまた吹なれぬ横竹の音にたつれともあふかたもなし

隆信朝臣

よめたけの君によりけんことそうき一よの節にねのみなかれて

正三位經家卿

はるくと浪路わけくる笛たけを我こひつまとおもはましかは

中宮權大夫家房卿

此歌判云右歌なみちおほくわけくるふえたけをといへるおほ

同  
同  
同

くなみこそわけこしかなといへる野典（鄂曲イ）のころにやゑんなる  
に似たるべしと云々

柿本影供百首

六帖題

跡ふりて竹（ヤシ）にそかゝる秋（あき）のくもそらにのこれるふえのねもなし

後九條内大臣  
衣笠内大臣

同

玉（たま）はこのみちのちまたにふくふえの心（こころ）はかりはゆかぬものかは

民部卿爲家

同

世（よ）の中はうき一節（いちせつ）にふくふえのあなむつかしやねこそたえせね

正三位知家卿

同

ふきたつるとなりの笛（ふエ）の聲（こゑ）たかみ我（わが）去きたへもちりはらふらん

信實朝臣

同

みまきの、草（くさ）かり笛（ふエ）のわらは聲（こゑ）あなかまとのみよそへてそきく

光俊朝臣

同

牛（うし）のりまきのうなぬか吹笛（ふエ）はふかきさとのまゑるへとそきく

源仲正

同

ふりことるみ（み）の（か）の（い）の（や）の高麗笛（たかまりふエ）に打合（うちあ）するはからつゝみかも

家長朝臣

同

ふえのねをふきつる人もよるの鶴（つる）子を思（おも）ふ聲（こゑ）をあはれともきけ

家長朝臣

### 鼓

正治二年百首

百首歌

顯季卿（すゝめ）ける百首  
堀河院御時百首

文永九年每日首一中

君か代はいさめをつゝみとりなれて風さへ枝をならさゝりけり

土御門内大臣

さよ深き貴船（きふね）のおくの松かせにきねかつゝみのかたおろしなる

寂蓮法師

うちならず人のなければ君か代はかけしつゝみもこけ生（なま）にけり

祐子内親王家紀伊

時うつる法（ほり）のつゝみに打添（うちぞ）へてたえせぬかねもあるへきをまで

民部卿爲家



弘長四年毎日一首也

題不<sub>レ</sub>知

長歌

ときもりの雲井のこゑをへたてきてかはるつゝみになる、山里  
時守のうちなすつゝみうちみれば時にはなりぬあひみぬあやし  
ゆみとりもちし、みいくさを、あともひたまひ、とゝのふる、つ  
つみのおとは、いかつちの、こゑときくまで、ふきならず、をつ  
のゝこゑも、

老てこそうつへかりけれよ、へてもとしのつゝみの契ありやと

此歌は女御どの、御いみはて、七月十五夜彦山の座主の此と  
のゝみかどに常不輕つきにきたりけるをのちにきゝてよめる

と云々

鐘

花見せさせ給けるに日の  
暮ければ

百首御歌

妙聞社歌合曉鹿

花にあかぬ名残を思ふはるの日のこゝろもまらぬかねのおと哉  
吹よわるたえまゝにきこゆなり入あひのかねをうつむ山かせ  
秋ふかみまもまつみねの鐘の音にこゑうちそへてを鹿なくなり

此歌判者大僧正行尊云右歌本文をよまれたるに侍めりあさまし  
く遠耳聞ける人かな鹿や鳴らんなどおしはかられたらばこそ

民部卿爲家

よみ人しらす

人丸

權中納言定頼卿

後京極攝政

後鳥羽院御製

中納言雅兼卿

あらめ唐朝のかねのおとに日本のまかの聲うちそへて鳴なり  
と侍ればよと云々

百首歌

洞院攝政家百首述懐

柿木影供百首

文應元年七社百首

百首歌曉

家集

弘長三年毎日一首申

六帖題

正治二年百首歌

同

建保三年内裏秋十五首歌  
合旅

千五百番歌合

題不知  
百首御歌

題不知

六百番歌合

きゝつものまものよはひの鐘のこゑとしはふれともすむ心かな  
露霜をおくりむかふるかねの音にその事となくすむこゝろかな  
ちかひおくことはたかふ夕くれはくもりかねたる鐘の音かな  
まもにおくあかつきおきかねのねを老の枕にたへてそきく  
きく人のねさめの袖は露げくてをのへのかねにしもやおくらん  
まきれつる窓のあらしにこゑとめてふくるをつくる鐘の音かな  
思ひきや大津のかねの浦つたひわかつそまにならんものとは  
昨日新六けふわくなる鐘のおとにたに猶おとろかぬなかきよもうし  
ひらまつはまた雲深くなちにけりあけゆく鐘はなにはわたりに  
わくらはにたのむる暮の入合はかはらぬかねのおとそひさしき  
ふるさとは遠山とりのをのへより霜おくかねのなかきよのそら  
夜をかさねさひしきとこに草枕いくたひかねのこゑをまつらん  
萩に鹿かやになくむしこゝろせよ野守のかねのあきのゆふくれ  
みな人をねよとの鐘はうつなれと君をし思へはいねかてぬかも  
入あひの音につけてもまたれしをねよとのかねに思ひよわりぬ

殷宮門院大輔

後九條内大臣

同

民部卿爲家

從二位家隆卿

西行上人

民部卿爲家

同

後鳥羽院御製

前中納言定家卿

同

皇太后宮大夫俊成卿

慈鎮和尚

笠原耶女

法橋顯昭

六百番歌合

あはれをはいかにせよとて入合いりあひに聲こゑうちそふる玄かのねならん 正三位經家卿

此歌左難云かねとなくて入あひいりあひばかり如何判云右歌入あひ

はかならずしもかねとす忍しのずともかねにこそはときこゆらん

と云々

題不知

萬代まんだいいたつらにけふもくれぬと入あひにまためぐりあふわか涙なみだかな 慶政上人

建保三年名所百首

あかつきのかねのひゝきにつくはやま人はかけせぬとこの枕まくらに 僧正行慶

同年和歌所歌合

あらし山ころさへつらきねさめかな時たにむせふあかつきの鐘かね 同

百首歌古寺松

ゆふくれのかねのひゝきを吹ふそへてあらしのやまをおつる松風まつかぜ 從三位家隆卿

家集冬歌中

雪ふりてことしもけふにはつせ山あらしのかねの夕くれのそら 同

述懐歌

ちかつくときゝけん鐘かねもみなせ山おもひやりてや秋はかなしき 同

最勝四天王院名所御障子

みなせ山木葉まはらになるまゝにをのへのかねの聲そちかつく 後鳥羽院御製

文永二年七月白河殿七百首

ちよふへき龜かめの尾山のむかひなる鐘かねのひゝきはいつもつきせし 山階入道左大臣

前大僧正源惠泉障子繪關

あふさかや杉すぎのしたみちたちこめて霧きりにくれぬる入あひのころ 前中納言爲世卿

文永二年七月白河殿七百首

くれぬとて入あひのかねに宿しゆくとへは關路せきじのつきにさそふあき風かぜ 前民部卿雅有

源惠僧正泉障子繪歌

あふさかや關せきの戸かどこゆる秋かせに霧きりもへたてぬいりあひのころ 參議爲相卿

貞應三年同題百首

はつせ山入あひのかねのころはかりくもりのこせる五月雨ごごゆの空そら 民部卿爲家

長河霧外失三行客遙嶺嵐  
中送遠鐘

さためなきあらしにかはる山かけのくもりはてたる入あひの鐘かね 前中納言定家卿

家集歌とていひける中に

雪ふればたかくなりけるすゝか山いかなるまもに鐘ひくらん

前中納言匡房卿

### 卒都婆

六帖題

新六四

たておきしつかのそとはも朽はて、残る形見のあとはかもなし

衣笠内大臣

千首中歌イ

定めなきよの習ひこそ哀れなれひをへてまさる野へのそとはに

民部卿爲家

承久二年卒爾百首無常

知るしらすこのよ盡ぬるはてをみよ野へのそとはの數に任せて

同

百首無常

あさち原古きそとはに契りおかんとなりとならば哀れともみよ

寂蓮法師

### 金

萬十八

みちのくよりはじめて金  
なまゐらせたりける時

すめらぎの御代榮えんとあつまなるみちのくにこかね花さく

中納言家持卿

長歌

わかおほきみの、もろ人を、いさなひたまへ、よきことを、は

しめたまひて、こかねかも、たのしくあらんと、おほしく、ま

たなやますに、とりかなく、あつまのくにの、みちのくの、を

たにある山に、こかねありと、まうしたまへれ、みこゝろを、

さきそめしこかねの花はすへらきのひかりを開くはしめ也けり

殷富門院大輔

昔みちのくより金はじめ  
てまゐりけるを

寄金戀

建長三年毎日一首中夢

五行御歌金

家集寄金戀

はんれいがちやうなんの心な

六帖題ことは

題不知

戀歌中

三種寶物の心を

久安百首

文永二年中務卿親王家三首歌合述懷

題不知續詞花

同

こかねほるみちのく山にたつたみの命もえらぬこひもするかな

ふところにうけしこかねの末ひろみ榮え行へきひかりをそまつ

こんよまでなかきたからとなるものは佛につくるこかね也けり

我こひの鐘のみたけのかねならはみろくの代にもあはまし物を

捨やうていのちをこふる人はみな千々の黄金をもてかへるなり

心せよいつはり人のことのはこかねをけすときくもおそろし

萬十四  
ま金ふくにふのまそほの色に出ていはなくのみそあか戀らくは

明玉  
まかねふくにふのまそほの色にたにくはや人の哀れともみん

寶

神代よりみくさの寶つたはりてとよあしはらのえるしとそなる

玉

なゝわたの玉にもをらはぬく物を思ふこゝろをいかたとほさん

思ふこといのらはとほせ君にわれあふなくわたの玉津玄まひめ

けふかさす神の忌垣のたまひかけむかしのことを尋ねてそくる

わかたまを君かこゝろに入かへて思ふとたにもいはせてしかな

鎌倉右大臣

民部卿爲家

後京極攝政

源仲正

西行上人

權僧正公朝

よみ人しらす

素俊法師

從一位教良

清輔朝臣

法印尊定爲家

よみ人しらす

忠峯

新古今

御集月を

永久四年八月雲居寺歌合

露

家集戀歌中

家集

家集題不知

長承三年顯輔卿歌合

六帖題

同

同

百首御歌

久安百首

寶治二年百首寄玉戀

六帖題玉を

千五百番歌合

家集

題不知

新古今

水くきのあとにのこれる玉の聲いかゝもさむきあきのかせかな

黄金をいひひけつくちの玉みかく月をはえこそゝまらさりけれ

いなつまのひかりにまかふ夕露をひかる玉ともおもひけるかな

たまをもちとりうつ山のいしよりもあひみることの難き君かな

石なこのたまのおちくる程なさにすくる月日はかはりやはする

夜るひかる玉をつゝむとおもひしにあやなく袖の柄にけるかな

こひわひて落るなみたのたまならば手箱の数もつきやまなまし

誰もけに手にもつ玉のみえねはやよをてらしてはある人もなし

たかやまのみねに旗棒わられたてゝみかける玉は世のひとのため

いにしへのさつけし玉はわたつうみのまほひまほみち心也けり

みさこゐる荒磯なみによる玉のありとはみれと手にもかゝらす

水の面にうかへる玉のほともなく消るはよ所のものとやはみる

人心またあらいそのなみのたま緒にもぬかねはとりやはつさん

和歌の浦に蟹のたもてる玉の緒の永くはすてぬ世にもあはなん

月みればやかてたもとのぬるゝかなこゝろの玉や水をとるらん

やまむにもまかりの玉と草なきのつるきは國のたからなりけり

かくらくのはつせ少女か手に掛る玉は亂れていはすかもあらん

能宣朝臣

法性寺入道

源兼昌

源仲正

西行上人

前中納言道房卿

藤原雅親

民部卿為家

光俊朝臣

衣笠内大臣

同順徳院御製

前參議教長卿

信實朝臣

民部卿為家

正三位季能卿

中原師光朝臣

よみ人しらす

弘長元年百首不逢戀

若臣御歌合

建長八年百首歌合

當座百首中

家集中

後法性寺入道關白家百首御歌

行幸を

題不知

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

誰ゆゑに思ふとは去るはつせめてにまく玉のおのれみたれて

世にこゆる君かことはの玉はあれとひかりの底を去る人やなき

衣てにけふぬきかへる玉の緒のなかくもかなやおもふ子のため

たからとはたまをもいはす世のために君を治むるうつは物なり

島の子か心ゆるさぬたまのはこあくれとあけぬ物にそありける

人去れぬ思ひの玉のをたえなはなにしてあかぬかすをとらまし

此のりはうけてたもてる玉なれば永き世てらすたからなりけり

松かけのきよきなきさにたましかは君來まさなか清きはまへに

わたの原をつく去ら玉風ふきてうみはあるともとらすはやまし

底清み去つてふ玉を見まほしみちへにそつけしかつきする蟹

秋風はつきてなふきそわたのそこおきなる玉をてにまくまてに

あちむらのとほよるうみに舟うけて去ら玉とらん人に去らすな

蟹をとめ玉もとむらしおきつ浪かしこきうみにふなてせる見ゆ

伊勢のうみの蟹の去まつのあくや玉とりて後もか戀の去けらん

いくしたてみわす去まつる神主のうすの玉かけみればともしも

玉ぬしにたまはさつてかつくに枕とわれはいさふたりねん

おほうみのみなそこてらすあわひ玉たつねてとらん風な吹こそ

民部卿為家

前中納言為家

從二位行家卿

藤原為顯

實方朝臣

伊勢大輔

後京極攝政

藤原八束朝臣

よみ人しらす

同

同

人丸

よみ人しらす

同

同

坂上郎女

よみ人しらす

同

家集月

釋教

家集寄玉聞戀

六帖題

嘉應元年五月觀智法眼御房歌合

日吉社五首歌合

足玉も手玉もゆらにおるはたを君かみきぬにぬいてきせんかも  
萬代ゆら家 わきもこかうはのたますちうちなひき戀しきかたよれる戀による心かな

同 好 清 輔 朝 臣 忠

ひかりをやさしかはすらんもろこしの玉つむ舟をてらす月かけ  
埋れてくまなき玉はあるものをちりをはらはてねかふはかなき

同 權 僧 正 公 朝

もろこしにありといふなる夜光よるひかるたま〜人ひとをきゝわたりつゝ  
あらはるゝ時こそありけれみよまては石とてすきてしその唐玉たうぎよも

同 實 昭 法 師

なみよする汀あはにすたくほたるこそうらにかへりし玉とみえける  
此歌判者清輔朝臣云みぎはのほたるをうらにかへるたまになし  
たるこそゆるゑありてきこゆれと云々

實 昭 法 師

よゝをへて玉ゆゑなきし人たにも終つひにはかくと知られやはせぬ

源 光 行

此歌判者俊成卿云左歌たまゆゑなきしとは韓子曰楚卞和得つひ

玉璞於荆山一獻つひ之則武王玉人相曰石也、則其右足仞後、文王即

位又獻之玉人相曰石也、則左足仞後、成王即位和抱其玉璞

哭楚山之下、三日三夜淚盡繼之以血玉人治之得實名曰

和氏璧云此心に申をかしく侍と云々

鏡



六帖題鏡

同

同

同

同

同

題不知歌林良材

千五百番歌合

嘉元元年竹園千首御歌山

家集

久安百首

同

伊豫國にて樂府歌百練鏡

仁安二年八月經成卿家歌

合月

題不知歌林良材

新六五

いくたひも心をみかけますか、みうらには影のうつるものは

御かりせぬ野守のか、み時にあはてうつし心もなく、そふる

みかきなす鏡のおもてあきらけみよものすかたの移らぬもなし

いかはかりみかきいてけん秋のふちの水ともすめる増か、み哉

捨やらぬかけはつかしきふるか、みさもそ面はつれなかりける

くもりなき水の鏡のとにかくに見まくかひある世とこそはきけ

ひかり草か、やく影やまかひけん白銅のか、みくもらぬものを

さ根こしのさかきにかけし鏡にて君かときはのかけはみえけん

かこ山のみねの榊葉くちせすはか、みをかけしえたもかはらし

くもりなき鏡の上にあるちりを目にたて、みる世とおもは、や

いさなきのますみの鏡手にとりてうみまもまるとらす月よみ

いかにしてよその思ひをまらせまし野守のか、み君は見すとも

五月雨にとつるまかねをみかきつ、てる日にみゆるます鏡かな

てる月を波の上にてみるときそますみのか、み鑄るこ、ちする

此歌判者清輔朝臣云右百練鏡の心にや波のうへの月まことに一

例秋潭水にことならず侍けんかすと云々

あつまの野守のか、み得てしかな思ひ思はずよそなからみん

衣笠内大臣

民部卿為家

前中納言為兼卿

正三位知家卿

信實朝臣

光俊朝臣

よみ人しらす

前中納言定家卿

参議為相卿

西行上人

實清朝臣

前参議親隆卿

能因法師

祝部成仲

よみ人しらす

永久元年十一月定通卿家  
歌合本

六百番歌合野行幸

家集寄鏡戀

題不知

御集

家集

寒流帶月如澄鏡

家集戀歌中

御集十首御歌合

三百六十一首御歌中

家集寄鏡戀

元日戀

永久四年百首王昭君

みかりするかりはの清水氷けりこれやのもりのかゝみなるらん

古への野守のかゝみけふみれはみゆきをうつすこほりなりけり

戀せしといのる御室のますかゝみうつりし影をいかてわすれん

はふりこは祝ふみ室のますかゝみかけて去のひつあふ人ことに

同 ます鏡たゝめに君をみればこそいのちにむかふわかこひやまめ

ひとりねのねやにかけたる増鏡わか身のかげをとみにたにみん

うちわひて獨ねたれはますかゝみとるとゆめみつ妹にあふかも

こほりわけなかれにすめる月かけはたまくしけなる鏡とをみる

見えぬには影やはうつるます鏡うらなるつるのねをのみそなく

むかへおこならの社のますかゝみなくくたのむ影はみゆらん

山鳥のをたえのはしにかゝみかけきよきよわたるあきの月かけ

照すなる玻璃のかゝみにつみふかく忍ふる戀やかくれなからん

千代までも影をならへてあひみんといはふ鏡のもちひさらめや

見えはやな見えはさりとと思ひ出つる鏡に身をもかへてける哉

同 寂蓮法師

民部卿爲家

よみ人しらす

同

後九條内大臣

人

前中納言匡房卿

俊頼朝臣

後鳥羽院御製

中務卿みこ

源仲正

同

俊頼朝臣

枕

題不知

千五百番歌合

六帖題

同

舊枕古姿誰與爲

千五百番歌合

老若五十首歌合、うきま  
くら

五月雨歌十五首歌中、た  
きまくら

六帖題、こままくら

題不知、つけまくら

家集、こまくら

六百番歌合、草枕

文治六年五社百首

千五百番歌合、つけの枕

寶治二年百首、つけまく  
ら

承久二年四季百首、たま  
の枕

敷妙萬十のまくらせし人ことへやそのまくらにはこけおひにけり  
敷妙萬四の枕を去けるなみたにそうきねを去けるこひの去けさに

吹かせを夢のうちにもいとふかな花にまくらをむすふよなく  
新六五  
ますらをも枕を高みやすきよにひとりなけきはぬるよともなし

とちおける枕さうしのうへにこそむかしかたりの夢はみえけれ  
新六五  
とこのうへにふるき枕もくちはてはかはらぬ夢を遠さかりゆく

露去けきよもきかねやのひまとちてふるきまくらに秋風そふく  
なみのみかたまやの下のうき枕もりきてつきもそでぬらしけり

五月雨に山田のあせのたきまくらかすをかさねて落るなりけり  
新六二  
いまままたよとのにむすふこも枕たかにへ人の去わさなるらん

夕されはゆかのへさらぬつけ枕いつしかなれるぬしまちかたし  
萬十  
ゆひし細とかむ目とほみしきたへのわか小枕にこけおひにけり

はるかなりいく草枕むすひてかその去たひものとけんとすら  
かきすつるあまのもしほの草枕こゝろそとまるわかのうらかせ

いくとせになれにしとこのなりぬらんつけの枕もこけ生にけり  
見しまゝにとこもはなれぬつけ枕されとも人はゆくひやはしる

あまのかるたまもの枕去もとちてわれからさゆるかたしきの袖

人 丸

よみ人しらす

宜秋門院丹後

民部卿爲家

信實朝臣

前中納言定家卿

寂蓮法師

嘉陽門院越前

西行上人

正三位知家卿

人 丸

同

慈鎮和尚

皇太后宮大夫俊成卿

同

正三位知家卿

從一位家隆卿

水無瀬殿御會海邊見登

六百番歌合、あらしの枕

洞院攝政家百首歌

風のたまくら

六百番歌合、はつほのま

千首歌、こげ枕

建保四年百首、あれ枕

家集冬歌中

貞永元年八月十五夜三首

千五百番歌合、いそ枕

寶治二年百首、ちまくら

千五百番歌合

五十首御歌花下送り日

洞院攝政家百首逢不會

雜御歌中

題不知、手枕

すまのうらやもまほの枕とふほたるかりねの夢ちわふと告こせ

ふるさとを出しにまさるなみたかなあらしの枕ゆめにわかれて

こげのうへのあらしのまくら山深てわかる、月に露そこほる、

やとからにせみの羽衣あきやたつかせの手まくら月のさむしろ

花すゝきはつほの枕そのまゝにうらかる、まてとはぬきみかな

よひくにかたしくいはのこげまくらいく秋風の袖になるらん

すかはらやふしみの里のあれまくらゆふかひもなき草の霜かれ

よをへてはうきねの床のあれまくらをしそなくなるいけの氷に

波かくる難波のさとのあしまくら月みんとてやむすひおきけん

月いらはわれもさてやはいそ枕たひねもちかしまかのうらなみ

あらいそのもくつのとこのかち枕袖よりほかのなみになれぬる

せきあへすなみたにぬる、袖枕かはかすなからいくよへぬらん

草の葉にまをればてぬる袖まくら夢やはむすふよはのしらつゆ

花かけのたひねのあらしよころへて月そなれゆく袖のたまくら

朽にけりかはるちきりのすゑの松まつになみこす袖のたまくら

あかつきのねさめのたひにねをそなく後の世おもふそての枕に

前中納言定家卿

同

後九條内大臣

前中納言定家

中務卿のみ、鎌倉

民部卿為家

従二位家隆卿

同

藻壁門院少將

具親朝臣

前納言忠良卿

衣笠内大臣

參議雅經卿

後鳥羽院御製

俊成卿女

光明峰寺入道攝政  
よみ人志らす

家集

百首御歌、かや枕

六帖題枕

家集旅歌、(かや枕)

石清水三首歌合旅宿風

久安百首、こすけの枕

嘉禎四年百首、いな枕

九十九首菊歌中、(あさての枕)

ほうの木まくら 枕

いしの枕

家集つま枕

ゆふ枕(誤)

家集金葉

かへし金葉

よもすから物おもふ時の手枕はかひたるさこそ知られさりけれ

手枕にいれしかたみとおもはずはなみたにくたす袖はおしまし

おのつからいくよをふとも手枕のあかぬ契りにひちやくたさん

秋風にごろみたる、旅ねかなゆひとめられぬかやまくらして

かや枕かりそめふしのさひしきによはのあらしそ友となりける

はつ雁のこすけの枕つくりおけるかひこそなけれ妹しまさねは

夢とのみふしみのさとのいな枕むすひしのちのなさけたになし

あつまやの庭の白きくまきまのひあさてのまくら秋かせそふく

みちのくのくりこまやまのほうのきの枕はあれと君か手まくら

ひとりねの床にたまれるなみたにはいしの枕もうきぬへらなり

河水にかはつなくなり夕されはころもてさむつましくらせん

かみつせにかはつなくなり夕されは河風さむしゆふまくらせん

整

いした、みありける物を君にまたまくものなしに思ひけるかな

名にしおは、身もひえぬへし石た、み片しく袖にころも重ねよ

伊勢

喜多院入道二品のみこ

俊實朝臣

源仲正

法印道清

清輔朝臣

民部卿爲家

爲實朝臣

よみ人あらす

同人

人丸

中納言家持(誤)

皇太后宮大貳

俊頼朝臣

此歌は皇后宮こうきでんにおはしましける比にしおもてのほ  
 そどのにてたちながら物申ける夜のふけ行まゝにくるしかり  
 ければつちにゐたりけるをみて物をまかせまゐらせばやと女  
 いひければいしだゝみも侍つと申をきゝてよめると云々

蕙

たかひてあはぬ戀

六帖題

長承三年六月家歌合、た  
 まのむしろ

家集寄、蕙戀 かむしろ

千首歌、かやのこむしろ

千五百番歌合 さむしろ

寛元四年日吉社歌合、さ  
 むしろ

戀御歌中、あや蕙

家集水上月、みなむしろ

こけむしろ

たまゆかの、おましのはしにはたふれて心はなきぬ君なけれども  
新六帖 道のへにそのぬかりはす蕙うちおのれかつくゝまかそみる  
 つゆのしくたまのむしろのとこなつにやとりやすらん有明の月  
 あつまのゝ露のかりねむかや蕙みゆらんきえてまきまのふとは  
 ひとよねぬあさてかりほす東屋のかやのこむしろ敷まのひつゝ  
 うちはらふをりもありけり床の浦のなみにあれたるよはのさ蕙  
 とへかした身もいたつらにさしむしろひとへに戀る心なかさを  
 あや蕙をになるまてに戀わひぬまたくちぬらしとふのすかこも  
 こかくれて浪のをりま谷かはのみなむしろにも月そすみける  
 み青野のあをねかみねのこけ蕙たれかおるらんたてぬきなしに

俊	頼	朝	臣
信	實	朝	臣
爲	忠	朝	臣
前	中	納言	定家卿
民	部	卿	爲家
大	納言	通具	卿
正	三位	知家	卿
鎌	倉	右大臣	
俊			
人			
丸	頼		

嘉應二年十月住吉社歌合  
旅宿時雨(いなむしる)

いなむしろまきつのうらの松風はもりくるをりそ時雨ともまゑる

清 輔 朝 臣

此歌判者後成卿云左歌松の風に時雨をまがへてもりくるをり  
ぞ時雨ともまゑるといへる心はよろしくみゆるを此いな薙しき  
つの浦うらといはんためおけるなるべしとみゆるを此いなむしろ  
のほんたいうらをおもふにまきつのうら浦にことよかるへしとこそ  
おぼえ侍らね河ならばをかしかるべしすみよしの松のしたに  
はいな薙しうらべしともおぼえ侍らぬ也又いな薙ばかりにてた  
びの心あるべしともおぼえぬ如何と云々作者云いな薙とはた  
びといふ事にはあらぬにや近人の歌にもたびにかへすはいな  
薙とやといへり又ふるき式にみなまゑかせるを見られざるにや  
河にこそあるべけれと侍るはみなむしろをおもひたがへ給へ  
るにやと云々

簾

題不知  
こすげのすだれ

すきたりと許ゆるされすとも玉たれの一間いっけんにかけてみるよしもかな  
玉たまたれのこすの簾すだれをゆきかてにいは寐ねられねときみはかよはず

よみ人あらず  
同

六帖題、しのすたれ

同いよすたれ

百首歌中

こもすたれ

六帖題、玉簾

同あしすたれ

同

御集櫛を古來歌合

戀御歌中、ゆつのもつぐし

六帖題御歌、つけのつま

同さしくし

同

家集物へゆく人にさしくしの箱にかきてつかはしける

新六二一 へたつれとまはらにあめる玄の籬玄のふ人めのえこそかくれね

同 年へて世に煤けたるいよすたれかけさけられて身をは捨てき

詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀 詞花戀

あふ事のまとほにあめるいよ簾いよくわれをわひさするかな

新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一

かやりひのけふりになるゝともすたれ物むつかしきわか心かな

新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一

たえはてゝふりぬるみやの玉簾とにたにみえすなりにけるかな

新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一

すくもたく難波少女かあしすたれよにすゝけたる我身なりけり

同 世中のはてはすゝけのあしすたれあしくかけけるわかか海かな

櫛

とりのしも猶みたひこそおかれぬれ誰を待ともなき身なれとも

明玉 我妹子かゆつをつましくしさしもやはつれなき人を思ひわたらん

をとめこかつつけのつましくしさしもなとうき世の中に心ひくらん

新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一 新六二一

明暮てさし櫛もなくなりけりたけふのせうのとるとせしまに

同 君におきてみせんと思ひしさし櫛をあした夕べに誰かとりけん

さまゝに神をそいのるさしくしのさしはなるゝか心ほそさに

正三位知家卿

光俊朝臣

惠慶法師

俊頼朝臣

衣笠内大臣

民部卿爲家

信實朝臣

後一條入道關白

後鳥羽院御製

中務卿みこ

衣笠内大臣

民部卿爲家

和泉式部



六帖題、つけのをくし  
建長八年百首歌合、つけ  
のさしくし

逢<sup>新六五</sup>ことをとふやゆふけの占<sup>つ</sup>まさにつけの小櫛<sup>こし</sup>もまゐるしみせなん  
おふことをつけのさしくし、さしもやはあたるゆめに心引へき

信實朝臣  
後九條内大臣

どうの治部卿にくしなつかはすとて人にかはりて、玉のをくし

こゝろをはなに、おきてか白露の玉のをくしをさして見すらん  
行へなき玉のをくしをかたみにてなほそのかみを忘れわひぬる  
新後拾遺

少將内侍

前大納言忠良卿

なき人の櫛をみて

君にやるかたみの櫛はわかれちの神にまかせていのれとぞ思ふ

能宣朝臣

かたみのくし

少女子か玉くしけなる玉櫛のめつらしけなく妹に逢はすあれば

大伴耶女

題不知、たまくし

志賀の蟹のめかり鹽やきいとまなみくしけの小櫛取もみなくに

石川少郎

鬘

六帖題

同

新六五  
未永<sup>新六五</sup>くたのみしかとも玉かつらいかなるすちにかけはなれけん  
年ふともよもたえはてしたまかつらむすふくみめのななき契は

民部卿爲家

正三位知家卿

不逢戀の心を

花かつらあかもすそにくりためて花ふく妹をふれすはやまし

俊頼朝臣

一字百首

あけにけりかさして出る山かつら人もみるへきひかりはかりに

前中納言定家卿

百首中歌

いかにしてまらせ初まし小山田のはつほのかつら露かゝりとも

民部卿爲家

弘長三年毎日一首中

ふる雨のかさのかりてのわさほもてなせるかつらにかくる白玉

同

家集

六帖題

萬八  
我妹子かわさと作れる秋の田の旱稻穂のかつら見れと厭かぬ鴨  
新六二  
今はハやあきちかゝらし小山田のわさほのかつら未なひくまで

中納言家持卿  
衣笠内大臣

答箒

六帖題

同

正治二年百首

新六五  
磯柴つむ鬢少女等かはなかたみうらはのなみもかけやそふらん  
新六五  
おのつからかたみにもらぬ水はありて命の止るよやなかるらん  
玄つ女のあかかたみの底はむなしくておいぬわかなに日敷をそ摘

衣笠内大臣  
光俊朝臣  
源師光

火取

六帖題

同

六帖題

同

同

六五  
たき物のこの玄たけふりふすふともわれ獨をは玄らすへしやは  
同  
この下にひとりやわひしたき物のなれも思ひにたえすとかきく  
新六五  
たきものゝくゆる煙の下むせひわれひとりとや身をこかすらん  
新六五  
たきものゝ獨のおきのいきなから灰まきれてもよをすくすらん  
新六四  
諸人のとるやひとりさきたては登るをとめのかこそをるけれ

よみ人ゑらす  
同  
民部卿爲家  
正三位知家卿  
光俊朝臣

挿頭

家集祝歌中

六帖題

同

同

敷島やみわのひはらもよろづ代の君かかさしとをりやそめけん  
左<sup>新六四</sup>藤みきさくらとてとりなれしかさしの花もむかしなりけり  
同 うきことにゆき隠れてもみてしかな山のまげりにかさしノて  
同 ことに出で時の花をもかさしこしきさらき八月いつかわすれん

從二位家隆卿  
衣笠内大臣  
正三位知家卿  
光俊朝臣

祓麻

同題ぬき

同

同

洞院攝政家百首旋

爲家卿家百首

文治六年五社百首

ぬき

新六四 いまひとめいもをみむろの神にこそぬさとりむけて祈わたらめ  
新六五 いまは我すてられなからあさぬさの君かてなれし時そこひしき  
新六四 なみたつるぬさの遣風はやければまかちまげぬきわたるふな人  
このもりの紅葉の錦たてなからみちのたよりにぬさたてまつる  
けふの日はぬさよくまつれ船人のかとりのおきに風むかふなり  
あふさかの關もる神にたむけせしぬさのまるしは今宵なりけり  
萬十三 すへかみにぬさとりむけて我こえんゆき逢さかの山とわかるな

衣笠内大臣  
民部卿爲家  
光俊朝臣  
家長朝臣  
從二位家隆卿  
皇太后宮大夫俊成卿  
人丸

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

同  
同  
同  
願不知  
從筑紫上京時

喜多院入道二品親王家五十首  
同五十首述懷  
正治二年百首  
旅歌中  
六帖題をり  
後鳥羽院御時御撰十首歌  
喜多院入道家五十首歌旅  
百首歌旅戀

六四 千佐日記 野宮  
わたつうみの千尋のそこに手向するぬさの追風やますふかなん  
同  
そめたちて祈れるぬさの思ひとはたむけのみちの神やゑるらん  
同 寶之集  
たつぬさの我思ひをはたまほこのみちの奥ことに神もつけなん  
萬十  
あはなくにゆふけをとふとぬさにきりわか衣手は又そつくへき  
萬四  
ちはやふる神の社にわかかけしぬさはたはらむ妹にあはなくに

よみ人志らす  
同  
同  
同  
土師宿禰水鏡

### 志折

たひころもあかつき露に袖ぬれていくをりしつゑらぬ山路に  
花の烈になれし心やよしのやまをむかんみちのをりなるへき  
柴の戸のあとみゆはかりをりせよ忘れぬ人のかりにもそとふ  
みわの山杉のをりを去るしにてたつきも知ぬかけちをそゆく  
新六六  
いくをりはのさ枝は分過てはてはおよはぬおくのみやまき  
をりしてならひにけりな里人のかへる山路にいづるつきかけ  
夕くれはくもにをりのみちたえて名をたにきかぬとりの一聲  
かりにゆふ葉もゆきにうつもれてたつねそわふるもすの草くき

野宮 左大臣  
正三位季經卿  
前中納言定家卿  
俊頼朝臣  
信實朝臣  
如願法師  
寂蓮法師  
前中納言定家卿

刊本

標

百首歌

建保二年内大臣家百首  
寄名所戀

光臺院入道五十首歌

寄壇述懷

家集

題不知

同

同

同

題不知

同

同

題不知

永き世のためしにひかん鈴鹿河こえていつまのわたらひの玄め

かづらきや高間の山にさす玄めのよそにのみやは戀んと思ひし

さゝなみや山に玄めゆふ人はなしつりする蟹やゆきにいつらん

今はけに神のいかきもこえぬへく思ひつゝくるやへの玄めなは

あさち原をのに玄めゆひ契るともいつはり人をいかゝたのまん

淺茅原をのに玄めゆふ空ことにかなりといひて君をまつらん

山たかみ夕日かくれぬあさち原のちみんために玄めゆはましを

春日野にあさて玄めゆひたゝめやと我思ふ人はいやとほなかに

君に似る草と見しよりわか玄めし野やまのあさち人なかりそも

思ひあまりいともすへなみ玉たすき雲ぬる山にわれ玄めむすふ

紀の國の室のはやわせひてすとも標をははへよもると知るかね

足引のいはねを清みすかのねのひけはかたしと玄めのみそゆふ

山ぬしはけたしありとも我妹子か玄めむすはむを人とかめやも

遅れるて戀つゝあらずはおひきかんだのくまわに玄めゆへ吾脊

從二位家隆卿

從三位行能卿

大納言雅忠卿

從二位家隆卿

よみ人志らす

同

同

中納言家持卿

よみ人志らす

同

中納言家持卿

大伴駿河丸

但馬皇女

夫木和歌抄卷第三十二終

夫木和歌抄卷第三十三

雜部十五

題

衣綾櫃網

裳錦斤繩

袴綿車緒

袋布樋網

紐絲筏魚

梁

帶機

船付梶

衣

六帖題

同

文永二年七月白河殿七言

六帖題

新六五

山かけの櫻あさもておるころもはなのたもとの名をやたつらん

つかふとして著しや衣のさかさまに年はゆかなんいまになるやと

さかさまに夜半の衣をいそきつゝ君につかふる身をはやすめす

さかさまに著るや衣のとしもへぬつかふるみちに急くならひは

民部卿為家

同

前大納言為氏卿

前中納言為家卿

建長七年顯朝卿家千首中  
擣衣聲悲

六帖題

柿本影供百首

服なる女のもとへ月あか  
き夜のつき日

家集

衣をよめる歌に

久安百首

同百首名歌(すゝりはこ)

或抄物中いろ／＼衣

建保四年院號庚申久戀、  
(は)かり衣

隆信朝臣四品して今日悦につかはしたる言葉、にひ衣

題不知、(に)ひくわまゆ  
のきぬ

長歌にしきの衣

六帖題とき衣

すつる身の衣をなに、たとへまし山路のこけのなき世なりせば  
古來歌

ふく風にごゑうらむなりまくすもておれる衣をたれかうつらん  
新六一

雪ふりてたけのよことのさむけきにゆるす衣のみへやきてまし  
古來歌

あさかほにそめし衣をぬきしよりつねなき世とは思ひ去りにき  
新古哀傷

ほしあへぬ衣のやみにくらされて月ともいはすまとひぬるかな  
龜鏡 袖中十五

うすはたにおれる衣は夏きてもはるのかけつ、おしまれしかな  
かしたは木のゆはた染むてふむらさきのあはむあはしは灰の心も  
逢事はわかかけよそひのきぬなれや年はゆけともさせる日もなし

人去れすすりはこのますみち奥の忍ふのもちもなに、かはせん  
古來歌

玄つめのめかつま木とりにとあさをきていろ／＼衣袖まくりしつ  
萬代

かくてしも世をやつくさん山とりのはつかり衣くちはてぬとも

むらさきのはつ玄ほそめのにひ衣ほとなく色のあかれとぞ思ふ  
萬十四

つくはねのにひ桑まゆの絹はあれと君かみけ玄の綾にきほしも  
萬十六

さにつらふ、色になつける、むらさきの、錦の衣、すみのえの、と

ほさとをの、まはきまで、にほらしききぬに

新六五  
あさましや玄つかいものととき衣ふみあらはれは人もこそしれ

光俊朝臣

同

前中納言高定卿

道信朝臣

祐舉

よみ人まらす

藤原季通朝臣

前參議親隆卿

よみ人まらす

後久我太政大臣

清輔朝臣

よみ人まらす

同

民部卿爲家

民部卿爲家

民部卿爲家



家集

六帖題のれ衣

同をかころも

長久二年四月土

堀河院御時百首

家集

同寄衣戀

同かり衣

六帖題

天仁二年四月師時卿家歌

合寄衣戀

同かたみの衣

題不知

詠仙人形(かは衣)

六帖題

同

萬十

とき衣の思ひみたれてこふれともなと汝かゆ烈ととふ人もなし

新六五 世中にうきぬれ衣の機はりはのへも去たしめもせられやはせむ

同 梅かえの一しほすりのをみころも色こきよりも目にそたちける

年をへて日かけにみれとをみ衣するめことにもめつらしきかな

をとこ山かさしの花も春なれはをみのころもはゆるなりけり

八少女のをみのころものゆかしきはなれぬほとを誰か忍はん

から衣ふちのまる屋はあやにくに重ねもあへすぬきすてこし

新六五 かり衣ほやのあやすりうちはへてあけのゆひも結ひしてけり

かりころもわくる野原の去はすりにうつろふ露の色そみたる

いろくの柳さくらのかりころもたちましろひし昔をそおもふ

我戀は去つのかりきぬをのか身にあはぬことをもなけきぬる哉

去たにきるかたみの衣あはぬ間にそてやくちなん涙ほしあへす

萬九 わかせこか形見の衣つまとひにわか身はなたしことほすとも

とこしへになつ冬ゆけやかはころもあふきはなたす山にすむ人

新六五 山ふかくおこなふみちのかは衣よものかせきもきてなれにけり

同 谷ふかくかはのころもに身をかへてうき世へたつる雪の山ひと

同 わさつのをかたみかけたるかは衣けふのみあれを待たりけり

人 丸

信 實 朝 臣

同

よみ人 去ら ず

仲 實 朝 臣

伊 勢

俊 頼 朝 臣

同

正三位 知家 卿

衣笠 内大臣

源 顯 國 朝 臣

寂 念 法 師

よみ人 去ら ず

同

民部 卿 爲 家

光 俊 朝 臣

衣笠 内大臣

同題歌かは衣

寶治二年百首寄戀衣

安元元年閏九月歌合月照山雪(かひのけ衣)

久安百首

元應元年正月十日中院入道右大臣家歌合戀(たまの衣)

六帖題御歌たま衣

弘長元年百首袖つき衣

建保三年名所百首月の衣

題不知(つるはみの衣)

家集戀歌中、ねすりの衣

三百六十首中、ねころも

百首戀歌中(なれ衣)

建長三年七首歌合月恨戀、涙の衣(うすそめ衣)

題不知(うすそめ衣)

三百六十首中うすら衣

擣衣歌(うつらの衣)

なにかいとふ霜夜きつねのかは衣けむつかしとてぬきも捨ぬに

なれくしとはふるきのかは衣君きまさねはあたらさむけし

月かけにかひのけ衣さらすかとみれば去らねの雪にそありける

ふり積る白根の雪はいなをさのかひのけころもほすとみえけり

こひむふる涙の袖をあちきなくたまのころもとひとや見らん

袖をたにひきもとめす玉ころもたまきてはいそく君かな

秋はきはうつりにけりなみや人の袖つきころもいろかはるまで

去ろたへの月の衣手かたしきてねぬ夜あまたのうちのはしひめ

つるはみの衣ときあらひまつち山むかしの人になほしかすなり

みかりするかきのねすりの衣手にみたれもとろに去めるわか戀

わきもこかさ夜のね衣かさねきてはたへを近みむつれてそぬる

てもたゆく去ほるなみたになれ衣なれぬ人ゆ列そてやくちなん

うき人になみたのころもひきかへしやとすとかたれ袖の月かけ

くれなゐのうすそめ衣あさはかにあひみる人にこふるころかな

せみの羽のうすら衣になりゆくになとけぬ山ほとゝきす

いまもなほ野となる里に誰すみて秋はうつらのころもうつらん

權僧 正公朝

正三位知家卿

太宰大貳重家卿

前大納言隆季卿

神祇伯顯仲卿

中務卿のみこ

前大納言爲氏卿

從三位行家卿

よみ人まらす

大納言經信卿

好忠

安嘉門院四條

民部卿爲家

人丸

好忠

從三位廣範卿

信成卿北野會にて旅浦嵐  
(うらわけ衣)

六帖題のりの衣

三十首歌旅宿(雪の衣)

百首歌残雪、(やなきの衣)

題不知(やしほの衣)

同

家集ふる衣

天仁三年四月師時卿家歌  
合寄衣戀ふち衣

貞應二年當座百首初戀

寛元四年 日吉社歌合、ふ  
かそめ衣

六帖題御歌雜戀、またら  
衣

題不知

こけ衣

千首歌

中務卿親王家五十首歌合

法眼定忍にあひて侍し時大峯の物語せしを聞てよめる(こけおり衣)

夕あらしうらわけ衣ふきはらへもしほのけふりそでにたなひく  
ときおきし法の衣をわかものとあらそひてひくゆめもまさしや

かへすとも雲のころもはうらもあらし一夜夢かせ峯のこからし

松のうへに降しら雪も春たてはやなきのころもほすかとそみる

唐あるのやしほの衣あさなくなればすれともましめつらしも  
雲葉の織古戀四  
かくはかりありける物をくれなるのやしほの衣なに、そめけん  
ふるころもうちすつるひとは秋風のたちくる時に物思ふものを

あひきするたてしのあまのふち衣なにのためにか袖はひつらん

とは、やな玄ほくむあまの藤衣おもひたつよりそてはぬるやと

けさはまたつゆをかこちて月くさのふかそめ衣かへるつらしな  
うき戀はまたら衣のとにかくにひといろにやはそてもぬれける  
今つくるまたら衣のおもかけにわれにおもほゆあまたきねとも  
六五 萬七

こけ衣ちふ串もよみふ串持てこのをかに榮つむす子かいへさけ  
えそゝめぬ身をおく山のこけ衣おもへはやすき世とは玄れとも

山ふかき谷のかきほのこけころも露けきほともたれかきてみん

すゝかけの苦おりきぬのふる衣をてもこのもにきつゝなれけん

從二位家隆卿

權僧正公朝

從二位家隆卿

六條院宣旨

よみ人未らす

亭子院御製

人丸

仲實朝臣

民部卿爲家

正三位知家卿

中務のみこ鎌倉

よみ人未らす

雄略天皇御製

民部卿爲家

左兵衛督教定卿

鎌倉右大臣

元永元年六月八條太政大臣家歌合夏月判者修理大夫氷の衣

題不知(あはころも)

六帖題御歌あさ衣

六帖題

建長三秋十首歌合秋露

長歌

六百番歌合寄雨戀

六帖題あわせ衣

題不知或抄中

家集戀歌中

家集きころも

久安百首きそのあさきぬ

堀河院御時百首祝の衣

二所へまうてたりし下向に春雨のいたくふりけるに(みちゆき衣)

夏なつのよよのそらさへわたる月かけにこほりのころもきぬ人そなき

ことしゆくゆくにひひままもりかあさ衣かたのまよひは誰かとりみぬ

逢あふふことはにひひままもりか肩かたにきる麻あしのころものままとほなれとや

賤しづの女をかあつまからけのあさ衣ふたまたかしはさそわたるらん

ゆきあはぬかたのまよひに霜しもそおおくにひひままもりかあさあのさ衣

かかつつしかの、ままのてこなか、あさきぬに、ああををふふすすままきて、

ひたさを、もにはおりきて、

えたとほる涙なみだに袖そでもくちはて、きるかひもなきあまころもかな

少すく女子こかあはせ衣えのかくれつつまうすすきちきりにうらみわひつ、

須磨すまの浦うらに玉たまもかりほすあまころも袖そでみつえほのひる時ときやなき

浪なみかつくあまのさ衣えそそてをなみうらみありともなにをえほらん

秋あききりのたちぬるすから心こころあてにいろなき風のきころもにしむ

さらしなやきその麻あしきぬ袖そでせはみ著きたるかひなし胸むねしあはねは

君きみかためゆはたのきぬをとりして、かかみにそまつる萬代まんだいまでに

春はるさめはいたくなふりそ旅人りょじんのみちゆきころもぬれもこそすれ

源 仲 正

よみ人まらす

中務卿のみこ

信實朝臣

大納言通具卿

蟲丸

法橋顯昭

衣笠内大臣

よみ人まらす

從二位家隆卿

好忠

前參議親隆卿

修理大夫(顯季卿)

鎌倉右大臣

題不知(まろあさ衣)

まろたへころも

六五 拾雜上 萬七  
とにかくに人はいふともおりわかんわかたものゝまろあさ衣  
君にあはすひさしきときはおりきたるまろたへ衣あかつく迄に

人 丸  
同 殿富門院大輔

百首歌

正治二年百首御歌(まほすり衣)

なれもきぬまろたへ衣かけほすは夏のかきねのあるしなりけり  
いはねふむやまのたつきの夕されはまほすり衣うちまをれつゝ  
くさまくらまのゝ衣の夕まくれいかなるいろをわきてそむらん

第三のみに  
權大納言忠信卿

建保五年歌合冬夕戀(まほ保衣)

建保四年内裏百首歌合秋歌(まほの衣)

まろたへへの霜のころもをうちわたすをちかた人や袖にまろらん  
消わふる霜のころもをかかねても見る夜まれなる夢のかよひち

光明峯寺入道攝政  
後久我太政大臣

同五年歌合冬夜戀

光明峯寺入道攝政歌合行路見戀(まほの衣)

まられしなまのふの衣ゆきすりの人めはかりにみたれわふとは  
うつりふし心の色にみたれつゝひとりまのふのころもへにけり  
すゝか川誰か名をたてゝいせの蟹のまほなれ衣ふすりてゝけり

從二位家隆卿

家集戀歌中

弘長元年百首(まほなれころも)

新六五  
あまのすむまかきの嶋のなみの間にまほやき衣かけてほしつゝ  
萬三十一  
須磨の蟹のまほやききぬの藤衣ま遠にしあれはいまた著馴れす

民部卿為家

六帖題

題不知(まほやききぬ)

からき世にさてや慰む方やあらんまほやき衣の間とはなりせは  
山あゐのひとしほころもいろそへてかさしに匂ふ花さくらかな  
つき草にそてすりません秋萩のひとはなころもいろふかくとも  
くみぬらすもしほのころもふきほさて風のみせたるうらの月影

よみ人未らす  
民部卿為家

毎日一首中

寛喜元年女御入内御屏風(ひとしほ衣)

山あゐのひとしほころもいろそへてかさしに匂ふ花さくらかな

常磐井入道太政大臣

ひと花衣 弘長三年百首

つき草にそてすりません秋萩のひとはなころもいろふかくとも

後九條内大臣

永仁三年内裏御會(まほの衣)

くみぬらすもしほのころもふきほさて風のみせたるうらの月影

爲實朝臣

すゝかけ衣  
三百六十首中（すみやき  
衣）  
建仁元年十五首寄衣戀  
（すり衣）  
三百六十首中（すゝみ衣）

みよしの、苔路をつたふ山ふしのすゝかけころも露にぬれつゝ、  
冬やまのすみやきころもなれぬとて人をは人のたのむものかは  
みしかけよさてや山あわのすり衣みそきかひなきみたらしの波  
さくら波たちておりつる水のあやは夏の河原のすゝみころもそ

衣笠内大臣  
好忠  
前中納言定家卿  
好忠

六帖題

新六五  
我妹子か繪裳のひきこし長き夜をかけてそ契るあかぬあまりに

衣笠内大臣

同

引かけて思ひなよりそあから裳のあからさまにも人走りぬへし

民部卿為家

同

たをやめはうは裳を結ふうす色のうすきを夏のゑるしとや見ん

正三位知家卿

同

たかためもなかきちまりを我妹子か上裳のこしのためしにそ引

信實朝臣

久安百首

衣手そさえわたりけるあられち我か裳のこしにきればなり鼻

郁芳門院安藝

家集人の裳き侍に

住吉のうらのたまもを結かけてなきさのまつのかけをこそ見め

元輔

宰相もとすけの朝臣の女  
のもき侍りしに

むすひあくる君か玉裳のひかり見はさやけき月のかけそ添らん

同

袴

刊本

0 0 0

題不知  
三百六十首中  
六帖題おほたかあり

まふくたか修行に出しかた袴けのすわれこそぬふれいしかそのかたはかま  
あやめまよふく賤しのさはかまぬれくも時にあふと思ふへらなる  
降雪におちくまさとむる犬かひのかはのはかまはみるもおそろし

行基菩薩  
好忠  
權僧正公朝

0

家集

袖みれはうれしきものををつゝみたる袋かへしつかけてのみ見ん  
此歌或所にきちやうのかたびらいてまゐいらせればふく  
ろかへさせ給へるに

和泉式部

紐

0 0 0 0 0

同  
題不知(かたひも)  
寄見物戀(あかひも)  
題不知(ゆはたのひも)  
俊忠かもとにて戀十首歌

眞之集 六五  
あけたては松さす紐ひものいとよわみたえてあはすは猶やみたれん  
萬十一 六一 同返  
かきりなく人はいへともこま鑑我かたひも結むすひあへなく  
忘れすやかさしの花の夕はへもあかひもかけしをみのすかたは  
萬代 續後拾遺  
逢あことは片結むすひするわきもこかゆはたのひもよいつかとくへき  
心みゆはたの紐ひもをときそめてふかくまみなんいろはかはらし

貫之  
よみ人志らす  
大納言經信卿  
基俊  
殷富門院大輔





御集

後法性寺入道關白家初逢戀(あてのまたおひ)

光明峯寺入道攝政家歌合六首歌中行路見戀

六帖題

同題御歌帶

同

弘長百首初雁(くもの下おひ)

六帖題(かけおひ)

同(石のおひ)

題不レ知(まつはたおひ)

家集寄レ帶戀(菊の花おひ)

奈良歌合

家集

六帖題(綾)

谷川のこほりのおひやむすふらんおとこそきかねきひのなか山(玉戀)  
ときかへしゐての下おひゆきめぐりあふせうれしき玉河のみつ

露をおくゐての下おひさはかりもむすはぬのへの草のゆかりに

いまさらにむすふ契もたのまれますひとに解くげゑるてのしたおひ

すゑにたにめぐりあはなん山城(しやうじやう)のゐての下おひちきりたえすは

山しろのゐての下帯おびいくよへてむすふちきりのあはれえららん

山もとのくもの下おひなかき世にいくむすひして雁もきぬらん

をりまもあれえやは心をかけ帯の思おもひはむねのへたてなるへし

思おもひきや我身去つめる石のおひのうはてに人をかけてみんとは

いにしへのまつはた帯をむすひたれ誰たれといふとも君にはまさし

君やささはひら緒の下にはほの見えてのこりゆかしきさくの花おひ

綾

くれはとり二むら山をきてみれば目もあやにこそ月はすみけれ

うらもなく今はひとへに我妹子(わがむすめ)かあひみそめけんくもとの綾

吹(ふ)はらふ風(かぜ)にたよふくもとのあやしやうきて世を過る身は

西園寺入道太政大臣

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

民部卿為家

中務卿のみこ

よみ人えらす

後九條内大臣

信實朝臣

光俊朝臣

中納言家持卿

源仲正

俊頼朝臣

修理大夫顯季卿

民部卿為家

同  
同  
家集木のまの月おもしろ  
きをみく  
六帖題御歌(あや)

人の國に織てふはとりつたへても怪しやいかにこゝにしもさる  
つちにひく春のころもの一かさね千のこかねの數にまされり  
庭のおもそ夜るのあやとはなりにける木の下蔭の月のまに  
江のみなみ春ゆくみつのいろふかくそめし衣手あやに著まほし

前中納言爲兼卿  
權僧正公朝  
能因法師  
中務卿のみこ

題不知

兵部卿元(良辨)親王家歌  
合曉別

をくるまのにしきのひもとけん時君もわすれよ我もたのまし  
春の夜のあかぬわかれのあかつきは千重に錦をたつにまされり  
ふる里に又もかへらは後の世にちへのにしきを著てもなにせん

よみ人志らす  
同  
正三位知家卿

六帖題(にしき)

同

夢にみし夜のにしきのたまくにはかなや人のなとまとひけん  
らむせいのにしきの色もいかならんかさへにはへる山さくら哉

光俊朝臣  
民部卿爲家

貞應三年一字百首歌

久安百首

花にしきをわらはは人の山さくらひとむらぬすめよものやまかせ  
紅葉する秋のやまのぬれにしきはせとや雨のおしはれぬらん

待賢門院安藝  
源仲正

家集ぬれにしき

こまにしき  
紐

限なく人はいへともこまにしきわかたひもむすひあへなく  
こま錦ひもときあけて夕ともまらぬいのちをこひつゝやあらん

よみ人志らす  
同

同

旋頭歌題不知

高麗錦紐の片えそ床に落にける明日の夜來むと言せは取置て増  
人

丸

家集聖夢露(とこにしき)  
承安元年八月全支法印歌  
合月

あさ露のおきゐる庭のとこにしきたかしきまの山となてしこ  
から國のにしきにおれることの葉も見えぬはかりにすめる月影

俊頼朝臣  
玄有法師

此歌判者清輔朝臣云何事にか侍らん文にくらき者己子細にまど  
へり若朗詠集に侍織錦機中己辨相思之字と云文の心にや凡は  
本文を詠歌事は古人誠之昔歌にはいとみえず就中に歌合  
にはよしなき事なりと云々

布

六帖題

布

家集遠村卯花  
六帖題御歌

寄布戀(たくぬの)

堀河院御時百首(けふの  
せは布)  
文治六年五社百首(けふ  
のほそ布)

新六五  
さほ川にをりはへさらす手作はなみのかけたるいろかとそみる  
六五 細中十五  
をち方に白き花こそいなをさのかひのてなこのさらすてつくり  
むかつをのはたのかこひの卯花や玄つのさらせるてつくりの布  
思へた、けふのさぬの、あさ衣きてもあひみぬむねのくるしさ  
玄かまなるいちめかもてるかちぬの、色ふかくのみ人を戀つ、  
いかなれは戀にむさる、たくぬの、なほさゆみなるひとの心そ  
石文のけふのせはぬのはつくにあひみてもなほあかぬけさ哉  
錦木のちつかのかすよけふみちてけふの細ぬのむねやあふへき

衣笠内大臣  
よみ人あらす  
源仲正  
中務卿のみこ  
同  
源仲正  
仲實朝臣  
皇太后宮大夫俊成卿

布六帖

卯花作牆

六帖(卯花)あさ布(卯花)

同(をみのあさ布)

同(おく布)

同(かたひら布)

後拾遺 錦木はたてなからこそ朽にけれけふのほそぬのむねあはしとや

うの花のかきねなりけり山かつの月にもさらすけふとみつるは

世のすゑの習ときけとあさ布のうすくなりゆくたみいとほし

新六五 二にあふをみの麻布とちかけし宵あかつきもそのかみのもと

同 いまは世にあるもまれなるおく布のもちゐられしは昔なりけり

同 いかにせんかたひら布の片よりは身をかへすへき物とやはみる

よみ人ふらす

俊頼朝臣

權僧正公朝

民部卿爲家

光俊朝臣

正三位知家卿

綿

同 駿 綿

同 新三二

同

同

同

同 題不知

同 駿河なるふしのくわこのにひわたはたかねの雪の色に似るらし

同 去きしまや大和にはあらぬ唐人の植てしわたのたねはたえにき

同 秋のくるよはの衣のひとへわたひとへになほそかせは身にまむ

同 それも又子を思ふはの綿なればいつかはあしの花もうらみし

同 哀れ我が身はくわこにそ成なましわたの端山のたすけさりせば

萬三 去らぬひのつくしのわたは身にひけていましはきねと暖にみゆ

民部卿爲家

衣笠内大臣

正三位知家卿

光俊朝臣

權僧正公朝

沙彌滿誓

絲

題不知

六帖題(まげいと)

承安五年三月重家卿家歌  
合逢不逢戀

六帖題

戀歌中歌苑抄

日吉社歌合(あさのうみ  
糸)

同

六帖題(わくてのいと)

家集戀歌(てそめのいと)

洞院攝政家百首怨戀

同百首不會戀(かた糸)

六帖題御歌

同

同

雲葉  
浪かくる玉えの糸をくりかけて玄のほすてふころもおるらし

新六五  
我がこひは玄つの玄け糸くりかねていかなるふしに思ひ立らん

よふたひにくれともなとや玄け糸のよるは心にまかせさるらん

新六五  
ひとすちに心もいはまは玄け糸のうきふしかちに世のなりしより

ことわりや絶れはこそはみたるらめふし玄けかりし賤の玄け糸

玄つのはたの麻のうみ糸よるともたえにしのはあは物かは

新六五  
玄つのめかすかくるいとに露そひて思ふにたかふ戀もするかな

われかくてわくての糸の幾めぐりのちなかくて年をへぬらん

かうちめの手染の糸のみたれあひてよりあふへくもみえぬ君哉

なか／＼に絶もはてなて河内女の手染のいとむすほれゆく

よりかけてまたてにかけぬ玉の緒の片糸からたえやはてなん

機

かけておる賤か麻はたあさましやまとほにたにも君かきまさぬ

新六五  
あさはたにおるてふ布のぬきを荒み夜はの嵐えやはふせかん

同  
山道やみのひろきぬおるはたのおよひくるしき戀もするかな

貫 之

衣笠内大臣

勝命法師

民部卿為家

鴨長明

民部卿為家

西行上人

正三位知家卿

修理大夫顯季卿

從二位頼氏卿

前中納言定家卿

中務卿みこ

衣笠内大臣

民部卿為家

同 同 正三位知家卿

同 同 光俊朝臣

戀歌中 同 權中納言長方卿

同 同 同

同 同 同

六帖題 同 同

同 同 同

同 同 同

同斤 同 同

寛平御時后宮歌合 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

家集秋歌中 同 同

雜歌中 同 同

同 同 同

同 玄くれつ、秋のみけしをそめはたのおるてにあかすたつ嵐かな  
同 山かつのあさてにかけておる機のおさくしきは我身なりけり  
戀歌中 玄つかおる貢のあさのすちよわみくるしき戀のまげきふしかな

はかり 斤

新六五 たれもみな心にかけて思へかしかうのはかりのおもさかろさを  
民の戸に秋をさめするいなはかり年ある御代をかけてまらし  
あしひきの山にかけたる水はかりかたさかりにもおつる瀧かな  
かけ稻のはかりの石はおもくともことは民のうれへあらしな  
新撰萬六五 かけつれば千々の黄金も数えりぬなとわか戀のあふはかりなき

櫃

錦をはいくのへこゆるからひつにをさめて秋は行にやあるらん  
をりひつに花のくた物つみてけりよしの人のみやたてにして  
此歌はみやたてと申けるはしたものとしたかくなりてさまか

衣笠内大臣  
正三位知家卿  
信實朝臣  
權僧正公朝  
よみ人あらず

西行上人  
同

へなどしてゆかりにつきてよしのにすみ侍ける思ひがけぬや  
うなれどもくやうをのべんれうにくだ物をかうやの山へつか  
はしたりけるに花と申くだ物侍けるをみてつかはしけると云

云

車

百首御歌

七十に成て昔<sup>し</sup>人の<sup>詩</sup>にまかりてよめる

車

正喜二年毎日一首中

永仁元年楚忽百首

十題百首小車

建久七年百廿八首

百首歌

六帖題

同

人こゝろうしともいはし昔よりくるまをくたくみちにとへて  
かそふれは車をかくるよはひにて猶この世にそめぐりきにける  
はま人のとまやのそこはあれぬらんのせてかへりし小車のおと  
をしほ山めぐりくるまの玉すたれゆくすゑかけて神やまららん  
物見にといつるくるまに心かけてすけるすたれのあふ<sup>おぼ</sup>忘るな  
霜<sup>よ</sup>ふかくおくるわかれの小車にあやなくつらきうしのこゑかな  
行なやむうしのあゆみにたつちりの風さへあつき夏のをくるま  
山かつのあふさかこゆるをくるまに心やりたるあかつきのこゑ  
老か世にまたまちたてぬ小車をつたふちからのなきそかなしき  
小車の道のをのまつはやともせわたりもみえす日はくれにけり

後鳥羽院御製

俊頼朝臣

源有長朝臣

民部卿為家

藤原為顯

前中納言定家卿

同

寂蓮法師

信實朝臣

同

家集戀歌中

堀河院御時百首

家集乍臥無實戀

三十六人歌合初逢戀

千首歌(淀車)

六帖題(すき車)

同(ちから車)

冬歌中(すみの車)

正治二年百首(炭つみ車)

六帖題あふひ(かさり車)

法輪百首寄(水流懷(すみ車))

家集寄(車戀(から車))

深夜寄(霜戀(まのひ車))

承安三年七月右大臣家歌

合水月(みつくるま)

御集

隠居百首

柴車

宵／＼に錦のひもはとくれともなと小くるまのおとたにもせぬ

又いかにむすひかくらんをくるまのにしきの紐はとけにし物を

小車のわつかにとははみつれともにしきの紐はとりてかへしつ

小車のにしきのひもはとけにけり去ちのはしき百夜つもりて

ふかき夜の竹田河原のよとくるまあかつきかけて音きこゆなり

新六(五ノ)哀れなとかものみあれのすき車かさりてわたる世となりけん

同行なやみちから車もひくになりむそちあまりのなけきつむとて

雪をこそつみあまりつれ市の南かとのほかなるすみのくるまに

去つのをかおのかわたらひいとなみて炭つみ車ゆきゝ去るなり

年(とし)ことにみるもめつらしみあれいのあふひかけたるかさり車は

いさひきてこほりをきしるすみ車おもきうれへは我をまさされる

我を君あはぬ戀とやからくるまやまとことゐのかけすまひする

さよふかす忍(しの)び車のうはしろに去(こ)もふるまでもにたてれとや

はやきせにやとれる影をくみあけて月の輪(か)かくる水くるまかな

なかめやるうちの河せの水くるまとはにこそ君はかけられ

せたえする去らすにたてる水車よにめくるへきこゝちこそせね

柴車おとすみやまの谷ふかみくたりさかなる身にこそありけれ

前中納言匡房卿

仲實朝臣

俊頼朝臣

正三位經家卿

民部卿爲家

同

正三位知家卿

權僧正公朝

源師光

權僧正公朝

源仲正

同

同

同

中務卿のみこ

民部卿爲家

同



正喜二年暮春歌

久安百首

家集(つみ車)

戀歌中

かたそはの小さくたりたぐりの志は車とめかねたる春のくれかな  
あやふまてみねかりくたす柴車たぐりのりにこゝろやそみかくたなる  
妻木こるをの山へは霧こめて志はつみくるまみちやまよへる  
河こしの柴つみくるまいかゝするこほりのくさひ冬はたへまし  
みきは行柴つみくるま氷うすみくたくはかりに物をこそおもへ

權僧 正公 朝  
花園左大臣家小大進  
前齋 宮 肥 後  
前中納言匡房卿  
同

樋

百首御歌(かけひ)

千首歌(竹のわれひ)

家集(ふたひ)

題不知

永久四年百首落葉

家集(うちひ)

六帖題田かほのうちひ

同いしひ

同かはらひ

里とほくはやまの道やなりぬらんかけひのみつの音をまれなる  
かけわたす竹のわれひにもる水のたえくにとふ人をなき  
玄めはへて山田の志たひくちぬらんさなへも志つむ五月雨の比  
水鳥六三(萬十)のかものすむ池の志たひなくいふかしきみをけふ見つる哉  
あふ坂のかけひのみつになかるはとおとはの山の紅葉なりけり  
傳へくるうちひをたえすまかすれば山田は水もおよはさりけり  
水新六三わくる田河たがのうちひうたがし田にかはくまなくてくつる袖かな  
同まかせつるいしひの水の下にのみすますこゝろは志る人もなし  
踏同こゆる道にふせたるかはらひの杓とも知らしうつもる身は

順徳院御製  
民部卿爲家  
従二位家隆卿  
よみ人未らす  
源 兼 昌  
西 行 上 人  
民部卿爲家  
衣笠内大臣  
光 俊 朝 臣

同いほておもふ

嘉祿百首(竹のかけひ)

久安百首(かけひ)

懸樋水曉になれば音まさるを聞て

忍ふわけてうつほ柱にかくるひはもるてふ水のくちやなからん

山もとの竹のかけひをもる水のわりなき世をもすみわたるかな

はしり井のかけひの水のすしさにこえもやられすあふ坂の關

ねぬほとに夜や朋方になりぬらんかけひのみつの音まさるなり

信實朝臣

民部卿爲家

清輔朝臣

前大僧正行尊

### 筏

宇治綱代あはする所に筏おろす

久安百首

御集

柿本影供百首

東宮女御賀御屏風歌よしの河くたす

家集大井道邊に

雑歌中

大井河行幸あそふかもめ人になれたり

あしろ木にいさよふ浪のよるをみて暮ぬ日をさへ急くいかにたし

となせ河こすいかたしのつなてなは心ほそきはとしのくれかな

蘆分のみなどのいかたさはりおほみ我思ふ道やこほりはつらん

我なけきやむ時もなくつみおけといつかいつみの柚のいかたし

吉野がはおろす筏のをりことにおもひもやますなみのこゝろを

風ふかはとなせにおとすいかた士のあさのころもに錦おりかく

いかたしにあふ柚川のみをつくしおしのけられてすくる比かな

大井かはみなわさかまくいはふちもたむ筏のすきかたのよや

えち河にいはこすさをのとりもあへす下す筏のいちはやのよや

夜とゝもにいかたをくたす河なればかもめも人におも馴にけり

祐舉

待賢門院安藝

後九條内大臣

同

元眞

俊頼朝臣

同

同

同

花山院御製

一條大相國家屏風の繪に  
名所歌

千五百番歌合

六帖題御歌

建長八年毎日一首申述懐

寶治二年百首柚山を

百首歌水鳥馴笈

家集氷笈を閉つといふこ  
とを

長歌

大井河うける紅葉のいかたしのさをのまつくをまぐれとや思ふ

能宣朝臣

いかたしのやみをもわかぬみなれさをさすかに夏は月を待かな

後鳥羽院御製

かめ山のみねたちこえてみわたせは清たき川をおとすいかたし

後嵯峨院御製

柚木ひく弓削のかはらの笈なはくたるをいそく世こそつらけれ

民部卿爲家

をちこちのまけき宮木をひきよせてそま山川にいかたくむなり

源俊平朝臣

程もなくたちぬるあとにかへるなみいかたにちかふあちの村鳥

寂蓮法師

氷わるいかたのさをのたゆければもちやこさましほつ山こえ

西行上人

をのとりて、にふのそま山、きとりきて、いかたにつくり、に

よみ人しらす

かちぬき、いそきにきつ、

いつみかはに、もてこゆる、まきのつまでを、もえたゝす、いか

同

たにつくり、のほすらん、

はつせ河に、いかたうけて、わかゆくかはの、かはくまの、や

同

そくまおちす、よろつたひ、

忠峯集延喜七年亭子御門西河に行幸せさせ給へる時和歌序云

序者忠峯

のりの御門ひじりの君秋の雪をきこしめさむと御舟共をなら

べること雲をあめるいかだのごとしさすべきさをのまげれる

事なみをかくめるかきに去たりと云々

船

題不知

屏風歌はまべに男女みわたりけり

延喜十三年三月三日亭子院歌合

同五年二月定家歌合會後戀

家集舟を

永久四年百首内

家集海路戀

堀河院御時百首

旅宿水螢一字抄

久安百首御歌

家集五十首眺望

百首歌旅五月雨

仁安二年二月歌林苑歌合

萬十  
あをなみに袖さへぬれてこく舟のかちふる程にさ夜ふけなんか  
荒浪のかけくるきしのとほければかさまにけふを船わたしする  
玉戀新拾遺二

あしの葉の散にし日より難波えにつなてなかくも戀わたるかな  
續古戀四

あふ事はいまはかたほになる舟の風まつほとはよるかたもなし  
六三伊勢集

おひ風にかせはなほりて吹ぬともあまのいかりに止まりやせん

なこかれよみすりも須磨すまに焼つみて赤穂あこうもろての灘なみとほる日そ

戀しさをさし荷ににつめる舟なればかちもみとろくこゝろせよ浪

月影つきかげによものままへをみわたせはまほもみなひくふかなひぬなてせよ君

日も暮ぬすたく螢あせをかゝりにてあかしのうらにふなとゝめせん  
新千別

おきつなみたちわたととも音ねに聞なか井いの浦うらにふなとゝめすな

めもはるにおきかけさかり行船いりふねはかこのこゑこそまづは消けれ

五月雨ごごゆにはやをのつなは朽くはてゝまほにひかるゝ舟ふねそあやふき

難波江なみにくたすたかせのこすさほにいくたひたちぬかもの村鳥

中納言家持卿  
兼盛

よみ人不知  
忠峯

躬恒  
俊頼朝臣

同  
基俊

大藏卿行家  
崇徳院御製

喜多院入道二品のみこ  
小侍從

登蓮法師

弘長元年百首御歌

夕日さすやまもととほくゆく舟のかたほいてたる秋のかはきり

後九條内 大 臣

百二十八首韻歌

こしかたも行ききもみぬ浪のうへに風をたのみにとはすふね哉

前中納言定家卿

最勝四天王院名所御障子

あはれとやかすむにつけてまほかまの浦こく舟のとほさかる聲

後久我太政大臣

家集泊舟といふことを

岸ちかくよせつなはへてさす舟にこゝそとまりと人むかふなり

光 俊 朝 臣

千五百番歌合

高砂やこきのくふねもうちむれて風やすけなるなみのうへかな

具 親 朝 臣

千首歌

いくてまてほなはつくらん風はやみほのうらはにすくる舟人

民部 卿 爲 家

同

よせかへり浪うつ舟のとまやかたうきねは夢もえやはみえける

同

延喜二年毎日一首中

うきてのみ末の世渡る舟のうちのそのたのしみは盡る目もなし

同

一字三十首

たけをひくふねさしよする河むかひきりのみ秋の明ほのゝいろ

前中納言定家卿

家集戀歌中

ゆめかさはなみのたゝちに行舟のたよりにつけしよはのひと聲

從二位家隆卿

建長八年百首歌合

風そよくあしのうらまのよはの月かゝみをかけし舟かとぞみる

光 俊 朝 臣

此歌判者知家卿云かゝみをかけし舟の中と侍これは日本紀に  
侍事とかや本説たしかにて是非に不及侍うへに歌のすがた

詞うつしく侍と云々

題不知まつら船

萬七 さら更てほりえこくなる松浦船かちおとたかしみをはやみかも

人

同

萬十一 松浦船みたれほりえのみをはやみかちとる間なく思ほゆるかも

よみ 人 不 知

家集つくしにて歌よみけるにつくくし

雲かゝる浦にこきつくつくし舟いつくかけふのとまりなるらん

元 眞

光明峯寺入道攝政家歌百首三舟

鞠旅歌あけのそほふれ

題不<sub>レ</sub>知も、舟

相模國歌あしがらをぶれ

洞院攝政家百首御歌不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>戀

建長八年百首歌合

かもといふ舟

家集あまのはしふれ

堀河院御時百首

同なだのを舟

同たかさふれ

寛元四年日吉社歌合からふれ

いつてふれ

弘安二年三嶋社百首沖津舟

文永十一年毎日一首中一葉のふれ

後法性寺入道關白家百首遇不<sub>レ</sub>逢戀なにはふれ

からさきやおほみや人のみふねまつみきはもとほく氷しにけり

たひにしてもこのひしきに山本のあけのそほふね沖にくくみゆ

百つ島あしがらを舟あるき多みなこそかるらめころはもえと

ゆくべなくわかなも湊たつ浪にあしからをふねよるへ去らせよ

あさひらきひとりまちえて百つ島あしからを舟とまりいつなり

浦ねよりはるかにみれば沖つとりかもといふ舟も浪にたゆたふ

秋風にまかせてせとをわたるかなすまのうらはのあまのはし舟

むやひするかまのほなはのたえはこそ蟹のはし船ゆらも忘れめ

つなて引なたの小船や入ぬらんにはのたつのうらわたりする

夜もすからおなしこあらしおろすなり高砂船はいまそいつへき

わか戀ははかたをいつる唐船のゆたのたゆたにおひかせをまつ

いつて船おひかせはやくなりぬらしみほのうらわによする白浪

いつ方にこきはなるらんおきつ舟ほのかにとほく浪ちへたて、

ちりやすき一葉のふねのうらなかさすか月日を又わたりつ、

あし分のほとこそあらめ難波舟おきにいへもこきあはしとや

從二位家隆卿

高市黒人

田邊福丸

よみ人不知

光明峯寺入道攝政

前大納言顯朝卿

同

躬恒

俊頼朝臣

中納言國信卿

信實朝臣

隆源法師

順徳院御製

安嘉門院四條

民部卿爲家

皇太后宮大夫俊成卿

たまもかりふね

あしの葉も霜かれにけり難波かたたまもかりふね行かよふまで

寂念法師

三十首御歌江上暮春たまものをふね

にこり江のたまものを舟こきかへりうらみてくる、春の空かな

後鳥羽院御製

かすみのをふね

新後拾春下  
ほりえこくかすみのをふね行なみやおなし春をもたふ比かな

前中納言定家卿

六帖とまりふね

類六三  
みたとえにかあふりたつるとまり舟流るゝまてに潮はみちきぬ

衣笠内大臣

ともふね

新六三  
友船はつくしもいせもきき合のおなしとまりにうきねをそする

信實朝臣

建保三年名所百首御歌あけのそほふね

秋ふかき八十字治川のはやき瀬に紅葉そくたすあけのそほふね

順徳院御製

障子繪に海づらに人ながめてあたりまへより舟行所

かつしかのまゝの浦わの沖津すにあけのそほ船からろおすなり

俊頼朝臣

舟を  
家集あはな舟

柴をふねまほにかけなせゆふしてゝにしの宮人かさまつりしつ

同

おいなげきてわれふね

われ船の世を海わたる去るしにはおもての浪におほれにけり

同

家集海のほとりにてあからふね

たれ人のつとまちかてらこき出であからをふねの月にたゆたふ

殷富門院大輔

永久四年百首舟

おそろしやともろは去りそ浪間行あからを船のあからめなせそ

神祇伯顯仲卿

同こし舟

雲津よりすゝめくりするこし舟の沖かけさかるほのくにみゆ

仲實朝臣

家集密舟戀えぞふね

わか戀はあしかをねらふえそ舟のよりみよらすみなみ間をそ待

源仲正

片戀河舟

せにかけてさしおとされぬ河舟のかた思ひこそくるしかりけれ

同

戀歌中

萬代  
あふ事をひさしくよとの川舟にとりこすつなのかゝらすもかな

殷富門院大輔

三百六十首中のぼり舟

のほり舟こち吹風をすくすとしてよをうしまとにどまりてそふる

好忠

亭子院御時長恨歌御屏風  
にくもふね

家集あまのなふね

五百首御歌

題不知あまふね

家集思ふ事侍ける比

西國受領歌あまのつり  
舟

えらでくやしむ戀

家集雜歌中くれ舟

あさづまふね

日吉社にたてまつりける  
五十首初春歌

十題三十首旅

歌林苑にて海邊の霧を、  
ともものずい舟

正治二年百首御歌あはぢ  
舟

堀河院御時鳥羽にて花見の行幸に池上花、花のみふね

同院御時高陽院に行幸時  
御舟に參て

家集まばふね

ゑるへするくもの船たになかりせは世をうみ中を誰かとはまし

たなゝしの蟹うずの小船せなわのあらいそにあなたとくし我ひとりゆく

としふともゑらしな心あま小船かまのほなはのたえすこふかも

蟹船せなわのへにくりつめるあみのめはつらき心のかすにそありける

玉戀たまこ三  
こち風になひきもはてぬあま舟の身を恨みつゝこかれてそふる

たなゝしの蟹うずのつりふね浪間よりと渡るほとそはるけかりける

わか戀はみしまかおきにこき出いでてなころわつらふあまのつり舟

くれ舟よあさづまわたりけさなせそいふきの嶽たけに雪まよくめり

おほつかないふき嵐あらしのかさゝきにあさづま舟のあひやゑぬらん

にほの海やあさづま舟も出にけりつなくこほりを風やとくらん

となかよりはやくきかへせ山田舟やまのたねひらのたかねに雲かゝりたり

かこのおす音ねにゑるしも霧の間にゆらのとわたるとものすゝ舟

淡路あわじふねきりかくれこくさほ歌の聲はかりこそせとわたりけれ

浪たてるさくらのみかは池いけにさへ花のみふねをうかへてそみる

けにけさは花のみふねをよそひても君か千年ちとせをつめるなりけり

風ふけはゆらのと渡るゑは舟のゑはしこかれてよをすくさはや

伊勢

同

後鳥羽院御製

よみ人ゑらす

女御みまみ子女王

よみ人ゑらす

西行上人

同

同

家長朝臣

同

權僧正公朝

盛方朝臣

喜多院入道二品のみこ

俊頼朝臣

同

同

同



太宰任にて下たるにふなぶひおきてもたひといふとまりにて、ころ舟

ころ船にゑふ人ありと聞つるはもたひにとまるけにやあるらん

太宰大貳高遠卿

家集せたの橋の本にて歌よみけるまへにいなをとる舟ありいさりをぶね

浪のよるいさり小船のみえつるはいをねられねはみゆる也けり

同

寶治二年百首いさり舟

うなばらやなきたる蟹のいさり舟沖のすさきにこきまはるみゆ

衣笠内大臣

久安百首あしはやなぶね

かきくもり雨はふりきぬみつをさかあしはや小船苦やふくらん

前大納言隆季卿

釋教歌中のりのはしふね

目まひたる龜の浮木に會なれやたま／＼えたるのりのはしふね

高辨上人

弘長元年百首釋教法のはや舟

西の海みちひく玄ほにまかせつゝわれとはさゝぬのりのはや舟

後九條内大臣

ちかひのふね

わたしもりひかひのふねは心せよのりかたふくる人もこそあれ

信實朝臣

久安百首たかせぶね

さをのをささをなすゝめを高瀬舟みやこに我はさせる身ならず

季通朝臣

同

たかせ舟かちふりたてよ大井川きしのもみちをいか／＼すくへき

崇徳院御製

寛喜元女御入内御屏風紅葉のみふね

大井川もみちのみふねさしはへてふるきためしにかへる秋かな

從二位家隆卿

永承二年歌合紅葉のふね

心せよもみちのふねのふなさしてあらしの山のわたりわたらは

大納言經信卿

新羅社歌合紅葉

さゝなみに紅葉の舟をよするかな玄かのうらわは秋のとまりか

泰覺法師

同

みつもせに紅葉の舟をむやひつゝにしきほにかけて風をこき行

權律師教香

此歌判者清輔朝臣云右歌もみちの舟と云て又にしきをほにあぐと侍如何たゞ舟に紅葉をちりかゝらせてにしきをほにあぐと

ぞいふべき物ひとつをふたつになしたる心えずや抑木のはを  
舟にたとふる事はふるくもみなよめり由緒あるべし木の葉の  
水にうきたるをみて智發して舟をばつくりいでたる事と申め  
り又仙人の以木葉爲船といふ事本文侍めりされば古今集  
に興風歌にや「白浪に秋の木ノ葉のうかへるをあまのなかせ  
る舟かとそみる」とよめりかやうにはよめれどおさへて紅葉  
の舟といはん事證歌なくてはいかゞとぞおぼゆる花のゆきに  
にする事はむかしよりあることなれど近頃の歌合仲實朝臣の  
花のゑら雲とよめるをば花のゑら雲といふものがさだまりあ  
るやうなり歌合には猶いかゞとぞ難て侍めるこれおなじ事な  
りと云々

光臺院入道二品親王家五十首河霧ちかた舟

石清水歌合河上霧わたり  
ふね

寛元三年結縁經百首

寛元二年百首渡月わたし

光明峯寺入道攝政家御會  
江舟月あしのなふね

夕されはをちかた舟やまよふらんきりになりゆくさほの河なみ  
わたり舟それとも見えすあさほらけみつのをかけてかすむ河浪  
紀伊の海のゆらのとあるく渡り舟我身さきよりいてかひもなし  
猶神えはしよとの河せの月をみんわたしをふねはこきなつけそも  
うら風神のさそふもゑらす難波江のあしのをふねに月をみるかな

從三位 範宗 卿

從二位 家隆 卿

民部 卿 爲家

信 實 朝 臣

從二位 家隆 卿

題不知あしわけをぶね

同かたかけをぶね

六帖題まほ船

同くちふね

嘉應二年十月法性寺殿歌  
合水鳥を

家集夏歌中まこもかりふ

萬十二  
みなど入のあしわけをぶねさはりおほみ我思ふ君にあはぬ頃哉

六三  
潮瀬こくかたかけを舟流るともいたくなわひそ楫とりによかん

新六三  
あはち嶋かさまにわたる鹽ふぬのからろの音そおきにきこゆる

同  
ともすれはとまりに去つむくち舟のこきてし方そさすか戀しき

をぶねこくともろにも猶たかしとやつなてをくゝるがもの村鳥

五月雨もをやむ晴間のなからめやみつのかさほせまこもかり舟

梶楫

題不知

文應元年七社百首海路

述懷百首

六帖題

承久後百首御歌

御集

寶治二年百首旅泊

山階入道左大臣家百首絶

戀

萬十二  
やかちかけ島かくれゆく我妹子かとまりとふらん袖見えすとも

あはままやと渡る舟のからかちのからき浮世をしをれてそふる

磯かくれまかちまかちぬきこく舟のはやくうき世をはなれにし哉

新六四  
なみたてるぬさの追風はやければまかちまかちぬきわたる舟ひと

風はやみおきこく舟のかち間にもわする、間なき世々の故郷

いそかてやかちひきをりて舟人もあすになるとの潮やまつらん

うきねして枕とたのむ船はたにおきならへたるかちもありけり

契こそゆくへもまらねゆらの戸やわたるかち緒の又もむすはて

よみ人まらす

同

衣笠内大臣

民部卿為家

三條右大臣實

西行上人

よみ人まらす

民部卿為家

皇太后宮大夫俊成卿

光俊朝臣

後鳥羽院御製

後九條内大臣

信實朝臣

民部卿為家

碇

六帖題御歌

同いかり

同

同

同

今日の日はいかりそへよと舟人のつしまのわたり風もこそたて

新六三 おひ風にはしるをふねのいかりなはくりかへしても昔をそ思ふ

戀にのみこかるゝ舟のいかりな思ひしつめはくるしかりけり

同 沖つ舟おろすいかりのつなつよみあやふからぬも猶そあやふき

こき出るとまりの舟のいかりなはへにくりかくる聲きこゆなり

中務卿みこ

衣笠内大臣

民部卿為家

信實朝臣

光俊朝臣

綱

堀河院御時百首

題不知

上野國歌よせつな

ちびきのつな

百首御歌述懐うき世のつ

賀茂社百首御歌こゝろの

難波かたつなてになひくあしのほのうらやましくも立なほる哉

萬十一 ひとははし我妹子つなて引うみよりましてふかくしを思

萬十四 たこの嶺によせ綱延てよすれ共あにくやしつのかほよきに

みやき引ちびきのつなもよわるらしそま川とほき山のいはねに

朝夕に袖にかくしてむすふてのうき世のつなをとかさらめやは

おもひえる心のつなをよもに引て老のねさめのみたれゆくかな

俊頼朝臣

人丸

よみ人不知

隆祐朝臣

慈鎮和尙

同

家集述懐百首中おもひの  
つな  
建保四年百首まさきのつ

洞院攝政家百首臨戀

百首御歌

六帖題あまのふるづな

ねりそのつな

たちかたき思ひの綱もつなかれてひきかへさるゝ事そかなしき  
人心なにとつなかんいろかはるまさきのつなのよるもたまらず  
戀衣いろにはいてし<sup>新續古戀</sup>まといふまさきのつなのよるの<sup>新</sup>まくれに  
夕くれのまさきのつなてはるかけて月のみふねや外山いつらん  
住吉のあまのふるつなひく人もいまはなきさにくちぬへきかな  
みやき引ねりその綱のもゝからみよわるけしきもみえぬ君かな

清 輔 朝 臣  
從 二 位 家 隆 卿  
光 明 峯 寺 入 道 攝 政  
後 九 條 内 大 臣  
民 部 卿 爲 家  
道 因 法 師

繩

述懐中に

百首御歌ひたのかけなは

正治二年百首あまのかく

寶治二年百首杣山うつす

寄垣述懐、やへのまめな

千五百番歌合

六帖題後惠法師の許にて人に十首よみける頃に

木をきさみなはを結びし古へも世をうきものとひとやいひけん  
秋田もるひたのかけなはうちはへてたゆます人をこふる比かな  
伊勢の海のなみのよるゝ人まつとくるしき物を蟹のかくなは  
つらきかな山のそま木のわれなからうつすみなはにひかぬ心は  
今はけに神のいかきもこえぬへく思ひつゝくるやへのまめなは  
宮るせし千尋たくなは君かためなかきちきりをむすひそめけん

權 僧 正 公 朝  
衣 笠 内 大 臣  
宜 秋 門 院 丹 後  
民 部 卿 爲 家  
大 納 言 雅 忠 卿  
野 宮 左 大 臣

ちはやふるちひろたく繩もゝむすひうちとけてみよなかき心を

殷 富 門 院 大 輔

六帖題

建長八年百首歌合らひるのなは

六帖題たくなは

新六三

うなはらやそこの心も去らるやとちひろたく繩うちかへてみん

えそ去らぬ千尋のなはを去つめてもおよはぬうみのそこの心を

蟹のすむ里にほすてふたくなはの永きうらみはけふそくるしき

正三位知家卿

後九條内大臣

民部卿爲家

緒

百首歌逃懼うれへのを

こゝろのを

淨覺上人につかはしける

六帖題つりのたなを

三百首御歌

家集

四そちまてうれへのをにはつなかれぬさて我ゆるせ住よしの神

よそならぬ心のをこそみしかけれなつの夜とのみ思ひけるかな

岸高みつりのたなをのうちはへてなかき日あかすくるゝ空かな

かちをたえこと浦風にゆく舟のうき世のなみにこかれてそふる

すまの蟹の浦こく舟の梶をたえよるへなき身そかなしかりけり

慈鎮和尙

同

同

正三位知家卿

順徳院御製

小町

網

建保三年名所百首

貞永元年戀十首歌寄網

新後拾遺

あつさ弓いそまのうらに引あみの目にかけなからあはぬ君かな

人心あたなる名のみたつまきのあみのゆくてになとかゝるらん

前中納言定家卿

同

爲家卿家百首

六帖題

同

住吉社百首

障子の繪に住吉社にまうづる人ありあみひく所

題不知

同

同

御集霞隔浦

春御歌中霞

永久四年百首景郎

題不知

三百六十首中

近江國にをかざきにてあ  
みひくをみて

寛喜元年女御入内御屏風  
海邊引綱

人にさばる戀

蟹のたくなはの浦わにうちはへてひくてふあみによらぬ戀かな

新六三  
いせしまや蟹のたはれにすくあみのめならふ人も猶そこひしき

現存六  
すまの蟹のあみの引綱くりかへしうちはへなとて戀しかるらん

とにかくにむかしをすくふ大あみに哀れをかけよすみよしの神

すみよしの神の久しきためしにて引あみの目のかすまらぬまに

萬十  
住吉の津守あひきのうけのをのかひか行んこひつゝあらすは

六三  
いとへとも猶すみのえの濱にほすあみのめまけき戀もするかな

萬六  
ちぬわより雨そ降くるまはつの蟹網の繩ほせりぬれはたむかも

あひきするまきつのうらの蟹人はかすみをわけて聲かはすなり

あみはゆるあしやの沖のあさ霞よをこめてこそたなひきにけれ

引まのうちまてきこゆあひきすとあことゝのふるあまのよひ聲

萬三  
大宮のうちまてきこゆあひきすとあことゝのふるあまのよひ聲

みほの浦の引綱のつなたくれともなかきは春のひとひなりけり

みほの海に綱引たみのてまもなく立むにつけてみやここひしも

おくあみのかすみをむすふ春風になみのかさしの花をさきそふ

逢ことはまれかのうらにあさりする網もさのみや人めもるへき

從二位家隆卿

衣笠内大臣

民部卿爲家

慈鎮和尙

祭主輔親

よみ人ふらす

同

同

後徳大寺左大臣

同

俊頼朝臣

よみ人しらす

好

紫式部

前中納言定家卿

俊頼朝臣

久安百首

同

六帖題御歌

同題

同

仁安三年無動寺歌合

鳴海潟潮干におけるあみなれやめにはかゝりてあはぬこひする

大炊御門右大臣

よさのうみにひくてふあみのつなてなはくるをは人の心とも哉

前參議親隆卿

浦人のあみのひきつなうちほへてうけくにももの悲しきはなそ

中務卿のみこ

いまは又日もぬふかけておく網のとほくないてそ蟹のうけふね

正三位知家卿

春はなほなかき日くらしひくあみの心ゆるへぬなこのうらひと

信實朝臣

人ぞれぬ身のみおもへはうしまとに引ほすあみのいはて過ぬる

隆實

### 魚梁

建保三年名所百首

やな

六帖題

同

家集八洲河秋

六帖題御歌やな

同

同

いたつらにあはぬうき身の名とり河やなせの波を袖にかけつゝ

僧正行意

はや河にやなうちわたすあた人のこゝろのせにそ思ひわひぬる

洞院攝政

せきかくる田上河のほりやなさかまくみつのおちそわつらふ

正三位知家卿

みなせ河ゆくせの水のくたりやな春のひよりにはやさしてけり

民部卿為家

朝ほらけやなせの浪の音はしてわたりやいつこやすのかはきり

同

いとふそよ世にふる河の下り梁かゝるみくつはせきなとめそ

中務卿のみこ

雨はるゝなこりの河のくたりやなにこれる水にうをそおちそふ

前中納言為家卿

はや川のせあさにかゝる片岸にやなうつけたのたよりにそかる

信實朝臣



六帖題御歌やな

建長八年百首歌(合イ)

三百六十首中

たむくへき神のにへそと事よせておまへの河原やなうちてけり

光俊朝臣

五月雨にやすのはやせののほりやな河なみたかし落や玄ぬらん

從二位行家卿

安河のはやせにさせるのほり梁けふの日よりにくらつもれり

好忠

夫木和歌抄卷第三十三終

夫木和歌抄卷第三十四

雜部十六

題 神祇付社付宮 釋教付寺

神祇

久安百首神祇歌中

同

同

社頭秋風

御集神祇

神祇歌

長歌祭神

あらかみのあらはれいてしむかしより神をは君とあふき初てき  
飛くたるな<sup>リイ</sup>しの雉をいさりせは蟹のは<sup>ハ</sup>やもなけさらましを  
いにしへも祭れるをりはけころもにあけの衣をきるといひけり  
ふりにけるあけのたまかき神さひてやふれるみすに秋風そふく  
八百萬<sup>ヤトモ</sup>よもの神たちあつまれりたかまのはらにき<sup>キ</sup>たかくして  
石<sup>イシ</sup>問<sup>ト</sup>代<sup>ト</sup>ににこりもあらしたかくらや麓<sup>ノボ</sup>にすめるをしほ井<sup>イ</sup>のみつ  
萬<sup>マン</sup>三<sup>サン</sup>あまのはらより、むまれたる、神のみことを、おく山の、さか  
きの枝に、まらかつけ、ゆふは<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>つけて、

左京大夫顯輔卿

同

前大納言隆季卿

鎌倉右大臣

同

度會仲房

坂上耶女

家集神祇歌

同

文永十一年毎日一首歌

久安百首神祇歌

家集

和らくる光ときくもあとたるゝところをいふはわかやまとくに  
新拾神祇  
みちのへの杉の下葉に引玄めはみわすゑまつるゑるしなるらし

民部卿爲家

神垣のいはほの上のかりふしにまるねのあしをあらふみやつこ

同

契たにたかへさりせはわたつうみのそこにも人やゆき通はまし

實清朝臣

たよせとは思はさらなんわたつ海のいのる心はかみそゑるらん

惠慶法師

えら雲に色みえまかふみてくらをたよせにうけよかみのこの神

同

此歌は障子の繪に須磨の浦のかたかきたるに神のやしろにふ

ねよりゆく浪のたかければたよせにみてぐらたてまつるとこ

ろをよめると云々

十題百首

前中納言定家卿

三社歌に

たのもしなあかつきちきる月影のかねてすむらんみよしのゝ嶽

同

永久四年百首櫛

君か代はよさみのもりのとことにはに松と杉とやちたひさかえん

俊頼朝臣

御集寄草戀

さかき葉を神の御室とあかむればゆふつけ鳥のねくらなりけり

後鳥羽院御製

千五百番歌合

かけてこふる神のみむろの玉かつらたえぬ契りをなほや恨みん

土御門内大臣

三百六十首御歌中

神こそは野をも山をもつくりおけ人にまことのみちをふめとて

後九條内大臣

家集

神まつるやとにけふさす榊葉のときはにかへるやへのゆふして

祝部成茂

建長七年顯朝卿家千首

われはかりけたぬ物かはふしのねの神たにもゆる思ひとそきく

從二位行家卿

久安百首

春神祇祈年祭

正應五年三嶋社十首歌  
頭祝

永仁元年楚忽百首

我戀をなとかは神のにくみしていのるこゝろのぬさもかひなき

光俊朝臣

神さひていはへるほこのみゆるかなこはよも山の人のまもりか

前大納言隆季卿

あらたまのとしをいのると引駒のおともひさしきささらきの空

前中納言定家

よろつ代もひさしくうけよ神かきや年にかはらぬ君かおもむを

参議爲相

君か代をまもるとならはよろつ神わきて久しきためしはしめよ

同

玉神職  
かしこまるまてになみたのかゝるかな又いつかはと思ふ哀れに

西行上人

この歌はそのかみよりなれけるならひに世をのがれて後も賀

茂の社に参りけるにとしたかくなりて四國の方へ修行しける

に又まゐらぬ事もやとて仁安三年十月十日の夜まゐりて幣ま

ゐらすとてたなをの社の許にてまづかに法施奉りける程に木

の間の月のほのくにて常よりも神さび哀に覺侍ければと云

云

とも岡のさゝの葉えたり雪ふれば腰にさしたるかたなひきなる

權僧正公朝

みなど田のかりたの面に雪ふれば八にかきらてゐるくらゐかな

同

み園生の木の根堀はむきりくす霜のふりはのねたさうれたき

同

あまつたふ月日こたへていさなきの命のさためよはあきらけし

後九條内大臣

いさなみのますみの鏡てにとりてうみしもまゐるくてらす月よみ

實清朝臣

三嶋社に奉りける神樂和  
する歌篠

湊田

蟋蟀

弘安元年百首(いざなき)

久安百首(いざなき)

建仁元年十首歌合

家集神祇歌

久治六年五社百首(伊勢)

百首御歌

太神宮にて

家集神祇歌

同

光明寺入道攝政家百首

二夜百首御歌神祇

千五百番歌合

同

承久二年四季百首春神祇  
例幣

正治二年百首

建長八年百首歌合(いは  
し水)

八幡宮にたてまつりける

永久四年百首石清水臨時  
祭

同

神風ややへのさかき葉かさねてもみもすそ河のすゑそはるけき

なかれ出てみあとたれます水かきは宮河よりやわたらひのしめ

人玄れすも、枝の松をたのむかなふちの末葉もあはれかけなん

神ち山も、えのまつるときはかけときはに君をまもりけるかな

神ち山たまかきこしにみわたせは杉間にたかきちきのかたそき

いす、河そのみなかみをたつぬれば神ちの山にかゝる玄らくも

百來歌  
す、か山神ちの宮るふりはへてよをたてそめしあまのみはしら

よろつ代に君もすめとやいす、河玄たついはねの玄きなみの聲

みもすそのひろき流にてらす日のあまねきかけはよもの海まで

神風やみもすそかはのいはしみつ君かためとやすみはしめけん

す、か河やそせのなみをへたて、もわか神風にきみをいのらん

みてくらのたつやいす、の河浪に山のもみちもぬさやたむくる

君か代は山田の原にたつちきもちたひかはらむほとはかきらし

いはし水すみはしめけん月影のみつのころもにかけそうつりし

石清水まつ風高くかけみえてたゆへくもあらずよろつ代までに

たつ程のかさねかはらげなかりせはおほえて澗の渡りせましや

をとこ山かさしの花も春なれはをみのころもははゆるなりけり

後鳥羽院御製

西行上人

皇太后宮大夫俊成卿

慈鎮和尚

僧正行意

嘉陽門院越前

從三位行能卿

從二位家隆

後京極攝政

從二位家隆

嘉陽門院越前

前中納言定家

土御門内大臣

衣笠内大臣

貫之

俊賴朝臣

仲實朝臣

同  
石清水三首歌合社頭松

男山みねのさくらにもろひとのかさしのはなをたへてそみる  
はこさきや松吹風にのこしけりなみのほかまてなひくひゝきを  
新續古神祇  
やはた山あとなれをめし玄めのうちになほよろつ世と松風を吹

源 兼 昌  
野宮 右大臣  
後鳥羽院御製

同

千世へても君そみとりのいはし水みゆきを松のかけやとしけり

前大納言忠良卿

同

神かきやゆきめぐりても君そみんおひそふ松のよろつよのかけ

嘉陽門院越前

同

君か代を祈るゑるしはみつかきやおひそふ松のいく千代かへん

皇太后宮大夫俊成卿

同

をとこ山みねの松風かみさひてこす忍にかよふあさくらのこゑ

後鳥羽院中納言

同

男山たねやまきけん我きみの千世におひあひのみねのわかまつ

大藏 卿 有家

同

神やまにおひそふ松の千世ことに君かためとやいのりおきけん

俊 成 卿 女

同

をとこ山よろつよかけて種しあれば君かためしにあひおひの松

家 長 朝 臣

同社歌合

いなりによみて奉りける  
中の社(いなり山)

同

御集名所述懐

いなり山みつすきなかにますか神わかことたてゝ頼むかひあれ

惠 慶 法 師

社霜を

とちはてし我みちひらけ春日山かみのみともるありあけのつき

後九條内大臣

あとのみや

かすかなるゆきあひとのに置霜のふりていくとせ神さひぬらん

正三位知家卿

保延元年家成卿家歌合祝

君か代のつきせぬかすはいはやとの神はかりこそ空にゑるらめ

光 俊 朝 臣

春日社歌合(いはひぬし)

きみかよを祈る心にまかせたるいはひぬしとはかみの御名なり

神祇伯顯仲卿

夫木和歌抄卷第三十四 神祇

部 兼 直

後

た

戀歌中(いなつの神)

建長八年百首歌合(にふの神)

この月は神の事するしとおもふ(はもりの神)

久安百首歌合(とよたまひめ)

目吉社戀五首歌合(わづらひの神)

賀茂神を(わけいかつちの神)

家集神祇歌(かすが)

かしま(常陸)

逢ことをたのみたのますいせくなるいなつの神の聞もはなてや

河かみのにふのいほりのまきのいたとりてそいはふ萬代までに

ことつけん人もなければみやまなる葉もりの神を思ひこそやれ

いまささらにゆくへもちらぬ我こひはとよたまひめの心こそすれ

いさなきのぬきしころもくなき物をなと逢ことにわづらひの神

此歌判者云日本紀に伊弉諾尊衣をぬきておき給えかば煩神と

なれる事にや此ちかきことにあらずと云々

續拾神祇 あまくたるわけいかつちの神しあれば治りにける天のまたかな

新拾神祇 三笠山ふもとをめぐくるさほかはのさして祈りし身をたのむかな

このうたは鹿島の社に跡宮と申社は大明神のはじめて天くだ

らせ給し所也と云々

神さふる鹿島をみればたまたれのご龜はかりそまたのこりける

此歌は鹿島といふ島は社頭より十町ばかりのきて今は陸地よ

りついきたる島になん侍りその所につぼと云物のまことにお

ほきなるが半すぎてうづもれてみえしを先達の僧にたづねし

かばこれは神代よりとままれるつぼにて今にのこれるよし申

侍りしこそ身のけはよだちておぼえ侍りしかこがめぞ事たが

同

明俊朝臣

光俊朝臣

成尋法師母

左京大夫顯輔卿

法橋顯昭

後京極攝政

藤原長能

鹿島社

建久二年百首神祇

百首歌(賀茂)

家集曉神樂

光明峯寺入道攝政家百首  
(賀茂)

十題百首

神祇歌中

六帖題まも月

春日社法樂御歌

賀茂神主重保におくりたる  
十首歌中

ひてよめりけると云々

鹿島のやわしのはかひにカシ乗てこしむかしの跡オトはたえせさりけり

かしまのやひはらすき原ときはなる君かさかえは神のまにカく

かも山のたかねにかゝる白雲やわけしなこりのそらのかよカひ路

神山のむつきのなかは月さえてとりのはつねに御戸ひらくカなり

かみ山のみねのまさかき萬世にかをかくはしみたちそさかえん

秋の田をかものかはせにこきよせてたれも千年チを松のかはふね

神山にあまのいはふねこきよせてつなきそめしもわか君のためカ

霜新六さゆるかものかはらに駒なめてみちゆきふりの山あふカのそで

神かきやてかひの玄かのなつけより去りぬひしりのあまのは衣カ

玄めのうちにくもかともみゆる櫻花あまくたりけんむかし思ほゆカ

みそきして眺めわひぬるゆきもよに神のひほろきとくる喜しき

此歌は賀茂にこもりたるにゆきのいみじうふるに心ぼそくて

うちながむる程に神の御おろしとてくほてをいれたるによめ

ると云々

神山のまさきのかつらくる人そまつやひらてのかすはかくる、

此歌は神祭日人々きてかしかのあるをととりて歌かきてとせめ

後京極攝政

前中納言定家卿

參議雅經卿

從二位家隆

大藏卿爲有家

寂蓮法師

賀茂氏久

正三位知家卿

慈鎮和尚

殷富門院大輔

二條太皇太后宮大貳

和泉式部



家集(かみの神、肥前)

題不知(かみ河合の神、山城)

建長七年顯朝卿家千首歌

神祇(かみの神、大和)

千五百番歌合(玉津島、紀伊)

百首歌

社(たむけのかみ)

神樂歌龍除窟(たきのはら、肥前、伊勢)

家集(たるみの神、和泉又播磨)

社頭會花を(ないますかみ、近江)

閑居百首中(たむけの神)

仁安二年八月經盛卿家歌合

正安三年日吉社歌合

百首歌(大原、山城)

十題百首神祇(くまの)

建保四年百首

千五百番歌合(くまのちの神)

ければよめると云々

新千戀(あひみんと思ふ心はまつらなるかゝみのかみやそらに去るらん

そのかみをおもひそいつるかはあひの神にもなれし冬の夜の月

たらちねの親のつくれるみ吉野のよしの、神は見るもたふとし

ななめけんくものふるまひ空はれて月かけきよき玉つしまひめ

玉津島あかぬ宮井のみつかきにくとしなみをよせてすくらん

君を思ふ我こゝろしそみえぬへきたむけの神もいかゝおもはん

六四 去らいとのたえすおちくるたきの原あたとれ初て幾代へぬらん

おりのほる人たのめとやこゝにしも跡をたるみのあけの玉かき

よろつ代のはるにもあかし八重櫻なゝますかみの玉のみつかき

めくりあはん契りの末は長道磐の神の去るへをたのむばかりそ

とけやらぬひとの心はつらからてむすふの神をうらみつるかな

大ひえやいのる去るしを三輪の山かけをしわたる杉のこすゑに

思ひのみおほ原野邊にとしへぬるまつことかなへ神の去るしに

雲かゝるなちの山風いかならんみそれはけしきななきよのやみ

み熊野のはしめのとしをかそふれば我身に殘るうらのはまゆふ

くゝのちの神もうらめしいかなればあたに櫻のはなとなりけん

紫式部

爲綱卿

源仲遠

正三位季能卿

殷富門院大輔

よみ人ゑらす

荒木田延季

俊頼朝臣

祝部成賢

參議爲相卿

藤原伊行

法印定爲

前中納言定家卿

同

參議雅經卿

正三位季能卿

(くにつかみ、近江)

百首御歌

(やなあひの神、伊勢)

やまもるくにつみかみにいのりおきてちとせは君か心也けり

小侍 從

さゝ浪やくにつみ神のますかゝみかけていてたる月のさやけさ

光明峯寺入道攝政

世中をあめのみかけのうちになせあらまほあみてやをあひの神

西行上人

此歌は公卿勅使に土御門内府宰相にてたちけるをいすゞ河の

ほとりにてみてよめると云々

家集(松尾、山城)

久安百首神祇歌中(藤し  
るの神)

家集神祇歌中(こやねの  
かみ)

(ことのみのかみ)

題不知(あすはのかみ、  
足羽、越前或上野)

久應元年社百首伊勢(あ  
らがれの神)

家集(あらがみ)

丹波國あまてるの社にて  
(あまてる神) 伊勢又伊勢

あさ日山のふもとに神祭する所(あさ日山の神)

玉かきはあけもみとりもうつもれて雪おもまろきまつ尾の山

郁芳門院安藝

ちはやふる君か千とせを松の尾にかゝりてさけるふちまろの神

民部卿爲家

あまてるや月日とあふく人のよをいかにこやねの神やすてつる

相

神かけてたのみしかとも東路のことのまゝにはあらずそ有ける

よみ人去らす

庭中のあすはの神にこしはさしあれはいはむかへりくまては

民部卿爲家

あらかねの神の初めにあとたれしみやゐの山はときはかきはに

西行上人

浪につきて磯わにいます荒神は潮くむきねをまつにやあるらん

丹波忠茂朝臣

おほえ山むかしのあとのたえせぬはあまてる神も哀れとやみん

實方朝臣

あさ日山ふもとをかけてゆふたすきあけくれ神をいのるへき哉

西行上人

家集(さきたまの神、未  
國) 近馬場にて(きた  
の山城)

雪朝右近馬場にて(きた  
の山城)

和らくる光をはなにかさゝれて名をあらはせるさきたまのみや

参議長成卿

神かきのとしふるまつにことよせてひとよにつもる野への白雪

西行上人

社頭月

小野にまうで、

久應元年七社百首北野

島中有神の蛭方(きさかた)の神(方、出羽又筑前)

萬代神祇

あめにますとよをか姫にことゝはん幾代になりぬきさかたの神

文永八年毎日百首中(祇園山城)

寶治二年百首(きぶねのみや山城)

屏風に四月家神祭所(わかやとの神)

寶治二年百首寄(社祝)みむろの神(大和)

たむけ

千五百番歌合(みたらしの神)

家集女のもとに(みこもりの神)

六百番歌合祈戀

相模國みたけ山奉納歌

家集(まほがま、陸奥)

十題百首神祇(まら山、加賀)

日吉社十五番歌合(ひよし、近江)

月のすむきたのゝみやのこ松はらいくよをへてか神さひにけん

いのりこふことのゑるしと北野なるうへの垣根の松そみえける

神はよもうけしなたけの言の葉もかさなるよゝのあとを守らは

萬代神祇

あめにますとよをか姫にことゝはん幾代になりぬきさかたの神

かさにごさすやま鳥の尾のなかし日に神のそのとを今日祭るらん

つのさふるきふねの宮の榊葉のちよとさしてもあかぬ御代かな

み室山みねのさかき葉よろつよにをりてまつらんわかやとの神

よゝかけて祝ふ三室の神やつこいやとこしゝにいのりまつらん

現存六

みむろ山とほつ宮井の神さひてかせのみはなのたむけをそする

戀すともつひにあふせを祈るかなこれをはうけよみたらしの神

ちはやふる天のいはくらおしひらき我にをかたれみこもりの神

もろこしに今はなりなんみ籠りの神のゑるしはありとこそさきけ

古へのよしのをうつつすみたけ山こかねのはなもさこそさくらめ

ちはやふる神もねのひと思へはやけふりたなひくまほかまの松

おもかけにおもふそさひしうつもれぬほかたに冬の雪のまら山

新古神祇 拾玉集

鎌倉右大臣

大宰大貳高遠

民部卿爲家

能因法師

民部卿爲家

衣笠内大臣

能宣朝臣

正三位知家卿

同

野宮左大臣

藤原長能

正三位經家

前大僧正隆辨

爲仲朝臣

前中納言定家

後京極攝政

信成卿日吉社會社頭冬

同社頭歌合社頭松風

久永五年毎日一首中神祇歌

同

同

弘安日吉一品經歌

同

同

嘉元三年楚忽百首日吉七社歌

同

客人宮

建保四年日吉歌合社頭松風

三社歌中(ひろた)

ひろの

あはれとはとをの聖もかそへしれことしも冬のなかはすきぬと

たのみこし春しもみつのかはよとにいまさへ松の風そひさしき

幾千代のまゐるしなるらん今日まつる神のみゆきのからさきの松

からさきのはまのさゝ浪立かへり今日こそ神のみゆきなるらし

とにかくにむとくそあふくひよしのやいのる心を神にまかせて

きたのみねふかきみのりをあふく哉神は日吉のかけをならへて

天くたる日吉の神のまゐるしとやをひえのすきのこたかゝるらん

さしてなほ日吉のかけのくもらぬやみふねをよせし梢なるらん

からさきの松の木すゑにふねのほせまゐるしをみせしみわの神杉

からさきの松にみふねをとゝめおきて心をよせしなみの跡

みな月の空よりふりし雪にこそあとたれけりと世にもまゐるれ

現葉  
みつかきにうゑてまゆふ花なればにははん春を久しかるへき

この歌は日吉の本社に千本の樹をうゑて千首の歌を人々にす

すめて侍れるとき寄<sup>叶</sup>樹春といふことをよめると云々

神さふるみとのゆふしてうちなひきかはらぬちよの松風そふく

あはれひを廣田のはまに祈りてもいまはかひなき身の思ひかな

まら玉のみかとの親のおほちこそひろの、神のひゝこなりけれ

從二位家隆

前中納言定家卿

民部卿爲家

同

同

正三位能清卿

通

基卿

左近大將家教卿

從三位爲實卿

同

祝部圓長宿禰

同

同

後九條内大臣

前中納言定家

同

六帖題ちかふ(ひたちの神)

これは平野の神の御歌となん  
ころもてのひたちの神のちかひにて人のつまをも結ふなりけり  
権僧正公朝

仁安二年二月詩輔朝臣家歌合祈神戀(ひとことぬし、一言、山城)

あふことをはるとや人も契るとて一ことぬしにねきそかけつる  
法橋顯昭

この歌は判者衆議云よるとや人もちぎるとかづらきの神をい  
のられけんもゆゑありてともにおもしろければ持とぞ申あは

歌林抄  
免れたりしと云々

祈神戀

つれなさを一言ぬしにいのりみんとけぬつらさは思ひゑるらん  
登蓮法師

御集(ひろせの神、廣瀬、山城)

たむけする廣瀬の神のゑるしあらはこひの涙のふちもあせなん  
衣笠内大臣

永仁大嘗會(もろかみ)

あまてらす日陰のたすきかけまくもかしこく守れ八十のもろ神  
前中納言俊光卿

家集(すさのを、出雲)

すさのをの命を祈るともなしにこえてそみましなみのやへかき  
和泉式部

やはらくる光やそらにみちぬらん雲にわけける干きのかたそき  
寂蓮法師

この歌は出雲の大社に詣でみ侍ければあまぐもたなびく山の  
中までかたそぎの見えけるなんこのよのことゝもおぼえざり

けるによめると云々

家集月歌中(すくなみの神、豊前)

月みればすくなみ神をうらめしきにしには山をつくらさりせは  
俊頼朝臣

住吉社にたてまつりける百首(すみよしの神、攝津)

拾玉二

同

のりのはなちりまむまろにのそみてやひかりをまし、住吉の神  
いしかはのつかのむかしをたつねしをあはれとやみし住吉の神

慈 鎮 和 尙

同

君か代にひさしくにはへ住吉のまつにちきりしもくさのはな

同

三社歌

つれなくも猶すみのえにたむけ草ひきすてられし道のくち葉を  
すみよしの神代の松のあきのまもふりてもひさしみつの玉かき

前中納言定家卿

建保三年内大臣家百首神  
祇

かたそきのゆきあはぬまよりもる月の深てみそきの霜に置らん

大藏卿有家

住吉社にて觀月

みたれゆくよにこそたのめもろこしをわかぐに、なす住吉の神

西 行 上 人

住吉社百首御歌

とそちつ、よつの社のくはへますたまの緒なく君そさかえん

慈 鎮 和 尙

同社三十首

すみのえにむこのうら風立そひてふた、ひ神のめくみをそみる

從 二 位 家 隆

承安二年廣田社歌合述懷  
判者俊成卿

新拾遺神祇  
君かためたまてのきしにやはらくる光のすゑはちよもくもらし

道 因 法 師

合家卿よませる住吉歌  
合社頭祝

津 守 國 平

社付宮

寶治元年十首歌合社頭祝  
いすいの宮

ちはやふるいすゝのみやのます鏡くもらぬ御代を照すとそきく

大納言雅忠卿

建保三年名所百首（いせ  
なのみや）

月影もたえすやすまんす、か、はいせをの宮の世々のふるみち

兵 衛 内 侍

寶治元年十首歌合社頭祝  
（いせのみや、伊勢）

續古神祇  
神かせやいすゝのかはのいそのみやとこよの浪の聲そのときき

花 山 院 内 大 臣

千五百番歌合（とようけ  
のみや、伊勢）

そのかみや祈りし事はとようけのまろしそ君かめくみなりける

土 御 門 内 大 臣

久安百首(をやしる)

久治二年百首神祇(かものやしる)

題不知(かもの社壇大和、かぜのみや、伊勢)

家集(かぜの宮、伊勢)

同かつまの宮(周防)

建保三年内大臣家百首賀茂(たけすの宮、山城)

家集(たきのみや、伊勢)

六帖題(つしやしる)

中務卿親王家歌合社(つまやしる)

建保元年十首歌合(な、の社、近江)

百首御歌

六帖題社

承元三年長尾社歌合社頭櫻花(ながたの社)

家集(な、のをやしる)(大和)

文永六年毎日一首中神祇歌神寶(ならひのみや、伊勢)

うなるこかかきねにいほふを社も思ふことたにならばたのまん

きくことしたのむ心のすみまさるかものやしるのみたらしの聲

天飛やかかるのやしるのいはひつき幾代迄やらんかくれつまそも

この春ははなををしまてよそならんころを風の宮にまかせて

ちはやふるかつまの宮のひめこ松おいを手向てつかへまつらん

名にし負はうき世の人のいつはりをたすの宮に任せてそ見る

なみとみる花のまづえのいは枕たきのみやにやおとよとむらん

道のへの木のまたかけのつし社たれなはさりのぬさたむくらん

草ふかき野なかのもりのつま社こやはなすきはにいつるかみ

君か代を萬代とこそかそふらめな、のやしるのみつのひしりは

二なき八とせののりをまもるとてな、ます神はあとをたれける

やをとめのふるてふす、のころくにな、の社は宮井せりとそ

たむけして春やゆくらしちはやふるなかをの宮の花のゆふして

祈ることな、のを社ころくとことなはせよくくちははしるなり

たきのはらならひの宮のかみたからなほするつきおきつ白浪

上西門院兵衛

前中納言定家

よみ人あらす

西行上人

元輔

慈鎮和尚

西行上人

信實朝臣

権僧正公朝

慈鎮和尚

同

衣笠内大臣

前中納言定家

俊頼朝臣

民部卿爲家

弘安百首歌(むすぶの宮、未國)

御集(うちとの宮、内外宮、伊勢)

六帖題御歌ことの葉

正八幡宮を(うさのみや、宇佐(豊前))

家集(龍除窓、うのみみや伊勢)

神祇を

建長八年百首歌合(あでの社未國)

後鳥羽院御詣の時本宮山三首歌(くまのみや、組伊)

寶治二年百首歌社祝(くにつ社)  
神祇歌(げびのみや、越前)  
百首御歌(ふるの宮、大和)  
三百六十首中

なきの葉にみかける露のはや玉をむすぶの宮やひかりそふらん

はたすゝきおはなかりふき神風やうちとの宮はよろつ代までに

をかたに、かたちうつりし神代より傳へて久しやまとことのは

わたのはら浪ちへたつるうさの宮深きちかひはよゝにかはらし

朝日さすかしまのすきに夕かけてくもらすてらせよをうみの宮

諸人をはくゝむちかひありてこそうみの宮とはあとをたれけめ

あつまちやはりの、玄水えてしよりゐての社はなつけそめてき

此歌判者光俊朝臣云ゐでの社は昔景行天皇の御時針野に(獨字玄)

給ける時寒水をえて即社を被立たりけりかの夏后氏以松殷

人以柏やしろをいはひけんもろこしまでもおもひよそへら

れていみじく侍ける和漢雖隔尊意是同と云々

ちはやふる熊野の宮のなきのはをかはらぬちよのためしにそ引

あきつしまくにつ社のあきらけくまもりはくゝむ御代の久しき

山をきるつるきをみねに残しおきて神さひにけりけひのふる宮

いくとせのかけとか神もちきるらんふるのやしろのすきの下風

ひはらもるふるの社の神やつこはるきにけりとまらめやそも

檢按注親王

鎌倉右大臣

中務卿のみこ

後京極攝政

西行上人

正三位季經

前大納言顯季

前中納言定家

民部卿爲家

行

順徳院御製

好忠



堀河院御時百首

三十六人歌合

久安百首

家集

新拾卷上  
いそのかみふるのやしるに春くれはかすみたなひく高まとの山

大納言師頼

あれにけるふるの社のもみちはや秋はかりするあけのたまかき

經正朝臣

さみたれのふるのやしるの時鳥みかさのやまをさしてなくなり

郁芳門院安藝

いその上ふるの社をすきぬればよしのやまにゆきやかやはん

小辨

このうたはある人山寺になんまばしあるべきといへどもなく

ていふをたづねてよめると云々

ふえふきの社のかみはおとにきくあそひ岡にやゆきかよふらん

前大納言俊光卿

家集ふえふきの社(大和)  
久永六年毎日一首中(あさくまのみや、伊勢)

朝熊のまほひにのこるますかゝみなとまらなみの思ひよりけん

民部卿爲家

神祇歌中

あさくまやいはねの櫻としふれとはなのかゝみのかけそ曇らぬ

荒木田神主尙良

(あそのみや、阿蘇、筑前)

今はとてまものはふりこ暇あれやあそのみやまに雪のつもれる

藤原基長朝臣

このうたは宇佐使にてくだり侍ける時あその社にまうでゝ雪

のつもれるをみてよめると云々

家集神祇歌中(あさひのみや、伊勢)

神風や朝日のみやのみやうつしかげのとかなる世にそありけれ

鎌倉右大臣

同(あかきの社、上野)

かみつけのせたのあかきのから社やまといかて跡をたれけん

同

我たのむあかたの宮のますかゝみくもらぬ空をあふきてそまつ

正三位知家

家集(さかとの宮、常陸)

あさましやさかとの宮のかり宮のあやの亂れてさてやくちなん

光俊朝臣

百首歌(さくららの宮、伊勢神祇歌中(きふねのみや、山城))

文治二年貴布禰社歌合

永久四年百首(みわの社、大和)

百首歌

去水てらのあんなを(まみつのみや、豊前)

花歌中(まめのみや、未園)

廣田社三首歌合社頭雪(ひろたの社、廣田、攝津)

六帖題(もろやしる)

御集(今すき社、大和)

名をもおもへさくららの宮にいのりみん花をちらさぬ神風もかな  
明玉  
君か身はきふねの宮にまかせたりまづつめは神の名こそたちなめ

みつかきのかげにそみゆるきふねかはひさしくすめる神の心は

束ねつゝたてならへたるあしやさけみわの社のまゐるしなるらん  
新後撰神祇

思ふことみわの社にいのりみんすきはたつぬるまゐるのみかは

ほさはやなまのをりかけてはす衣まみつの宮のなかれたえせて  
古來歌 新拾遺神祇

神もさそあかすみるらん櫻ちるまめのみやもりあさきよめすな

さかきとるむこの山風さえくゝてやしるもまろく雪ふりにけり  
新六二

六十あまりくにみちたるもろ社よのためにこそ跡はたれけめ

今つくる三輪のはふりかすき社すきにしことはとはずともよし

鎌倉右大臣

釋教

春雪

三界唯一心

同心を

古來歌

さとりえて思ひとく日にあひぬれば程なくきえぬ罪のあわゆき

すみにこるなかれのすゑはかはれとも心ひとつの法のみなかみ  
いろもかも心もほかになきものををしむに花のいかてちるらん

皇太后宮大夫俊成 賀茂成助

法橋顯昭

源兼昌

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言匡房卿

荒木田延季

道因法師

民部卿爲家

鎌倉右大臣

僧都源信

心海上人

前權僧正宗性

心月輪の心を

釋教の歌なきぐりてよみけるに大日

論の三種菩提心行影心

毎日三首中戒を

無量義經船師大船師

法花經廿八品歌序品悉捨王位

廣度諸衆生其數無有量

曼珠沙花梅檀香風

方便品諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世

同文

深着於五欲如猶牛愛尾

譬喻品猶如火宅

其中衆生悉是吾子

同文

家集譬喻品の心を

信解品以佛道聲

雲葉

さとりゆく心のうちにすむ月はいてゝいるへきやまのはもなし

みそちあまりなつ宮にかけやとす月のあるしも心なりけり

おもはずは玄のふのおくへこましやはこえかたかりし白河の關

いましむるいもぬの玉をえてもなほつらき心のみかきやはする

ともつなは生死のきしにときすてゝ解脱の風にふなよそひせよ

法のためと思ふになればすへらきの跡をたにこそあたに捨しか

わたすへきかすもかきらす橋柱いかにたてけるちかひなるらん

つほむよりなへてにもにぬ花なればこするにかねてかをる春風

今そ玄る野へにさくへきはちす葉をてらさんとてや山のはの月

あまの原くもふきはらふかせなくはいてゝややまん山のはの月

高砂のをのへのさくらみしことも思へはかなしいろにめてける

まとひゆくうき世の中にもゆる火はふるさとゝのみ思ひける哉

みなしことなになけきけん世中にかゝる御法のありけるものを

ちもなくていはけなき身の憐みはこのゝりみてそ思ひ玄らるゝ

うき世にて身はみなし子と成はてぬわれ迷はずな法のたらちね

松風のこゑをつたふる秋の葉も玄かのそのにやなひきそめけん

隆 專 法 師

權 僧 正 公 朝

西 行 上 人

民 部 卿 爲 家

皇 太 后 宮 太 夫 俊 成

慈 鎮 和 尙

皇 太 后 宮 太 夫 俊 成

西 行 上 人

慈 鎮 和 尙

西 行 上 人

皇 太 后 宮 太 夫 俊 成 卿

慈 鎮 和 尙

俊 成 卿

西 行 上 人

家 隆 卿

慈 鎮

無上寶業不來自得

是時窮子聞父此言即大歡喜得未曾有

藥草喻品汝等所行是菩薩道

我觀一切普皆平等無有彼此愛憎之心

同文

授記品心尙懷憂苦

於未來世得成佛

同文

化城喻品以大慈悲力度苦惱衆生

我等與衆生皆共成佛道

觀彼久遠猶如今日

五百弟子品內祕菩薩行外現是聲聞

同文

同品心

世尊於長夜常愍見教化

人記品壽命無有量以愍衆生故

同文

まよひける心もほる、月かけにもとめぬたまやそてにうつりし

吉野山うれしかりけるまなかなさらてはおくの花をみましや

まかのそのになかめし花の色なから露もかはらぬ春のみやまち

春さめはこのもかのもの草も木もわかすみとりに染るなりけり

ひきくになはしろ水をわけやらてゆたかに流す末をとほさん

すゝきゆく法の衣やいかならんうらやましきはぬるゝそてかな

いかばかり嬉しかりけんさらてたにこん世の事は知まほしきを

おそ櫻みるへかりける契あれや花のさかりはすきにけれとも

世のながのくるしき道はあはれひのちから車のはこふなりけり

秋の野のくさの葉ことにおく露をあつめは蓮のいけたふへし

するすみのいふはかりなき古へもけふかきつくる心ちこそすれ

山のはの月にそのりしまはしこそ野へゆく鹿にかくるをくるま

いはせきてこけきる水は深けれとくまぬ人にはまられさりけり

たま衣身をはなれすときけと猶ひかりみねはやありとしもなき

なかきよに猶さてのみやすくさまし哀れとみつゝ教へさりせば

かきりなき命となるもなへてよのものゝ哀れをまればなりけり

思ひありて盡ぬいのちのあはれみをよそのことにて過にける哉

俊 成 卿

西 行 上 人

慈 鎮 和 尙

俊 成 卿

西 行 上 人

慈 鎮 人

俊 成 卿

西 行 上 人

俊 成 卿

西 行 上 人

慈 鎮 人

同 行

西 行

民 部 卿 雅 有

俊 成 卿

同 行

西 行

同品我獻寶珠世尊納受

我願既滿

法師品法花最第一

漸見濕土泥決定知近水

一念隨喜者我亦與授阿禪

多羅三狼三菩提

寶塔品則爲疾得无上佛道

若暫持者我即歡喜

手把虛空而以遊行亦未爲難

移諸天人置於他土

提婆品龍女成佛

髮中明珠

採薪及菓麻隨時恭敬與

同文

動持品我不愛身命但惜無上道

何故憂色

安樂品行常有是好夢  
深入禪定見十方佛

なみまよりひとつの玉をさゝけすはいかて五障の雲のはれまし

我ねかひみちて嬉しきまとる哉たれものそみのかなふむしろに

春の山あきの野原をなかめすて庭にはちすのはなさきにけり

むさしの堀かねの井もある物をうれしく水のちかつきにける

夏くさのひと葉にすかるゑら露も花のうへにはたまらざりけり

かひなくて浮ふよもなき身ならまし月のみ船のりなかりせは

まさきくを飾れるひものたまゆらもたもてはほとけ悦びたまふ

大空をてにとることは安くとものりにあふへきをりやなからん

三度までうつしかへてし大空にかすかきりなきひかりをそみる

たまゆゑにいてぬとみえし海の月のやかてみなみにさし昇る哉

いまそゑるたふきの玉をえしことは心をみかくたとへなりけり

薪こりみねのこのみを求めてそえかたきのりはきゝはしめける

ねをはなれつなかなぬふねを思しれは法えんことそ嬉しかるへき

數ならはをしくやあらまし惜からぬ憂身そきけは嬉しかりける

はせを葉やいかなる風をいたむらん秋のころそ色にいてぬる

思ふへし我うつゝこそかなしけれみ法のやとにみるゆめそゝれ

まつかなる庵をまめて入ぬればひとかたならぬひかりをそみる

法性寺入道關白  
慈 鎮

俊 成 卿

同 行 上 人

俊 成 卿

僧 都 源 信

慈 鎮

同 成 卿

同 行

西 行 上 人

慈 鎮

同 成 卿

俊 成 卿

北 源 信

同 文

涌出品得成正覺傳無上法輪

從地而涌出

父少而子老

壽量品壽命無數劫

得入無上道速成就佛身

同 文

現有滅不滅

常在靈鷲山

分別功德品不久詣道場

若坐若經行除睡常攝心

若坐若立若經行所

隨喜功德品如說而修行其福不可限

如是展轉教

最後第五十開一偈隨喜

同品五十展轉隨喜功德

法師功德品是人持此經安住希有地

ふかきやま心の月しすみぬれはかゝみによものさとりをそみる

夏山の木かけたにこそ涼しきをいはのたゝみのさとりにいかこそ

池水のそこより出るはちす葉のいかてにこりにまますなりけん

たらちねをわかの浦わとみしまゝに子は又老のなみをかけゝる

これそまこと佛の道にいりしよりえてしいのちはつくる物かは

まとふ人のこゝろの行にまたかふやうへなき道の知へなるらん

わけいりしゆきのみ山のつもりにはいちまゑるかりし有明のつき

かりそめに夜半のけふりとこのほりしやわしの高峰にかへる白雲

わしの山法をこの葉にかきとめてはなのひもとくまかのその哉

いそきゆくやとにかはらぬ道なれや五つのまなも四のまことも

おこたらす常に心をいさめつゝいつかうき世のねふりさむへき

たちゐにもあゆく草葉の露はかりこゝろをほかにちらさすも哉

から國や教へ嬉しきつちはしもそのまゝをこそたかへさりけめ

つたひゆくいそちのすゑの山の井にみのりの水をくみてまゑる哉

たに河のなかれの末をくむ人もきくはいかゝはまゑるしありける

さ夜更ていそちにつたふはま千鳥きゝつゝ人もゆめはさむなり

うれしきはつひにすむへきみやま路の草もゆるかぬのりの秋風

西 行

同

俊 成 卿

慈 鎮

同

同

西 行 上 人

俊 成 卿

家 隆 卿

慈 鎮 和 尙

俊 成 卿

西 行 上 人

同

慈 鎮 和 尙

俊 成 卿

藤 原 爲 顯

慈 鎮 和 尙

又如淨明鏡悉見諸色像  
唯獨自明了餘人所不見

にこりなく清き心にみかゝれて身こそますみのかゝみなりけれ  
ましゝてさとる思ひはほかならし我なけきをば我忘るなれば

俊成卿 西行上人

常不輕品時乃得聞是法華  
經

萬代を衣のいはにたゝみあけてありかたくてそのりはきゝける  
二十あまり八つてふ文字に顯れてほとけの種はかくれさりけり

同 慈鎮和尙

而打擲之逃走遠住

そのかみのあらきたふさの杖にこそつひにかゝりて導かれけれ  
くらふ山かこふまはやのうちまてに心をさめぬところやはある

俊成卿 西行上人

神力品如來一切祕要之藏

於我滅度後應受持斯經是人於佛道決定無有疑

西行上人

於我滅度後應受持斯經是人於佛道決定無有疑

法の花に佛のたねをむすふことをうたかふまこと聞そうれしき  
この法をこのころたもつこれそのほとけの道にさためたる人

同 慈鎮和尙

同文

能持是經者則為己見我

あふき思ふみのりの風に雲きえてわかためすすむ月をみるかな  
みたひなてゝ契りし君の勅なればけふまてたれもその示教

同 民部卿雅有

囉累品如世尊勅

さまゝにきそのかけ路を傳ひ入ておくを去りつかへる山人

同 慈鎮

佛之智惠如來智惠自然智  
惠

哀れけふみのりの末を聞こともゆつりおきけるまゝなりけり  
行末に世にひろめよと三たひなて三たひさつけしのはこの法

同 俊成

今以付屬汝等

花をわくる峯のあさ日の影はやかて有明の月をみかくなりけり  
法の花ちらぬやとこそなかりけれわしのたかねの山おろしの風

同 西行

同品心

花をわくる峯のあさ日の影はやかて有明の月をみかくなりけり  
法の花ちらぬやとこそなかりけれわしのたかねの山おろしの風

同 西行

藥王品容顏甚奇妙光明照  
十方

たのむかな露の命のきゆるときはちすのうへにうつしおくなる

同 西行

廣宣流布

たのむかな露の命のきゆるときはちすのうへにうつしおくなる

同 慈鎮

即往安樂世界

たのむかな露の命のきゆるときはちすのうへにうつしおくなる

同 俊成

妙音品及衆羅處皆能救濟  
正使和合百千萬月其面貌  
端正

八萬四千衆寶蓮花

普門品施無畏者

弘誓深如海歷劫不思儀

同文

施羅尼品乃至夢中亦復莫  
惱

同文

羅刹女等

嚴王品願毋放我等出家作  
沙門

又如一眼之龜值浮木(孔)

同文

同品心

勸發品成就四法

卽往兜率天上

濁惡世中其有受持是經典  
者我當

釋教歌中

あらきうみきひしき山の中なれとたへなる聲はへたてさりけり

わか心さやけきかけにすむものをあるよの月を目とつみるたに

驚の山あまたはちすのひらけしをおとろきながら去る人そなき

おそれなき道にみちひくひしりこそ我名にたて、人に去らるれ

ちかひける心のやかてうみなれは人をわたすもわつらひもなし

おしてや深きちかひのおほあみに引れんことの頼もしきかな

夢のうちにさむる悟りのありければ苦しみなしと、きける物を

うつゝにはさらにもいはすぬは玉の夢の中にもはなれやはする

十の名を法のむしろにき、しよりけになつかしき妹かことのは

たらちねを導かんやたらちめに請しいとまのすゑそうれしき

同じくはうれしからまし天の河のりをたつねしうき木なりせは

我やこの浮木にあへる龜ならむこふはふれともよりは去らぬを

つちに入天にのほりて火をいたし水をなかすもたらちねのため

法の水をほとけのみなにつたふとて四つの心にむすひいれる

はるかなるその曉をまたすともそらのけしきはみつへかりける

あはれみの名残を花もと、めけりにこるおもひの水すまぬよに

なかくるたまのいつみのかけなれや霜おくつきの有明のそら

同

西

慈

同

俊

西

同

俊

慈

同

西

俊

雅

慈

俊

西

慈

行

鎮

卿

行

卿

成

卿

鎮

卿

行

成

卿

有

鎮

卿

行

鎮



南北百番歌合

誓佛智惠水永洗煩惱塵

十禪師宮歌合

久安百首涅槃經一切衆生  
悉有佛性

同經心

同

雪にて丈六の佛をつくり  
奉て供養すとて

題不知

大比叡社十五番歌合

四季百首御歌

家集舍利講雪中聞法

建保三年内大臣家百首釋  
迦

久安百首一道無爲一乘佛  
性

法花經妙莊嚴王品

千五百番歌合

春雨するに聖のもとへ

久安百首化縁大乘五性各  
別

月のすむ都はむかしまとひいてぬいくよかくらき道にまよはん  
 のこらめや心のたまに水すまはよ、につもれるちりふかくとも  
 教へおくまことの道のふかきこそ山のすきふのゆきにまらるれ  
 もろ人のこゝろのうちにすむ月をいかなるつみの雲かくすらん  
 玉釋教  
 ぶたつなき玉をむめたるもとゆひのとく事かたき法とこそきけ  
 ぶたつなき法にあはすはかけはなれ五の雲もはれすやあらまし  
 新釋釋教 康實玉四集  
 いにしへのつるの林のみゆきかと思ひとくこそあはれなりけれ  
 花咲しつるのはやしのそのかみをよしの、山のくもにみしかな  
 志かのうらのなみにかげをもやとすかなわしのみ山の有明の月  
 うれしくも卯月の七日明る日やこのよにほとけむまれたまひし  
 わしの山なこりをあとのまゝのへにてゆきふみわくるのりの庭人  
 むかへこしすかたも月もさやかにてうき世をてらすさかの山本  
 去なく、に四の車をすゝめすはのりはつれたるひとやあらまし  
 皇のみゆきをいて、みさりせは今日まで世にはなつまさらまし  
 新拾釋教  
 谷の水峯のあらしを志のひてものけのたき、にあふそうれしき  
 一乗のあめふるけふや妙ほうのはちすのいけのみつまさるらん  
 ねが身にも佛のたねのありなしは花のかつらをかけてこそしれ

後京極攝政

八條院高倉

安嘉門院四條

左京大夫顯輔卿

待賢門院堀川

上西門院兵衛

瞻西上人

西行上人

慈鎮

同

寂蓮

從二位家隆卿

前參議教長

左京大夫顯輔

寂蓮法師

生

前參議教長卿

殿

前參議教長卿

眞言の心を

藥師寺龍宮をうつす事を

生死のやみに六道生死輪廻する心を

同

同

建長七年百廿八首韻歌

釋教歌中

應無所住而生其心

六帖題

同

目吉社百首御歌

同

同

釋教歌中

百首歌

花參せけるをしきに霞のふりかゝりければ

百首御歌

たい日の種子よりいて、さまやかたさまやかたまた尊形となる

十あまりふたつの誓ふかくしてなみのまななるみやつくりかも

すへらきのあつけられたるはこ捨て今はおなしく中こゝろみん

つりはりや食せてしかと緒を弱みにしこふるまに年はつきつゝ

よふことりうきよのひとをさそひいて、入於深山思惟佛道

かのきしにこのたひわたせ法のふねむまれてまぬるふる里の河

うちもねす宵々ことにたつねみよまことの道はせきもりもなし

またてみるすかたはかりや有明の月にわかれぬ名こりなりける

新六五 色ふかきのりの衣のすみそめは三世のほとけのかたみにそきる

つぎてその曉ふかきのりのみゐなかくむ身となるかたうとき

こまの火の灰なきはいに種蒔つまきつるたねはうするものかは

たのめとやむかし聖のたつそまにたえにし斧のまたおとのする

いかにして罪の漸をこりはて、わかちゑのひにたきつくさまし

現葉 あか水にたゝくこほりはとけやらてまきみを雪にすゝきつる哉

古來歌 も、草にかく水くきのあととはみなひとつみ法のうみにいるらし

まきみおくあかのをしきのふちなくはなに、霞の玉とまらまし

けさみれば佛のあかにつむ花もいつれなるらんゆきのむもれ木

鎌倉右大臣

殷富門院大輔

花山院御製

後京極攝政

同

前中納言定家卿

法印定圓

他阿上人

衣笠内大臣

光俊朝臣

慈鑑

同

同

法印印澄

殷富門院大輔

西鳥羽院

後鳥羽院

六帖題

家集

新六帖、  
まきみつむ竹の花籠はなかごのはかなきもまことの道にいらさらめやは

求むるにまたかふ法のたまなればひかりさすかに失ぬうせとをしれ

此歌は藏人いへいへときがまもりを封ふしたりけるを見つけても

とむるときいてこれはそれかとしてすむくのためのもとにむす

びつけてつかはしけると云々

百首歌釋教

成尊成尊法師入唐の時

同

家集釋教歌

同

ふく風や七重寶樹にかよふらんこゝろすしきこのゆふへかな

かのきしにほどなくこそは行てこめ心になふのりのいかたは

うらめしくこきはなれぬるうき舟ふねをのりの筏いかだとたのみけるかな

曉あけぼののはちすのうてないろくにまみまざるなりいとたげのこゑ

曇くもなきるりのとひらにさく花は遅れぬかけのいろにそありける

はれかたきまとひの雲にくらされて六の道にやいまかへるへき

此歌はずぎにけん世のつみのほどもおしはかられていまもい

かいとあはれにてと云々

百首歌中

同

天王寺百首

靈眞靈眞子十五番歌合

衣笠内大臣

俊頼

八條院高倉

成尊成尊法師母

同

殷富門院大輔

同

六條院宣旨

同

衣笠内大臣

慈鎮

同

同

百首御歌釋教

さとりえてにしにこゝろをかくるかないけのはちすに法の白浪  
すての<sup>ゆ</sup>かて子を思ふ鹿の去るへよりの宿りはいとひ出にき  
家 隆

この歌は天王寺繪堂慈鎮和尚つくりいでうしろの障子に九  
品往生人かゝれ侍ける時中品下生の人の心をよみけると云々  
續古釋教  
あたにちる花みるたにもある物をたからの植木おもひこそやれ  
俊 山 院

いろくものくものはたてをかさりにて入日やみたの光なるらん  
西方にあみたほとけはますなればことばりなりやなもと唱ふる  
季 通 朝 臣 頼

ふたらくのみ山かくれにとしをへてすむらん月を思ひこそやれ  
浪あらしきみなみのうみのはなれしまたかためりの舟通ふらん  
前 大 納 言 隆 季

立さらぬ誓ひたのめはおのつから花のうてなにのほらさらめや  
なにこともこゝろの如輪國のりのはしめにめぐりあひぬる  
花 蘭 左 大 臣 家 小 大 進  
民 部 卿 爲 家

くわんおんの大慈大悲をむかふへき八葉のはすのむねに開きて  
世のうさを數は取ともおのつからてにける玉のをはりみたすな  
同

まつかなる光のみやこたつぬればむねのはちすの月そすみける  
今日はるゝそらの光も去るきかな千種のゝりをばなのたむけに  
同

今日むくふささきの七世のかそいろはもらさす救ふまことと哉  
このみし劍のえたにのほれとてまもとのひしを身にたつる哉  
同 西 行

久安百首不動  
毎日一首中如意輪  
同歌中  
同年毎日一首中  
文永四年毎日一首中寂光  
同八年毎日一首中十種供  
養  
建長五年毎日一首中自徳  
地獄の繪をみてよめる

同

つみ人は去ての山ちの柚木ゆずきかなをのゝつるきに身をわられつゝ

西

行

同

ひとつ身をあまたに風の吹きりてほむらになすそ悲しかりける

同

同

何よりは舌ぬく苦こそかなしけれ思ふことをもいはせしとはた

同

同

なへてなき黒きはむらの苦しきはよるの思ひのむくひなるへし

同

同

南無歸命敬禮救世くわんせおんかゝるちきりはあらしとそ思ふ

慈

鎮

和

尚

同

塔のうへにのこるひかりにはしたかの雲より通ふ跡そうれしき

同

同

般若臺般若におさめ置てし法花經もゆめとのうちそうつゝにはみし

同

同

のりのみちやさそおもかけにたつた山けさの霞の天のはころも

同

同

なにはかた法の花そのひらけそめてうつろふにこそ露は置けれ

同

同

極樂とこの津の國とあはれなりあまねきかとをあげあはせつゝ

同

同

東漸のみりのふねの指南使はにしのかたよりきたるなりけれ

同

同

十あまり七しちのちかひせし人はあのとふむみよをみるよしもかな

同

同

わか太子四方の八町のうちをたになほ化まかぬるこゝろ苦しき

同

同

わか寺の淨土まわりのあそひこそあさき物からまことなりけれ

同

同

住吉古令歌とみたのみくにを聞しよりいとゝむかへをまつと去らすや

僧

都

源

信

佛の迎を待心を

天王寺にてやまひかきりになりける最後の歌七百首中

僧

都

源

信

同

なにはの海雲井うみぐもになして詠れはとほくもみえずみたのみくには

從

二

位

家隆

日想觀を

百首歌諸佛光明所不能及

家集おほそらに常に樂音する心

尙知本願重願不虛

三心の心を

觀經禁母縁を

他力の心を

釋教歌中

釋教歌中

同

同

うみにいるなにはのうらの夕日こそにしにさしける光なりけり

あまつ空月にあらそふかけはあらしかすくみゆる星の宿りも

ふえのねにことゝのまらへのかよへるはたなひく雲に風や吹らん

僞のあるをならひのことゝの葉もちかふになれたのみやはせぬ

二なくたのむになれはおのつからみつのことゝろはありける物を

はき木に何のうらをかむすひけんところもおかぬ秋の霜かな

なをはけめよもの佛のたちをひてまもる我身を身をなをしみそ

此歌は觀念法門五種増上縁中護念増上縁の心を

現存 みてもまれわれとはなれぬ夢の世のやみをてらして出る月かけ

みるたひにめつらしきかな極樂のこかねの花のちらぬ木すゑは

にしへ行まよひさとり道たえて南無あみな佛の聲にまかせよ

此歌はある人にしへゆく道をあまたにきゝわけてまよひぬべ

きをいかいさだめんとよみたりけるかへしにつかはしけると

云々

あともなき雲にあらそふ心こそなかくつきのさはりなりけれ

みなをよふ人はあま夜の月なれやくもはれねとも西へこそゆけ

心よりこゝろをうるとこゝろえてこゝろに迷ふこゝろなりけり

爲 家

藤 摩 爲 顯

俊 頼 朝 臣

中務卿のみこ

權僧正公朝

同

證 惠 上 人

圓 空 上 人

行 仙 上 人

一 遍 上 人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

心をはこゝろの跡あととこゝろえてこゝろのなきをこゝろとはせよ 一 遍 上 人

こゝろをはいかなる物とちねとも名をとなふれば佛とそなる 同

なにかなふ心はにしにうつせみのぬけはてたる聲をすゝしき 同

心よりほかにそのりの船はあるちねもちつむちるもうかはす 他 阿 上 人

此歌或時人を教化ありけるに三業の外ほか稱名といふ事なん心

えすふるき聖の歌にも「心よりほかにほのりのふねもなしち

らねはちつむちねはちつます」とこそあれと申ける人の返事

と云々

三心發得の心を

にしへゆく月をはかせもゆるかさすうきたる雲そ空にたよふ 同

畢竟空の心を

いつくにもはてなき空を出てゆく月日のみするいろはとまらす 同

法文の心を

すますへき山には雲のふるければいてそみつるふるさとの月 同

同

くらきよりくらきにみつ夢路そと知やねさめの初めなるらん 同

同

いきなからみたのちかひに法の舟さしてをばりを待そうれしき 同

同

かちをさへわれとはとらぬなみちかな西ふく風に舟をまかせて 同

同

さけはこそちらぬ櫻はあらはなれちらすはさかぬ花を見ましや 同

同

山のはにこゝろの月をさきたておいのすかたそ西にかたふく 同

永仁三年 歳暮の別時後業

報證歌中

いとなみのひまゆく駒うまに法はふちらはなとかまことの道にむかはぬ 同

同  
同  
念佛の歌

聖衆俱會樂

十題百首十地現前池

極樂六時讚を

身を思ふこゝろのなかをたかはすはみには心そあたとなるへき  
くるしみとなげきをうけは我心いつゝのよくにあひみちなせそ  
何事をおもふ思ひもはかりなきいのちのみなにしたのみてそふる  
光させはさめぬかなへのゆなれともはちすの池になかめる物を

同  
同  
民部卿爲家  
西行上人

此歌は地獄の繪に阿彌陀の光願にまかせて重業障の物をきら  
はず地獄を照し給によりて地獄のかなへ湯清涼の池にながて  
蓮のひらけたる所をかきあらはせるをみてよめると云々

同

いけの上にはちすのいたをまきみて、浪るる袖を風のたくめゆ  
すみまさる池のこゝろにあらはれてこかねの峰に浪そよせける  
ほのかなるくものあなたの笛の音もきけは佛のみのりなりけり

前中納言定家卿  
皇太后宮大夫俊成卿

此歌は震朝朝（時効）に定より出程髻（かぶ）に天の樂を聞（き）けり  
あさまたきつゆけき花を打ほどにたましく庭になまそちりしく

同

此歌は黄金瑠璃の庭に出て人々共に花を採る

くもりなき玉の臺（たい）にのほりてそはるかなるよのことも見えける

同

此歌は日中時貳宮殿樓閣に登（のぼ）りて他方界を見む

新勅釋教  
まろたへに月かゆきかとみえつるはにしにさしける光なりけり

同

此歌は日没時貳國界悉（し）く白銀光盛（さか）なり普賢大士來（き）至（す）すと



いろ／＼に雲空よりはなそちりまかふこれをや法の雨と云ふらん 同

此歌は時に大衆法を開彌歡喜瞻仰せむせむ即時に自然に無數の妙

花散亂す

かへりくる玉のうてなもはなのうちも光はおなしすみかなり成覺 同

此歌は初夜の時見佛聞法事畢て本の坊に歸へし或は金蓮花の

中金色淨土の如くなり或は瑠璃閣の中淨瑠璃淨土のごとく成なり

深き夜のひかりも聲もまつかにて月のみかほをさやかにそみる 同

此歌は中夜時夜の境靜にて漸半夜に至程三五の人々共に出て

金繩界道歩つゝ衆寶國土の境界の寂靜安樂なるを見る光も聲

も淨成して晝の界に異ならむ

新古今

新古今釋教成いにしへのをのへのかねに似たるかな岸うつ波のあかつきの聲 同

あけかたは池のはちすもひらくれば玉のすたれに風かよふなり 同

此歌は曉到て浪の聲金の岸に寄る程欲成曙れば風の音珠簾を

過る際也

雲葉續古今釋教いにしへにいかなる契ありてかは彌陀に仕ふる身となり成にけん 前律師永觀  
阿彌陀佛と申はかりをつとめて淨土の莊嚴みるそうれしき 源空上人

題不知  
釋教歌中

同

同

同

中比ある僧の夢に僧三人  
行合てよめる歌

極樂へつとめてとくと出たはみのをはりにはまわりつきなん

同

おほつかな誰かいひけん小松には雲をさゝふるたかまつのえた

同

阿彌陀佛といふより外は津の國のなにはの事もあしかりぬへし

同

此四首歌指南抄中よりかきいだせり

玉釋教 哀なり日はくれかたになりぬれとにしへゆくへき人のなきかな

よみ人しらす

雲葉 玉釋教 極樂にゆかんと思ふころにてなむあみた佛といふそみころ

此歌は或人三心をいかゞ心うべきとて八幡に祈請申けるに夢

玉釋教 にまめし給ける御歌と云々

いせ島や清きなきさはぎてもあれわれはにこれる水にやとらん

同

此歌は式抄云ひたちの國北郡といふ所に不斷念佛の堂あり善

光寺如來を安置まてまつりて律僧と凡俗といづれにて念佛

申べきと思わづらひけるに律僧の夢に黒衣の僧來てまめしけ

ると云々

風釋教 待かねてうらむとつけよみな人にいつをつとめて急かさるらん

同

いそけ人みたのみふねの通ふ世にのりおくれなは誰かわたさん

同

此二首は善光寺の如來の御歌となん

寺

伊呂波四十七首

家集月明寺邊

柿本影供百首

賀茂社百首御歌

同

六條題  
寺ナ

家集山寺秋野

古寺月

文永六年毎日一首中

れいのこゑかねのひゝきも秋ちりしいほりも寺も山ふかくして  
 ひると見る月にあくるををえらましや時をつひの音なかりせば  
 たうたてしあとにはくつなふたらくのみなみの岸きしにのこる埋木  
 いにしへの三のたからそまのはるゝ十五大寺のあとをみるにも  
 これやさ永久四年百首は高野のやまにすむこゝろ關伽振鈴のゆふくれのこゑ  
 はしめなきつみのつもの悲しさをぬかの聲こゑ々々ときつるかな  
 うはそくかおこなふ山の櫻はな今日のみゆきのいろそありける  
 此歌は花山院御覽しにありかせ給に御伴にさぶらひて山寺に  
 あそふといふ事をと云々

新六二  
あそふといふ事をと云々

ふくる夜の寺行やうぎひのかねのおとにはかつゝみにうちそおとろく  
現在六  
 なからなるはしもと寺もつくるなりおこさぬ家を何にたとへん

野へのすゑにをばなをみこす山本のもみちにこもる寺のいし橋

寺ふかきこのまの門かどにかねさえてこの世の秋にみぬつきつきそすむ

小倉山今日こんにちまくれぬとつくるなりふもとのてらてらの入あひのかね

前中納言定家卿

西行上人

後九條内大臣

慈鎮和尚

同

俊頼

藤原長能

同

信實

同

前民部卿雅有

同

同

爲家

永仁元年九月十首古寺暮

同

嘉元元年式部卿親王家續  
千首歌山寺夢

山寺竹

山寺鳥

嘉祿四年百首山寺

建長四年每日一首中

六帖題

家集

正治二年百首御歌

千首歌(みれの山寺)

光明峯寺入道攝政家百首  
古寺紅葉

山寺にて入相の鐘を聞く  
(とは山寺)

今方御方會遠見山雪

不相思(おほてら)

千五百番歌合

六帖題(みれの大寺)

くればつる秋もうらめしをくら山ふもとの寺のいりあひのかね  
秋もくれ今日も暮ぬとつくるかな水のみなみのいりあひのかね

ゆみなる山路まつけき夜な〜に枕のたきやゆめあらふらん

山ふかき寺のそとものひとむらや世のうきふしにあらぬくれ竹

つゝらざる道のゆくてのみねたかみせみにまされる鳥の聲かな

あかすく水はまきみにおちそへてひととおともせぬおくの山寺

山寺のあけ行かねにうちそへてまぐらのゆめをあらふたきつせ

まきみつむ時のまもなく山寺にわきてひとたひあかたてまつる

入あひのおとのみならず山寺はふみよむこゑもあはれなりけり

霧ふかしそこともまらぬ山寺にはるかにひくれいのおとかな

あかたなの花のかれ葉もうちまめり朝きりふかしみねのやま寺

そはたつる枕におつるかねのおとも紅葉をいつかみねのやま寺

入あひのとは山寺のかねのこゑあなこゝろほそわか身いくよそ

みわたせは遠山寺の塔のうへにふりかさねたるこゝのわたの雪

あひおもはぬ人を思ふはおほ寺の垣のまきへにぬかつくかこと

朝夕はたのむとなしにおほてらのむなしき雲をうちなかめつゝ

たのもしな國を守れとちかひおきしわかたつそまのみねの大寺

左近大將内實卿

大納言實泰卿

参議爲相卿

同

同

爲家

同

正三位知家

西行

後鳥羽院

爲家卿

定家卿

基俊

源仲正

よみ人しらす

前中納言定家卿

民部卿爲家

家集山寺(こてら)

山寺時雨

文永二年七月白河殿七百首(みてる)

文應元年七社百首(たちばなてら)

六帖題

題不知

久永八年毎日一首中(花の山寺)

建保元年八月十五夜月十首歌合古寺月(こてら)

題不知(ほうりん、山城)

建長四年毎日一首中法輪寺

弘長元年四月八日楚忽百首(さかのい寺)

洞院攝政家百首祝(法成寺、山城)

文應元年毎日一首中(雲尾寺、山城)

山寺

山寺

山寺

山寺

すまはやな峯のまきみのはなを折谷のみづくむ山のこてらに

時雨する山のこてらは花につむまきみかうへそつゆけかりける

白河やちかきみてらのいとさくらとしのをなかく君そさかえん

いにしへにたか袖のかをうつしおきてはな立花の寺となしけん

新六二  
今よりはこけのまたにてみえすとも空より花のふりしところそ

萬十六  
たち花の寺のなかに我ぬねしうなるはなりはかみあけつらん

玉納下  
さかこえてのほりやすくを思ひやるたむくるのりのはなの山寺

歌林  
おしなへて霞める野へのさかなれば法のわにさへ立めぐりけり

法のわにめぐりくるまのまのまのしにやおもはぬ外の人のとひけん

此歌は人々いざなひて大井河紅葉の次に法輪へ参るにときは

のほどよりいよのかみもろかぬをもてのりたる車をつかはさ

れしかばよめると云々

くもゝみなむなしき空に藏つゝすめるあらしのやまのはのつき

月のこるさかのゝ寺のかねのおとに常にうき世の夢やさめなん

君を守る法なる寺のまきはしらあらためたてゝ千世もくちせし

山さくら花のさかりにたつねきてくもゐる寺の名をみつるかな

山さくら花のさかりにたつねきてくもゐる寺の名をみつるかな

源 仲 正

同

花山院内大臣

民部卿爲家

光 俊

よみ人しらす

民部卿爲家

皇太后宮大夫俊成

源 有 房

殷富門院大輔

爲 家

同

家長朝臣

爲 家 卿

爲 家 卿

深夜歸雁

題不<sub>レ</sub>知(兼作)

雲居寺歌合

東山にて月あかき夜

建保三年内大臣家百首

(阿彌陀)  
二夜百首佛寺五首中(高野紀伊)

同(しか寺、近江)

同(せつせ、大和)

寺

西大寺(西のおほてら)

天王寺百首(なにはのてら)

同

同

神力品即是道場

康元二年毎日一首中天王寺西門

二夜百首佛寺五首中

寺(雲林、山城)

雲を寺ふくかひきけは歸るなるかりかねにこそよはなりにけれ

すむ月をみたのみかほになかむれば雲ある寺も名のみなりけり

歌林 雲をてらかすみふきとくはるかせにみたれてけりな青柳のいと

久かたはてにとるはかりなりにけり雲のゐるてふ寺にやとりて

まらぬよのふかきけふりもはれぬらん雲あるてらをいつる光に

ななき夜にあさ日まつまの心こそたかの、おくにありあけの月

なみにたくふかねのおとこそあはれなれ夕さひしきまかの山寺

くもにふす人のこゝろそまられるけふをはつせのおくの山本

はつせへと思ひ立田の山とほみこまひきとめてをるすへもなし

さりとともと西の大寺たのむかなそなたのねかひともしかりしを

西へとくむかふるきみをたのむ道はなにはの寺のみかと成けり

むかしよりのりのはちすをいけにみてこのおほ寺に心すみつゝ

このてらをおかむまるしの石の上にかたく契をむすひけるかな

このくにのなにはのうらの大寺の額のめいこそまことなりけれ

世をすくふちかひのうみの入目こそなにはの水の照すなりけれ

難波江やひしりのあとにとしくれぬ月日のいるを思ひおくりて

白河はたましけりともみえなくに雲のはやしをあらしつるかな

源 仲 正

式部大夫(定)業

花園左大臣家小大進

惠 慶 法 師

家 隆 卿

後 京 極 攝 政

同

同

よみ人しらす

殷富門院大輔

慈 鎮

同

同

同

天王寺西門

後 京 極 攝 政

よみ人しらす

尋花到古寺

たはふれ歌とよめる  
(たはを寺山城)

五十首中古寺花(いその  
神寺、大和)

六帖題

同題寺

百首御歌名所秋(とよら  
の寺、大和)

家集竹上霜

古寺紅葉

建長七年顯朝卿家千首

釋林寺時鳥をきいて(新  
拾)

家集舟寺に僧あて經よむ  
所(ふれてら、攝津)

永久四年百首(ふみつ寺、  
山城)

詣寺見戀(清水)

六帖題寺

大僧正源徳泉障千繪關寺

秋六帖題(あすかの寺、大  
和)

嘉元元年式部卿親王家千  
首歌古寺月

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

これやきく雲のはやしの寺ならん花をたつぬるこゝろやすめん  
高尾寺あはれなりけるつとめかなやすらひ花とつゝみうつなり  
むかしよりう烈けんときを人忘れすはなにふりぬるいその神寺  
新六帖  
礪の上になあふ寺のかねのおとにふるくなるよを聞そかなしき  
わたつうみの花のあしたをまつへくははやわき返れ三井の玉水  
かねのおとによもきか露をおきまさるとよらの寺の秋のよの月  
かつらきやとよらの寺のたけのはに氷れる霜はとつるよもなし  
おなしえもにしこそわきてそめつとよらの寺の秋の紅葉は  
岩ふかきとよらの寺は山ふしのおこなひこゑもさひしかりけり  
新拾遺中  
去のひねもおとなかりけり時鳥こや去つかなるはやしなるらん  
舟寺にのりうかふ也夜もすから聲をほにあけてよみすましつゝ  
門を出ては尋ねてゆかん清水寺名にたかはすはすみやとまると  
歌林  
をかみするかために妹かみられつゝいつらは心きよみつのたき  
新六帖  
いたつらに行き來をとむる關寺はむつの道をやゆるさゝるらん  
あふさかや霜をかさぬるてらふりてかねのひゝきもすめる月影  
現存六  
いかはかりひかりをそへん朝日まつあすかの寺の法のともし火  
みるまゝにかけこそ去らめとふ鳥のあすかの寺のあけかたの月

爲	同	爲	爲	藤	藤	前	從	藤	家	土	權	後	西
相	鳥	僧	御	原	原	律	二	原	集	御	僧	鳥	行
卿	羽	正	門	爲	爲	師	位	爲	竹	院	正	羽	上
	院	公	院			永	行		上	宮	公	院	人
	內	朝	御			親	家		霜	內	朝	宮	
	卿	家	製			賴	卿		雪	卿	家	內	
	卿	家	製			房	卿		霜	卿	家	卿	
	卿	家	製			房	卿		雪	卿	家	卿	

寂蓮法師のもとにつかはしける歌中(ひえの山寺、近江)

賀茂百首御歌

法の水あさくなりゆくすゑの世をおもへはかなしひえの山てら  
ひえの山の堅義やちかくなりぬらん夜半にさえたる問答のこゑ

同 慈 鎮 和 尙

夫木和歌抄卷第三十四終



夫木和歌抄卷第三十五

雜部十七

帝王	院	春宮	中宮	親王	將軍
大臣	歌人	民	翁	法師	尼
優婆塞	父	稚子	未通女	嶋子	婦人
女	妹	我妹子	妻	使	商人
海人	夷	田子	匠	遊女	遊士
傀儡	樵夫	山老	健男	長	賤人
總角	垂髮子	奴僕	里子	唐人	楊貴妃
李夫人	王昭君	上陽人	陵園妾		

題

帝王

題不知(皇自祖)

大王

長歌

同

題不知

同

同

同

同

同

萬十一  
すめらきの神の御門をかしこみとさふらふときにあへる君かも  
よみ人まらす

萬三  
すめらきの遠つみかと、あり通ふまをみれば神代を思ふ  
人丸

萬四  
天の下、まろしめしけん、すめらきの神のみことの、おほみや  
同丸

は、こゝときけとも、  
赤人

萬三  
すめらきの、神のみことの、まきませる、くにのまをせる、みゆ  
赤人

はまも、さはにあれとも、まま山の、よろしきくと、  
赤人

萬六  
明つかみ我天皇の天の下八洲の中にくにはしも多くしあれとも  
よみ人しらす

やすみまし、我おほきみの、たかまきし、大和のくには、すめら  
同丸

きの、神の御代より、まきませる、くにしあれは、  
同丸

萬三  
すめらきの、つかはし、ま、ひなさかる、國おさめにと、むら  
同丸

とりの、あさ立ゆけは、  
同丸

萬一  
とほつかみ、わか大君の、みゆきよき、山こしの風の、ひとりを  
同丸

る、わか衣手に、あさゆふに、  
同丸

萬二  
やすみし、わかおほきみの、あめのまた、申たまへは、よろつ  
人丸

よに、まろしもあらんと、  
人丸

萬十七  
おほきみの、まけのまに、まなさかる、こしを治めに、いて、  
よみ人しらす

こし、ますらわれすら、  
よみ人しらす

題不知

神龜五年秋八月作歌

天平元年冬十月作歌

題不知

同

長歌

同

千子

題不知

同

萬十七 おほきみの、みことかしこみ、あしひきの、山野さはらす、あま  
 さかる、ひなをささむる、ますらをや、  
 萬九 ありしあひたに、うつせみの、よのひとなれば、おほきみの、み  
 ことかしこみ、あまさかる、ひなをさめにと、  
 萬九 うつせみの、よの人なれば、おほきみの、みことかしこみ、まき  
 しまの、やまとのくにの、いそのかみ、ふりにしさとを、  
 我みかと物なおほしそすめかみのつきて給へるわれならなくに  
 我みかと千代と言葉にさかえむとおもひてありし我しかなしも  
 萬十一 おほきみは神にしませはあま雲のいほへのまたにかくれ給ひぬ  
 大君のみかさにぬへるあがま言有つゝみれとことなきわかくも  
 萬六 すらきのみゆきのまに我妹子か手枕まかすつきそへにける  
 萬三 すみのえのきしの松原とはつかみ我おほきみのみゆきしところ  
 萬十一 おほきみのまほやくあまの藤衣なるとはすれといやめつらしも  
 萬三 大君のむつたまあへやとよくにのわかみの山をみやとさたむる  
 萬三 やすみえるわか大君のみけくにはやまともこゝ同しと思ふ  
 萬三 やすみえる我大君のたかてらすひのわかみこもおほきみとのに  
 萬三 おほ君はちとせにまさむ白雲もみふねの山にたゆる目あらめや

よみ人まらす

笠 金 村

同

よみ人とらす

同

中納言家持卿

同

よみ人まらす

師 大伴 卿

春 日 王

喜多院入道二品親王家五  
十首祝

ふる雪の玄らかみまで大君に仕へまつればたふとくもあるか  
つきもせぬわか大君のなかれかなみのりの水はとたひすむとも

橋 左 大 臣  
前大納言經房卿

院

正治二年百首

玉椿ふたゝひいろはかはるともはこやのやまの御代はつきせし  
よろつ代と常磐かきはに頼むかな貌姑射のやまの君のみかけを  
てらしみむやほよろつ代そくもりなきはこやの山の峯にすむ月

後 京 極 攝 政  
前中納言定家卿  
俊 成 卿 女

春 宮

正治二年百首

くれ竹のそのよりうつる春の宮かねても千代のいろはみえにき  
雲のうへも春のみ山のよろつ代も松とたげとのすゑにたとへは  
風のおともものときき春の宮のうちにさかりひさしき花をみる哉

後 京 極 攝 政  
參 議 雅 經 卿  
大 藏 卿 隆 持

中 宮

百首歌祝春宮

弘安七年春宮御方三首歌  
見花

寛嘉元年女御入内御屏風  
京花入家天皇  
洞院攝政家百首

かさねてもかねて千とせのえるきかな春に立そふあきのみや人  
月も日もかけをならへて秋の宮くもらてのみや千代もめづらん

從二位家隆卿  
藻壁門院但馬

親王

喜多院入道二品親王家五  
十首祝

同

弘安元年百首

色かへぬ竹のそのなるうくひすはいくよろつ代の春をまつらん  
年をへておひそふ竹のそのうちにつきせさるへき君の千代哉  
あさ日かけさしさかえ行竹の園ちよにやちよになほそかさねん  
みとりなる竹のみその萬代になほもときはのかけそまげらん

野宮左大臣  
大藏卿有家  
從二位行家卿  
民部卿爲家

將軍

家集將軍

下のおひのむすふ氷にてをかけてそらにそうくるゆみはりの月

寂蓮法師

大臣

建保二年内大臣家百首祝

同

同

かけなひくみかさの山の藤の花あさひさしいつる雲かと思ふ  
かけなひくみかさの山にる雲の長閑くもあるか風たぬ代は  
代をてらすかけなひく星のくらゐ山なほ榮ゆかん末もはるかに

從二位家隆卿  
大藏卿有家  
藤原有季朝臣

題不知

萬一元明天皇御歌

ますらをの鞆たもとの音ねなりものゝふの大おほまうち君きみたてまつらしも

聖武天皇御製

歌人

千五百番歌合

同

文永二年毎日一首中

洞院攝政家百首述懐

かきつむるもくつをいかし思ふらん浪なみになれたるわかわかのうら人  
なしつほのむかしのあとあとに立たかへりわかわかのうらにそ浪なみのより人  
ためしなき松まつのけふりにことゝはぬ時ときしもいかにわかわかのうら人  
たらちねのおよはずとほき跡あと過すてみちをきはむるわかわかのうら人

第三のみこみ  
家長朝臣  
民部卿為家  
定家卿

民

御集冬御歌中

百首御歌

題不知

毎日一首中民

建長四年毎日一首中

同

おほふへき袖そでこそなけれ世よ中にまつしきたみのさむきよなく  
いいつまでと夜寒よひがむのころもぬきかけてあはれと民たみを思おもひしりけ  
現葉いまは新後撰あたらしく雜中まじ  
むくふへき世よのことわりは思おもへとも民たみのちからを助たすけやはする  
思おもふへきたみのつかさのなはかりになけく力ちからのやすむ日もなし  
いかにして民たみのこゝろをうるほさむ小田こゝの早苗はやなに雨あめをまかせて  
五月雨ごげつあめのふるにかひあるうるひかな民たみのたもてるあめの下したとして

後京極攝政  
後一條入道關白  
同  
為家卿  
同  
同

六十五韻字歌漸々好風吹  
北牖宜哉林席筵中絶

最勝四天王院名所御障子

同

家集述懷

六帖題

建長八年百首歌合

堀河院御時百首雪

堀河院御時百首雪

翁

六帖題御歌一首

翁

百首御歌

六帖題

同

おきな

六帖題むま

すへらきのむかしあまねきめぐみやこの六月の民にほとこす

君か代は誰もまかまのいちをるくとしあるたみのあまの空かな

いとまなきまかまのいちに立たみもまのにかすそふ君か代の秋

世中はくさるとるたみそこゑにきもならばぬあけほの空

かへるさのいへちをいそく道（新六）にいて、ゆふとろきの民の聲哉（市岡）

海山もたちそふ民のけふりにて御代のさかりはあらはれにけり

吉野川とをつかはかみ雪ふればけふりやなみのいへるなるらん

吉野川とをつかはかみ雪ふればけふりやなみのいへるなるらん

この濱につりする翁あはれなりくるまのみきにたれかのすへき

深山よりいて、や君に仕へましよつのおきな（漢故事和歌集）のいまもありせば

心をはきたのおきな（新六）にならへともまた立かへるこまたにもなし

心をはいかにならはむ方もなしきたのおきな（新六）に身はなりぬとも

いにしへのきたの翁もある物をなとあやにくに世をなけくらん

きよき名のおきな（同）ならいかに心にはいてぬる家に身をやとしける

世中はきたのおきな（同）の馬なれやよきもあしきものちをまらねは

定家卿

同

俊成卿

家隆卿

信實朝臣

土御門院宰相（小）

中納言國信卿

中務卿

同

土御門院御製

衣笠内大臣

正三位知家卿

同

權僧正公朝

同

正治二年百首

六百番歌合

六帖題杖

翁

永久四年百首

同

堀河院御時百首野

いつのまに霜のおきなとなりぬらんきくをは花のおとと思ふに

わか葉つむ野原をみればたかとり六六四の翁はむへもたはれあひけり

代々をへて古たるおきな杖つきて花のありか六二一をみるよしもかな

わたつみのおきなも花はかさしけり春の至らぬところなければ

本らひく蟹の濱屋に年ふりていか見ヤにまはせあられにけり

あさ露をひさしき物と思ふ世にほとけのあにいかてなりけん

堀河百首音高はる岡に登て見けむたかとりかこのころのこををしと思ふ

此歌萬葉集の詞に音高値有子也老翁也此翁之萬、  
忽聽値高羨子也羹、九箇女百嬌無子也儔花容無上略之といへり

### 法師

六帖題法師

同

同

同

同題歌に

新六二かみをそり衣をそむるいろなくはなに、つたへて法をきかまし

たかの山あけむひかりをまつ人のなかきよけたぬ法のももし火

あさなくあかの水くみまきみつみこけの袂はいはにふれつ、

山ふしのすかたけとほきかは衣ころこはくも身にそはぬかな

世の常のあまのまわさといさむれば佛をつりしりの師もあり

前大納言隆房

法橋顯昭

よみ人志らす

同

俊頼朝臣

仲實朝臣

師時

爲家

知家

光俊

信實

同



老若五十首歌合

山ふしのほらふく峰のゆふきりにニそこともゑらぬすゝのうは風

寂蓮法師

尼

母

六帖題尼

新六二黒かみの色はかはらぬさけあまのまことのすちに身は靡きつゝ

衣笠内大臣

同

玉かつらかけしすかたを改めておこなふみちはみるもかしこし

爲家

同

すちにいつゝのさはりいとひてや思ひすてゝも道新六にいるらん

正三位知家

同

なほさりの昔のけさの行するにかゝるさとりの身とそなりぬる新六

光信朝臣

優婆塞

三百六十首中

うはそくかあさなにきさむ松の葉は山の雪にやうつもれぬらん

好忠

堀河院御時百首

うはそくはおこなひすらし真木の立あら山中にまふしさしつゝ

權中納言師時卿

父

題不知

萬廿 たち花のみえりの里にちゝをおきて道のなからは行かてぬかも

大部足丸



未通女

題不知

陸奥國歌

題不知

長歌

題不知

久安百首御歌

延喜廿七年三月五日京極御息女所歌合

御集

永久四年百首妓女

家集をとり

光明峯寺入道攝政家百首

熊野山二十首歌

家集

萬四  
をとりぬか袖ふる山のみつかきのひさしき代より思ひそめてき

人丸

萬十四  
つくしなる匂ふこゆるゑにみちのくのかとりをとめの結し紐とく

よみ人志らす

萬九  
蘆の屋のうなひ少女かおくつきをゆきくと見ては音のみし泣る

蟲丸

萬九  
あしのやの、うなひをとめの、やとせこの、かたおひの時に、

同

をばなりに、かみたくまでに、ならひゐて、

萬九  
君を待松浦のうらのをとめらはとこよのくにのあまをとめかも

よみ人志らす

ひれふりし松浦の山のおとめらもいとわれはかり思ひけんやも

崇徳院

ちはやふる神しゆるさは春日野に立やをとめのいつかたゆへき

よみ人志らす

玉のえにすむといふなるをとめかひかりの花もかくや咲らん

花山院

をとめか裳裾にあまる黒かみの靡くをみるそゆふかたもなき

神祇伯家仲卿

をとめかかとみの男にひれふりてかへすま袖を煮のはさらめや

俊頼

ひかりさすたましま川の月きよみをとめのころも袖さへそてる

定家卿

をとめか挿頭にたをるたかさこの外山のさくら花さきにけり

爲家卿

いそなつむあまのさをとめ心せよおきふくかせに浪たかくなる

西行上人

一句百首冬歌

同

六帖題

御集綴

建長八年百首歌合

題不知

あづまに下ける道にて

此歌は屏風のゑを人々よみけるにうみのきはにをさなき物あるところをよめると云々

ふかき夜にをとめのすかた風とちて雲路にみてるよろつ代の聲

らる雪にみとせはすきてをとめこの袖のいろますもしきの庭

むしたる東をとめかすきかけになこりおほくて行わかれぬる

冬されははつせをとめの袖さえて手にまく玉とちるあられかな

この程はあまつをとめら暇なみさはたのさなへいそきとるなり

庭にたつあさてかりほしきまのふあつまをとめを忘れ給ふな

ふしのねの風にたよふ白雲をあまつをとめかそてかとそみる

此歌路次記云たごのうらにうち出でふじのたかねとみれば時

わかぬゆきなれどもなべていまだまろたへにはあらずあをく

しててんによれるすがたかたへの山よりこよなくみえて貞観

十七年の冬の比白衣美女ふたりありてこのいたゞきにならび

まふと都良香が富士の山の記にかきたる故に思出らるゝと云

云

# 島子

定家

同

衣笠内大臣

中務のみこ

前大納言顯朝卿

よみ人あらず

源光行

題不知

當座百首中浦島子

後つひに命玄にけるみつ萬九のえのうら玄まの子かいへらをそみる  
よみ人志らす  
とこよには又もかへしぬ浦島やさてみつ參議のえのなみにくらへん  
爲相卿

婦人

百首御歌

建保三年名所百首

後京極攝政家詩歌合花

家集

たをやめの袖うちはらふ村雨にとるやさなへのこゑもならはす  
後 鳥 羽 院  
みしまえの浪のさほさすたをやめのはるの衣のいろそうつらふ  
定 家 卿  
玉すたれおなしみとりもたをやめのそむるころもにかほる春風  
同  
たをやめか衣をうすみ秋やたつあすかにちかきかつらきのやま  
匡 房 卿

女

六帖題をうな

久安百首

家集

をうな

我妹子かまたあさかほやつゝむらん髪ふりかけて面かくしする  
新六二  
知 家  
いはひおくみよのはしめのやをんななとめ新六に八百萬代の程は見えにき  
同  
信 實  
あさてかりまきしのひけむあつまめも我戀はかり思ひけんやそ  
左京大夫顯輔卿  
いちこもるうはめをうなの重ねもつこのて柏におもてならへむ  
西 行 上 人  
我せこに年の數をもあらはさてなほわかゆてふさくさめのとし  
現存六  
知 家

よしの、離宮の幸に

建保七年名所百首

弘長二年百首

三百六十首中(なにはめ)

萬七

かうちめの手染の糸をくりかへしいとにありとも絶んと思ふな  
はつせめのつくるゆふ花み吉野のたきのみなはに咲にけらすや

はつせめのならすゆふへの山風に秋にはたえぬまつのをたまき

誰ゆゑに思ふとかゑるはつせめの手にまく草のおのれみたれて

あしの葉に隠れてすめる難波女のこやは夏こそすしかりけれ

よみ人去らす

笠金村

定家

爲家

好忠

### 妹

題不<sub>レ</sub>知

同

同

同

同

萬十一

いけとくあはぬ妹ゆゑ久方のあまつゆゑもにぬれにたるかも

月をみるくにはおなしき山邊にてうつくし妹はへたてたるかも

とほ山田霞たなひきいやとほにいもかめみすてわかこふるかも

あふみの海に沖津白浪ゑらすとも妹かりとはなぬかこえなむ

久方のあまてる月のいりゆかはなになそへていもをゑのはん

人丸

同

同

同

同

### 我妹子

人目もるあしかきこしに我妹子を逢みるからに事をさたおほき

よみ人去らす

〇 〇 〇

題不知  
同  
家集

我妹子か逢ふよしをなみ駿河なるふしの高ねのもえつゝあらむ  
我妹子にあをわすらすな磯のかみ袖ふるかはのたゝんと思ひつ  
いかならむ神にぬさをもたむけはか我思ふいもを夢にたにみん

よみ人志らす  
人  
丸  
同

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

題不知  
旋頭歌  
題不知  
六帖題かくれつま  
建長八年百首歌合  
六百番歌合寄草戀

八千はこの神の御代よりともしつま人志りにけりつけて思へは  
とほつまと手枕かはしねたる夜は鳥のねなくなあけはあくとも  
初瀬のやゆ槻か下に隠れたる妻あかねさし照る月夜に人み天鴨  
我門にちとり志はなくおきよくわかかくれつま人に志らるな  
をとめこかあはせ衣のかくれつまうすき契りにうらみわひつゝ  
から人のわかづま志らぬ家うつりそれをためしの戀もするかな  
うき中のつまはかれにしさよころもま袖かたしきぬる空もなし  
戀つまのやかて軒端になりゆけはいと忍ふのくさそ志ける

人  
丸  
同  
同  
よみ人志らす  
衣笠内大臣  
光俊朝臣  
前大納言顯朝卿  
正三位經家卿

使

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

題不知

同

同

建保三年内大臣家百首

六帖題つかひ(やまとつかひ)

六帖題(うへのつかひ)

同

同

同

同(ふみつかひ)

家集(ころつかひ)

久永九年毎日一首中つかひといふを

千五百番歌合

題不知

萬葉はのちりゆくなへに玉はこのつかひをみれば逢しひ思ほゆ  
 萬十人へ人は道もまみくにかよへともわかまつ妹かつかひこぬかも  
 萬四玉かつら絶ぬつかひの通はねは今年もあると思ひいつるかも  
 春日山かすみたなひくまめの内に春のつかひもいまやたつらん  
 今の世にありとは聞すもろこしの文まなふてふやまとつかひは  
 新六二たてまつる上のつかひの名残こそ時にのそめはさすかなりしか  
 同いまの代もひかりとそみるあふひ草まつりにさせる加茂の使は  
 同あけはまたさかひへたて、伊勢島やかりの使のゆきやわかれん  
 勅なればさそいのらん伊勢つかひ代は春なれと花ををりつ、  
 新六五むすひめのたかふも知らす文使ほかにみせずといふかはかなさ  
 おもひやる心つかひはいとなきに夢にみえずときくかあやしさ  
 すゝか山たよりの風ををるへにてことつてわたるまつまの、浦  
 君か代のつきぬちとせの友とならん老のつかひになしと答へて  
 萬廿みそら行雲のつかひと人はいへと家つとあらむたつきまらすも  
 ゆふへ行雲のつかひにことつてむうはの空なるたよりなりとも

商人

人 九  
 よみ人まらす  
 大伴坂上郎女  
 家長朝臣  
 權僧正公朝  
 衣笠内大臣  
 爲家卿  
 正三位知家  
 光俊  
 同  
 好忠  
 爲家  
 慈鎮和尙  
 中納言家持卿  
 家隆



六百番歌合寄商人戀

同

同

同

同

としふかき入江の秋の月みてもわかれをしまぬひとやかなしき

あき人の舟のむかしを思ふにもうらみはふかきなみたなりけり

辰の市や日をまつ賤のそれならばあすまらぬ身にかへて逢まし

ともすればわかれをまらぬ浪の上にかきなすねをも人は問けり

すみわひてよにふる道はまらるとも難波の蘆のかりにたにみむ

此歌は判者云なにはのあしかるもの商人にとりてかすかなる

にやと云々

後京極攝政

慈鎮和尚

定家

家隆

寂蓮法師

# 海人

家集春歌中

永承五年十一月俊綱朝臣  
歌合

永久四年百首泉郎

同年十月二日宮宣旨家歌  
合霞浦

筑前國志賀泉郎を

題まらず

同

はるくとうらく煙立わたりあまのひよりもしほやくらんかも

もしほやくあまの濡衣ほすみれはいそへの松そはつきなりける

ぬれ衣いまそはつきにかけてほすかつきしてけりよさのあま人

春かすみ霞のうらをみわたせはあまのふせやをこめてけるかな

大君のつかはさなくにさかしらにゆきしあらをらおきに袖ふる

あひきするあまをとめらか袖とほりぬれにし衣ほせとかはかす

あさなくあまのさほさす浦ふかみおよはぬ戀も我はするかな

好忠

能因法師

源兼昌

よみ人まらず

同

同

同

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

同 伊勢集  
おひ風にかせはなほりて吹ねとも蟹のいかりにとまりやせむ

同 六三 萬七  
まかのあまのつりする小舟うけたえず心に思ひいてきにけり

同 萬三  
まかの蟹のやく鹽けふり風をいたみたちはのほらて山に棚ひく

同 萬十一  
まかの蟹の鹽焼衣なるといへと戀といふものはわすれかねつも

同 爲 家 卿  
まかのあまのまほやくけふり立ことに人にまらるゝ浦風そふく

千首歌 後 鳥 羽 院  
すまのあまの身を吹とほす浦風にもしほの袖やいとさむけき

太神宮百首御歌 同  
思ふかたのいせをの蟹のつりさをのなかきよあかすぬるゝ袖哉

家集 伊 勢  
伊勢の海に年へてすみし蟹なれば何れのもかはかつきのこさん

百首歌 俊 頼 朝 臣  
あめふれはあまのかゝみにふくとまのもろ心にもあらぬ君かな

久安百首 俊 成  
いかにせん蟹のさかてを打かへし恨みても猶あかすもあるかな

百首歌恨戀 定 家 卿  
己のみあまのさかてをうつたへにふりしくこのは跡たにもなし

六百番歌合寄海人戀 兼 宗 卿  
我戀はあまのさかてをうちかへし思ひときてやよをもうらみん

此歌右方云あまのさかて有異説等事也而ひとへに海人にさだ

め讀るにや判者俊成卿云あまのさか手殊庶幾すべきにはあら

ねども海人によめらんにおきてはなんのうたがひかあらんや

近來人の實説をいたすと云無其理歟愚老こそ往昔によみて侍

しそれを難するよしに侍も伊勢物語のほか異なる證據なかる

同 同

べしと云々

家集

御集

家集戀歌中

文應元年七社百首不逢戀

あま

六百番歌合寄海人戀

六帖題

同

同

同

同

海邊宿次百首まほみち

千五百番歌合

戀歌中

よさの海の蟹のあさたのまてかてにおりやとらん浪の花かひなみ

まてかたにあまのかきつむもしは草煙はいかにたちぬとやきく

いせのうみの蟹のまてかたまてまほし恨に浪のひまはなくとも

とへかした蟹のまてかたさのみやはまつに命のなからへもせん

いせの海蟹のまてかたゆきかへりくみほす潮のまなくこひつゝ

伊勢の海の蟹のまてかたならね其戀のそめきもいとなかりけり

いせの海の蟹のまてかたかきつめていくたひ同じ藻鹽たるらん

朝夕の蟹のたくなはいとまなみこの世はかりをくるしと思ふ

みるめ刈鹽やく蟹のあしたゆくるれはかへるいとまなの身や

をりかとふ濱松か枝の袖かきにかりほすあまのみるめさひしも

はまなかにまほかせはかり音信でかたゝよりなき蟹のやとかな

くれてはやまほみちぬらし浦々につりふねよせておるゝあま

難波津におのかものゆゑ行かへりねになくあまもはるになる比

和泉式部

女御徽子女王

家隆

爲家

行能卿

法橋顯昭

衣笠内大臣

詞家

光俊朝臣

信實朝臣

爲相卿

爲蓮法師

寂蓮法師

夷

歌林  
音信あらは津輕の奥にとめられてえそかへらぬと妹につけはや

道因法師

千五百番歌合

田子

戀路にもおりたちぬれはよそにみしたこのもすそを袂にそしる 嘉陽門院越前

匠

題不知 萬十一拾遺 人に 丸  
とにかくにもものは思はず飛驒工うつすみなはのたゝひとすちに

六帖題(龍宮) 新六五 信實朝臣  
かつは又さすさやくちにあふひつは心ありけるかなたくみかな

寶治二年百首山 同 西行上人  
そま工ひくやまさきのつなこまにさこそあつさの山とよむらめ  
まささわるひもの工やいてぬらんむらさめすきぬかさとの山

遊女

六百番歌合寄遊女戀 新編古戀四 後京極攝政  
たれとなくよせてはかへるなみ枕うきたる舟のあとともとゝめす

同 寂蓮  
いつかたを見ても忍はむなにはめのうきねのあとにきゆる白浪

同 慈鎮和尚  
その人とわきてまつらんつまよりもあはれはふかき浪の上かな

同 前大納言兼家卿  
浪の上にかれてすくるたはれめも頼む人にはたのまれぬかは  
波の上にくたす小舟のむやひして月にうたひしいもそこひしき  
中宮大夫家房卿

六百番歌合寄遊女戀

たれとなきうきねを去のふあま衣おもひは淺きうらみなりけり

家隆卿

同

あしまわけ月にうたひてくふねに心そまつはのりうつりぬる

法橋顯昭

家集遊女

河の瀬に浪の浮草うかれありくそのたはれめをいかゝたのまん

源仲正

建長八年百首歌合

船よせのきしの上なるかとやよりあやしや妹かみえかくれする

信實朝臣

此歌判者光俊朝臣云遊女がすみかにこそおなじ事と申なからび

云がことばにも舟中流上とこそかきて侍れ舟よせのかどやと

侍るたいひとへにをしからんとたしなまれたるこそよしなく

もやと云々

嘉祿四年百首寄遊女戀

うきふねのさためぬ浪のちきりたになほ夕暮は身もこかるなり

民部卿爲家

### 遊士

題不知

うなはらの遠き渡りをあそびをの遊ふをみむとなつきひそこし

よみ人志らす

長歌

をとめらか、かさしのために、たはれをの、かつらのためと、

同

去きませる、くにのはたてに、さきにける、さくらははなの、

贈三件宿禰田主

たはれを我はきけるを宿かさす我をかへせりをそのたはれを

報贈歌

たはれを我はありけり宿賃さす歸せる我そたはれをにはある

石川女耶  
大伴宿禰田主

久安百首

かくはかり厭ふたにこそ戀しけれなと隠しけむをそのたはれを

左京大夫顯輔卿

傀 儡

六百番歌合寄<sub>二</sub>傀儡<sub>一</sub>戀

ひとよみし人のなさはは立かへるこゝろにやとるあをはかの里

慈 鎮 和 尙

同

一夜かすのかみの里のくさまくらむすひすてける人のちきりを

前中納言定家卿

同

うらむへきかたこそなけれ東路のかみのいはのくれかたの空

寂 蓮

同

こゝろゆく野路の旅ねの友なくはいとゝみやこや戀しからまし

兼 宗 定 卿

同

一夜のみやとかる人のちきりして露むすひおくくさまくらかな

後京極攝政

同

うかれめの浮れて歩く旅やかたすみつきたき物にそありける

正三位季經卿

同

あつまちやかやつのはらの朝露におきわかるらん袖はものかは

有 家 卿

同

大井河きしのとまやの竹はしらうかりしふしやかかりなりけぬ

爲 家 卿

嘉祿四年百首寄<sub>二</sub>傀儡<sub>一</sub>戀

貞應二年六月當座百首同心

百首歌くらす

かりそめのをはたの里のとまひさしとまらぬ袖の露をみせはや

同 寂 蓮 法師

同

をくら山ふもとの里のさひしきはぬせきのおとよ峯のあらしよ

同

同

いほりさす山の端ちかきゆふつゝの影ほのかなるをのゝ玄の原

同

同

あはれなきおほよそとりの心すら月よとなれはされありくなり

同

樵夫

延

霞

六百番歌合寄 樵夫戀

家集雜歌中

同

家集雪歌中

岡屋入道攝政家百首樵夫

弘長二年内裏百首瀧波

建長八年百首歌合

内裏歌合山夕風

永仁元年楚忽百首戀歌中

六〇 おちつもある松をひろひてとしふれは老のつま木と人やみるらん

六〇 山かつのなげきこりつむいほりにはかすみやたちて煙ともなる

こひ路をは風やはさそふ朝夕にたこの玄はふねゆきかへれとも

山人の手ひきのかつらくりかへしたのむ爪木のゆふかひもなし

玄はふねの峯よりおつるをさ、原風よりあらしなみのおとかな

あらし山さかしく、たるたにもなくからきのみちをつくる白雪

山人の身におふほと、おもふたになほ世をすくる道そくるしき

たかためにいそのつま木をこりわひてこす白波に袖ぬらすらん

身におつるおのか玄わさを賤のをかてもとこたへてこる爪木哉

かねのおとを松にふきしくおひ風につま木やおもきかへる山人

身におはぬなげきこり積山人のあふこをいつむなくくそふる

藤原匡房

よみ人しらす

後京極攝政

從二位家隆卿

同

西行上人

爲家卿

行家卿

信家實

定家卿

藤原爲顯

山老

大江色房

六七

正治二年百首  
建保四年内裏歌合

六帖題

同

同

ひまもなくのきをならふる山かつのすまゐをわかたつ夕かほの花  
いとしくうつろふはなを山かつのまつこゝろなく春風そふく  
新六六  
山かつのそなふのすも、咲にけり風をいとはぬはなやみるらん  
新六五  
山かつの賤のあさ衣みしふつきくさるとるた井にたゝぬ日はなし  
新六五  
山かつのをさをあらみのはたなれば音は間遠にきこえやはする

源 師 光  
知 家 卿  
衣 笠 内 大 臣  
同  
信 實 朝 臣

健 男又男子

題不知

同

同

三百六十首中

萬十一  
ますらをやうつしこゝろも我はなしよる晝わかす戀しわたれば  
同  
いはほすのゆき廻るへきますらをも戀てふことは後のくいあり  
同  
ますらははともそのめきになくさむる心もあらむを我そ苦しき  
夏河のせゝにあゆつるますらをも我うきかけはみつかからそ思ふ

人 丸  
同  
同  
好 忠

長 人長

六帖題

三百六十首中

新六六  
人の長の神のをしへに去たかひてこゑくすめるこゝへの庭  
あしろもる宇治の河をさ年つもりいくそ月日をかそへきぬらん

信 實 朝 臣  
好 忠



内裏御會船中月

新後拾秋下  
さしかへる<sup>カ</sup>去つくも袖のかけなれば月になれたる<sup>川</sup>宇治の河をさ  
忘れぬ<sup>カ</sup>みゆきはわれをみなれさを思へはこひしよとの川をさ  
從三位爲實卿

賤人

題不知

萬四  
去つたまき數にもあらぬ命にてなとかくはかりわかこひわたる  
蟲  
後鳥羽院

百首御歌

山深きねさめのともと去つたまき數にもあらぬさみなれとも  
家隆卿

家集戀歌中

山風にはつしもかけて去ろたへのころもしてみつ去つの神ひと  
同

家集秋の歌中

新六五  
まとはなる賤かうみををさいれにこゝろとうすきあまの衣手  
知家

六帖題あさころも

新六五  
賤の女かあさてほすての玉たすき思ひかくればちかふようし  
爲家

同たまたすき

同  
ねたけなる賤かあさての玉たすきたれに向ひてわきをかくらん  
信實

千首歌

河の瀬にさてさす去つかぬれ衣はさはわか身のこゝろなるらん  
爲家卿

洞院攝政家百首紅葉

爪木こる去つかをたまきあさなくのこしてけりな峯の紅葉は  
從二位賴氏卿

總角

後京極攝政家三十首歌合  
家集女郎花

あけまきはあとたにたゆる庭もせにおのれむすへと去ける夏草  
こまにかふ草のなかなるをみなへしおのれむすへと去ける夏草

定家卿  
源仲正

### 垂髮子

六帖題御歌うなひ

同

同

同

たばれ歌とてよみける中

日くれぬと山路をいそぐうなひこか草かりふえの聲そさひしき

新六一  
うなひこかふりわけ髪かみの行末ゆきすえによそへてかくるくさかつらかな

同  
うなひこかうちたれ髪かみをふり分わかてむかひつふての袖かきすなり

いとほしやまたかふるなるうなひとも焼野やきにあまたつはな拔也

うなひこかすさみに鳴なすむきふえの聲こゑにおとろく夏のひるふし

えのよとにみそ具ぐ拾ひろふうなひこかたはふれにたに問とふ人もなし

此歌はたなかみにてむかひのえにはらはへのあそびたはぶる  
るをたづぬればみそがひひろふといふをきゝてよめると云

云

### 奴僕

中務のみこ  
知家卿  
信實  
同  
西行上人  
俊頼

六百番歌合行戀

いまはさはこひのやつこの行末もたのむみおやの神にまかせむ

右 家 卿

此歌方人云やつこは奴僕心なり此歌のおもては彌子によまれ

たり不審云々

萬代 神やつことるやなにそもちはやふるかもの祭にあふひなりけり

藤原清平朝臣

夏歌中

里子

後九條内大臣家百首江上納涼

よと河のいりえのきしの柳かけつなくをふねにすゝむさとのこ

從二位家隆

唐人

永仁四年百首唐人

たつ波につゝみの聲をうちそへてから人よせくおきの玄まより

神祇伯顯仲卿

同

おしてゐるや干重の白浪わけし人わか玄きしまにいかてきつらん

仲實朝臣

同

唐人は玄かのをしまにふなてしてなかしまつらしいたてまし也

俊頼

同

うれしきをいかにすればか唐人のことしも袖をせはくたつらん

藤原忠房

同

から人のころもにかさる白玉の見つゝひかりのめつらしきかな

二條太皇太后宮肥後

貞應元年閑居百首御歌

きてもみよこゝろなやます唐人の袖ふるあとのあはれ玄れとや

光明峯寺入道攝政

最勝四天王院名所御障子

から人のたのめし秋はすきぬともまつらかおきに雲なへたてそ

如願法師

楊貴妃

文治二年百首楊貴妃

家集楊貴妃

同

長恨歌馬嵬堤下泥土中

九花帳裏夢魂驚

春風桃李花開日

秋露梧桐葉落時

西宮南苑多秋草

舊枕故衾誰與共

文治二年百首李夫人

家集寄煙戀

みかきおく玉のすみかも袖ぬれて露ときえにし野へそかなしき

道のへにこまひきわたす程もなきたまのをたえむ契りとやみし

まほろしは玉のうてなになつねきてむかしの秋の契りをそきく

世中をこゝろつゝみのくさの葉にきえにし露にぬれてこそゆけ

うたゝねのさあての後のくやしきは夢にも人をみさすなりけり

春風にふみをひらくるはなのいろむかしの人のおもかけそする

この葉ちる時につけてそながくに我身の秋はまつまられける

こゝのへの玉のみきりもあれにけり心としけるくさのうへの露

うちわたしひとりふすまのよなくは枕久しきねをのみそなく

李夫人

ほのかなる煙はたくふほともなしなれし雲井にたちかへれとも

なき人はかへるけふりもたてぬへしいけるつらさそ面影もみぬ

中務卿のみこ

二條太皇太后宮大貳

權中納言長方卿

太宰大貳高遠

同

同

同

同

同

定

雅

家

有

卿

卿

定

家集李夫人

月詠集  
ながくに散なむ後のためとてそをれし花のかほもはちけん

長方

卿

### 王昭君

文治二年百首王昭君

うつすとも曇あらしとたのみこしか、みの影のまついらきかな

定家卿

王昭君といふことを

去らさりきか、みの影をたのみてもうつしかへける筆の跡まで

公朝卿

同

時しもあれさそうかりけん都出しみさへいつきの秋のころは

爲相卿

家集王昭君

かくはかりせきわつらは、涙河みやこのかたへなかれいらな

長方卿

永久四年百首王昭君

みるまゝに我すかたをは書てまし千々の黄金を、しまさりせは

源兼昌

同

おとろふる鄙のわかれの悲しさにきすなき玉の身をそうらむる

二條太皇太后宮肥後

同

みちすからなくさむやとてひくことをこに玉をぬく涙かな

六條院大進

百首御歌王昭君

あらず身のなり行たひの別路にてなれしことのねこそわすれね

後徳大寺左大臣

家集

たきつせの去らへを袖にひき添てならはぬ道にいたるへしやは

源有仲

此歌は王昭君の事かけるふみに琵琶を馬上に去らべてといへるをみてよめると云々

### 上陽人

家集東尋文歌中

春往秋來不記年

唯向深宮望明月

宮鶯百轉愁厭聞

家集上陽人を

同

文治二年百首上陽人

そこはくの年つむ春にとちられてはなみる人になりぬへきかな

春秋のゆくかへり路も去らなくなにを去るしに年をかそへん

みる人もなきやとてらすつきかけの心ほそくもみえわたるかな

もの思ふ時はなにせむうくひすのきくいとはしき春にもある哉

はかなしや空しきとこにあけくれてとしのむそちの空に過ぬる

くれなるにたとへしかほも霜降てうとき人にはみえしとを思ふ

去らさりき塵も拂はぬ床の上にひとりよはひのつもるへしとは

太宰大貳高遠

同

同

同

長方卿

二條太皇太后宮大貳

定家卿

陵園妾

陵園妾

家集同題

三十六人歌合陵園妾

なれきにしそらのひかりの戀しさにひとり去るゝ菊のうは露

春のうれへ秋の思ひのつもりつ、三代にもいまはなりにける哉

松の戸をとちてかへりしその日よりあくるよもなき物思ひかな

とちはつる深山のおくの松の戸をうらやましくもいつる月かな

同

長方卿

登蓮法師

光行

夫木和歌抄卷第三十五終

夫木和歌抄卷第三十六

雜部十八

賀	大嘗會	元服	行幸	公事	旅
題	狩獵	眺望	夢	戀	占
言語	述懷	哀傷			

賀

正治二年百首御歌  
千五百番歌合

よろつよを山はよはひてたにかはの水はちとせの色そみえける  
君か代にとたひすむべき水の色をくみてまりけるやまのこゑ哉

第三のみこ  
大藏卿行家

此歌判者季經卿云黄河千年にすみ山萬歳をよばふことを君の  
御代にひきよせられたるあひかなひてこそきこえ侍れと云

云

建久五年後京極攝政家歌  
合春日山

千五百番歌合

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

家集百首

かすか山みねのあさひをまつほとのそらものとけき萬代のこゑ

前中納言定家卿

よものうみの浪の外まできこゆなりはこやの山のよろつ代の聲

從二位家隆卿

おふの浦のそのなかはまによる浪のゆたけき君のちよのすゑ哉

具親朝臣

そのかみや祈りし事はとようけのまゐるしそ君かめくみなりける

土御門内大臣

も、まきはかめのうへなる山なればちよをかさねよつるの毛衣

同

四のうみをさまれるよはおとにきくかめのみ山も浪をこすらん

皇太后宮大夫俊成卿

かちの葉にやほ萬代とかきつけてねかふねかひは君かまに

法橋顯昭

くもりなきはこやの山の月かけにひかりをそふる玉つままひめ

前大納言兼宗卿

千賀も、ちたひ浦島のこはかへるともはこやの山はときはなるへし

皇太后宮大夫俊成卿

萬代あきつしま神の治むるくになればきみまつかにて民もやすけし

源仲綱

まもりこしなこりはすゑも久しかればこやのやまの松のむら立

慈鎮和尚

わしの山真如くちせぬそまひとのいのりしことほわか君のため

寂蓮法師

君か代は真如くちせぬむろの浦に慈悲のあさひのひかりさす迄

同

永き代のためしにひかん鈴鹿川こえていつきのわたらひのしめ

從二位家隆卿

おのつから治まれるよやきこゆらんはかなくさすむ山人のうた

後京極攝政

あま雲にいふねうけしそのかみを思へはつきしやまとま主人

常磐井入道太政大臣

苦うつむゆるかぬ岩のふかきねは君かちとせをかためたるへし

西行上人

釋傳  
⑤  
千二百三十七



喜多院入道二品親王家五十首

洞院攝政家百首祝

文應元年七社百首祝

申務卿親王家五十首歌合

六帖題

式部卿親王家御會秋祝

久安百首

同

天曆御門うまれさせ給て御百日の夜よみ侍ける

御返事

攝政家御屏風大臣大變會所樂舞有所拜禮

ある人の子うみたる九日にちこのきねやるとて

永久四年百首賀

同百首七夜

同

玉貫

君かよはたかの、山のいはの室あけんあしたの、りにあふまで

雲ふかくいる山人のきみか代にいくをの、えかくちてかへらん

さこそけにときはかきはと守るらめくにつあるしのやほ萬代を

言のはをひろふきのとのうしなれば昔にかへるあともかしこし

此歌は文永二年續古今えらばれたる比よみけると云々

我君を千とせといのる時なれやきたにむかへるよひのおこなひ

吾國はちいほ秋つのなもえらくこのときをえていはひたのしめ

土佐の海阿波の鳴戸をさしなからたにへくるつまで君はましませ

はこやにはふたりの君のもろともに春と秋とにとめるとそきく

日をとしにこよひそかふる今よりやもとせまでの月影もみん

いはひつる言靈ならはもとせの、ちもつきせぬ月をこそみめ

よろつ代の舞の袖ふるやとにこそあるしたつねてもろ人もくれ

七日ゆく濱の眞砂をかすとしてこぬかさへもかすへつるかな

柏木を椎のさえたつえにをりかへてさいふさまてやふしまろふへき

君か代はなかひこのかゆ七かへりいはふ言葉にあへさらめやは

おし照やうのはふきける昔もやこよひはちよといはひそめけん

皇太后宮大夫俊成卿

民部卿爲家

同

權僧正公朝

同

前民部卿雅有

同

季通朝臣

同

參議伊衡卿

延喜御製

祭主輔親

同

和泉式部

俊頼朝臣

同

源兼昌

花山院洞院歌合祝

承保三年十一月藤隆伊朝  
臣出雲國名所歌合長田祝

同

保延元年家成卿歌合祝

文永二年七月白河殿七百  
首隱士出山

建長八年百首歌合

同

御集題不知

正治二年百首

寛喜元年松有久色

最勝四天王院名所御障子

中納言雅忠卿家歌合

家集或所會祝

閑居百首

六帖題

萬代もいかてかはてのなかるへきほとけに君は、やもなりなん

かそふれはかすもえられす君か代は永田につくるなかひこの稻

君か代は數へ盡さんかたそなきなかたにちくらちもとこのいね

またさかに千代に一たひすむ水をいくかへりとは君そかそへん

新續古雜下  
みちありとわかきみの代にいてはて、山のおくには住人もなし

君か代のまげきみかけにたちなれてやまのおくには住人もなし

みことのり道にそむかぬ故とてや海のほかにもまもりあるらん

判者光俊朝臣云聞守在海外云詞華治天下之政誠是可謂頌誰不握

翫字之

天のした八すみのなかにひとりますまの太君よろつ代までに

いくとせのいくよろつ代か君か代にゆき月花のともをまぢみん

かすかなるみかさの山のたねなればちよに千年もあひおひの松

もろ人もちよのみかけにやとしめてとはにあひみん松の秋かせ

たむげくさまげき玉えにそなれ松よにひさしきも君かためとも

つるかめのいのちくらへのかちまげを君こそまらめ萬代をへて

四の海をたゝてのなかに照すてふ君やくもらぬかゝみなるらん

新六四  
もちなから歌をとなふるさかつきのきよく濁らぬみよの久しさ

源 俊 兼

藤 原 通 憲

權 大 納 言 長 雅 卿

從 一 位 良 教 卿

前 大 納 言 顯 朝 卿

鎌 倉 右 大 臣

式 子 內 親 王

民 部 卿 爲 家

前 中 納 言 定 家 卿

俊 賴 朝 臣

源 仲 正

從 二 位 行 家

衣 笠 內 大 臣

家集祝

百首歌

わたつうみのゑらぬ浪間にすむ龜のよもきか島も君かためとそ  
いさなきのみことの時にさためてき我君ひさによにまさんとは

民部卿爲家  
仲實朝臣

### 大嘗會

定家卿家集

君<sup>そそ</sup>まちてふたゝひすめる河水に千代そふとよのみそきをそみし

參議雅經卿

此歌は建曆二年とよのみそぎふたゝびおこなはれけるつきの

日定家卿のもとへつかはす歌と云々

返事

君か代のちよにちよそふみそきしてふたゝひすめるかもの河水

前中納言定家卿

### 元服

永久四年百首元服

同

同

同

同

もとゆひのこそめのいとをくりかへし衣の色にひきやうつさん  
こよひゆふわかもとゆひの紫のまそてのいろにはやもならなん  
うなるこかはなちのかみを取立てまきそめかはよ淵瀬<sup>に</sup>かはるな  
かそいろの共に祈れはふたりさすそく影にちよそうつれる  
紫のはつもとゆひにゆひおかんつるはみころもちとせふるまで

神祇伯顯仲卿  
仲實朝臣  
俊賴朝臣  
源兼昌  
六條院大進

行幸

貞應百首御歌述懷

海原やつりする人のとしふりていつかみゆきのはるにあふへき

光明峯寺入道攝政

文應二年毎日一首放生會

いはし水わかふる道やまもるらんけふのみゆきの空そのとけき

民部卿爲家

文永六年毎日一首述懷

すゝまうすみゆきの庭は遅れれとあらぬはしりに人いそくなり

同

康元元年毎日一首中八月十五日歌

をとし山げふのみゆきの三代迄につかへきぬるも神はまゐらん

同

同七年毎日一首中

音にきくおとはのたきはけふとてやきみかみゆきは心みゆらん

同

文應元年毎日一首中

ありま山君か御幸もとしふりぬたのむまゑるしをかみもあらはせ

同

百首歌川

もみち葉に埋れてこそたつた川ふるきみゆきのあとはみえけれ

從二位家隆卿

六帖題(御幸)

とのまもり近き守をすゝめくしておほみゆきする道そかしこき

前中納言爲兼卿

同

殿守のよるのみゆきにともすひのあきらけきよとなりにける哉

光俊朝臣

同

東にもあとあることもまきもくのひしりの宮のふかきみゆきは

權僧正公朝

公事

建保三年百首御歌公事

あしけなる馬ひくけふのわかなには舍人待こそたよりなりけれ

慈鎮和尚

建保三年百首御歌公事

同

同

同

同

同

題不知

同

同

同

長歌

題不知

同

新撰古今雜俳諧

百敷のかものみあれの玄めのうちにはとけの身をも猶すく哉

となふなるみよのほとけの名の敷を幾千年まできみはかさねん

春のあしたはこやの山のみきりよりまついはひたつくもの上人

これもみなちとせの秋のためしかなげふことにひくもち月の駒

きみか代は雲のかよひち空はれてをとめのすかた月にみるかな

あら玉のはるをむかふる年の内におにこもれりとやらふ聲かな

旅

萬三 新古

あまさかる鄙のなちりにゆ萬こきくればあかしのとより大和島見ひ萬ゆ

あまさかるひなに五とせすまひつ、都のてふりわすられにけりえ萬

神風の伊勢のはま萩をりまきてたひねやすらんあらしはまへに

さほすきてならの手向におくぬさは妹をめかれす逢みそめとそ

草枕、たひにあるまに、さほかはを、あさかはわたり、かすかのを、

そかひにみつゝ、

六二 六四 貫之集 行末もかへらむ事もたまはこのたよりのかみはいのれとぞ思ふ

慈 鎮 和 尙

同

參 議 雅 經 卿

同

同

同

人

よみ人まらす 丸

同

長 屋 王

坂 上 耶 女

同

よみ人まらす

長歌

となみ山、たむけのかみに、ぬさまつり、あか戀のまへ、はしき  
やし、君かたゝかを、

同

左中辨よしみつの馬のはなむけにせんとてよませける

ひたちのくにへくだりたる人に

玉ほこのたむけのかみも我ことくわか思ふ事をおもへとそ思ふ  
別路につけてもこのこそおもほゆれたむけの神もあはれとやみん  
あら山のとほりならばぬいはつたひ手向のかみにまかせてそ行  
いく去をりこえてたつねんなにたかきあさまの山のみねの白雲

貫能宣朝臣

新六四

光俊朝臣

六帖題

かへりみる雲まの木すゑたえくにあるかなきかのふる里の山  
草むすふをのゝ去のはら月さえてまたしき去もの袖に去らるゝ  
さゝわけし袖こそあらめけふは又谷のほそみちもすそぬらしつ  
たなはしにかつゝ駒をうなかしうひくしくも出る旅かな  
たひ衣つかれにけらしひたりての弓とるかたのたゆくなるかな  
おもかけの身にそふ宿にわれまつとをしまぬ草や霜かれぬらん

後九條内大臣  
如願法師

洞院攝政家百首旅

和歌所歌合月前旅

寶治二年百首旅行

建長八年百首歌合

久安百首

喜多院入道二品親王家五十首

建久七年百廿八首旅

建長八年百首歌合

弘長元年百首

建保三年秋十五首歌合秋旅

山ふかみまたなも去らぬとりのねをあげぬときて今そこへ行  
みやこ思ふ袖もかたゝほしやらすあへの嶋山つゆふかくして

從二位行家卿  
大納言通具卿

石清水三首歌合旅宿嵐

くもちかきみねの木のはをかたしきて枕の下にあらしをそきく

前大納言忠良卿

五十首御歌旅泊月

忘れすないてしみやこのよはの月きよみか關にめぐりあふまで

後京極攝政

南北百番歌合

わすれすはみやこのゆめやおくるらし月は雲井をうつつ山こえ

同

正治二年百首

くもはねや月はともし火かくしてもあかせはあくるさやの中山

同

雜御歌中

雲かゝるみやこのそらをなかめつゝけふもこえぬるさやの中山

慈鎮和尙

旅歌中

古來歌 新拾旅 たひ人のよこをりふせる山こえて月にもいくよわかれ去つらん

中納言家持卿

正治二年百首御歌

あともなく八重たつ雲にみちわけてなみた去くるさやの中山

喜多院入道二品のみこ

同

風をいたみいくよあかしのこの本に花を旅ねのひしきものにて

宜秋門院丹後

同

みるまゝにあらすなり行山路にも空はみやこにかはらさりけり

正三位經家卿

同

あはれなる春のあけほのあさたちぬ霞のそこやくれのたひすみ

民部卿範光

同

礮の山まさきをつなによりかけて去ほみつ程のふねはつなかん

民部卿爲家

正嘉三年每日一首中

ふねくたすよとの河きりいつしかも都のかたのやまなへたてそ

同

貞應三年楚忽百首月騎中友

たひの空うきていてにし野山まで道もやとりもつきそともなふ

同

嘉元元年百首海路

いそけともなほ山こえぬなみのうへの雲をとまりとむかふ舟人

參議爲相卿

平宗宣朝臣すゝめける十首中歌旅

今日は、やこえこそなつめ深山路や昨日分こしのへにならひて

同

永仁三年家歌合

めにかけし雲の尾のへをわけこえて昨日はとほき山路をそゆく

同

君臣御歌合

とまるへきやとをは月にあくかれてあすのみちゆく夜半の旅人

前中納言爲兼卿

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

家集文永元年旅泊

千五百番歌合

同

建保三年名所百首

千五百番歌合

石清水三首歌合旅宿嵐

同

同

同

百首歌

弘長元年百首

同

嘉禎二年十首歌合竊旅

同

後京極攝政家詩歌合竊中眺望

七百首歌中

家會旅眺望

わするなよおなしうきねのかち枕おもひくしにこきわかるとも  
玉旅  
かりそめと思ひし物をあすか井のみま草かくれいくよへぬらん

あけぬれと浪は許さす清見かたせきちはとりのねまてと思ふに  
ふたみかたいせのはまをきまきたへの衣手かれて夢もむすはず  
今そおもふかた岡山のたひ人も身をかへしけるむらさきのそて  
野邊寒しをきのかれはをかたしきてすくるあらしを枕にそきく  
またねするならのかれはをふく嵐まらすやこれもたのむ木の木  
山ち行かりのいほりをとふあらしなれをそたのむたひの友とは  
こけむしる雲にかさぬるよはのそてぬきわかるゝはみねの松風  
月よするうらはのなみをふもとにてまつそてぬらす峯の松かせ  
里もなき浦としりてやたひ人もあしまのふねにけふりたつらん  
去らま弓つるかの船路よるもなほおしてひきこす浪のかけかは  
ふねとむるおきつしほせのゆふなきに遠山うかふ秋のうらなみ  
けふはまたあかしのとよりこき出て心をつなくよものうらうら  
けふはまた山のはもなくなりにけり去らぬはまちの夕暮のそら  
さ、波ややはせの船のいてぬまにのりおくれしといそくかち人  
關越てうちいての濱の志のゝめにあとよりおくる鳥のこゑかな

權僧正公朝

第三のみこ

從三位保季卿

前中納言定家卿

寂蓮法師

慈鎮和尚

後久我太政大臣

皇太后宮大夫俊成卿

鴨長明

前中納言定家卿

後九條内大臣

同

同

隆祐朝臣

從二位家隆卿

權僧正公朝

參議爲相卿



建長五年毎日一首中

百首御歌

同

百首歌合

經信卿つくしにてみまかりぬときいてくだるとて

同

風寒みあをのをゆけはまなのちのをちのたかねに雪ふりにけり

きよみかたひとりいそねの秋の夜は月もあらしもころそ悲しき

夏の夜の月はきよみか關にみつあきはまのふのさとなかめん

草枕なみたかきあへぬねさめかなまきの羽音にゆめをのこして

筑紫船恨みをつみてもとるにはあしやにねてもしらねをそする

岸の上をさよなど見ればあちきなく竹の節めになとれぬるかな

このうたはみしまえと云所にてあけぼのにきしのうへにあや

しき物をはしらにてあをきたけのうへにさゝげたりける物を

みてよめると云々

雲のゐるみこしいはかみこえん日はけふる心にかゝれとそ思ふ

うちたのみ片敷袖もぬれにけりをさかやとにまじひするには

鳴見かたまほひにうらやなりぬらんうへの道をゆく人もなし

なるみかたうきねのとは風さえてふけゆくまに千鳥鳴なり

天さかるひなのあらのにひとりねは物思ふよりわひしかるへし

たひの空なれぬはにふのよるとこわひしきまてにもる時雨哉

あふみのやのちの旅人いそかなんやすかはらとて遠からぬかは

民部卿為家

慈鎮和尙

同

同

俊頼朝臣

同

しき物をはしらにてあをきたけのうへにさゝげたりける物を

みてよめると云々

同

大僧正行尊

藤原景綱

平經正朝臣

鎌倉右大臣

同

西行上人

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

御集

17

家集

歌林苑歌合旅泊千鳥

御集

17

家集

六帖題

同

千首歌

悠々一別已三年

朝故郷結念

太宰の任にてくたりける  
時月をみて

久安百首

同

同

家集旅歌中

御集

卅首御歌中に旅行を

六帖題

同あかつきやみ

権

新六四

道のへにたゝりなすなとみそきして關もる神にぬさたてまつる

道新六四のへのあしき岩根いわねにぬさむけてさかしき山をこえそわつらふ

なかきよのあり明の月もかたふきぬたひゆく人や道みちいそくらふ

近からぬほとに一度いちどわかるれはとしのみとせそへたゝりにける

あさことにむすほゝれてそすくしくるふりにし里をこふる心は

ひまもなく物思ふときの旅たびやとりいかなるまにか月のもるらん

おのつから鄙ひんのわかれにほとふれは都みやこのてふりかけぬ日そなき

旅つともたたるかれいひのほろ／＼となみたそおつる都思へは

朝立あしたてわかれし人はいまもかもひなのあらのにくさむすふらん

いかにせんすくちはゆかてあしからやよこはしりする人の心を

山さとのきみかたひるはうくひすを人にきかせむこゝろ也けり

此歌は關白うちにいとひさしくおはして人々いとおほくてか

へりたまふに鶯うぐいすのなきたるをきゝてと云々

東路とうろやたひのそらこそあはれなれ野くれ山くれこまにまかせて

道新六四のへの露つゆわけころもほさすしてのくれ山くれいくよぬるらん

旅人新六六のかたへいさなふこゑはしてゆくかたみえぬあけくれの空

いくばくの道みちゆきつかれやすむらん権けんのはせはき旅たびのかれいひ

正三位知家卿

信實朝臣

民部卿爲家

千

同

太宰大貳高遠卿

左京大夫顯輔卿

清輔朝臣

實清朝臣

源仲正

堀河右大臣

慈鎮和尚

衣笠内大臣

正三位知家卿

信實朝臣

光善院入道二品親王家五  
十首山旅

建永元年和歌所三首歌合  
竊中暮

後京極攝政家詩歌合竊中  
眺望

同

旅歌中

家集内裏御會竊中山

二所詣下向後侍ども見えざりまかばよめると云々

みやこ出しころもてかれてあらち山いろかはりゆく秋風そふく

ふみなれぬ山のいはねのゆふまよひおとやしるへの谷河のみつ

秋の日のうすきころもに風たちてゆく人またぬをちのしらくも

雲かゝるいはの枕にあげにけりかたふくつきをなみにまかせて

國かはる境いくたひこえすきておほくのたみにおもなれぬらん

そこはかとみえぬ山路にことゝへとこよひもうとしそら雲の宿

旅をゆきしあとのやと守おのゝくに私あれやけさはいまたこぬ

### 狩獵

内野御狩のとき

題不知

長歌

萬一玉きはるうちの大野に馬なめてあさふますらんそのゝさふけの

萬十九たつかゆみてにとりもちてあさかりに君はたちきぬ手枕のゝに

萬六あしひきの山にも野にもみかり人ともやたはさみ亂れたるみゆ

同みよしのゝあきつのをのゝのかみには、おとみすゑおきて、み

やまには、せこたちわたり、あさかりに、まゝふみおこし、ゆふか

りに、とりふみたてき、うまなへて、みかりそたてし、

鎌倉右大臣

後京極攝政

前中納言定家卿

隆信朝臣

前中納言定家卿

後京極攝政

前中納言定家卿

問人連老

よみ人ゑらす

亦人

人丸

同

萬三  
みかりにたてる、わかこもを、かりちのをのに、ましこそは、いは

同

日本紀覽宴

よきことを萬代かけてみつるかなかつらき山のけふのみかりに

源

清

陰

同

みかりする君かへるとてくめ川にひとこと主そいてませりける

有

穉

建長七年顯朝卿家千首狩

あきつの上の方<sup>て</sup>にみちみすゑまふみおこし狩る人はたれ

光

俊

朝

臣

家集居待月

山さつかねらふまかきやまけからん居待の月のいてよさりする

源

仲

正

野徑眺望

ますらをか朝ふむのへを見渡せは雲井はるかにかへるせこなは

左京大夫顯輔卿

民部卿

爲家

卿

岡屋入道攝政家百首狩獵

みかり人なすのなつのは心せよたかくさかくれをれきふすなり

權僧正

公朝

朝

六帖題かや

かり人のゆすゑふりたてちかへとも笠はた見えぬなすの高かや

信實

朝臣

臣

家集狩

路多きなすのみかりのやさけひにのかれぬ鹿のこゑそきこゆる

正三位

知家卿

卿

かり

せこなはにひきこめらるゝまかはかりあはれ心の行かたそなき

神祇伯顯

仲卿

卿

永久四年百首夏獵

夏のたつおきのはすりのかさ音にふむのゝまかは今やおくらん

仲實

朝臣

臣

同

夏草のまけみにかゝるせこなはにもるゝを鹿にあひはくれつゝ

源兼

昌

昌

同

ねらひする賤をかさつをさを鹿の一むらくさとみてやすらん

藤原

忠房

房

同

夏かりのせこかいるのにたつ鹿は秋よりさきにねをやなくらん

二條太皇太后宮肥後

藤原

經

同

夏かりのまけみを分てかりくれはかくれもあへぬ鹿のむらとも

藤原

道經

經

長承三年常磐(井麿)五番  
歌合野禪草深

正治二年百首

建長八年百首歌合

五十首御歌

文永二年七月白河殿七百首鳥夏草

寶治二年百首御歌夏草

題不知

六帖題

同

同

久安百首御歌

百首歌原露

千五百番歌合

正治二年百首

み山いつるすそのゝ<sup>レ</sup><sub>レ</sub>まかをあさ<sup>レ</sup>立ちて袖そほぬるゝ夏かりの露

外山なるゆすゑもみえすくらきよをま<sup>レ</sup>りてや鹿の引かへらん

あつさ弓ゆつるまきかへますらをの片野の原にかりくらしつゝ

駒なへてのしまをすくるかりひとのゆすゑも見えすまける夏草

ふりたつるゆすゑもみえす夏草の野しまかみちをすくるかり人

六二<sup>たひ</sup>なみ野に狩するまかは草ふかみむつきは見えて弓のかすみゆ

新六二<sup>まけ</sup>明渡るもとやま遠くせこたてゝ夜こめのまかのゆくかたそなき

同<sup>は</sup>なにとして深山おこしのせこ聲にやはれなから鹿もすくらん

新六二<sup>ん</sup>まらやとくこらかつとひの山祭けふのかりくらむなしからめや

なさけなき狩子の耳にさを鹿のこよひのこゑをいかてきかせん

まはきさくみやきはらの白露をあさふますらんかり人そうき

眺望

民部卿範光

後九條内大臣

光明峯寺入道攝政

後嵯峨院御製

同

よみ人まらす

正三位知家卿

民部卿爲家

信實朝臣

崇徳院御製

従二位家隆卿

前大納言忠良卿

隆源法師

民部卿範光

喜多院入道二品親王家五  
十首眺望

洞院攝政家百首眺望

同

同

同

文應二年毎日一首中

あまのはしたてにて新撰  
風體

家集眺望心を

寶治二年百首海眺望

承安二年廣田社三首歌合  
眺望

同

同

いそのとまりと云所にて  
夕日を  
洞院攝政家百首眺望

山高みふもとの里をみわたせはよもの木すゑはなつなかりけり

夕日さすまほひにかすむ遠山のまつたえまにのこるつりふね

あしからの山うちこゆる夕くれのなみのふもとやうき島かはら

うなはらや浪間にうかふさゝたけの葉はかりのあまのつり舟

むさしのやくさのはらこす秋風のくもにつゆちるゆくすゑの空

夕暮のそらゆきはてゝゐるくもにまらぬさかひの山をみるかな

さゝ浪やうらよりをちをみわたせはいふきのたげにかゝる村雲

はるかなる入うみかけて沖つ波きくにこえたるあまのはしたて

みわたせはみほのうらわの夕なきになほなみかへるおきつ島山

わたつ海はいかなる浪のはてならん沖をもおきとみる程そみる

新續古雜中  
わたの原こきはなれゆくなみちには心もえこそつなかさりけれ

こきいてゝとほきうなつらみわたせは雲井のきしにかへる白浪

うなはらや雲井はるかにこく舟をうき木にのれる人かとそみる

此歌判者俊成卿云左うき木にのれるこれ又蜀郡靈猪張鷟が漢

河に昇しかとうたがへるなるべし心をかしく待めり

入日さす浪路をみればひと雲井あかしのうらはへたゝりにけり

いにしへを心のうちになかめてもまよふ夢ちのはてをまらばや

大藏卿右家

後九條内大臣

大納言經通卿

光明峰寺入道攝政

俊成卿女

光俊朝臣

民部卿爲家

前大納言爲家卿

隆祐朝臣

信實朝臣

皇太后宮大夫俊成卿

盛方朝臣

源仲綱

能因法師

家長朝臣

家長朝臣

224  
あ

建久七年百廿八首韻歌

かへりみる雲よりしたのふる里にかすむこすゑは春のわかくさ

前中納言定家卿

### 哀傷

延喜御子の御服にならせ  
給ける時

墨染の身にむつまじくなりしよりおほつかなきは佗しかりけり

天曆御製

御返し

墨染のいろたになくはほのかにも覺束なきは知らすやあらし

よみ人しらす

世間の無常をいとふ歌に

生死のふたつのうみをいとはれてまほひの山をまのひつるかも

同

かたらひ侍ける人のおや  
なくなれりけるに

我ためにうすかりしこと墨染のいろをはふかくあはれとぞ思ふ

能宣朝臣

權中納言俊忠卿とりへの  
の基(墓)所

はかなさはふな岡山の夕まくれまはしもたえぬけふりにもしれ

皇太后宮大夫俊成卿

家集無常歌中

露ときえ煙とのほりとにかくにむすほるはうき世なりけり

爲實朝臣

嘉元四年當座百首

船岡のすそのつかにかすそひてむかしの人にきみをなしつゝ

西行上人

家集

此歌はあひまりて侍ける人の身まかりてあとに十首歌人々よ

みけるによめると云々

地獄のふをみて

哀れかかゝるうきめを見るは何とて誰もよにまきるらん

同

同

うかるへきつひの思ひをおきなからかり初の世に迷ふはかなさ

同

同

鈴の聲日をふるまゝに残るよのいともちかくなるそかなしき

登蓮法師

家集無常歌中

鈴の聲日をふるまゝに残るよのいともちかくなるそかなしき

登蓮法師

戀わふる花のすかたはかけろふのもえしけふりを胸にたきつゝ  
前中納言定家卿

此歌は建永元年三月後京極攝政にはかにうせ給てゆめの心ち

し侍けるあくる日家隆卿とぶらひたりける返事と云々

建永二年三月百首御歌

かはらすよ三月七日のつゆはあきくもらはくもれ春のたなはた  
玉雉四  
人のよはおもへはなへてあたしのよもきかもとのひとつ白露

慈 鎮 和 尙

うつりゆくときのみ音ことに別れのとほくなるそ悲しき

同 民 部 卿 爲 家

家集無常歌中

いつまてか形にやとるたましひの離れぬほとをありとたのまん

同 安 嘉 門 院 四 條

弘安二年箱根宮百首

なにとかはたのみ頼ます目の前にあるも空しきかけろふの世を

他 何 上 人

雑歌中

別れとは身のある程そわれなくは人をもなにかあはれとはみん

同 同

同

草の葉の露にこの身をくらふれば風のまゝなるいのちなりけり

同 權 僧 正 公 朝

七百首歌

さき立といふもはかなしいつまてか空しきあとに身を残すへき

同 從 位 行 家 卿

柿木影供百首

老か身は近くこえなんぞての山とほづくといふへくもなし

從 位 行 家 卿

源氏物語卷々をみるによみける

いつとたにゑられぬよこそかなしけれ命のみつの流れひるまを

西 行 上 人

久安百首

もえいつるみねの早蕨なき人のかたみにつみてみるもはかなし

前 大 納 言 隆 季 卿

家集山水の文の心を

思へたゝみなわなす身のはかなさは有かとみればきえぬる物を

西 行 上 人

家集火をけにひとりゐて

山河のみなきる水のおときけはせむるいのちそおもひゑらるゝ  
向ひひるみるにもかなしけふりにし人を思ひのはひによそへて

和 泉 式 部



みちの國にて子にをくれ  
て  
浮生短<sub>ニ</sub>於夢<sub>一</sub>

我ためとおもひおきけん墨染はをのかけふりの色にそありける  
よるへなく空にうかへる心こそゆめ見るよりもはかなかりけれ

重 之  
千 里

夢

家集戀歌中

題不知

近くてはあはぬうつゝに今宵よりとほきゆめみん我そわひしき  
六四 宝旅 貫之集  
別れゆく人ををしむとこよより遠きゆめちをわれやかよはん

貫 之  
よみ人志らす

同

うはたまに戀しき人をみつる夜は夢のうちにてよをつくさはや  
萬代 家集  
まきたへの枕をたにかさはこそ夢のたましひ玄たにかよはめ

前中納言匡房卿

同

いはそくこゑよりやかておとろけはゆめあらひやむ谷の下水

素 性 法 師

正治二年百首

山ふかきのきはの松にとしふりてなれるゆめは風もいとほす

喜多院入道二品のみこ  
民 部 卿 爲 家

貞應二年爲顯百首山家松

さらぬたに春はまさしき夢の中にちるとや花のみえんとすらん

前大納言兼宗卿

喜多院入道二品親王家五  
十首

よしの山夢にもはなをみるひとや春はまさしといひはしめけん

慈 鎮 和 尙

四季百首御歌

夢をなとはかなき物にたとふらんみよの事までみゆとこそきけ

皇太后宮大夫俊成卿

文治六年五社百首夢

ぬるかうちに百年過しことわりも夢てふものそまことなりける

常磐井入道太政大臣

弘長元年百首

ぬるたまの夢はうつゝにまさりけりこのよにさむる枕かはらて

前中納言定家卿

文治元年百首夢

つききよみねられぬよしも諸越のくもの夢までみるこちする

同

花月百首

同

同

一字百首

御集戀歌

弘長元年百首夢

六帖題ひる

千五百番歌合

正治二年百首

戀御歌中

承安三年法輪寺歌合戀

百首御歌

五十首歌合御歌

千首歌

六帖題夢

同

爲家卿家百首

建長八年百首

蟲のねはねさめの夢におほえつ、秋のはるにもなりにけるかな

われはなほ夢のなこりもおほえけり雨のゆふへも雲のあしたも

いにしへの雲とあめとの山かけはたかあさゆふの夢ちなるらん

うちたゆむ晝間の夢のおもかけは雲にもあらずあめにもあらず

みきとたにたれにかたらん雨そく雲にまかひしあかつきの夢

たまさかに逢みし夜半に逢とみし夢はまことにいみけるものを

萬代玉戀二夢ちにはなこそその關もなしといふ戀しきひとのなとかみえこぬ

つらかりし夢はさめても變ぬにあふとみつるそひたりなはなる

思ひとけ夢のうちなるうつゝこそうつゝの中のゆめにありけれ

みる夢の迷ひのうちにあけくれてさめぬをさむと思ひけるかな

とにかくに現にもあらぬこの世には夢こそ夢の夢にはありけれ

新六四みぬもみえきかぬもきつよのなかに夢こそ戀のさとり也けれ

同ちらすなよ逢と見るよの夢かたりうたてちかふる人もこそあれ

立かへり猶そ戀しきたらちねのおやのいさめしうたゝねのゆめ

わか戀は海驢のねなかれさめやらぬ夢なりなから絶やはてなん

判者光俊朝臣云海驢まつなにともえよみとき侍らず或云牛海驢

は鮫魚にや侍らん雲海流にたる時空に向て浪にねふりてなが

同

後京極攝政

後九條内大臣

權僧正公朝

小侍從

同

一品資子内親王

祐盛法師

慈鎮和尚

中務卿みこ

民部卿爲家

信實朝臣

光俊朝臣

從三位家隆卿

衣笠内大臣

れ行とかや夢みることそはかりがたかるべきおほよそこの事  
みづから去れるにはあらず就<sub>レ</sub>之論<sub>ニ</sub>勝<sub>劣</sub>一未<sub>レ</sub>得爲<sub>レ</sub>之責彌の  
がれがたしと云々

文應元年七社百首夢

別後相思夢魂遙

家集戀歌中

家集

題不<sub>レ</sub>知

同

康和二年國信卿家歌合

千五百番歌合

たのむそよ<sub>ナ</sub>まほの聲をきく夢のもとちかひに思ひあはせて  
わかれにし時を思ひてたへぬれば夢のたましひはるけかりけり  
つらさのみまさりゆくかな思ひやる夢のたましひいかに行らん  
ねぬる夜の夢さわかしくみえつるはあふに命をかへや去つらん  
わきもこに戀てすへなみ白たへのそてかへしは夢に見えきや  
わかせこか袖かへすよの夢ならしまことも君にあへり去かこと  
戀わひてかたしく袖はかへせともいつかはきみか夢にみえける  
夢にたに人を見よとやうたねの袖ふきかへすあきのはつかせ

戀

新撰萬葉

寛平御時后宮歌合

同

兵部卿元良親王家歌合  
寢戀

かきりなく深き思ひを忍ふれば身をころすにもおとらさりけり  
しら玉のきえてなみたとなりぬれば戀しきかけを袖にこそみれ  
こひわひて心まとへる寢覺にはおもかけをたに逢ふとたのまん

民部卿爲家

千 里

元 眞

和 泉 式 部

よみ人未らす

同

隆 源 法 師

二 條 院 讚 岐

同

よみ人未らす

同

同

同

同

同

文治六年五社百首

同

治承二年右大臣家百首初戀

同

六百番歌合老戀

柿本影供百首

家集戀歌

文治三年百首忍戀

家集

同

のちのあした

隔月戀

祇園社百首

御集二千寄名所戀

五十首御歌被披講中戀

或抄中

家集冬歌

はしめよりおもふ心はきはもなしのりの道をもさこそいふなれ

袖ぬれて去ちのはしかきかきそめてすゑまた遠きみちしはの露

ゑるしあれといはひそゝむる玉はゝき取手はかりの契なりとも

ゑるやいかに君をみたけの初いもひ心の去めもけふかけつとは

たまはゝきてにとる程も思ひきやかりにも戀を去かのやまひと

うみをせき山をつくりしわかくにの戀のはしめも神を去るらん

つらさにも落し涙のいまはたゝおしひたすらにこひしかるらん

わかこひよ君にもはては忍ひけりなにをはしめに思ひそめけん

ゑるしあれと竹のまろねを數ふれば百代は臥ぬ去ちのはしかき

君こひて我せこにさへうとまれぬこやうらやみてあゆみせし人

道すからぬしなき戀やあくかれてかへる我身にとりつきぬらん

かきたえてみつきになりぬこれやさは心つくしの門出なるらん

恨みのみ結ひおきける身にしあればなとかは人をわきて思はん

をはつせや夜半の衣をかたしきていのるたもとそいとゝ露けき

ふくかせも物や思ふととひかほにうちなかわれはまつの一こゑ

をやみせずあまよの空になく涙もりぬしをれぬせくかたもなし

涙川こひよりいてゝなかるれはかくこほるよもさえぬなりけり

皇太后宮大夫俊成卿

同

同

從二位家隆卿

後九條内大臣

皇太后宮大夫俊成卿

前中納言定家卿

俊頼朝臣

同

同

同

皇太后宮大夫俊成御

慈鎮和尚

後京極攝政

前中納言定家卿

能因法師

能因法師

家集戀歌中

同

六帖題

百首歌逢不<sub>レ</sub>會戀

尋ぬはれきたもみなみもわきやすしなと我戀のあふかたのなき

家六二 思ひあまり戀しき時はよとかれてあくかれぬへき心ちこそすれ

新六六二 逢ことはかたちかひなるさゝむすひよゝのむくひの契つらしな

なかく<sub>レ</sub>迄も結はさりける契ゆるなにあけまきのよりあひにけん

こひやせて鏡のかけをけさみれば<sub>六</sub>迄らぬ人にもなりにけるかな

この歌はある女にた<sub>六</sub>ひあやしき所にておもひかけずあひての

ちあさがほのはなにつけてつかはしけるとなん

とにかくに身にはうらみのみち<sub>六</sub>て思ひをむかん方ぞ覺えぬ

いとせめて思ひいれたるなけき哉うき身ならては恨みやはする

人もうへわれもくやしきなくさめは世々のちきりの報はかりそ

頼むへき<sub>六</sub>迄ちのまろねの言の葉は思ひたえねといはぬはかりそ

いつしかにけさやる文の言の葉はあふ嬉しさとおはぬうらみと

君も又ゆふへやわきてなかわらんわすれすはらふをきの風かな

新六四 まちかねし夕の床のうたゝねもおとろかれぬるいりあひのかね

するかなるふしの煙のたゝぬ日はありともむねは晴しとぞ思ふ

更にけりたのめぬ鐘は音つれてならふさひしきとふのすかゝも

新續古戀三 かたしきの袖行水のうすこほりおもひくたけていく夜ねぬらん

前中納言匡房卿

貫 之

正三位知家卿

前中納言定家卿

前中納言匡房卿

皇太后宮大夫俊成卿

後鳥羽院宮内卿

前大納言忠良卿

寂 蓮 法 師

前大納言兼宗卿

後京極攝政

衣笠内大臣

二條院讚岐

大藏卿有家

正三位忠定卿

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

建保五年内裏歌合冬戀

正治二年百首

六帖題

夕戀

同歌合朝戀

六百番歌合契戀

同

千五百番歌合

述懷百首歌恨

家集戀歌中

六帖題

建仁三年水無瀬殿十五首

戀歌合

寶治十首歌合忍久戀

戀歌中

家集

戀歌中

六百番歌合寄雨戀

家集

六帖題

七夕もとしに一夜はあふものをなとわかこひのとほめつらなる  
新六五  
いまもなほこゝろにかゝる別かなかみかきやりし人のうしろて

前中納言匡房卿  
正三位知家卿  
參議雅經卿

なかめしやこゝろつくしの秋の月露のかこともそてふかきころ  
月ゆゑと人にはいひて誰をかもめてゝもこひのおいとなるらん

信實朝臣  
前中納言匡房卿

あちきなくひとをもこひしいまはたゝにしに傾く月をなかめん  
むすひけん人のことのはあたなれやみたれて秋の風にちるらん

伊勢  
西行上人

あやひねるさゝめのうみのきぬときん涙の雨を玄のきかてらに  
ふかき夜のねさめになにをおもひけんまとうちすさむ曉のあめ

寂蓮法師  
貫俊朝臣

六五  
かりこもゝ心のうちにほさなくなるとさみたれてもの思ふらん  
新六五  
いかにせん戀と思と身にそへて來ん世のたきけつかたもなし

光俊朝臣  
祭主輔親

身はかくれ聲は音なふ山ひこをたつぬるほとになつそくれぬる  
此歌はかたらひける女ありところをかくしてさすがふみなど

祭主輔親

百首歌中に

とほき所へまうづとてある人のもとへつかはしける

玉戀二  
つれ〜と空ぞみらるゝ思ふ人あまくたり來んものならなくに  
ありける六月つごもりによみけると云々

和泉式部

六百番歌合寄繪戀

みほの海のうらみでそ行尋ねすはみわの山人のさもたゝしとて  
主や誰みぬよのことをうつしおく筆のすさひにうかふおもかけ

同  
前中納言定家卿

六百番歌合寄繪戀

後徳大寺左大臣家十首歌  
寄催馬樂戀

稻荷社歌合寄催馬樂戀

源氏物語の名によせてよ  
める戀歌

千五百番歌合

同

洞院攝政家百首後朝戀

同

安元三年十月左大臣家歌  
合曉戀

六百番歌合別戀

六帖題後朝

永仁二年藤原長清か家歌

乾元元年歌合

洞院攝政家百首怨戀

延喜五年二月家歌合會後  
戀

むぐら

題不知

人志れすつくす心はかひそなきこやゑにかけるすかたなるらん

あはてのみかへる野原の露なれとかふるはをしきはきか花すり

みし人はかれくくなる東路に去けりのみゆくわすれくさかな

あはぬよのこゝろゆかしの手習は戀しとのみそふてはからるゝ

せきもあへす戀すてふ名や流れなん水のしたまでかけかよふ也

あはてたゝなけくはかりの契をはこはなにゆゑに結びおきけん

わすれしのななき契もあさね髪みたれてものはけさそかなしき

夢をまつあかぬなこりのあさね髪かゝるなみたそ猶みたれそふ

誰とねて君きぬくになりぬらん片しきてこそわれはあかすに

去はしなるけさのまたねに見つるかな心かはりのゆくすゑの夢

あかぬ夜を月そくといふ程にけに去らむまでわかれかねつゝ

我袖のほかにないてそなみた川うき身なるみはせきあへすとも

とはむしも今はよしやのあけ方もまたれすはなき月の夜すから

續後拾戀四

逢見ては睦しくこそなるときけつれなさのみもいやまさるかな

なからせんに玉のうてなも八重むくらはへらん宿に二人こそねめ

なからふるつま吹風の寒き夜にわかせのきみはひとりかぬらん

正三位季經卿

皇太后宮大夫俊成卿

建禮門院右京大夫

登蓮法師

西園寺入道太政大臣

醍醐入道太政大臣

大納言經通卿

民部卿爲家

道因法師

慈鎮和尚

民部卿爲家

參議爲相卿

前中納言爲兼卿

從二位家隆卿

平定文

よみ人志らす

同

同  
同  
同

萬十二  
夕されは君やきますとまちし夜の名残そいまはいねかてにする  
萬四  
おとしのさきつ年より今年までこふれとなそも妹に逢かたき  
萬十一  
わきもこかよとてのすかたみてしより心空なりつちはふめとも

同  
中納言家持卿  
人丸

占

題不知

萬十一  
おはなくに夕けをとふとぬさに置我ころもてはまたそつくへき  
六一  
ゆふけとふわかころもてに置露を君に見せんと取れはきえつゝ  
萬十一  
ことたまのやそのちまたに夕けとひ占まきにせよ妹に逢んよし

よみ人志らす

同

玉ほこの道ゆき占にうらなくはいもにあはんとわれにいひつる

同

同

月夜にはかといいてたち夕けとふ足占をせしゆかまくをほり

中納言家持卿

同

萬十一  
月夜よみ門にいて立あしうらしてゆく時さへや妹にあはさらん

よみ人志らす

同

萬十三  
いつきまさむと、たまはこの、みちにいいてたち、夕うらを、わかと

同

長歌

ひしかは、ゆふうらの、われにつくらく、

同

題不知

萬十六  
占へをも八十のちまたも占とへと君をのひみんたとき志らすも

同

國後卿家歌合

歌苑抄  
たはれにし妹にあふやと道のへにとひしゆふけそ人たのめなる

基

久安百首

玉銚のゆふけをとはんこのくれに山ほとゝきすすきくやきかすや

大炊御門右大臣 俊



千五百番歌合  
建長八年百首歌合

こりはてぬうき身の程をうたかひて心のうらにつくへかりけり  
夕けとふいしうらもちて逢ことのかたきこひとは思ひまりにき

前中納言兼宗卿  
従二位行家卿

言語

延喜七年御屏風歌

照月を見さらましかはうは玉のよるは物へも行かすそあらまし

貫之

尾張守をきかた下るにぬ  
さいうぞくやるとて

人はいさ我はむかしの忘れねはものへときゝてあはれとそ思ふ

同

延喜御時(御イ)屏風歌

浪のうへにほのみにみえつゝ行舟はうらふく風のまるへなりけり

躬恒

家集

身に添る影とも人をなしてしかうしろやすさをみせんと思へは

伊勢

題不<sub>レ</sub>知

ゆふけとふ道のほとりの人たにもことの答へはせぬとやはきく

清慎公

同

ひたみちにたのめは人のつらくとも知ぬ顔にてあらんとそ思ふ

西宮前左大臣

家集

せこかきてふし宏かたはら寒き夜はわか手枕をわれそしてぬる

和泉式部

同

こぬ人をまたましよりもわひしきは物思ふ頃のよひ居なりけり

同

あつきな物といふ物をひとりのをけにいでて十二月計に

かく計さゆるにあつきけのすれはひとりの桶のなれはなりけり

同

節分のつとめて

けふよりはあしまのみつやぬるからん春のたちとの氷うすれて

同

かみをひさしくげづらで  
かみのみだれたるに

物のみ亂れてそ思ふたれにかは今はなけかんうはたまのすち

同

題不知

關白殿あがたにおほしましけるは御ともにて旅紅葉

萬代  
いづれをかまつうれへまし心にはあたはぬことの多くもある哉

相模

建保二年内裏秋十五首歌合

同

朝ことにいろますもみちなかりせはなくさめましやみやこ心を  
月みてもわかよはすてにひさ方のあまねぐてらせ秋のこゝろを  
すへてたゝこひせぬそでの露たにももろきならひのあきの夕暮  
ならの葉のそよく響の玄たかせにちきらてつとふむらのさと人  
たつた山ひと葉おちる夏かけもおもひそめてし色は見えけり

權大納言長家卿  
大藏卿有家

一字百首

同

我やとにけふのねのひの松うゑてかせまちつけんすゑの夏かけ  
うちそゝく秋のむら雨ひやかにて風にさきたつゑたのうきくも

同

一句百首

同

をきの葉にふき立風のおとなひよそよあきそかし思ひつること  
たのめぬをまちつる宵も過はてゝつらさとちむるかたしきの床

同

文治五年百首秋

六百番歌合

吹はらふもみちのうへのきりはれて峯たしかなるあらし山かな  
あけかたになるや秋風たちそめていさゝかすゝし夏のたまくら

同

洞院攝政家百首

後京極攝政家にて一字を  
く三十一首歌

たゝいまの野原をおのか物とみてこゝろつよくもかへる秋かな  
みそきするあさのたちはゝ宿毎に刈ほともなくなけうてつなり

同

二見百首

韻字歌雙逢霜色先秋變、  
地芥恩餘有枕イテ老抛有枕イテ  
無藝無才無所好、琴詩  
酒興隔提携

月の色にきりなへたてそ難波舟みきはのあしはたつさはるとも

同

鳴枕暗巻イ尋露底、  
擊書遠鷹出雲端

秋の夜をむしのなくくうらむともつきし思ひの露のかたはし

同

貞應二年九月四季百首冬木

康安元年每日一首

建長三年每日一首中

寛元三年結縁經百首

隱居百首

同

同

海道宿次百首馬淵

雜歌中

嘉元元年百首

平大納言の女につかはしける  
或所の屏風歌馬にのりたる  
人秋の野を行

山里の人の家にきくの花あるをしりてつくるふ

東山に花みにありくとて  
山櫻を

家集秋歌中

ちりつものよもの木すゑのこからしにのこりてすまふ峯の椎柴

ゑらせはやそよものこと安けくもなきよの中に思ひわふとも

子を思ふ心はかりにほたされてうき世をなほそいてかてにする

ふた名たつ浪のこゝろもそと濱のうとましなから又かへれとや

いかにせんたゝなほさりの世習にたのまぬ中をなげくこゝろは

夕立のみねのむらくもたちさわきおひたゝしくもぬるゝ袖かな

とにかくにこゝろの鬼は日に添ておそろしき世にふるそ悲しき

たとひ世に猶なからへてめくるともたのまれぬへきわか心かは

目もくれぬわたせその馬淵もなきこの人かはゝせふみせすとも

まつの色真柴のかせの夕けしきあすもやこゝにたへてなかめん

よりふしてたゝうちやすむと計にまとろみぬらし夢のみえつる

住吉のきしいふかしくおもほえてなみのよるこそ立ぬまたるれ

秋の野の花に心をよせつゝはこまうなかきぬけふにもあるかな

霜雪にあてぬさきよりきくの花つくるふひとのそてそつゆけき

山櫻ちかくみんとこのこゝろにてけふはかすみにかくまるゝかな

たもとかへするものにもかむしの聲衣のそてもそほちはてぬる

民部卿為家

同

同

同

同

同

同

同

参議為相卿

前中納言為兼卿

入道前太政大臣北山

謙徳公

惠慶法師

同

同

同

同

百首歌中

同

家集戀歌中

右大臣家賀の屏風十一月

雪

おさなきこのもとに人の

かひをおこせて侍しを

殿上にて時鳥十首歌

時鳥聲驚眠

たなかみに侍ける比人を

まつとて

祝のこゝろを

たかさごにて風のいたく吹ければおきにひさこいろと云ものゝたつを

同竊旅

ひさこ花さけるけしきによそなからその心をくみてしるかな

悔離別と云ことを

殿上にて戀のこゝろを

いまさらにいも返さめやいちゑるきあすはの宮に小柴さすとも

年へたるひさの植きのうちいたさを知ても人に身をかふるかな

文をみぬ戀といふ心を

みさこたにうやまふ磯を打さらしは、ふる潮をなかめかねつる

家集戀歌

文見すと聞につけてもうたゑめのはしたなきまでぬる、袖かな

紅葉せぬときは山のときは木も秋はしたはそけしきはむらし

ひと、せのひたおもむきの春ならはのとけくみまし深山への梅

秋はきの下葉につけて思ふかなうかりしひとのこゝろはへをも

夜とゝもに心ひとつをやくゑほのとくともなしに消てみゆらん

つなきつゝいさみにゆかんふりつもる雪をふみわけかる鹿の跡

ゆくすゑを心もとなく思ひくるちひろのそのかひそうれしき

散木夏

時鳥あかねなけきのもりに来ていとゝもこゑをおしみつるかな

同

またすてふわか名もたてし郭公なきおこしぬとひとにかたるな

散木

たれにまたおもひゑらせん君まつとたゝすむ庭のこからの聲

みつからにゑろとをのゆふとりゑてゝあかふも君か萬代のため

同

同

同

同

同

同

人にまらるゝ戀 俊頼朝臣

としをへたる戀 同

いやしきないとふ戀 同

顯輔卿家にて戀の心を 同

左京大夫經忠卿家にて戀人によらすといふことを 同

紅のそてにはつれしまみよりもなれかつゝりのわゝけをぞ思ふ 同

百首歌中に松 同

山 同

橋 同

こりはてぬにへのはつかりあさにする宿にもあらて人返しけり 同

此歌は隆源法師のもとにたひんまかりけれどもいたはると 同

てあはざりければさうじにかきつけゝる歌 同

初雁のへのひるけのつかなりとほかけぬすへきいか返さん 隆源法師

肥後が歌をよみてかゝる古歌おほゆるとたづねたりしかはよみける 俊頼朝臣

吳竹のつゝをのみゆるせはしさによもこの節はあらしとぞ思ふ 源兼昌

妹かいへのかたに關守すゑてしか朝わかれゆくわれとむるかに 法眼全真

承安二年法輪寺歌合草花 風ふけはちくさの花もやすからてこゝろくるしき秋のゆふくれ

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

同年閏十二月東山歌合旅宿月

時々くる人なをうらむる心ある女にかはりて

家集寄井戀

山家百首忍戀

祇園社百首初戀

六百番歌合

同

同

千五百番歌合

老若五十首歌合

同

同

同

文集百首遙見人家花便入不<sub>レ</sub>論<sub>三</sub>貴賤與<sub>三</sub>親疎<sub>一</sub>

賀茂百首御歌

行とまる草のかりほのあたふしは月にもゝれてあかすなりけり

尋ねつるはなかとてこそよちのほれこひさめなれやみねの白雲

逢ことはまけめゆひかと思ひしをとほかりにこん人はたのまし

にこりゐにかけをならへてすむはかりかへはや人のつれな心を

よもすから身まろきをたにえこそせね衣かへすと人やきくとして

そのかみの戀の初めを思ふこそなほはかなさのきはめなりけれ

玉戀<sub>二</sub>雲とつるやとの軒はのゆふなかくこひよりおつる雨のおとかな

なかくする心のねよりおひ初てのきにまのふはまけるなるへし

涙川あふせもまらぬみをつくしたけこすほとになりけるかな

こよひこん人にそあはん七夕のたえぬちきりにあへんと思へは

なかくをはてる日のかげやへたつらん春秋もなき夏すかたかな

いほりさす野さはの夏の夕すゝみ物とこそせき秋にもあるかな

三日月のほのめく空に秋をこめてそゝろきわたるやまのはの雲

われいとふひとの心とおもはゝやまたくおつる袖のなみたを

花をやとのあるしたのむ春なればみにくる人をきらふものか

たにかけていはねきひしきおく山におそき櫻をみるひとやたれ

賀茂重保

信蓮法師

源仲正

同

皇太后宮大夫俊成卿

同

慈鎮和尚

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

慈 鎮 和 尙

同

同

同

同

日吉社法樂歌

同

建久二年春の比東林吟葉

同

述懷百首歌旅

皇太后宮大夫俊成卿

建長三年十五首歌合春戀

後鳥羽院内大臣

御集

後九條内大臣

同

同

弘安元年百首

同

五十首御歌月前竹風

後鳥羽院御製

百首御歌

同

御集寄月戀

後京極攝政

和歌所初度影供初戀

同

家撰歌合新旅

同

後法性寺入道關白家百首

同

百首歌

寂 蓮 法 師

玄つのも大路井筒に夕すゝみ玄たるきあさのころもすゝきて  
 くれ竹にいさゝか風のおとつれて吹やまくらにこのはちるなり  
 になひもつさうきのいれこまちあしたよわたる道を哀とそみる  
 人ならはうらみもすへしいかゝせんわれをすかすはわか心なり  
 むかし人みきりにうつす四季の糸のはるしも物を思ひけるかな  
 天さかる鄙の長路に日かすへておちふれぬへき身をいかにせん  
 さてもまたなくさむやとてなかむへき涙も空もうすかすみつゝ  
 あちきなし身のためにこそ戀もすれ心さたむるわかなみたかな  
 かくれ玄なうきもてなしの袖の露ことなきさまに打はらふとも  
 世中のあたのならひをあちきなくなとこけおひて花のさくらん  
 ふるさとの月吹かせになよたけのなはりあひても幾世へぬらん  
 なましひにいければ嬉し露の命あらはあふよをまつとなければ  
 君に我うとくなりにしその日より袖に玄たしきつきのかけかな  
 すまのあまのもしほの煙たちまちにむせふ思ひをとふ人のなき  
 まつ鳥や濱風さむきいそねかなあまのかるもをひしきものにて  
 のちもうし忍ふにたへぬ身とならはその煙をもくもにかすめよ  
 夜ふねこく明石のうらの月をみてふくるにおつるわかなみた哉

百首御歌

保安二年九月内大臣家歌  
合野風

永久四年百首王昭君

久安百首

同

六百番歌合寄雲戀

爲家卿家百首

家集

同

遠所十首歌合竊族

戀百首歌中

貞應三年百首戀廿首中

家五十首祝

久安二年六月顯輔卿家歌  
合戀

建長八年百首歌合

六帖題

同

さしもあらぬ時雨なれとも玉かしはことにとりなす夜半の音哉

喜多院入道二品のみこ

たひ衣のちのくさふしきむけきに風もおなしくゆふるせよかし

明賢朝臣

ゆくすから心もゆかす別れ路はなほふるさとのことそかなしき

仲實朝臣

野邊ことに人もゆるさぬ我もけふこや今やうのむさのことくさ

季通朝臣

もろともにつふそ心は行にけるひとつてならぬむつかたりして

前大納言隆季卿

おもひやるなかもいまはたえぬとや心をうつむ夕くれのくも

従二位家隆卿

戀死なは人笑へにもなりぬへし去ひてをいはむあるよはかりも

同

よそに聞うるまの島のうるさくはいひたにはなて思ひたえなん

同

あれくらしはまゆく風のいやはやにたちそふ浪に千鳥なくなり

同

をり去かむひまこそなけれおきつ風ゆふたつ波のあらきはま萩

同

朝露にぬれこそてをほす程にやかてゆふたつわかたもとかな

西行上人

おもひわひいまはわか身のかつかたにありし契や人にかたらん

民部卿爲家

たれも皆うれしき去ほにあひにけり浪もおとせぬよものうみ哉

喜多院入道二品のみこ

大井かはるせきによとむいかたしを涙のくれにまつそかなしき

西住法師

君か代をなにとへん天地のいやとほなかきかきり去らねは

前大納言顯朝卿

おのつから手枕はつしねなほれはわれ思はずにいもむつたり

光俊朝臣

おのつから妹か傳への口まねひあらぬけしきもなつかしきかな

同



同

百首歌

家集中

建長の百首歌合

寶治二年百首

弘長元年百首

同

御集花恨風

家集花歌中

夏歌中

女郎花水近と云事を

同  
つらかりし日ころを語る睦言になきみわらひみあかず夜半かな

夕すゝみあたねの床のあけかたにすたれうこかし秋はききにけり

口をしき身にもかふへき物ならば今までよをはきゝてへましや

新六で  
むら雨の空うちなひくあきの日の雲のはつれにのこるいなつま

かすならぬみは山かけの玄つゝと物哀れにもなるすまるかな

きりくす枕かたさることやなきあかつきかけて夢おとろかす

ふる雪のつもるをりこそわか宿にあしふみいれて人もとひけれ

浪のうへいそのあらくゝまらせてそくたく心のほとも見すへき

こゝろうきかせにもある哉櫻花さくほともなくちりぬへらなり

花みれはそのいはれとはなけれとも心のうちそくるしかりける

よしの山はな吹きくして峯こゆるあらしは雲とよそに見ゆらん

もろともにわれをもくしてちりね花うき世をいとふ心ある身を

あたにちるさこそ木すゑの花ならめすこしはのこせ春の山かせ

かたはかりつほむと花を思ふよりそ又こゝろものになるらん

空晴てぬまのみかさをとおとさすはあやめもふかぬ五月ならまし

こさしくふるさとをのゝみちのあむを又澤になす五月雨の比

をみなへし池のさなみに枝ひちて物思ふそてのぬるゝかほなる

信實朝臣

殷富門院大輔

成尋法師毋

信實朝臣

同

同

同

同

鎌倉右大臣

西行上人

同

同

同

同

同

同

同

月歌中

悔しくも賤のふせやおとしめて月のもるをも去らてすきけり

同

幽歌中

弓張の月にはつれてみしかけのやさしかりしはいつかわすれん

同

同

なかくくにとときく雲のかゝるこそ月をもてなす氣色なりけれ

同

家集

秋風のふけゆくへのむしのねにはしたなきまでぬるゝ袖かな

同

戀歌中

せくことにたけるうしほのおほよとみよとむとくいもなき涙哉

同

同

あやめつゝ人去るとてもいかゝせん去のひはつへき袂ならねは

同

同

さることのあるなりけりとおもひ出てしのふ心の忍へとそ思ふ

同

同

さることのあるへきかはと忍はれて心いつまでみさをなりけん

同

同

けふりたつふしに心のあらそひてよたけきこひをするかへそ行

同

同

むかはらはわれかなけきの報にてたれゆゑ君かものをおもはん

同

同

さりともとほのかに人をみつれともおほえぬ夢の心ちこそすれ

同

同

ことゝいへはもてはなれたるけしき哉うらゝかなれや人の心の

同

同

いとほしやさらに心のをさなひてたまきれらるゝ戀もするかな

同

同

人去らぬなみたにむせふ夕暮はひきかつきてそうちふされける

同

同

物思ふ袖になけきのたけ見えて去のふ去らぬはなみたなりけり

同

同

ものおもふ心のたけそ去られけるよなく月をなかめあかして

同

同

いひたてゝうらみはいかにつらからむおもへはうしや人の心は

同

雜歌中

同

とをてさすひくのおもてにひく潮しほにまつむ心こころそかなしかりける  
玉たま神かみ祇ぎかしこまりしてに涙のかゝるかなまたいつかはと思ふあはれに

同

西行上人

此歌家集云よをのがれて後仁安二年十月一日夜賀茂にまわり  
てへいまゐらせけるにこのまの月ほのぐとつねよりもあは  
れにおぼえてよめると云々

家集東山に阿彌陀佛と申ける聖人の庵室にまかりてよみたる

落花を

待花

雨中待秋

池上月

花歌中

梅歌中

戀百首中

同

齋院さいえんおきさせ給て後のちかの  
所の女房にようぼうに申ける

17

柴しばの庵いほときくはいやしき名なれともよに好このしきすまゐなりけり

吹かせのなへてこすゑにあたるかなかはかりひとのをしむ櫻うづに

今いまさらに春を忘るゝ花もあらしやすくまぢつゝけふもくらさん

はきか葉はにつゆのたまもる夕立は花まつあきのまうけなりけり

みさひるぬ池いけの面のきよければやとれるつきもめやすかりけり

よしの山雲やまぐもをはかりにたつね入てこゝろにかけし花をまゐるかな

この春はまつか垣根かきねにふしわひてむめかゝとめん人またしまむ

われのみそわか心こころをはいとほしむあはれむ人のなきにつけても

よたけたつ袖そでにたくへてしのふかなたもとのたきにおつる涙なみだを

君きみ住すままぬみうちは荒あらいてありすかはいむすかたをもうつしつる哉や

いつか又またいつきの宮みやのいつかれてまめのみうちの塵ちりをはらはむ

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

家集

家集戀歌中に

家集夏歌中

三百六十首中

戀歌中

同

鶴那家歌合

憂喜皆心灰

祭髪俄頃變春花

夢中歡樂勝然

老眼早覺常殘夜

自靜心共延壽命

此歌はいせに齋宮おはしまさで年へにけり齋宮こたらばか  
り御かどみえてついがきもなきやうになるをみて云々

も、玉戀まきにえられて植る女郎花こゝろをこりのなとかせさらん  
さりともと頼むこゝろにはかられて去なれぬものは命なりけり

はなちりし春のあらしを惜みおきて夏の日よりにふかせてし哉

さよなかにせせこかきたらは寒くともはたへを近み袖もへたてし

わきもこか衣うすれて見えしよりたはれねせしと思ひなりにき

をたまきにあさけのまな人わかことや心のうちにもは思ふらん

たまさかに逢あひても又わかれぬるあさけのまな人なこりかなしも

### 述 懷

悲しきもうれしきこともおほかたの心のはひとなりぬへらなり

くろかみのはかに白くなりぬれば春の花とそ見えわたりける

夢風雜下にても嬉しきことの見えつるはたにうれふる身には増れり

老てぬる目は早覺ぬ長しなへに夜はに明くれは寢てのみを經る

さわきなく心ひとつをなしつるにいのちを延るものはありけり

元同 眞

能 宣 朝 臣

好 忠

同

同

同

よみ人去らす

千 里

同

同

同

同

心更老於身

百首御歌委 形老少外忘

懷死生間

百首御歌述懷

嘉應二年十月住吉社歌合

述懷

述懷歌中

〇

述懷の心を

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

世シのなナかカを思シひヒわワひヒぬヌる心ココロこそ身ミよりもすスきてキてテおオいイまマさサりリけれ

おもオモひヒとトくクにニかカたタちチなナけケれレは心ココロなしナシ人ヒトてテふフ名ナをヲもモけケかカしシつツる哉

また死シなナて罪ツミの報ウチガタを見ミつツるかカないナイきてキてもかカゝる世ヨにニうウまマれレけケり

吾ワか盛シメやヤよヨいイつツかたタへ行ユクにニけんケンまマらぬラヌおオきキなナに身ミをヲはハゆユつツりリて

よろヨロこコふフもモなナけケくクもモあアたタに過スる世ヨをヲなナとかカはいイとトふ心ココロなるルらん

あアすスよヨりリはハあアたタに月ツキ日ヒを送ツクらラしシと思シひヒなナからラもモまたタくクらラしシつツゝ

哀アハレれレにニのノかカれレても世ヨはハうウかカりリけケり命イノチなナからラそソすスくクへヘかカりリける

身ミを思シふ心ココロのなナかカをヲたタかカはハすスは身ミにニはハこコゝるルそソあアたタとトなるルへヘき

すスてテしシ身ミをヲ又マタとトりリかカへヘすスいイつツはハりリの心ココロをヲいイかカてテこコゝるルとトはハせん

なナけケきキにニはハなナけケきキはハなナきキをヲ悦ユキをもトむムれレはハこコそソなナけケきキとトはハなナれ

老オシロイらラくクはハ身ミはハなナゝナそソちチのノさサかカへヘにニて心ココロなナとトめメそソむムねネのノせセきキもモり

老オシロイか身ミの山ヤマとトし高タカクくクのほホりリきキてテくクたタりリむムきキなナるルさサかカそソすスゑエなナき

いイかカてテかカくクにニこコりリの末スエにニむムまマれレきキてテ月ツキすスむ秋アキをヲあアまたタ見ミつツらん

まマつツむ身ミはハかカへヘらぬ老オシロイのなナみミなナれレは水ミヅ行ユクかカはハのすスゑエそソかカなナしシき

草クサも木キもふフけケはハかカれぬレヌ秋風アキカゼにニさサきキのみミまマさサるルものノおオもモひヒのノ花ハナ

こコとトしシけケきキこコゝるルよヨりリさサく物思モノシひヒのノ花ハナのノ枝エダをヲはハつツらラつツゑエにつツく

みミなナ人ヒトのノはハなナのノ衣イをヲきキるルなナかカにニひヒとトりリそソおオいイにニまマほホみミはハてテぬヌる

千 里

慈 鎮 和 尙

同

清 輔 朝 臣

同

慶 政 上 人

同

他 阿 上 人

同

同

同

同

皇太后宮大夫俊成卿

同

前中納言定家卿

躬 恒

貫 之

躬 恒

家集

返事

る

貫

述懷歌中

十首

喜多院入道二品親王家五

て

ち

嘉元三年十二月別時の

ち

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

あふきに手ならひをし侍  
として

十首御歌曉述懐

五百首御歌

御集

寄枕述懐

白氏文集をひかれて

千五百番歌合

建保三年名所百首

承元四年栗田社歌合

百首歌

同

家集述懐歌中

建長四年毎日一首中

文應元年七社百首述懐

嘉元元年式部卿親王家續  
千首寄沼述懐

賀茂社百首

雲葉

ちとせまであとゝまる筆の跡なればかく人からや人も去のはん  
よをこめし朝まつりこと引かへて今はほとけのみちそおこなふ

何かなく何とか去のふいたつらに思ひもをかし露の世のなか

あはれなり錦のとはりひきかへてあまのたまやは月もとまらす

我腕をまくらに去つゝ思ふかなげにたのしみはこれにすぎしも

身をは雲こゝろは水になしつれば人をもよをもうらみさりけり

かすならぬ我が身は花にふくあらしすむよも月にかゝるうき雲

わかのうらの神にかきやるもしほ草心になひくたむけともかな

わかの浦やなきたる朝のみをつくしくちねかひなき灘に残りて

いかにせんはてなき人は世にもなしとまらぬ駒の影はすくめり

こけの去たにうつまぬ名をは残せともはかなのみちや敷島の歌

かす去らす誰もかきおく名のみして塵につくへき言の葉もなし

あとたれてまもるとならは玉津島よこなみたつなわかのうら風

天の原たかしとはかりあふきみておほふむくひを知ぬかなしさ

人ことのいつゝの教たえはてねかみもほとけもなにをまもらん

よに去つむ言の葉はかりのはへてもいかほの沼の水隠れそうき

まちくたりよろほひ行て世を見れば物のことわり皆知られけり

權大納言行成卿

後鳥羽院御製

同

後嵯峨院御製

後明入道攝政

前大納言忠良卿

從二位家隆卿

前中納言定家卿

同

同

同

民部卿為家

同

同

同

參議為相卿

慈鎮和尙

三百歌十首御歌

柿本影供百首

同

六帖題

同

同

同

文永二年毎日一首中

恨身恥<sup>運イ</sup>蓬歌百首中

長歌がいのくにへまいり侍とて

人を見るも我身を見るもこはいかになもあみた佛なもあみた佛

慈 鎮 和 尙

神にむきほとけにむきていのる身はみなみへにしへちる涙かな

後 九條 内 大臣

たのしみになけきは影とそふ物を世にあふほとは知る人やなき

同

山深く八重のさかもき引とてもよのうきことはなきそかよはん

同

いかにかく心にむかし目になみたうかはぬ時もなき身なるらん

同

おろかなる心の師とはなりぬれと思ひおもひに身をはまかせし

同

かたきこるたつきの斧の柄を弱み思ひきられぬ世こそつられ

民 部 卿 爲 家

人ゑるやうき世のすゑのこゝろとて雨くもるそら水にこるかは

同

心なき身にさへ物のなげかれてさらにはきのなさをそしる

同

なほもく云てもいはんけふけふも思ふおもひの積るつもりを

俊 頼 朝 臣

年経ればけかしきみそに落ふれて濡しほとけぬいとほしの身や

同

山かつのつくらにゐたるわれなれや心せはきをなけくと思へは

同

古本忠<sup>忠</sup>集<sup>集</sup>こそこのこそ、とつきのゆはり、ありしとき、さきのすへらの、おほ

忠

せして、<sup>いひし</sup>おほなる、かひかねに、さしつかはし、ときは

同

わか、ゆめよくと、よひことに、ちきりしことは、わたのはら、

同

ふかみとりにて、ありそうみの、あたなみたつな、てふことを、を

同

峯

りかへしつゝ、いひおきて、去くれとゝもに、ふりてにし、まな  
このきりは、たちみたれ、あつまの道も、見えさりき、心のやみに、  
まとひつゝ、あふさか山を、こえいてゝ、去けき思ひを、やま  
しなの、山をうしろに、みなしつゝ、うしろめたしと、思おきて、  
わかみはせたの、はしにいたり、いかにせましと、うちなげき、あ  
ふみのうみを、みやりしに、やむことなみの、たちしかは、はるか  
にみえし、たて去まの、からきわかれを、するかなる、ふしのみ山  
を、くゆれとも、つびにとまらぬ、みちなれは、たむげのかみを、  
うちねきて、さてゆく程に、いたりにき、のこれる冬は、はかなく  
て、くさの枕に、わひくらし、としたにこえは、はるかすみ、立歸  
なんと、おもひしを、わかenasこととの、去つはたに、みたれてなら  
す、ありしかは、たちとゝまりて、へしほとに、せみのはつこゑ、  
なきしなへ、都よりこし、みやことり、そらになくねを、きゝしか  
は、君まつ山は、もみちして、なみさへこゆと、つけしかは、雲の  
うかへる、ことなれは、よにもあらしの、風ふきて、はれたる空  
を、うちなかめ、いつしか山に、たちのほり、まつ山ことに、うつ  
ろひて、ありとみんとぞ、いそきこし、なにかはさらに、さりけれ



U

長歌

は、いろのみとりも、さしなから、こゝろねさへそ、かれにける、  
 さりとも水の、あわこゝろ、すみも玄ぬへく、おもひしを、ほえに家こり。  
 そめにし、あさきせは、云くれといもにあさきり家。  
そ、家に、そ、家ほとりの、そ、家あたさわかしう、かすは家かやはすを、池水に家よをうき草の、み家か  
 くせとも、かくしもあへす、なにはかた、みきはにおふる、あし  
 のねの、あしたゆふへに、あらはれて、きこゆることを、くる  
 しひに、て家もえいてかほに、たつるなり家うつろひにけり、  
 さてもいかに、わしのみ山の、月かけの、つるのはやしに、い  
 りしより、經にける年を、かそふれば、ふたちとせをも、すき  
 はて、のちのいつ、の、も、とせに、いりにけるこそ、かな  
 しけれ、あはれみのりの、みつのあわ、きえ行比に、なりぬれゆけい  
 は、それに心を、すましてそ、わかやまかはに、去つみゆく、心  
 あらそふ、のりの師の、われもくと、あをやきの、いと、こ  
 ろせく、みたれきて、はなも紅葉も、ちりゆけは、こすゑあと  
 なき、み山への、みちにまよひて、すきなから、ひとり心を、と  
 とむるに、かひもなききの、去かのうら、あとたれまし、日  
 よしのや、神のめくみを、たのめとも、人のねかひを、みつか

前中納言正定家  
大僧正慈鑑

系録

反歌

はの、なかれもあさく、なりぬへし、みねのひしりの、すみかさへ、こけの下にそ、うもれゆく、うちはらふへき、人もかな、あなうの花の、よの中や、はるのゆめちは、むなしくて、秋のこすゑを、おもふより、冬のゆきをも、たれかとふ、かくてやいまは、あとたえん、とおもふからに、くれはとり、あやしきよるの、わかおもひ、きえぬはかりを、たのみきて、なほさりととも、おもひつ、まはしみやこに、やすらひて、のこるみりの、はなのかに、まひて心を、つくはやま、まげきなけきの、ねをたつね、まつむむかしの、たまをとひ、すくふ心を、ふかくして、つとめゆくこそ、あはれなれ、み山のかねを、つくくと、我が君かよを、おもふにも、みねの松風、のとかにて、ちよに千とせを、そふるほと、のりのむしろの、花のいろ、のにも山にも、にほひてそ、人をわたさん、はしとして、まはし心を、やすむへき、つひにはいか、あすか河、あすより後や、わかたちし、そまのたつきの、ひききより、みねの朝きり、はれのきて、くもらぬそらに、たちかへるへき

さりともと思ふ心そなほふかきたえてたえゆくやまかはのみつ

かへし

ひさかたの、あめつち共に、かきりなき、あまつひつきを、ちか  
 ひおきし、神もろ共に、まもれとて、わかたつそまと、いのりつ  
 つ、むかしの人の、まめてける、みねのすき村、いろかへす、い  
 くとしくを、へたつとも、やへのまら雲、なかめやる、みやこ  
 の春を、となりにて、みのりの花も、おとろへす、にははん物と、  
 思おきし、すゑはの露も、さためなき、かやか下葉に、みたれつ  
 つ、もとの心の、それならぬ、うきふしまけき、くれたけの、はつ  
 ねをたつる、うくひすの、ふるすは雲に、あらしつ、あとたえ  
 ぬへき、たにかくれ、こりつむなけき、まひしはの、まひてむか  
 した、かへされぬ、くすのうら葉は、うらむとも、きみはみかさ  
 の、山たかみ、雲井の空に、ましりつ、てる日をよ、に、たすけ  
 こし、ほしのやとりを、ふりすて、ひとりいてにし、わしの山、  
 よにもまれなる、あとめて、ふるきなかれに、むすふてふ、法  
 の清水の、そこすみて、にこれる世にも、にこりなし、ぬまのあ  
 しまに、かけやとす、秋のなかはの、月なれば、猶山の端を、行  
 めくり、空ふく風を、あふきても、むなしくなさぬ、行するを、  
 水の河なみ、たちかへり、心のやみも、はるくへき、日よしのみ

前大納言正慈家

夫木和歌抄卷第三十六終

かけ、のとかにて、君をいのらは、よろつ世に、ちよをかさねて、  
まつかえを、つはさにならず、つるのこの、ゆつるよはひは、わ  
かのうらや、いままたまもを、かきつめて、ためしもなみに、み  
かきおく、わかみちさても、たえせすは、ことのはことの、いろ  
いろに、のちみん人も、戀さらめかも、

君をいのるこゝろふかくはたのむらんたえてはさらに山川の水

此歌は後鳥羽院みなせどのにわたらせ給けるに慈鎮和尚のな  
が歌をたてまつられたりけるかへしたゞいまつかうまつるべ  
きよしおほせ事侍ければやがてかきつけてたてまつりけると  
云々

跋

長清法名蓮昭

此夫木和歌抄者、藤原朝臣長清自撰也、昔中頃之歌仙之家集、竝代々勅撰に漏る、和歌を拾集所也、目今以後之爲勅撰之、又此道に志あらむ人のために、世之嘲を不顧集置者也、又夫木抄と名付事、今案に非ず、此鈔之名を思案して少しまどろみて有ける夢の中に、白衣之老翁一人來曰、汝所撰之和歌抄者、我朝之至寶也、末代之證歌成べし、倭國之風俗なれば扶桑集と可名付と謂れけるを、夢心地に是は誰人にて御座ぞと問ければ、我は是和歌の道に心を留し、江中納言匡房と云者也とて夢覺ぬ、此由を冷泉黃門爲相卿に被申ければ、爲相卿此事希代不思議之靈夢、末代之希特、誠我朝之深秘鈔也、但扶桑者日本國總名也、可有其憚扶の字のつくり桑の字の木を取合て、夫木和歌抄と名付

夫木和歌抄いんさき藤原長清えらびおきしより、まきまの道に心をたのしぶ人、もてあそぶふみとなりにけり、まかはあれどながれの末にはとめずして、鳥のあとのみなもとうひくしくおもほえねばいづれを見るもよすがなく、更にひとりびとりの家集をかいなへおほなは、ただし侍るものならし、猶ねもころには、ざえあらんむまひとのこ、あらためたまふべし

黒川眞道  
山崎弓東 校

夫木和歌抄大尾